

# 第 19 回桃太郎フォーラム

(岡山大学教職員研修)

2016年度 (平成28年度)

「共育力」を高める  
～教員・学生・職員による三者協働型の教育に向けて～

2016年9月1日 (木)

主催：岡山大学 全学教育・学生支援機構 教育開発センター



OKAYAMA  
UNIVERSITY

## ○ 研修名称

平成28年度岡山大学FD・SD研修 第19回桃太郎フォーラム

## ○ 研修内容（テーマ）

「共育力」を高める～教員・学生・職員による三者協働型の教育に向けて～

## ○ 実施期日

2016年（平成28年）9月1日（木）

## ○ 参加人数

264人（学内：217人，学外：47人）

## ○ 実施場所

岡山大学創立五十周年記念館 多目的ホール・会議室

一般教育棟A棟，B棟，C棟

## ○ 主催

岡山大学 全学教育・学生支援機構 教育開発センター

## ○ 企画・実施組織

岡山大学 全学教育・学生支援機構 教育開発センター FD専門委員会

※本報告書のPDF（フルカラー版）に関しては、以下URLに掲載。

<https://www.iess.ccsv.okayama-u.ac.jp/kaihatsu/page/桃太郎フォーラム/>

岡山大学全学教育・学生支援機構>教育開発センター>桃太郎フォーラム

平成28年度岡山大学FD・SD研修  
第19回桃太郎フォーラム



「共育力」を高める～教員・学生・職員による三者協働型の教育に向けて～

- 日時 平成28年9月1日(木)
- 会場 創立五十周年記念館(午前)・一般教育棟A棟, B棟, C棟(午後)
- 主催 岡山大学教育開発センター
- 申込 岡山大学教育開発センターホームページから  
※上記HPに随時, 最新情報を掲載します。

【プログラム】

■午前の部	会場：創立五十周年記念館 総合司会：和賀 崇（岡山大学全学教育・学生支援機構 准教授）
9:00	開場・受付開始
9:30	<b>開会挨拶</b> 岡山大学副学長・教育開発センター長 許 南浩
9:35	<b>岡山大学ティーチング・アワード表彰 表彰式</b> 司会：佐々木 健二（岡山大学ティーチング・アワード表彰選考委員会委員長）
	<b>岡山大学ティーチング・アワード表彰 受賞者プレゼンテーション</b> 司会：佐々木 健二（岡山大学ティーチング・アワード表彰選考委員会委員長）
	<b>先進教育賞アクティブ・ラーニング分野 優秀教育賞大規模授業部門</b> 「生命の基本原則と生活の中の生物学」 異分野融合先端研究コア 佐藤 伸 准教授
9:45	<b>先進教育賞社会連携・社会実践教育分野</b> 「現代コミュニティと地域経済」 地域総合研究センター 三村 聡 教授
	<b>先進教育賞外国語による授業分野</b> 「観光文化交流論」 グローバル・パートナーズ 小野 真由美 講師
	<b>優秀教育賞中規模授業部門</b> 「対人援助のためのメンタライジングとマインドフルネスの心理学」 教育学研究科 上地 雄一郎 教授
10:45	休憩
10:55	<b>特別講演</b> 司会：中塚 幹也（岡山大学教育開発センター副センター長） <b>「三者協働型アクティブ・ラーニングの展開：関西大学の事例」</b> 関西大学教育推進部 三浦 真琴 教授
11:55	<b>各分科会・セミナー紹介</b> 全学教育・学生支援機構 和賀 崇 准教授
12:00	昼休憩 ※13時から午後の部を開始します。

## 第1分科会

会場：一般教育棟C棟C25  
座長：和賀 崇(全学教育・学生支援機構准教授)

### 学生の共育力を活用する教育の実際

午前の部を踏まえ、学生の力を活用する教育の実際について、成果や課題、推進にあたり必要な施策等を考えます。  
コメンテーター：三浦 真琴(関西大学教育推進部教授)

1. 「岡山大学のTA制度の現状について」  
全学教育・学生支援機構 和賀 崇 准教授
2. 「愛媛大学『スタディ・ヘルプ・デスク(SHD)』の取り組み～先輩から学ぶ：大学院生による学習支援～」  
愛媛大学 阿部 光伸 講師
3. 「法政大学における学習活動支援の取り組み」  
法政大学 近藤 清之 学務部長

## 第2分科会

会場：一般教育棟A棟A32  
座長：矢野正昭(全学教育・学生支援機構准教授)

### 60分授業・4学期制に対応した授業改善事例

平成28年度から導入した60分授業・4学期制に対応した授業改善の事例について発表し、学生の意見を交えて、メリットや課題、改善策等を考えます。

1. 「ミニ実験で体験する物理入門」  
異分野基礎科学研究所 野原 実 教授
2. 「半強制的な反復学修による基礎科目の徹底教育」  
環境生命科学研究科 泉 実 准教授
3. 「学生は60分授業・4学期制をどう思っているか」  
学生・教職員教育改善専門委員会委員  
酒井 也実(環境理工学部2年)・弓岡 弘樹(文学部1年)

## 第3分科会

会場：一般教育棟A棟A36  
座長：長瀧寛之(全学教育・学生支援機構准教授)

### アクティブ・ラーニングを支える学習環境デザイン

アクティブ・ラーニング実現に必要な学習環境に関し、「授業改善」「動画教材の活用」等の観点での実践例を紹介し、「学びを支える工夫」についてディスカッションします。

1. 「授業を変える、そのためのトライ」  
社会文化科学研究科 本村 昌文 准教授
2. 「学生の学びを深めるための、反転授業導入の試み」  
教育学研究科 山田 剛史 教授・TA学生
3. 「いま、なぜ、アクティブ・ラーニングか？」  
全学教育・学生支援機構 大崎 理乃 助教  
地域総合研究センター 山田 一隆 准教授・受講生

## 第4分科会

会場：一般教育棟B棟B21  
座長：花谷 正(全学教育・学生支援機構教授)

### ルーブリック評価の導入

#### ～信頼性の高い成績評価を目指して～

成績評価の客観性・厳格性を確保するための評価手段としてルーブリックを取り上げ、学内での導入事例を基に成績評価について考えます。

1. 「文学部哲学・倫理学分野でのルーブリック構築の試み-プロセスで得られたもの-」  
社会文化科学研究科 出村 和彦 教授
2. 「薬学部でのルーブリック導入事由と事例」  
医歯薬学総合研究科 竹内 靖雄 教授

## 第1セミナー

会場：一般教育棟C棟C32  
司会：森岡明美(全学教育・学生支援機構准教授)

### Syllabus Writing in English

This is a writing course focusing on the language and writing skills instructors need to effectively produce syllabi in English. The course will include language input mixed with writing skills work and lots of practice. By the end of the course, participants should feel more confident and able to produce syllabi in natural English that appeal to an international audience.

- 講師：Dean Southorn (British Council)  
・実施時間：13:00～16:00 使用言語：英語のみ  
・20人が上限のため、学内限定

## 第2セミナー

会場：創立五十周年記念館大会議室  
司会：萱野朋子(学務部学務企画課長)

### アクティブ・ラーニングをめぐる答申の変遷 ～課題認識と役割の変化～(SD研修)

中央教育審議会の答申をもとに、なぜアクティブ・ラーニングが重要視されているのかなど、答申の背景にある教育動向とそれを踏まえたわが国の高等教育政策について理解を深めます。

- 講師：文部科学省高等教育局大学振興課  
長谷川 智 法規係長

## 第3セミナー

会場：一般教育棟C棟C31  
司会：平田久子(女性サポート相談室)  
清水幸登(保健管理センター)

### 身近な人の様子に変だと感じたとき ～悩んでいる人への周囲の対応～

学生のこと、職場のこと等で悩んでいる人への周囲の対応について事例を通して理解を深めます。

- 講師：岡山県臨床心理士会会長  
川崎医療福祉大学 谷原 弘之 教授

・教職員限定

※分科会・セミナーの開催時間は13:00～15:00の予定です。  
(第1セミナーのみ16:00まで)  
※午前・午後ともに学生のみさんの参加を歓迎します。

### 【お問い合わせ先】

岡山大学学務部学務企画課教育支援グループ  
TEL:086-251-8424 yoshida-m4@adm.okayama-u.ac.jp

# 目 次

1	開会挨拶	1
2	岡山大学ティーチング・アワード表彰	3
3	岡山大学ティーチング・アワード表彰 受賞者プレゼンテーション	13
	先進教育賞 アクティブ・ラーニング分野 優秀教育賞 大規模授業部門 「生命の基本原理と生活の中の生物学」	15
	先進教育賞 社会連携・社会実践教育分野 「現代コミュニティと地域経済」	20
	先進教育賞 外国語による授業分野 「観光文化交流論」	29
	優秀教育賞 中規模授業部門 「対人援助のためのメンタライジングとマインドフルネスの心理学」	37
4	特別講演「三者協働型アクティブ・ラーニングの展開：関西大学の事例」	47
5	分科会・セミナー	
	第1分科会 学生の共育力を活用する教育の実際	67
	第2分科会 60分授業・4学期制に対応した授業改善事例	93
	第3分科会 アクティブ・ラーニングを支える学習環境デザイン	121
	第4分科会 ルーブリック評価の導入～信頼性の高い成績評価を目指して～	129
	第1セミナー Syllabus Writing in English	145
	第2セミナー アクティブ・ラーニングをめぐる答申の変遷 ～課題認識と役割の変化～（SD研修）	151
	第3セミナー 身近な人の様子が変わったとき ～悩んでいる人への周囲の対応～	161
6	アンケート集計結果	171
7	参加者名簿	195
8	平成28年度 第19回桃太郎フォーラムを終えて	203



## 開会挨拶

許 南浩 （岡山大学理事・副学長 教育担当）

皆さん、おはようございます。本日はお忙しい中、学内はもとより、学外からもたくさんの方々にご出席をいただき、誠にありがとうございます。このフォーラムの開催の準備にあたりましては、関係者の皆さま方に多大なご努力をいただきました。心より感謝申し上げます。

このFD・SD研修桃太郎フォーラムは平成10年に始まりまして、年に複数回開催された事もございますので、今年で19回を数えます。今年度は、『『共育力』を高める～教員・学生・職員による三者協働型の教育に向けて～』というテーマで行うことになりました。これまで岡山大学は、教員の力だけではなく、職員との協働や学生参画ということを重視して教育改善に取り組んで参りました。とくに学生参画につきましては多くの実績がありまして、そういう意味から言いますと、今回のテーマは、桃太郎フォーラムの原点と言いますか、一番基本となる方向に沿ったものだと思っております。

ご承知のように、大学改革・教育改善は、20年ほど前から、高等教育における一番大きな課題だと言われておりまして、それぞれの大学が様々な努力を重ねて参りました。歩みは遅々たるものという面もございますが、それでも着実な変化を見せていると思っております。例えばシラバスの整備や学生による授業評価アンケートの実施といった教育改革の取り組みは、どこの大学でも当たり前に行われるようになりました。

ただ、現在の「大きく変動するグローバル社会で、力強く未来を切り開いていける人材を育てる」という観点では、私たちがやるべき課題がまだまだたくさん残っております。岡山大学はそういうことを意識しまして、この平成28年度から、60分授業・4学期制という新しいプラットフォームを用意し、このプラットフォームの上に新たな教育の内容・方法を盛り込もうという努力をしております。この取り組みは当然、教員と職員の協働が必要ですが、とくに大事なのは学生の参画であり、学生目線で何ができるかだと思っております。

そもそも、自らが主導して様々な課題を解決する力は、卒業して急に身につくものではありません。大学という学びの場で自らが主導して環境を変え、主体的に学ぶ意思と実行力を養うことが必要だと思っております。岡山大学としては、是非そのための条件を整え、学生の力を引き出していきたくと心から願っております。そういう方向で今日の議論が進んでいくことを心から期待しております。

今日はこのあと、岡山大学ティーチング・アワードの授賞式とプレゼンテーションがございます。ティーチング・アワードは新たに設けられたものでありまして、学生の推薦に基づいて選考委員会が選考した先進教育賞と、学生の授業評価アンケートの結果に基づいて決まった優秀教育賞の2つで成り立っております。引き続いてのプレゼンテーションで

内容の紹介がございますので、是非皆さまの参考にしていただければと思います。

そのあとに基調講演がございまして、関西大学の三浦真琴先生が、「三者協働型アクティブ・ラーニングの展開」と題しましてお話をしてくださいませ。まさに、今日のテーマにぴったり合う、これからの教育にとって非常に大事なご示唆をいただけるものだと期待をしております。午後は様々なテーマに基づいて、分科会、セミナーも行われますので、それらを通じて活発な議論がなされ、教育についてのご理解がより深まって、教育実践の現場での新たな展開に繋がることを期待をしております。それでは、今日一日長い時間ですけれども、今日の議論が有意義なものになりますように、心から願って私からの挨拶とさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

# 岡山大学ティーチング・アワード表彰

---

岡山大学ティーチング・アワード表彰 表彰式

岡山大学ティーチング・アワード表彰 表彰概要

平成27年度岡山大学ティーチング・アワード表彰受賞科目一覧



## 平成27年度岡山大学ティーチング・アワード表彰 表彰式

平成28年度第19回桃太郎フォーラム午前の部において、「岡山大学ティーチング・アワード表彰」の表彰式を初めて実施し、許南浩理事・副学長（教育担当）が受賞者に表彰状と副賞目録を授与しました。



佐藤准教授



三村教授



小野講師



上地教授



許理事を囲む受賞者

※守屋准教授とルシンスキー准教授は所用のため欠席。

## 岡山大学ティーチング・アワード表彰 概要

岡山大学では、平成27年度から以下の「岡山大学ティーチング・アワード表彰」制度を導入しました。

### 目的

本学の教育改革を先導する先進的な授業科目及び優れた教育を行っている授業科目を選考し、その担当教員を表彰するとともに、その教育実践を全学に広め、教育改善を図る。

### 対象

全ての教養教育科目（非常勤講師担当科目含む）

### 授与する賞の選考方法等

以下の二つの賞を設ける。

賞	対象	対象授業分野・区分等	選考方法
先進教育賞	本学教育改革を先導する先進的な科目	・アクティブ・ラーニング分野 ・社会連携・社会実践教育分野 ・外国語による授業分野（語学を除く。）	各学部等からの推薦（自薦含む）を受け、選考委員会（教育評価専門委員会が組織）が推薦書や使用教材等をもとに選考
優秀教育賞	優れた教育を行っている科目	・小規模（21名～40名） ・中規模（41名～100名） ・大規模（101名～）	授業評価アンケートの評点の最上位科目を選考

※対象授業分野・区分等ごとに原則1科目を選考する。

### 表彰の内容

- ・表彰状（学長名）
- ・副賞10万円（複数教員担当授業の場合は主たる担当教員のみ副賞）

※同一賞を2年連続で授与された場合は、別途表彰し、翌年度以降5年間選考対象から除外。

### 実施期間

前年度に開講された全ての教養教育科目を対象とし、年度ごとに選考及び表彰を行う。

※平成27年度に開講された科目に対する表彰は平成28年度に行う。

※学期ごとではなく、前期・後期（4学期制導入後は全学期）を通じて1科目を選考。

### 教育実践を全学に広めるための方策

- ・受賞科目の公開
- ・授業録画の動画コンテンツとしての活用
- ・受賞者によるFD研修における講演 等

### 所掌

全学教育・学生支援機構 教育開発センター FD専門委員会

平成27年度岡山大学ティーチング・アワード表彰 受賞科目一覧

<b>先進教育賞</b>
<b>アクティブ・ラーニング分野</b>
<b>受賞科目</b>
生命の基本原理と生活の中の生物学 ※この科目は優秀教育賞大規模授業部門（最終評価者が101名以上の科目）を同時受賞しました。
<b>担当教員</b>
異分野融合先端研究コア 守屋 央朗 准教授・佐藤 伸 准教授
<b>選考理由</b>
座学であっても、マイクを回して学生に回答を促す、歌を歌わせる、標本を作成するなど、学生の授業への参加を促すことで、学生の興味・関心を引き出し、学生の学習効果を高める工夫がなされている。また、イラストコンテストや合唱などを実施し、適度に息抜き（アイスブレイク）を行い、さらに、シャトルカードやツイッターを活用し、学生一人一人が楽しく授業に参加できるような工夫がなされている。これらの点から、アクティブ・ラーニングに関して他の教員の授業改善の参考となる工夫がなされていると考えられるため、本科目を先進教育賞アクティブ・ラーニング分野の受賞科目と決定する。
<b>コメント</b>
 <p>この度は、平成27年度岡山大学ティーチング・アワードをいただき有り難うございます。受賞科目の「生命の基本原理と生活の中の生物学」は、主題科目（自然と技術）の一環として、佐藤伸先生と分担して平成24年度から平成27年度まで開講したものです。私にとっては初めての大規模授業で、いかに学生を授業に惹きつけるか、授業中・授業外で学生と双方向のコミュニケーションをどう取るか、授業を通じて学生の可能性をどうやって伸ばすかを常に考え、毎回いろいろな仕掛けを組み込みつつ4年間をかけて磨き上げてきました。その結果としてこのような名誉な賞を頂くことになり、大変うれしく思います。この授業の開講にあたっては、本学FD委員会作成の「授業改善のためのティーチングチップス集」が大変参考になりました。また、特に初期の授業内容の向上に、TA金高氏のフィードバックが大変役に立ちました。この場を借りてお礼申し上げます。（守屋）</p>



この度は過大な賞をいただき、関係各位の皆様には厚く御礼申し上げます。テニュアトラック制度にて岡山大学に赴任し研究能力の提示を強く求められてきた私たちにとって、今回の「教育」に対する賞という物は、格別にうれしく且つ重いものと受け止めております。研究も教育も「人が面白いと思う物を目指す」という事が我々の思想の根源です。人の興味や嗜好は時代とともに移り変わるのだと思います。よって、我々も柔軟に時代に対応しなければならないと思っています。それには学生さんたちからのフィードバック（対話）は欠かせない要素だと思います。多くの学生さんが良いフィードバックをしてくれたおかげで、内容は回を追うごとにアップグレードしてきたと思います。ただ、授業改革の経緯で受賞対象授業は昨年までで消滅してしまいました。こればかりは残念に思うところですので、これを機に（復活を）再考いただければ幸いです。（佐藤）

次点科目	研究入門 岡山大学の知と共に考える「私の研究」
担当教員	全学教育・学生支援機構 大崎 理乃 助教
次々点科目	総合英語 1
担当教員	全学教育・学生支援機構 ルシンスキー ジョン エドワード 准教授
選考対象科目数	10

### 社会連携・社会実践教育分野

<b>受賞科目</b>	
現代コミュニティと地域経済	
<b>担当教員</b>	
地域総合研究センター 三村 聡 教授	
<b>選考理由</b>	
<p>「岡山」を題材とすることで、学生が地域の経済・社会に関与していることを示し、学生の興味・関心を引き出すとともに、自分の身近な環境や日本全体について考え直す機会を持たせ、学生の自己学習を促す工夫がなされている。さらに、専門知との関連を明確にしつつ実践知を身につけられるよう工夫がなされている。これらの点から、本学が掲げる「グローバル実践人」の育成に関して他の教員の授業改善の参考となる工夫がなされていると考えられるため、本科目を先進教育賞社会連携・社会実践教育分野の受賞科目と決定する。</p>	
<b>コメント</b>	
<div style="text-align: center;">  </div> <p>このたび、受賞したことを心から喜んでいきます。</p> <p>本授業は、岡山大学がめざす、実践型講義の試行版として位置づけました。授業の基本形は、「スーパーグローバル大学創成支援事業」で目指す、「グローバル実践知修得と社会との互恵性保持」の考え方を基礎として、「準備学習」、「現場実践」、「振り返り」という3段階とし、大学（異分野）、地域（異社会）、国際（異文化）の3要素を構成する授業を目指しました。</p> <p>また、実際に岡山県内の自治体やNPO、経済界や地域団体と共に活動する学生の紹介等を行い、気づき、動機付けを支援するという授業スタイルを取り入れました。</p> <p>なお、成績評価では、「アクティブラーニング」と「アウトカム基盤型教育」重視の観点から、成果報告を実施して、学生相互の投票により順位付けを行い、その結果を成績に反映する手法を用いました。</p> <p>こうした取組みが岡山大学全体に広がることを祈念します。</p>	

<b>次点科目</b>	瀬戸内の自然環境と地域の産業1
<b>担当教員</b>	社会文化科学研究科 田口 雅弘 教授
<b>選考対象科目数</b>	2

## 外国語による授業分野

<b>受賞科目</b>	
観光文化交流論	
<b>担当教員</b>	
グローバル・パートナーズ 小野 真由美 講師	
<b>選考理由</b>	
<p>地域に関する幅広い分析を行わせ、ツーリズムについて興味・関心を引き出すことで、学生が地域・国際社会で行動するうえで有意義な視点が身につくよう工夫がなされている。また、英語でのディスカッション・プレゼンテーションを実施させ、英語力や発表力が身につくような工夫がなされている。さらに、資料の作成（日本語と英語のバランス）などにおいて、学生が自己学習に取り組みやすくする工夫がなされている。これらの点から、本学が掲げる「グローバル実践人」の育成に関して他の教員の授業改善の参考となる工夫がなされていると考えられるため、本科目を先進教育賞外国語による授業分野の受賞科目と決定する。</p>	
<b>コメント</b>	
 <p>この度は、先進教育賞外国語による授業分野をいただき、誠にありがとうございます。観光文化交流論（Tourism and Culture in Japan）は、留学生と岡大生がともに学ぶ教養教育科目です。本科目では、文化人類学の視点から観光というテーマを取り上げ、人間社会と文化について学びます。英語を主たる言語として使用しつつも、日本語の解説や文献を取り入れることにより、様々な国と地域からきた留学生と岡大生が協働学習をすることを目的としており、アクティブラーニング型の授業を行っています。毎回の授業に加え、学期中の週末や休日を利用し、実際に近隣の観光地を訪問し、フィールドワークを行います。学生の主体的な授業参加と授業内外のアクティブラーニングの実践により、文化的背景の異なる学生同士が多様な価値観を共有しつつ、動的な学びの機会を創出することを目指しています。今後も、参加学生とともに授業内容をさらに充実できるよう努めてまいりたいと思います。</p>	

<b>次点科目</b>	アニメ：ジブリアニメから学ぶ日本
<b>担当教員</b>	全学教育・学生支援機構 藤本 真澄 講師
<b>次々点科目</b>	コミュニケーション開発 1
<b>担当教員</b>	全学教育・学生支援機構 ファースト トーマス デビッド 講師
<b>選考対象科目数</b>	3

## 優秀教育賞

小規模授業部門（最終評価者が21名から40名までの科目）

受賞科目

総合英語3

担当教員

全学教育・学生支援機構 ルシンスキー ジョン エドワード 准教授

コメント



In this day and age, English education at the university level in Japan should focus on helping students to develop their communicative English skills in order to become full-fledged global citizens. In order to accomplish this, my classes are guided by two important principles. First, students are given many opportunities to consider their own culture and practice expressing their ideas in English about Japan's place in the global community. Second, whenever possible, students interact and collaborate with students from other countries. In this particular class, students took part in several activities with international exchange students. I believe this increased their motivation to use English, as it was far more rewarding than merely using English with their Japanese classmates. Whether it is a speaking, listening, reading, or writing class, English is a communicative tool and students need opportunities to develop their real-world cross-cultural communicative competence. Although this was a great challenge, the results of the student evaluations prove that students embrace these challenges and come to understand the benefits.

次点科目	キャリア形成<総合演習>II 専門スキルを身につける①
担当教員	三浦 孝仁 非常勤講師
次々点科目	英語（読解）
担当教員	今林 修 非常勤講師

中規模授業部門（最終評価者が41名から100名までの科目）

受賞科目
対人援助のためのメンタライジングとマインドフルネスの心理学
担当教員
教育学研究科 上地 雄一郎 教授
コメント
 <p>私が主題科目として開講した「対人援助のためのメンタライジングとマインドフルネスの心理学」が賞をいただくということはまったく予想しておりませんでした。このようにして注目していただいたことにより、日頃の工夫と苦勞が報われたという思いです。この授業に限らず心がけていることは、①学生の興味を引く内容にすること、②わかりやすい内容にすること、③授業を通して、「考えること」だけでなく「感じること」を大事にすること、です。これらの目標を達成するために行っている工夫としては、説明にできるだけ具体例を添えること（抽象的説明だけで終わらないこと）、視聴覚教材を活用すること、可能であれば実習を取り入れること、丁寧な資料を配付すること、です。上記の授業は、これらの工夫を満載した授業であり、それが学生からも評価されたのだと思います。</p>

次点科目	総合英語4
担当教員	コールドウェル アンドリュウ 非常勤講師
次々点科目	物理の法則と科学技術
担当教員	異分野基礎科学研究所 野原 実 教授

大規模授業部門（最終評価者が101名以上の科目）

受賞科目
生命の基本原理と生活の中の生物学
担当教員
異分野融合先端研究コア 守屋 央朗 准教授・佐藤 伸 准教授

次点科目	キャンパスライフとメンタルヘルス
担当教員	保健管理センター 清水 幸登 准教授
次々点科目	口の機能と健康管理
担当教員	医歯薬学総合研究科 松尾 龍二 教授

# 岡山大学ティーチング・アワード表彰 受賞者プレゼンテーション

---

先進教育賞 アクティブ・ラーニング分野 優秀教育賞 大規模授業部門  
「生命の基本原則と生活の中の生物学」

異分野融合先端研究コア 佐藤 伸 准教授

先進教育賞 社会連携・社会実践教育分野  
「現代コミュニティと地域経済」

地域総合研究センター 三村 聡 教授

先進教育賞 外国語による授業分野  
「観光文化交流論」

グローバル・パートナーズ 小野 真由美 講師

優秀教育賞 中規模授業部門

「対人援助のためのメンタライジングとマインドフルネスの心理学」

教育学研究科 上地 雄一郎 教授



先進教育賞 アクティブ・ラーニング分野 優秀教育賞 大規模授業部門  
「生命の基本原則と生活の中の生物学」

“パンキョー” 「生命の基本原則と生活の中の生物学」

佐藤伸（文責）・守屋央朗（異分野融合先端研究コア）

### 1. はじめに

岡山大学で学生の教育を支える先生方に講義に関する話をするのは、全く「釈迦に説法」で僭越以外の何物でもないだろう。よって、本資料では我々がどう授業にアプローチしたかを記した記録としてご高覧いただければ幸甚である。

### 2. 研究者としての授業構築

当たり前のことだが、大学の授業にはディープな内容を講義するものと、個々人の（科学）リテラシーを構築する上での知識ベースを講義するものとあると思う。我々が担当した授業は後者である。つまり、ターゲットは「自分たち（の興味）と同じ専門性を持たない・積極的に聞く気はないかもしれない」対象である。このような対象をまず設置（想定）したことから講義の構築が始まった。

### 3. 専門性を持たない対象群に相対する

専門外や、興味外の対象に対してどうやって「聞いてもらうか」を考えたときに最も大事だと思うのは、“こちらが対象に興味を持つ”ということである。つまり、「ねえねえ、聞いて聞いて…」という状況を無理やり自己マインドコントロールで構築するということである。聞いてほしければ、相手が分かる言葉遣いと話し方、ボディーランゲージがとれる。このような事項は不特定多数の視聴者を相手にするテレビなどで活躍する方々が得意としていると思われる。こちらが相手に対して興味を失わないことは、「聞かせる」ためには必須な事項であろう。

技術的なことでは、使用する言葉の平易さがあげられるだろう。一般教養という100名以上の対象の専門性や興味は多種多様である。よって、言葉が難解である場合、しゃべり始めた途端に興味を失うだろう。たとえば、「Baby Metalのライブでね…」と始めたら0.5秒で脳回路がスタックする先生方は多いだろう。自分で平易だと思う言葉ですら、対象には難しいことも多い。例えば「タンパク質・DNA・遺伝子」という言葉ですら授業内での使用に注意が必要であった。対象が理解できる言葉と興味対象から始めることで、授業開始早々からの脱落者（夢の国に行く人）はかなり防げると感じている。

聞いてもらうためには「聞かなければならない」ということも事実だと思われる。「～知ってる？」「～ってどんなものなの？」「～ってすごいでしょ？」「～はできる？」

という逆ヒアリングは非常に効果的であった。岡山大学の学生さんはパスを渡せばきちんと返してくれる方が多いと心から思う。究極のキラーパスといえるThe Cell Songという細胞の機能を歌にしたもの（Youtube等参考）を英語で歌おう！という課題も人員を募集すればキチンと毎年ギター担当・歌唱（英語）担当が現れてくれた。これらの経験は、「あなたに聞いてもらいたいから、あなたのこと聞かせてね！あわよくば参加してね！」という試みは勇気がいるが教員側から踏み出せば何とかなるということをお私たちに強く実感させた。

#### 4. 小道具

「生命の基本原理と生活の中の生物学」の講義中では、興味を持ってもらうための様々な小道具を使用した。Twitterの使用、Web-siteでの授業資料公開、粘土やガムテープを使用した体を動かすことを伴う授業、The Cell Songなどなど。細部にはもっとたくさんの工夫をした。「聞いてもらいたい」という思いのために、常に試行錯誤を繰り返している。

#### 5. 最後に

非常に生意気なことを述べさせていただければ、講義の受け自体は教員の個性によるところが大きいと思われる。私たちは人前でしゃべるのが好きで、冗談が好きで、それほどまじめではない。自らの個性を把握したうえで、自分たちができる最良のアプローチを真剣に考えた末に構築した講義である。我々の講義は我々には向いているが、その他の方々にはその限りではないと思われる。結局は対象が何を欲していて、何を伝えるべきで、その最良のアプローチをできるだけ正確に把握することをどれくらい務めるかなのではないかと思う。

授業改革に伴い、我々の講義が消滅した事は残念である。しかし、このたびの榮譽にかかわっていただき、ご好意をいただきました関係各位の先生方、授業に参加した学生さん、TAの学生さん、いろいろなヒントをくれた研究室の皆様に厚く御礼を申し上げます。

先進教育賞 アクティブ・ラーニング分野 優秀教育賞大規模授業部門  
「生命の基本原理と生活の中の生物学」  
講演全文

異分野融合先端研究コアの佐藤です。私は岡山大学に旧制度のテニユアトラックで来まして、研究バカという扱いでずっといましたが、この度、教育に関する賞をいただけたということで、私も守屋先生も非常に喜んでます。

この授業は私だけではなくて、守屋央朗先生と二人でやって参りました。今、彼は研究留学中で3ヶ月カナダに行っておりまして、来週、帰ってきます。「皆さんによろしくお伝えください。この場で冗談を言って皆さんを笑わせたかったです」というのが彼からのメッセージです。

私たち二人は講義をするにあたって、いろんな方、とくに学生にヒアリングをしました。自分の研究室にいる学生や身の回りの学生を捕まえて、岡山大学の教養教育に対するイメージなどをいっぱい聞いたのですが、当時、4年ほど前ですが、だいたい7～8割が、教養教育に対してネガティブなイメージを持っていました。「教養教育は単位をくれればどうでもいい」、「専門はおもしろいが教養はつまらない」、「だいたい Youtube を見ている」、「今日の合コンについて考える」。そんなことを言っていました。実際に100人の大規模な授業でも、2割くらいの学生はまともにちゃんと聞いてくれるんですね。すごく意欲的に取り組んでくれる学生さんも多いのですが、そういう人は逆に放っておいても勉強してくれます。7～8割存在する、どうでもいいというような人たちの注意をどうやって引き寄せるか、それを常に考えてやってきました。その時に辿りついた答えが、「私たちが楽しんでしまえばいいや。学生が楽しむより私たちが最初に楽しもう。そうすると、その面白さは伝わるだろう」というもので、この4年間たくさん遊んできました。中でも、とくに私たちが力を入れたのは、ソーシャルネットワークの活用ということです。一例をご紹介します。

まず、独自の Twitter のアカウントを開設いたしました。この Twitter で学生が授業で描いてくれる絵だとか、3Dプリンタで打ち出したタンパク質の立体模図といったものを紹介しました。守屋先生は酵母が専門なので、「こういうところに酵母がいますよ」、「これも酵母ですよ」というようなことを授業中もしくは前後に紹介することをしました。学生からのリプライの応答や、質問への回答、表彰も行っています。グループワークで描かせた絵の掲載をしたりもしています。

また、ウーパールーパーを学生に飼わせたりもしました。学生にウーパールーパーを飼ってくれる人を募って、何人か集めます。1ヶ月くらい経つと、ウーパールーパーにしっぽや腕がもう1本生えてくる外科的なオペをします。もちろん、動物実験の枠内できちんと法律を守って行うのですが、それを学生に渡し、1ヶ月飼ってもらいます。そして週ごとにしっぽや手が生えてくる様子を観察し、Twitter に上げていってもらいます。1ヶ月

かけて、何でそれが起こるかということを理解するための予備知識をどんどん学生に教えていきます。細胞とは何かから始まり、細胞の機能を教えて、細胞の増殖を教えて、文化という概念を教えて、というような長期的なスパンで教えていきます。しかも、学生が自分たちで飼って、自分たちでアップロードしてくれるので、皆も食い付いてくれるような工夫をしました。

守屋先生の場合は、課題とプリントを与え、プリントを回収します。回収したプリントに必ず絵を描く学生がいて、酵母の利用例など守屋先生の講義内容を絵にしてくれているので、そういったものを **Twitter** に紹介していくことで、この **Twitter** を学生がながめて楽しむといったようなトライアルをしました。

これらはいくまで一例です。もっとおもしろいことをしているんですが、守屋先生は、講義の Web ページも作ってしまって、予習・復習に必要なツールをそこにあげています。もちろん、パスワードをかけていますが、授業中に使った動画や資料をアップロードして、学生が「動画見逃したな」、「あの動画はおもしろかった、どこがソースだろう」と思ったときに、あとで辿って見られるというようなこともしていました。

授業の中身ですが、一例をあげます。この画像は別に福山雅治ではなく、僕でもなく、守屋先生です。・・・まさにこれです。この寒い空気が、授業自体を寒くしていくのですが、学生には「私が冗談を言ったら、無理にでもいいから笑いなさい。そうしないと私の心が折れます」と言っています。冗談を言わなくなっていくと、どんどん授業がつまらなくなっていくので、「笑え」と私たち 2 人は言っています。なので、すごく笑いの多い授業です。

また、積極的に絵を描いてくれる学生を芸術賞グランプリということで表彰したりもしました。表彰する方もされる方も、褒められて嬉しくないはずはないので、積極的に授業に参加してくれた学生にプライズを与えようということで、精力的に守屋先生はこういうことをなさっていました。

極めつけはこれです。守屋先生は非常に面白いトライアルをしてくれました。「**The cell song**」という細胞の機能や状態を歌にした英語の歌があるのですが、学生に歌ってくれませんかと投げかけると、必ず何人かが手を上げてくれるんですね。中にはギターの経験がある人もいれば、歌の経験もある人もいて、非常にクオリティーの高いものができる年もあります。こういう授業の何が良いかというと、学生がやってくれると我々が喋るよりもはるかに聴いている側の学生が食い付いてくれるんですね。この細胞歌の英語の歌詞を訳していくことで、細胞の機能を理解していこうというトライアルが非常に効果的でした。

もう 10 分経つので、これで終わりにするのですが、非常に「私たちが楽しめる」授業というものを構築させてもらいました。この場にいませんが、参加してくれた学生に厚く御礼申し上げたいと思います。また、TAの方々が、授業が終わった後にこういうところが良かった、こういうところが良くなかったというところを非常に精力的に教えてくれて助かりました。この場を借りて御礼申し上げたいと思います。

以上です。どうもありがとうございました。

Q：シャトルカードを使われていますが、どのような使い方をしていますか。

A：シャトルカードは授業の最後に5分間、時間をとって学生に記入をさせて、集めていきます。その時に私たちが奨励したのは、「授業の不満を書きなさい」、「授業の内容に対して質問を書きなさい」、「私たちを褒めなさい」。この3つです。シャトルカードでネガティブなことを読むとどんどん心が折れていくので、私たちを褒めなさいというのは大事なことなんです。褒めてもらえると、また次がんばろうという気持ちになります。あとは、授業の質問があれば、その授業の質問に対して答えを書きます。いい質問があれば次の授業の開始から10分くらいで、パワーポイントを使って紹介し、それに対する答えを、その場で解説していきます。かつ、私たちに対するポジティブなコメントを出して、自分たちをアピールして学生を笑わせています。なぜかという、私たちの授業は3時間目なんです。旧制度の3時間目です。ご飯が終わって眠くなってくる時間なので、笑うなど刺激を与えることで頭をはっきりさせるというようにやっていました。

Q：学生の作品をソーシャルネットワークにあげているのは、私も非常に良い方法だと思います。学生が先生に作品を出すだけではなく、それをみんなが見てくれるというかたちでされているのが非常に良いと思います。また、先生や他の学生が自分の事を見てくれていると、意欲が出てくると思うんですけども。

A：ただ問題があって、私たちのキャラクターだからこそ、学生がこれだけ絵を描いてくれたところもあると思います。私たちは若くて、世代が学生とも近いので、比較的學生と同じ目線で授業を構築できるというアドバンテージがあったと思います。

Q：学生の成績、評価については、何か工夫があるのでしょうか。

A：成績評価に関しては難しく、私たちは2人で受け持っているので、分かれて評価せざるを得ないんですね。その中で1つ、私たちが大事にしたのは、「出席すること」です。というのも、専門科目ではないので、科学リテラシーを醸成するという観点から、専門的知識をたたき込むというよりは、参加してもらって、「こういった考え方がある」、「こういった授業がある」、「こういったプレゼンテーション方法がある」、そういった一般的な知識を身につけてもらうのが大事なんじゃないかと思ったんですね。出席点を主にしましたが、もちろんレポートは必ず毎回課すようなかたちにしていましたし、提出物やシャトルカードも課しました。もちろんシャトルカードに悪いことを書いたからといってマイナスにすることもありません。そういった提出物は大事にして、私たちもメモをとって、良いものに関してはチェックしてExcelに集めて、最後の加点に活かしていくようなかたちにしていました。非常に手間がかかりました。

**先進教育賞 社会連携・社会実践教育分野**  
**「現代コミュニティと地域経済」**

地域総合研究センター 三村 聡

主題科目（現代の課題）：現代コミュニティと地域経済（選択必修）

科目カテゴリー：法学、政治学、経済学、社会学

### 授業の概要

現代の日本経済を取巻く環境が厳しさをますなか、地域経済が持続的に成長するためには、現代コミュニティとのつながりが重要である。コミュニティビジネスやソーシャルマーケティングの観点から地域経済の持続的発展に求められる条件と課題解決策を明らかにする。

### 学習目標

岡山のまちが抱える課題を抽出して、その解決策を考える実践型のプログラムを通じて、地域コミュニティと地域経済の関係を実践知として理解する。社会人に求められる基礎的な素養を習得することが目標。実践力を身につけるため、実際の岡山県内にある自治体、経済界、NPOの活動に即した講義内容に留意した。地方自治やNPO活動、地域金融を対象に研究を進めようとする方の教養編として位置づけている。

### 授業計画

1回オリエンテーション、2回現代コミュニティの課題（少子高齢社会）、3回現代コミュニティの課題（格差社会）、4回平成の大合併を経た岡山の姿（地方分権）、5回地域経済の課題（金融財政政策）、6回地域経済の課題（企業の状況と個人金融資産）、7・8回地域の課題を考える（事例研究Ⅰ・Ⅱ）、9回岡山の経済統計を読む、10～12回岡山でのまちづくり活動の実際Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、13回岡山大学生の活動実態から考えるワークショップ、14回発表と対話、15回課題解決に向けた今後の方策とまとめ、16回試験

### 授業形態・使用機器

グループディスカッションを実施する。プロジェクターにて実際の活動内容を紹介する。

### 研究活動との関連

実践力を身につけるため、岡山県内の自治体、経済界、NPOの活動に即した講義内容にする。地方自治、NPO、地域金融を対象に研究を進める学生の教養編として位置づけている。

### 教養教育DP要素との関連割合

創造力・想像力【教養】30%、論理的思考力・判断力【教養】40%、情報収集力【情報力】30%

授業の資料（ご参考）

### 全学的な実践型社会連携教育プログラム

成熟社会において求められる能力

- 成熟社会での社会的自立
- 想定外、解答のない問題への対応力
- 責任、姿勢、気風の涵養

従来の教育の不足点

- ストーリー性（単発での実施）
- 組織・体系化（教員の個別対応）
- 社会人活用（教員評価の限界）

持続的実践教育 → **Good Habit** → 教職員意識改革

全学体制による総合的実践カリキュラム

- 四極体制（学生、教員、社会連携教員、地域人・社会人で構成）
- 相互性の原則
  - ① 互恵性
  - ② 地域人・社会人参画（評価）
  - ③ 学生の地域・企業・生活の場への参加

地域社会への成果報告会実施（オープンハウス）

地域人・社会人（協力）assessment

実践型教育プログラム

1年 2年 3年 4年 大学院 社会人

Service・Learning CBL Community Based Learning Co-opプログラム

体系的・持続的なカリキュラム

### 国際人材育成（実践知）教育の展開

#### グローバル実践知修得 + 社会との互恵性保持

- ◆全学体制による取組
- ◆グローバル実践型教育科目を設定（文理融合、社会との協働）
- ◆高度実践認定システム

準備学習 → 現場実践 → 振り返り

社会が直面する課題に協働して取組む

互恵性を保持

- 社会とのPBL教育
- 学生はグローバル実践知を修得する
- 社会は課題を解決する

PRIME

### 国際人材育成（実践知）教育の展開

Input 入学生

Processing 課程教育

Output 卒業生

Quality Control 学生参画

「何を教えた」かではなく「何ができたようになったか」

At Okayama University, teachers' focus will shift from "what they have taught" to "what the students have become capable of"

#### 実践知を身に着けるための4つの要素 市民的教養に表付けられた

- 判断力
- リーダーシップ
- チーム力
- 責任・気概

### 岡山の暮らしと歴史・文化・芸術・食を通じた多文化共生（休日・お盆）

異分野

異社会

異文化

### 地方創生を考える 2015年3月内閣府

### 市民参加なしでまちを維持することは不可能な時代

#### 高齢化の推移と将来推計

将来にわたる都市の人口ビジョンが求められている

### 西川緑道公園界隈の活性化活動 大森岡山市長と岡山大学

# 平成27年度実践型授業 現代コミュニケーションと地域経済

地域総合研究センター 三村 聡

本授業は、実践型社会連携教育プログラムとして位置づけ、実社会と関わることによる実践知の涵養を目的として、その実践知を修得するために、地域との互恵性を念頭に置いた深い現場体験と傾聴を通して以下の観点を重視して実施した。

- ①【リーダーシップ】、②【チーム力】、③【判断力】、④【責任】、⑤【気概】

## (2) 授業の特徴

授業の冒頭では、岡山大学がめざす「美しい学都構想」（森田ビジョン）の要諦と地域総合研究センターの役割について説明し、加えて、岡山大学が平成28年度から本格実施する60分・クォーター制と実践型教育について説明し、本授業はその模擬授業として位置づけている点を説明したうえで実施した。特に「アクティブラーニング」と「アウトカム基盤型教育」に留意した実践型授業である点を強調した。

また、予習復習のために「岡山市まちづくりに関係する資料」「イオンモール関連資料（金沢、幕張）」等を配布、さらにロンドン市とオックスフォード大学、ストラスブール市とストラスブル大学、ポートランド市とポートランド大学の説明資料を準備して岡山市と岡山大学の対比による国際理解が可能となる話題を提供するなど、グローバル人材育成を念頭において、授業の準備・組み立てを行った。



## 1. 学習の目的と全体像

### (1) はじめに

基本となる岡山大学のDIP（ディプロマポリシー：学士課程、修士課程、博士課程の学位授与の方針）は、以下のとおりであり、これらの要素を学士教養課程の授業として身に付けることを念頭に置いて授業を実施した。

#### ①人間性に富む豊かな教養【教養】

自然や社会の多様な問題に対して関心を持ち、主体的な問題解決に向けての論理的思考力・判断力・創造力を有し、先人の足跡に学び、人間性や倫理観に裏打ちされた豊かな教養を身につけている。

#### ②目的につながる専門性【専門性】

専門的学識と時代を担う技術を身につけていると共に、それらと自然・社会とのつながりを意識し、社会に貢献できる。

#### ③効果的に活用できる情報力【情報力】

必要に応じて自ら情報を収集・分析し、正しく活用できる能力を有すると共に、効果的に情報発信できる。

#### ④時代と社会をリードする行動力【行動力】

グローバル化に対応した国際感覚や言語力と共に、社会生活に求められるコミュニケーション能力を有し、地球規模から地域社会に至る共生のために、的確に行動できる。

#### ⑤生涯に亘る自己実現力【自己実現力】

スポーツ・文化活動等に親しむことを含めて、自立した個人として日々を享受する姿勢を一層高め、生涯に亘って自己の成長を追求できる。

さらに、講義の基本形は、岡山大学がスーパーグローバル大学を目指す、「グローバル実践知修得と社会との互恵性保持」の考え方を基礎として、「準備学習」、「現場実践」、「振り返り」という3段階とし、大学（異分野）、地域（異社会）、国際（異文化）の3要素を構成する授業を目指すため、こうした点を理解した上で、参加意識を強く持つて臨んで欲しいことを伝えた。

なお、成績評価では、「アクティブラーニング」と「アウトカム基盤型教育」重視の観点から、成果報告を実施して、学生相互の投票により順位付けを行い、その結果成績に反映することを伝えた。

また、実際に地域活動を展開する学生サークルの紹介等、気づき、動機付けを支援するという授業スタイルを取り入れた。

なお、受講に際しては以下の注意を与えている

- ・ 必ず全日程に出席すること。その理由は、グループで動くため、欠席すると他の学生に迷惑になる（チームワークの重視）、また、大学の授業は予習復習の時間を費やすことが、授業に臨む前提になっていることから、報告書作成に向けて、各チーム（班）で個別に集まり、調査のまとめ作業に向けて可能な限り発表の準備をするよう指示を与えた。加えて、フィールドワークに行く時、カメラと筆記用具を忘れないことなど、携行品の指示も行った。見学や調査先では、各グループ共に集合時間を厳守、大学生らしい礼儀でさわやかに対応するよう指導した。

(注) 実践型授業開発・実施費用は、交通費、昼食費を学生負担としたためゼロである。

## 2 「準備学習」(座学)

まず、「準備学習」として、高校までの授業で学んだ知識を基にして、大学としての専門的学識を与え、時代を担う能力として現代コミュニケーションの実態を把握するために実際の調査データを読み解く能力を身につけると共に、地域社会における人々のつながりを意識し、地域社会が直面する課題を認識し、その解決策を探ることにより社会に貢献できる高度な教養の修得を目指す。

座学の内容は以下の通りである。

- A) コミュニティとは何かを理解する (指導方法: 板書と国の資料とデータ)
- ① 縄文時代、弥生時代の暮らしの違いとコミュニティの形成
  - ② 大和朝廷以降、荘園制度、封建制度、明治以降・戦後資本主義に至る社会システムとコミュニティの変遷
  - ③ 産業革命がもたらした近代社会の特徴とコミュニティの変容
  - ④ 現代コミュニティの課題を少子高齢社会、格差社会、ネット社会、里山の衰退と過疎問題、商店街はじめ中心市街地の衰退、大型商業施設の出現、都市交通問題、環境問題など複眼的にとらえる。
- B) コミュニティの定義と直面する課題を理解 (指導方法: 板書、資料、データ)
- ① 地域コミュニティ: 自治会、町内会、学区、平成の合併と基礎自治体の変化
  - ② 広域コミュニティ: 高梁川流域連盟、地方中枢都市圏構想、中四国広域連携、オリンピックと地方都市、世界のコミュニティと日本の比較
  - ③ 超域コミュニティ: 欧州連合 (EU) が直面する課題、地球規模の環境問題
- C) 日本の課題と地方創生の必要性を学ぶ (指導方法: 資料、データ、写真)
- ① アベノミクス検証: 金融政策、財政政策、景気浮揚政策の最新事情をデータから読み解く
  - ② 地方創生: 人口推計と人口ビジョン、東京一極集中と地方、景気と雇用の取組み
  - ③ 政府 (地方創生本部) の政策と地方創生戦略の内容と具体的取組み
- D) 岡山市が進めるまちづくりと直面する課題を知る (テレビ映像、岡山市資料)
- ① イオンモール岡山と中心市街地の状況
  - ② 商店街の状況と中心市街地の回遊性
  - ③ 新市民会館の建設と路面電車の岡山駅乗り入れ
  - ④ 大学がある岡山駅西口周辺の状況と奉還町商店街
  - ⑤ スポーツで考えるまちづくり

(授業で使用了資料の一部)



次に、現代コミュニティや地域社会が直面する多様な問題に対して関心を持たせるため、まず、岡山市の都市計画、キャンパスがある岡山駅西口の活性化計画、岡山市商業調査結果を講義、映像、資料で学んだ。そして、岡山市を構成するステークホルダーである①「商店街 (奉還町商店街) と大型商業施設 (イオンモール岡山) を対比することにより両者の独自性と連携プランを考える」、②「プロスポーツ団体への支援活動をまちづくりに結びつけるプランを考える」ことにより、現代コミュニティの重要性を認識しながら地域社会が抱える課題を解決するプラン提起することを授業の最終ゴールに設定して実践型社会連携授業を進めることを説明した。

そこで学生達は、イオンモール岡山と商店街経営者への現地調査を通じて、主体的にチャッターが降りた商店街の活性化策、という問題の解決に向けて、論理的思考力と判断力を活かして現状分析と商店街の個店へ現地調査をチームに分かれて解決策を見出す作業を行った。創造力を発揮し、学び、人間性や倫理観に裏打ちされた豊かな教養を身につけることを理解した。

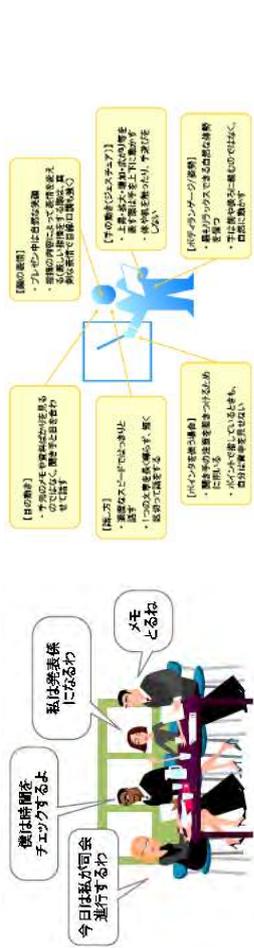
さらに、本授業では、現役の学生から地域での社会連携実践活動を紹介することにより、受講生に動機付けを促した。岡山県にあるプロスポーツ団体であるフアジアーノ岡山 (フッカーJ2) 及び岡山シーガルズ (Vリーグ) は共に市民に支えられている組織であり、地域で社会貢献活動を展開している。授業では、実際の活動を通じて得られた気づきや自らの成長、そして地域コミュニティとつながる素晴らしさについて紹介、意見交換を行った。こうして学生を4つのグループに分けて自己紹介とリーダーを決めた。各グループでは、「現場実践」の内容について説明したうえで、実践型社会連携教育で重視する、①リーダーシップ、②チーム力、③判断力、④責任、⑤気概、の期待する要素について、での視察、まち歩き、現地調査を通じて養って欲しい旨を伝え、調査の目的と「振り返り」で実施するワークショップとグループワークによる課題解決「提案」に向けた動機付けと意識の共有を行った。

3 現場実践: グループ作業について  
 まず教員から、教員自らが考える「岡山駅西口活性化策」について60分間、プレゼンテーションを行った。そして、作業の手順とまとめ方、発表の方法や時間配分について説明し、各グループは作業を開始した。ワークショップやグループワークの流れは下記のとおり。

ワークショップやグループワークの進め方



留意点①  
ワークショップを進める際の基本的な注意事項を指導した（総務省資料より）

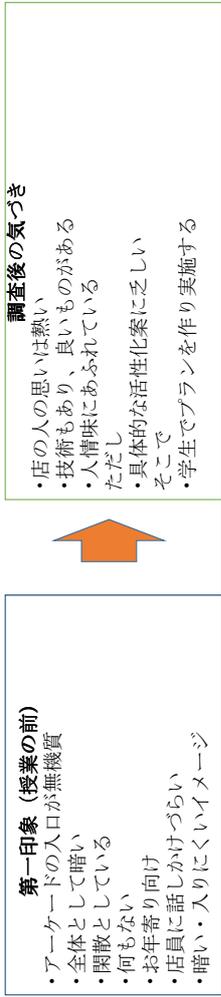


留意点②  
ワークショップのプレゼンテーションする対象を商店街の皆さんと仮定した。

学生たち自身が具体的に出来ることを最優先し、商店街の皆さんがやるべき事項、岡山市がやるべき事項に分類して話し合うよう指示をした。  
メッセージ性を高めるための工夫として、写真、データ、Webなどを活用してプレゼンテーションすること  
を重視して取り組むよう指示をした。

4 振り返り 気づきと課題

調査を実施したことによる気づきについては次のような意見が出された。



見えてきた商店街の課題

- ・駅所の高齢者の客しか呼べない→その実態を如何に打開するか
- ・駅から商店街までの200メートルは顧客にとっては長く、何か魅力的なモノやコトがなければ客は来ない→その解決策はないか
- ・新規の貸店舗には信用が必要だが、若い人が貸店舗を利用するのはなかなか難しい→若者が参加する仕組みを考えられないか
- ・ノートルダム清心女子大学の学生は商店街には来ているが横切っているだけ
- ・イオンの固定客は商店街へ連れ込むことは難しいが、商店街にもイオンにも固定化されていない客を呼びこめないか→イオンとの連携を視野に入れた施策
- ・通るだけでは消費は生まれにくい→滞留時間が長いほど消費は伸びる仕掛けを

5 講師

概ね、期待通りの成果を得てくれたと感じた。特に岡山大学が実践型社会連携教育を目指す「互恵性」(地域と学生の双方にメリットが生まれる課題解決策の提案)では、学生から「定期的に大学の学生グループを呼ぶ→出資料、イベント参加料金を無料にし、落語研究会や吹奏楽部に来てもらい、空きスペースで子供からお年寄りまで気軽に参加しやすいイベントを企画する」という提案が出された。その提案は互恵性として相互にメリットあるとして、商店街には、人が集まる、認知度が上がる、そして学生グループは、活動発表の場を得られる、コミュニティが広がる点を指摘している。こうした着想で課題を解決する能力が身につくことを期待している。

本来商店街は、おしゃべりができるのが一番の売りだと思うが、お店があまりフレンドリーでない。イオンに負けている。接客に力を入れてない。(岡山の県民性かとの問いかけに、うなずく岡山市の学生) 岡山大学はもとより、ノートルダム清心女子大学や岡山理科大学もいっしょに続けていく必要である。特に、話しかけづらい、という人は誰も特つ印象。しかし話してみようと思いは熱い。例えば、岡山大学がベンチマークにしているポータルランドは、米人が一番住んでみたい街であり、ファミリーマートが発祥の地である。栽培した人が市に持ってきても販売する。食べ方など説明し、対話をしながら売っていく。スーパーマーケット、百貨店と根本的に違う点である。商店街は、本来、専門性を持っている(最近では自信がなくなってきた)。少量でもよいものを出していくことで、広がり生まれる可能性がある。説明をしてくれる八百屋さん少なくなってきた。

面白かったのは、若い人、留学生が自国の野菜を求めて来店、気軽に外国人が泊まれる宿(全日空ホテルには泊まれない)。留学生用には、大学宿舎もあるが商店街に外国からの観光客が泊まり、留学生や岡山大学の学生とわいわい出来れば楽しい。昔の日本、おしゃべりなセンスの両方で奉還町周辺に長く滞在してくれて町が面白くなる。社会に出ると奉還町が直面しているような課題に直面せざるを得ない。社会に出てからも、創造性に溢れる力を発揮してほしい。

駅札口から奉還町の入り口までの約200メートルが、客足を向かわせるために速いことを商店街も認めている。東口は乗り入れなど大規模開発計画が進んでいるなかで、西口は、歩行者デッキを伸ばしてほしいという意見もあったが、公共性から却下されている。一方で、イオン自身がお客を十分には集められていない。昨年は1800万人。当初2000万人を見込んでいた。イオンが起爆剤となって全体のパイが増えるのがサクセスシナリオ。それがうまくいかないと岡山全体が盛り下がる。

イオンとの連携フランでは、朝市もやれと面白い。イオンも野菜があまり売れてない。しかし逆張りの発想でお互いがお互いの突破口にしている。また、デジタルサイネージについては、具体的映像でないと単なるイメージ映像や広告宣伝では顧客は見えない。学生により番組制作を行う企画をイオンと岡山放送が採用してくれることが実現できればよく、SNS、ツイッターを組み合わせ使用などのアイデアがあれば、AIDMAの法則(Attention (注意)、Interest (関心)、Demand (欲求)、Memory (記憶)、Action (行動))の5つの購買ステップを指すマーケティング用語)に似た流れを醸成できる可能性は高い。

また、イオンの共生策は良いアイデアが出され全体的によくできていると感じた。リテンション、クロスセル、あちこちのものを買ってもらおうとすることはうまくいく。カード戦略については、誰が保証するかの問題はあるがよいアイデアである。こういう切り込みのための斬新な企画がほしい。常識的に考えてありえないだろう、では手詰まり。ありえないことを含めてアイデアを出し、そこから突破したい若い世代の心をつかめたい。

「生きる力」(文科省)を見つけてもらおう。まちが、外から来たイオンと共生できるのか、フアジアーノ岡山や岡山シーガルズというプロスポーツをまちづくりに生かせるのか。「生きる力とは何か」を考えてもらった。また、ブレゼン、ワークショップ、初めての人も、最初はあえて何も注意せずにやってみたら、いろんなことを学んでくれたと思う。テーマや内容もさることながら、岡山大学としてはこうした実践型の授業を増やしていきたい。

最後になるが、今回の授業に協力いただいた奉還町商店街ならびに岡山放送の皆様にご心より深く感謝申しあげる次第である。

**先進教育賞 社会連携・社会実践教育分野**  
**「現代コミュニティと地域経済」**  
**講演全文**

今、ご紹介いただきました、地域総合研究センターの三村聡でございます。本当に今日は、栄誉ある賞をいただきまして、ありがとうございます。先ほどの佐藤先生のように若くなく、孫も2人おりますので、ベテラン系のプレゼンテーションになるかと思えます。表彰を受けたのは、小学校の時に図画工作で表彰状をもらって以来50年ぶりくらいだと思いますけれども、よろしくお願ひしたいと思ひます。

学習の目的と全体像ですが、この授業は「現代コミュニティ」を教養教育の段階でどのように理解してもらうか、さらにいかに地域総合研究センター・岡山大学と地域経済・岡山の社会をつなぐかということミッションとしております。また、岡山大学のディプロマポリシーである5つの項目を大前提とし、今回は実践型という社会連携教育ですので、リーダーシップ、チーム力、判断力、責任、気概といった5つのキーワードを授業に織り込んでいくことをテーマに授業を進めております。

特徴ですが、まず、本学が目指す「森田ビジョン」である「美しい学都」構想とは何かについて学生に説明します。それと、この授業は昨年度開講ですので、今年度から始まった60分授業・4学期制の趣旨を伝えることを前提としております。そのうえで、これは試行的な授業である点、さらにアクティブ・ラーニングとアウトカム基盤型教育の要素を有することを説明しています。説明だけでもなかなか大変です。

それから、大学では、小・中・高とは違い、授業を受ける前後で予習復習をきちんとやる必要があるため、その動機付けも、毎回授業の時に与えております。予習におきましては、岡山市に関する具体的な何種類かのデータと施策を資料として与えました。とりわけイオンモール岡山ができて岡山の街が大きく変わりましたので、先行事例である金沢や千葉の幕張でどんな展開をしているかに関する都市比較を行い、グローバルな観点では、オリンピックの招致がありましたので、ロンドン市とオックスフォード大学が、ロンドンオリンピックの際に如何なる連携をしたか、現在、本学がベンチマークとしているフランスのストラスブール市とストラスブール大学やアメリカオレゴン州のポートランド市とポートランド州立大学の連携関係等々を前段の予備知識として学生たちに説明しました。そのうえで、実践型教育を基本形とし、「スーパーグローバル大学」としてグローバルな視野を持つ大学生になって社会に出ること、私たちは社会といつも密接に関わっていること、この2つのキーワードを盛り込みながら、本学が目指している異分野・異社会・異文化といった3要素を授業の中で、なかなか難しいところではありますが、私の力量の範囲で、常に認識をしてもらえよう授業の工夫をいたしました。

授業の方針ですが、欠席すると授業が分からなくなることも勿論ありますが、チームで動くので、欠席すると他の人に迷惑がかかることから、出席を重視しました。もう1つは

報告書です。実際にグループで地域へ出かけて行って、戻ってきてからプレゼンテーションをし、ワークショップを実施しながら最終的に報告を行います。自分のチーム以外にどこのチームが良かったかを評価させて成績を付けるという方式をとりました。その理由は、競争させるのではなく、責任を持って集中してフィールドワークに取り組んでもらうことが狙いです。また、実践型の授業では運営コストの問題もありますので、キャンパスに近いイオンモール岡山と奉還町商店街をフィールドに使い、交通費・昼食費のコストは学生負担とし、なるべく自主的に地域展開をさせるという方針で授業を進めました。

準備については、高校までに学んだことを大学の教養教育に引き継ぎ、それを更に専門に展開する流れを重視します。学生はバラバラの学部から来ていますので、実際にコミュニティとは何かについて、板書を使いまして、日本の狩猟や稲作を起源とする原始コミュニティ形成の歴史から明治維新までの変遷、産業革命以降のコミュニティの変容、そして戦後から現代に至るコミュニティの課題を理解してもらいます。そして地方創生、少子高齢化社会の話や人口減少・格差の問題、大型商業施設の出現による商店街の衰退と住民の暮らしへの影響、等々の話をしながら、実際のコミュニティを「地域コミュニティ」、「広域コミュニティ」、更に「超域コミュニティ（グローバル）」という定義に分け理解を深めます。さらに私は経済学が専門ですので、わが国の課題として、アベノミクスの政策と経済状況、東京一極集中と地域経済の比較、最後に学生たちが暮らす岡山市が進める総合計画や都市計画について示します。これについては、極力、地元テレビの番組や新聞報道などを組合せて、分かりやすく身近に感じてもらえるように工夫をしています。

こうした事前準備をした上で、実際にイオンモール岡山と奉還町商店街の因果関係をフィールドワークで調査を実施します。学生たちは、ほぼ全員がイオンモールへは足を運びますが、一般的に商店街へはあまり行きません。お店に入店すると何か買わなければ出られなくなるのではないかと、奥から眼鏡でおじいちゃんが覗みつけてくる雰囲気があるなどの意見が出ました。それが実際に商店街を巡りながら、店主にヒアリングをして戻ってきて、事前事後で、どのように意識が変わったか「気づき」を観察する点をポイントにしています。

もうひとつの視点は、岡山市の西口を拠点に活躍するプロスポーツ団体であるファジアーノ岡山、岡山シーガルズの活動と商店街活性化との関係性を考え、スポーツが街づくりに活かさないかというテーマを投げかけています。単なるスポーツ観戦に留まらず、地域活性化のためのスポーツと商店街の関わりといったことを課題に与えています。この課題を理解してもらって、学生を4つのグループに分け議論を開始します。そこでは、冒頭に申し上げました、リーダーシップ、チーム力、判断力、責任、気概といったことを意識してグループワークを実施するよう動機付けを行います。

さて、この授業では500枚くらいのパワーポイントを使います。一部をお見せしますと、オックスフォード大学とロンドン市が連携した「CO2削減に向けた政策パッケージ」の概念やストラスブル市のトラムの復活による公共交通を核とした都市交通政策、さら

にASEANと日本の関係を知る上で、イオンを通して時を同じくしてオープンしたイオンモール岡山とカンボジアのイオンモールプノンペンの店舗や都市構造を比較するというスライドを見せます。

さらに、本学が目指す「美しい学都」構想を考えるために、学内の先生方が取組まれている「学都研究」の資料ですとか、「学生企画」として活動予算をとって学生が展開している地域活動の報告資料もあわせて紹介します。この準備には地域総合研究センターの職員の方の多大なる協力を得ています。センター職員とまちづくり活動を展開している学生の参加でもって授業全体を進めていくという流れをとりました。

ワークショップやグループワークの手法ですが、まず、グループで目指すテーマを決め、実際に商店街へ出て行って、了解を得てお気に入りのお店で写真を撮らせて頂き、ヒアリングを行い、コメントをとってきます。これには事前に奉還町商店街の商店街組合に依頼して事前打ち合わせをする必要があります、準備は通常の授業の3倍くらいかかります。そして、ヒアリング先の個店分析や改善案の検討、大学へ戻ってからワークショップを組み合わせ提案書作りを行います。最後に岡山駅西口の全体の課題抽出と解決に向けた改善プランの策定を行います。イオンモールの中に、岡山放送も入りましたのでICTや情報ネットワークを活用した次世代メディアをイメージしながら地方局の果たすべき役割について、地域とメディアの連携プランについても検討します。プロスポーツを活かした街づくりプランでも、こうしたメディアミックスの観点を踏まえて、奉還町商店街のあり方を考えます。

実際のワークショップの基本的な進め方の解説、今お話した授業前と授業後の気付き、そして具体的な課題、解決策をプレゼンテーションするという授業についてご説明申し上げました。少し駆け足ですけれども、以上でございます。

Q: もう少し具体的に、学生がどのように動いていくのか、TAを使われているかどうか、あるいは先生方がどのようなかたちで関っていくのか。最初のあたりは座学でいろんなことを学ばないといけないということがあって、そのあと学外に出て行くわけですが、それぞれグループごとにたくさんテーマが出ましたけれども、例えばスポーツならスポーツだけをやっていくわけですよね。そうすると行く先がてんでばらばらになるわけでしょうから、どのような調整をされ、教員はそのとき何をしているのか、もう少し動きを教えてくださいませんか。

A: 説明不足でありましたが、TAについてはセンターの研究者と職員の協力を得ています。また、事前学習で座学で学んだ内容を踏まえて、自主的に商店街へ出かけてもらい、その感想を話し合ってからフィールドワークに入っています。そして振り返りをして、お互いを評価し合うというステップを踏んでおりまして、フィールドは岡山駅西口エリアの奉還町商店街と運動公園・スタジアム、東口ながらイオンモールまでを検討領域に設定しました。

どこを中心にするかは、グループ分けをしたときに、目的を伝えてグループの学生たちに話し合わせ、今までの経験知で抽出をさせています。基本的な内容は西口側全体の活性化ということですが、それぞれ詳細なテーマを決めて、自分たちで計画を立てて、うかがう際の礼儀作法を教えて、戻ってきて授業の中やグループワークでプレゼンテーション資料をパワーポイントで作成し、それぞれが発表していくといった中でそれぞれのチームとの差異ですとか、共通認識というものを理解しあい、最後は教員の方でまとめを行います。その時に、研究員や職員の方に実践の授業のフォローもしていただいております、裏方の作業をかなりお手伝いしていただきながら、職員と教員の連携、あとは先行して街に出ている学生も授業に巻き込んで、同じ学生同士が話し合うということで授業に深みを作っていく工夫をしています。

Q：最終的には、学生はどういうものを出して評価されるのでしょうか。レポート等でしょうか。

A：時間の関係で省略してしまいましたが、授業前と調査後の気付きです。評価については、各人はレポートをまとめて Word で提出します。さらにグループで作成したパワーポイントによる提案書の内容とプレゼンテーション能力を評価に加えています。ただ、リーダーシップでぐいぐい引っ張る学生と受身の学生もいますので、ぐいぐい引っ張る学生だけが成績が良いという付け方はしていません。だいたいグループで見ながら、あとは毎回の出席ですとかミニ理解度テストを課しておりますので、提出状況等も評価の対象としています。

Q：それは最終的には商店街で活用されるかたちになりますか。

A：ご協力いただいた奉還町商店街、岡山放送、イオンに対してはアウトプットとして印刷した冊子にしてお渡ししております。本当は学生が報告会を実施する授業に商店街の方や関係者に来学して頂き、聞いていただきたいというのが狙いだったのですが、そこまではできておりません。一方で、アウトプットをきちんと奉還町商店街にフィードバックして次に活かすべく、授業を受けた学生数名が自主的に奉還町商店街へ行って、引き続き自分たちがやったことを検証しようと活動展開をしております。

## 先進教育賞 外国語による授業分野 「観光文化交流論」

小野 真由美（グローバル・パートナーズ講師）

日本の高等教育の新たな価値創造がグローバル人材育成という理念の下で進められるなか、学際的かつ国際的な研究交流と教育にいかに関与するかという課題に対し、各大学が対応を迫られている。高等教育機関が目指すべき改革の方向として、グローバル人材の育成に取り組んできた日本の大学は、教育の英語化や留学生の受入と派遣により学生のモビリティの向上に努めるだけでなく、グローバル化時代に求められる教養を重視した教育の改善充実について、何を、どのように取り組む必要があるのか、教養教育の内容が問われている。教養の中身が時代とともに移りゆくのであれば、現代の高等教育の現場からみて必要となる教養とは何かについて検討を重ね、その中身にあった教養教育を提案することが、教育の現場である大学に求められている。

このような状況の下、岡山大学では外国人学生の受入と日本人学生の派遣留学の増加のために、海外の協定校や研究機関との交流や連携の強化・拡大に取り組んでいる。グローバル・パートナーズでは、海外の協定校からの留学生向けに英語による授業数を増やし、留学生と日本人学生が共に学ぶ機会を提供している。本報告では、岡山大学グローバル・パートナーズの教員として担当する授業「観光文化交流論」（Tourism and Culture in Japan）について紹介する。

### 1. 本授業の目的

本授業は、現代社会における観光と文化に関する基礎的な知識を習得し、世界の様々な観光文化交流について文化人類学の視点から比較・検討することによって、日本社会と文化について理解を深めることを目的としている。本授業では、留学生と日本人学生がともに英語（日本語を併用）を用いてアクティブラーニングを実践する。

グローバル化の進展により、国境を越えた人の移動が多様化する現代社会では、常に新しい観光形態が生み出されている。従来のような「余暇活動としての旅」だけではなく、観光は「移住」や「医療」といった人々の暮らしや生き方自体に大きく関与している。本授業は、観光という切り口から日本社会と文化について学ぶ上で、世界の様々な地域における観光の価値創出のメカニズムと比較・検討し、ますます多様化、複雑化する文化をく読み解く視点をも身に付ける。観光という現象が、国家、コミュニティ・地域社会、個人をとりまく社会文化的な状況をどのように反映しているのか、また、新たな観光形態を経験、消費することはツーリストの生活にどのような質的变化をもたらすのか、さらに、観光地の地域コミュニティや地元の人々にどのような影響をあたえるのか、観光開発によって当該地域に生じる様々な現象や問題点を指摘・検討する。

## 2. 本授業の概要

本授業では、旅、伝統文化、表象、交流、商品化、遺産、環境、開発、健康・医療、民族、エスニシティ、アイデンティティ、ふるさと、ホスピタリティなどについて考察する。本授業は、アクティブラーニングを取り入れ、フォトグラフィーを用いた課題やドキュメンタリーフィルムの批評、調査実習を行うことによって留学生との協働学習（ディスカッション、プレゼンテーション、フィールドワーク、グループ研究）を実践し、共通の課題を設定し、協働を通じて理解を深め、批判的、相対的に考える視座を身につける。授業の前半では、観光や文化についての基礎的な知識を習得し、後半にはグループワークによるアクティブラーニング型の学習を実施し、学期末にその成果を授業内で発表する。

## 3. 本授業の特徴的取組

本報告では、本授業の特徴的取組として、以下の4点について紹介する。

- ① 留学生と日本人学生の協働学習：文化的背景の異なる学生同士が連携して主体的に学び、言語や行動様式、価値観の違いを相互に調整しながら課題に取り組む。本授業は、日本人学生（文学部、教育学部、医学部）と様々な留学プログラムに参加している留学生（EPOK・アメリカ、キャンパスアジア・韓国、日研生・フランス、コーププログラム・カナダ）が参加し、文化的多様性に富んだ学習機会を提供することができた。
- ② 二言語（英語・日本語）の併用：留学生と日本人学生が協働学習をする上で、英語と日本語を併用し、母語の異なるもの同士が相補的に学び課題に取り組むことによって、授業内容の深い理解が可能となる。留学生は、授業内容に関するアカデミックな日本語を習得する機会となり、日本人学生は英語での議論や情報収集、意見発表のスキルを身に付ける。
- ③ アクティブラーニングの実践：観光と文化についての基礎知識を学ぶだけでなく、自らの体験や文化理解に照らし合わせて、議論やグループワークを行う。フォトグラフィーを用いた課題やドキュメンタリーフィルムの批評、クラスメイトのグループ発表のコメントなどを通じて、文化的背景の異なる他者と協働することについて実践的に学ぶ。
- ④ フィールドトリップの実施：文化人類学の文化の概念やフィールドワークについて学び、学期中の休日を利用し、現地調査実習のためのフィールドトリップを実施している。平成27年度は、大久野島で実習を行った。フィールドトリップの事前（調査地に関する知識の習得とリサーチクエスションの作成）・事後学習（調査報告）は、グループワークとグループプレゼンテーションによる協働学習を行った。



岡山大学桃太郎フォーラム2016



OKAYAMA UNIV.

## 観光文化交流論 TOURISM AND CULTURE IN JAPAN

岡山大学  
グローバルパートナーズ  
講師 小野真由美



## 観光文化交流論—授業の目的



### 実践

- ・ 外国語能力、異文化間コミュニケーション能力が必要となる現場の状況
- ・ 留学生とともに学ぶ
- ・ コミュニケーション能力:対話による意思疎通

### 文化

- ・ 異文化を知る
- ・ 異文化のなかで生活し、経験から理解する

### 理念

- ・ グローバル人材の育成の場となる高等教育の現場
- ・ 共生・協働
- ・ グローバル社会への貢献

週	Tourism and Culture in Japan/観光文化交流論 授業内容
1	Introduction
2	Meaning of tradition in Japanese tourism/ 日本の観光における伝統の意味
3	Photographing tourism sites/観光地の写真を撮る
4	Commodification of culture/文化の商品化
5	Heritage tourism/遺産観光
6	Mid-term presentation
7	Tourist gaze/観光のまなざし
8	Film: <i>Cannibal Tours</i> /ドキュメンタリーフィルム「カンニバルツアーズ」
9	Othering the nationals: Okinawa/沖縄の事例からみるエスニック観光
10	Onsen and Health・Medical tourism /温泉観光とヘルスツーリズム
11	Medical tourism/医療ツーリズム
12	Group presentation 1/グループ発表1
13	Group presentation 2 and final discussion/グループ発表2
14&15	Field trip/現地調査実習(フィールドワーク)

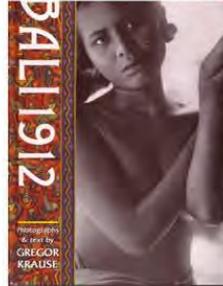
## 授業内容紹介:観光のまなざし



### TOURIST GAZE:

### WHO 'GAZES' AND WHO IS 'GAZED'

観光者のまなざし:「見るもの」と「見られるもの」

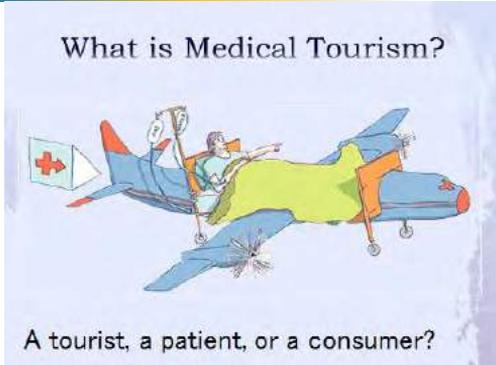


Gregor Krause,  
German doctor's  
photographs

### Bali 1921

Bali has become the last  
resort among Western  
tourists.

## 授業内容紹介:医療ツーリズム



## 4つの特徴的取組



- ① 留学生と日本人学生の協働学習
- ② 二言語(英語・日本語)の併用
- ③ アクティブラーニングの実践
- ④ フィールドトリップ(現地調査実習)の実施

## 特徴的取組①留学生と日本人学生の協働学習



- H27年度の履修生
  - 岡大生（文学部、教育学部、医学部）
  - 留学生（EPOK・アメリカ、キャンパスアジア・韓国、日研究生・フランス、コーププログラム・カナダ）
- 留学生とともに英語で学ぶ教養教育科目
  - EPOK留学生とともに英語で学ぶ教養教育科目の充実
  - 日本社会と文化に関して英語で説明する能力を身に付ける
  - 留学生チューターやTAの機会
- 地域をキャンパスに留学生と学ぶ・交流する
  - 地域＝日常生活圏内で課題に取り組む
  - フィールドトリップ（現地調査実習）の実施

## 特徴的取組②二言語（英語・日本語）の併用

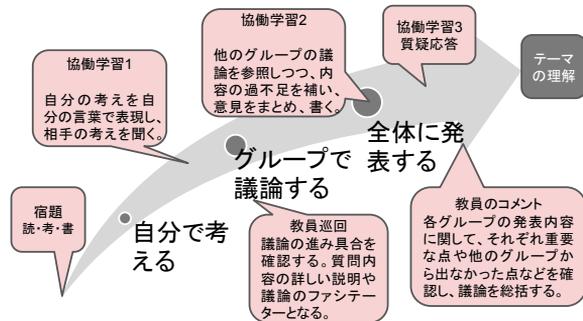


## 特徴的取組③アクティブラーニング



- アクティブラーニングの実践
  - 自らの経験や文化理解に照らし合わせて、議論やグループワークを行う
  - 文化的背景の異なるものと協働することについて実践的に学ぶ
- フォトグラフィーを用いた課題
  - 言語以外のツールを使い、文化表象について考察する
- ドキュメンタリーフィルムの批評
  - クラスメイトの課題発表やグループ発表の批評やコメントを行う

## 授業内の議論と思考のフロー



## 特徴的取組④調査実習（大久野島）



最終グループプレゼンテーション  
大久野島調査報告

## おわりに：動的な学びの空間の創出



- 動的な学びの空間
  - 動的な学び＝アクティブラーニング
  - 岡山大学から世界へと広がる教室
  - 学生のモビリティを促進する授業づくり
- 協働学習を通して、教え・教わることを学ぶ
- 文化の読み書き能力と自己理解一人間の理解
  - 異文化理解＝他者を通じた自己理解
- 同時代を生きるあらゆる他者とひとつの世界にともに生きることを学ぼう
- 観光・産業社会に関わる知識の提供
  - グローバル実践人を育成する試み

**先進教育賞 外国語による授業分野**  
**「観光文化交流論」**  
**講演全文**

ただいまご紹介にあずかりましたグローバル・パートナーズ講師の小野真由美と申します。この度は、ティーチング・アワードという非常に榮譽のある賞をいただきまして、大変感激しております。これから教育実践に関して努力していきたいなと思いますので、つたない発表ですが、私のやっている授業に関して紹介させていただきたいと思います。

この授業は「観光文化交流論」といって、「TOURISM AND CULTURE IN JAPAN」を英訳のタイトルにしています。この授業を作るにあたって、どのような状況に私が置かれていたかといいますと、グローバル・パートナーズの講師として岡山大学に2年前に着任いたしました。グローバル・パートナーズでは留学生をたくさん受け入れておりまして、英語で開講する授業をどんどん作っていきこう時でした。そういった流れを受けて、日本について学ぶ要素を入れた観光・文化という切り口から、文化と社会について考察していくという授業にしております。使用言語は英語ですが、日本人の学生にも留学生と学ぶ機会をどんどん活用してもらい、また、グローバル・パートナーズでの私の役割がスタディ・アブロード部門といまして、日本人の学生をどんどん留学に導いていくような役割をしていますので、留学の第一歩として、まず岡山大学のキャンパスの中で留学生と学ぶ機会を持ち、その楽しみ、喜び、新しい発見などを学生たちに提供できればと思いこの授業を作りました。

観光と文化の関係ですが、私の専門は文化人類学です。文化人類学のサブカテゴリーの中に、観光人類学という分野があります。観光という現象は文化人類学の中では80年代まで取り扱ってこなかったテーマですが、グローバル化する社会の中で観光という現象、営為、行為は人間の社会から切っても切れない事象になっており、そしてまた文化というものを考える上で非常に示唆のある切り口であり、様々な問題を提起してくれる分野であるということで、文化人類学また社会学等が観光を取り上げるようになりました。留学生をたくさん受け入れているグローバル・パートナーズで開講する教養教育科目として、観光を取り上げることで、日本文化について知識を深めてもらうだけでなく、日本人学生の中にも自分の生まれ育った日本、日本文化、日本社会というものを相対的に考察する機会を与える、そういった授業を作れるのではないかと思います。「観光文化交流論」という授業を行っています。

授業の目的ですが、外国語能力そして異文化間コミュニケーションを培う現場になればということ、留学生と共に学ぶということが非常に重要なファクターであること、対話による意思疎通やディスカッションの能力を高めてもらいたいということです。異文化を知ること、異文化の中で生活し経験から理解すること、そういった留学生がまさに岡山大学で経験していることを日本人の学生が共有していくことが、日本文化や世界の文化を理解していくきっかけになるものです。そして、理念としてグローバル人材の育成を掲げる高等教育の現場でどのような教養教育を提供することが時代の要請にあっているのかと考えること、

学生に共生や協働，グローバル社会の貢献といったことを考えてもらうきっかけづくり，そういうことを授業の目的としています。

平成27年度にこの授業を履修した学生は，文学部，教育学部，理学部の学生でした。留学生も様々なプログラムに参加している学生が集まってきてくれました。EPOK 交換留学プログラムでアメリカからきた学生，キャンパスアジアの韓国人の学生，日研生のフランス人の学生，そして岡山大学で実施している短期留学インターンシッププログラム Co-op プログラムで受け入れたカナダの学生が参加しました。そのように多様な文化背景をもち，様々な専門を学ぶ学生たちが集まる，非常にバラエティに富んだクラスルームになりました。そして留学生と共に英語で学ぶのですが，英語だけではなく日本語を併用することによって相互の理解を深める，双方向的な理解に繋げるということを目指しました。日本人の学生にとっては，英語で学び，ディスカッションをし，共同作業をするよい機会になりますし，留学生に関しては日本語，人類学や観光に関する言葉，日本文化に関する言葉を積極的に学んでいくよい機会になるので，二言語を併用する形で授業を行いました。地域をキャンパスに留学生と学び，交流し，また，日常生活圏内で課題に取り組むため，フィールドトリップとして平成27年度には広島県大久野島に調査実習に行きました。そしてアクティブ・ラーニングの中でも，調査やディスカッションだけではなく，フォトグラフィーを用いた課題で行うことで，言語以外のツールを使って文化表象について考察すること，ドキュメンタリーフィルムの課題発表や批評，コメントを行うスキルも磨きました。

内容についてですが，観光人類学には，観光者のまなざし「TOURIST GAZE」という概念があります。観光者がどのように訪問先の文化をまなざしているのかということの問題として取り上げているのですが，学生に観光のまなざしという概念を理解してもらって，実際に自分が観光者になり，異文化を見るときにどのようにまなざしているのか，そこにどのような権力関係が発生しているのか，そのようなことを考えてもらう内容として，「観光のまなざし」を取り上げました。バリの観光写真集「Bali 1921」という写真集が出版されてからバリが世界の一大観光地になってきました。ここには，女性の身体が表象されているのですが，女性の身体が表象するバリの観光といった切り口から観光というものを再度検討していく，そういったことを授業のなかでディスカッションをしました。また，医学部の学生がいたりするので，最近観光の中でも非常に大きなテーマとなっている医療ツーリズムを取り上げて，今まで医療という面から見ると患者であった人がツーリストでもあり，消費者でもあるということなどをどのように考えるのかということ，倫理などをディスカッションしました。身体の商品化といった言葉を使ったディスカッションも行いました。

特徴的取り組みの3つ目ですが，調査実習として大久野島に行きました。なぜ大久野島を選んだかといいますと，観光学の中で最近「ダークツーリズム」が非常に大きな研究関心になっております。そもそも観光というのは光を観る行為，明るく楽しいイメージで語られているのですが，ダークなものを観る行為も観光の中に入るということで，最近研究が進んでいます。例えば，アウシュビッツであったり広島であったり，そういったダークツーリス

ムの研究が非常に盛んにされているので、大久野島を例にとって、学生がどのようにこの場を調査するのか、まなざすのかを探ってみました。事前学習を行い、数週間をかけて取り組み、毒ガス工場の見学、館内の説明をしてくださる方への質問をしたりしました。そのあと実際に大久野島の中で自分たちも観光者の一部となってその場を体験し、他の観光客の人がどのようなことをしているのかということを観察したりしました。その場にいる人たちに話を聞いたり、調査項目を立てて調査に臨みました。そしてその成果を最終報告としてプレゼンテーションしました。

一言でこの授業の工夫した点を述べると、動的な学びの空間の創出という言葉になります。動的であることはもちろんアクティブ・ラーニングでできることなのですが、岡山大学から世界へ教室が広がっていくんだというイメージの中で授業を行うこと、そして学生のモビリティを促進する授業作り、この先海外で学んでみたい、留学生と学んでみたい、外国語のアカデミックスキルをもっと身につけたい、そういったダイナミックなモチベーションが高まるような工夫をしました。そして共同学習を通じて教え教わること、双方向的な学びの意義を学ぶことを重視しました。そして文化の読み書き能力と自己理解、人間の理解と書きましたが、文化人類学の基礎を用いて、異文化理解は、つまりは他者を通じた自己理解であることを理解してもらうことに務めました。

最後には、「同時代を生きるあらゆる他者と一つの世界に共に生きる」という大きなテーマについてみんなで考えました。そして、観光というのは産業社会に関わる実践でもありますので、産業社会に関わる知識を提供し、グローバル実践人の育成を目指すという工夫も行いました。

以上が観光文化交流論の授業の紹介になります。ご静聴ありがとうございました。

Q: この授業で成績評価をもちろんされるわけですが、どういうふうに成績は付けておられますか。

A: 成績評価に関しましては、まず毎回の授業の参加度です。どの程度議論に参加できるのかということを見る部分として、6週目のミッドタームプレゼンテーションがありまして、プレゼンテーションが12～13週にあるようなかたちになっています。ミッドタームプレゼンテーションとファイナルプレゼンテーションになるグループ研究と、学期末に個人レポートとしてエッセイを書いて提出してもらいます。もちろん、英語を使う比重が大きい授業ですが、もし留学生に日本語でエッセイを書く意欲があれば日本語で書くように促していますし、日本人の学生でも日本語ではなくて英語でエッセイを書いて意欲的に取り組む学生もいます。なので、エッセイの最終レポートで評価もしています。あとはピアレビューをグループ内でしてもらい、どの程度自分がグループワークに参加し貢献したかということを経験者同士で評価し合うといったところから、参加度を測ったりしています。

Q: 学外に調査実習というかたちで学生を連れて行かれているわけですが、その際は

学生に英語で話されるわけですか、それとも日本語で話されるわけですか。

A：両方を使ってコミュニケーションをとっています。

Q：日本人学生の理解度、先生がずっと英語で授業をされていて、それに対しての理解は十分にできていると考えてよろしいでしょうか。

A：それに関しては、先ほどスライドで出させていただいたように、重要な概念に当たるところや言葉に関しては、日本語を付けるようにしています。例えば **TOURIST GAZE** と書かれていても何のことか聞き慣れない人には分かりづらいかもしれないので、それを丁寧に説明することによって、「観光者のまなざし」と書き、専門のテキストをそのまま使うのではなく、学生が分かりやすいように、かなり噛み砕いて英語と日本語を使って説明するようにしています。

オリエンタリズムの概念を議論に取り上げるとしたら、それを分かりやすく説明することはたぶんできるので、そういった形で専門用語を専門用語のまま使わないで、非常に噛み砕いた言葉を使って説明する工夫を、日本語と英語両方を使ってやっています。テキストでも日本語と英語が同じ訳が出ているものに関しては使ったりしました。たとえば、スーザン・ソンドクの著書「他者の苦痛へのまなざし」という本は「**Regarding the Pain of Others**」という本が出ているので、その両方の文献を配って、日本人も留学生も読んでもらうようにしました。

## 優秀教育賞 中規模授業部門

### 「対人援助のためのメンタライジングとマインドフルネスの心理学」

#### 教養の心理学の授業における目標と工夫

「対人援助のためのメンタライジングとマインドフルネスの心理学」を例として

上地雄一郎（教育学研究科）

教養科目は専門科目に比べて軽く扱われることがあるが、学生が大学に入学して最初に接する授業であり、大学へのイニシエーションとしての役割を担っている面がある。その意味では、授業を通して「岡山大学での学びは興味深い、意義がある」と感じてもらうことが重要であると思う。私の心理学の授業を受講する学生には医学部や教育学部など対人援助を目的とする学部の学生が多かったことから、将来何らかの対人援助職に就く予定であるか、対人援助に関心のある学生を対象にし、併せて私が現在とくに関心を持っていることを取り入れた内容にしたのが、上記の科目である。

この授業の大きな目標は2つあり、1つは自分の心の状態（精神状態）に目を向け、それをありのままに体験することである。もう1つは、カウンセリング的傾聴の姿勢と技法について学ぶことである。

私たちは、多忙さにかまけて自分の内面を見ることが疎かになりがちであり、また、目を向けたとしてもすぐに観念、概念、価値観、先入観などに妨げられて、心の状態をありのままに捉えているとは言いがたいことがある。上記の授業名に出てくる「メンタライジング」（*mentalizing*）とは、自閉症者についての研究などから生まれた概念であり、「自分と他者の心の状態に目を向け、それを推測し、一定の認識に到達する心的行為」のことである。ただし、メンタライジングには、そうして到達した認識をもう一度振り返り（メタ認知）、より妥当な認識に向けて省察を繰り返すことが含まれている。次に、「マインドフルネス」（*mindfulness*）とは、仏教の瞑想から発展した概念であり、心理療法（認知療法）の中に取り入れられたことで世間の注目を浴びている。マインドフルネスとは、自分の心身の状態に目を向け、価値観や評価を交えず、ありのままに捉えることである。

この授業では、瞑想の実習を通してマインドフルネスを体験するとともに、数々のワークを通して自分の心に浮かんでくる考えと実際の現実を混同しないようにするためのトレーニングを行った。以上の学習・実習を経たうえで、次に、カウンセリング的対話の基礎を学習し、受講者がペアになってカウンセリング的対話の実習（ロールプレイ）を行った。仕上げのレポートとして、悩みを持った人を1人想定し、その人に対してカウンセリングを行ったと仮定して、そのシナリオを作成してもらった。授業期間中を通して心がけたことは、わかりやすく、興味を引くような講義と、視聴覚教材の活用、実習の活用であった。

成果としては、実習を通して自分の心身の状態に気づきやすくなった学生や、カウンセリングの実習が将来のために役立つと感じた学生も多かったようである。履修者には、「将来精神科医になりたいので対話の訓練を受けたい」という学生も含まれており、専門課程への橋渡しにもなったかもしれない。適度に実習が組み込まれており、またディスカッションの際には他の受講生とのコミュニケーションも生まれるので、単に講義を聴くだけの授業では得られない参加者意識が生まれていたようである。

# 対人援助のための メンタライジングとマインドフル ネスの心理学

2016.9.1.

教育学研究科

上地雄一郎

1

## 1. 本授業の目的

(1) 自己理解:

- 自分の心身の状態に気づく
- 特定の(ネガティブな)考えへのとらわれに気づく
- 心身の状態をありのままに見つめ、特定の考えにとらわれないでいる姿勢を身につける

(2) 他者理解:

- 他者の心への注意を理解を心がける
- カウンセリング的傾聴の基本姿勢と基本技法を学ぶ

2

## 2. 本授業の背景

- 平成21年より、自己理解を促進する内容の心理学の授業を開講してきた
- 多数の学部から受講があったが、とくに教育学部や医学部の学生が多かった
- 受講生は、将来、人の心に関わる仕事に就くこととの絡みで受講していると思われた
- 平成27年から「対人援助」に関心のある学生をターゲットにして授業を構成
- 担当者の専門性を生かす:アカデミックな側面を失わない
- 50~60名程度の少人数授業とする

3

## 3. 用語の説明

(1) メンタライジング (mentalizing)

自己と他者の行動<sup>\*1</sup>の背後にある精神状態<sup>\*2</sup> (mental states) [考え, 願望, 欲求, 感情, 意図, 信念など] を推測し, それと関連させて行動を理解すること<sup>\*3</sup>

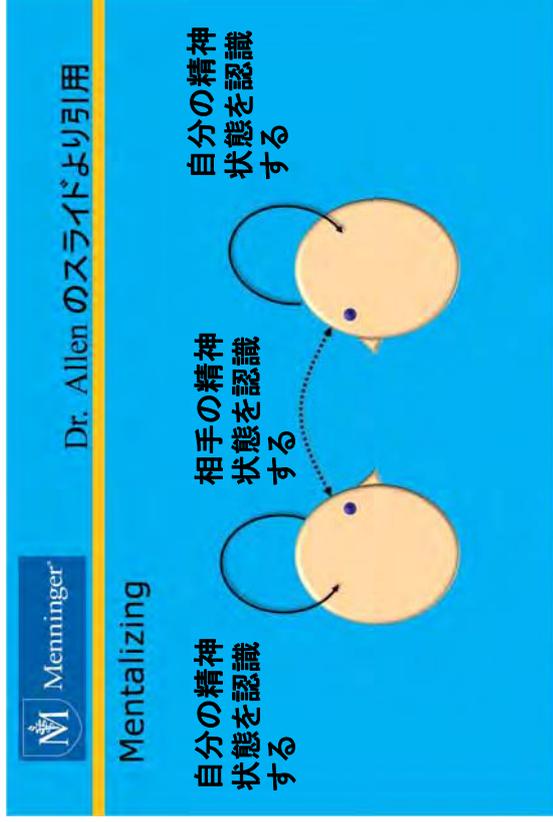
- \* 1) 行動=態度や発言なども含む広い意味での行動
- \* 2) 「行動は精神状態を反映している」と考え, その精神状態を推測すること

● 類似語「メンタライゼーション」(mentalization)

メンタライジングが可能になるプロセス, 可能になった状態, 結果としてのメンタライジング能力

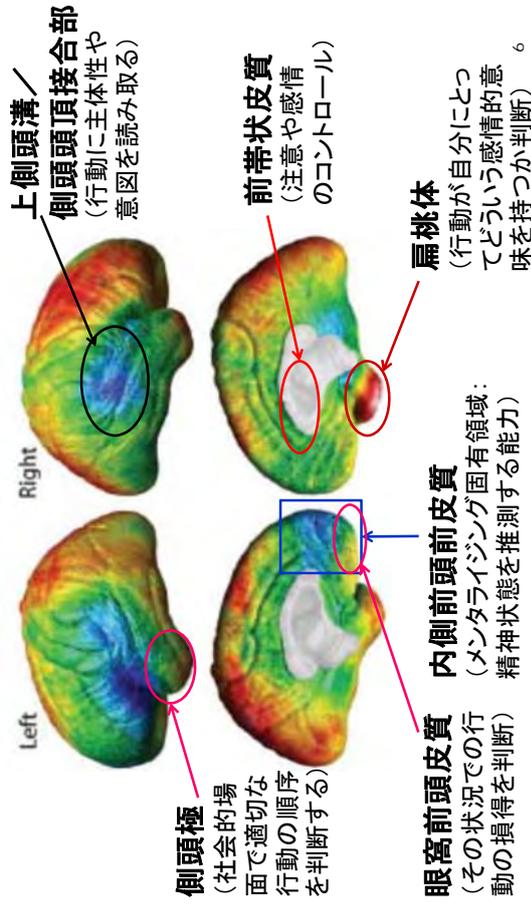
4

## ●メンタライジングの図式



5

## ●メンタライジングと関連する社会脳



6

## ●メンタライジング概念の起源

複数の起源があるが、共通点は「他者の心を読む能力」についての議論



- ① 自閉症者における「心の理論」  
またはメンタライジング能力の「先天的」障害
- ② 子どもの愛着を安定化させる親側の要因としてのメンタライジング
- ③ パーソナリティ障害患者におけるメンタライジング能力の「後天的」障害

7

## ●メンタライジングを促進する心理療法

- ピーター・フォナギー Fonagy, P. (1952-)
- 英国の心理学者・精神分析家
- 共同研究者たちと共にメンタライジングの障害を改善する心理療法を提唱



Bateman, A.



Allen, J.G.



8

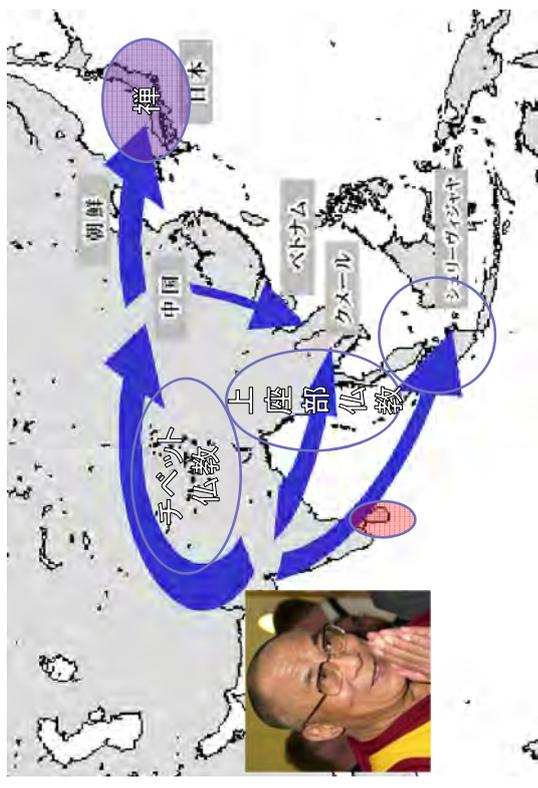
## (2) マインドフルネス (mindfulness)

- 定義: 「心身の状態に注意を向け、それを評価したり価値づけけたりせず、そのまま暖かく受け入れること」
- 仏教の瞑想から生まれた概念  
瞑想の目的: 物事をありのままに正しく観ること
- 瞑想と共に心理療法の中に取り入れられた  
⇒ マインドフルネスを活用する心理療法
- マインドフルネスの姿勢がうつ病や不安障害の治療および予防に有効

40

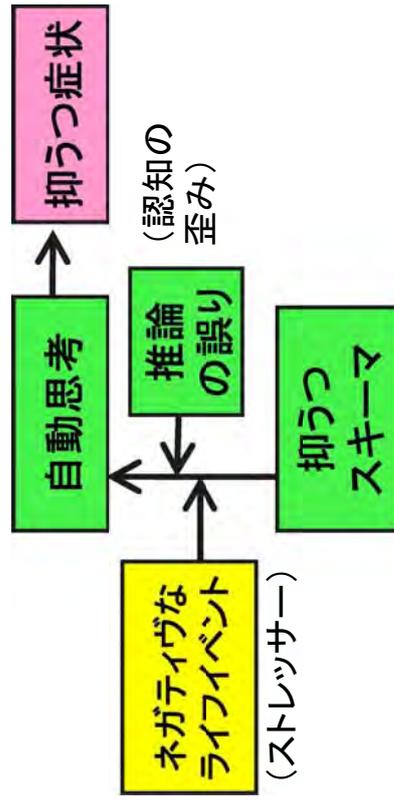
10

## ● 瞑想を重視する仏教の宗派



## うつ病発症の経過 (Beckの理論)

A 出来事      B 認知      C 感情

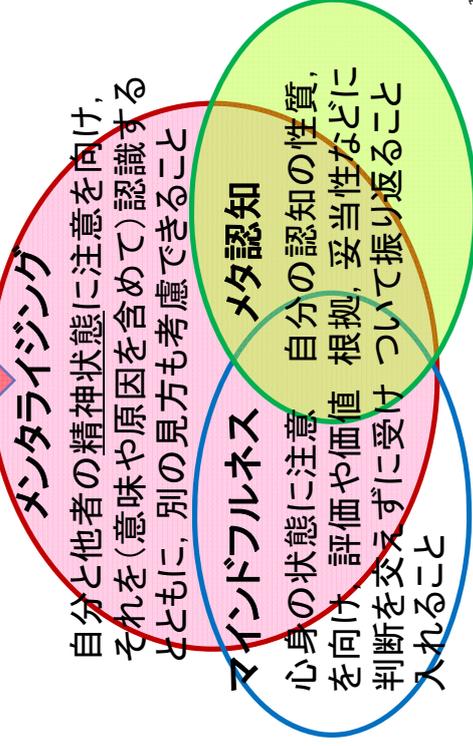


## (3) メタ認知 (metacognition)

- 「認知についての認知」「思考についての思考」
- 認知 (自分が捉えたこと, 考えたこと) の性質, 特徴, 根拠, 妥当性などについて振り返り, 認識すること
- メタ認知の不在または喪失 ⇒ 自分の「考え」と「現実」との混同  
\* 自分の考えはあくまで現実についての1つの捉え方
- メタ認知の促進: うつ病などの治療や予防に有効  
⇒ 精神科領域における「メタ認知トレーニング」

11

## 心の理論：メンタライジングに用いられる判断の枠組み



13

## 4. 授業における工夫

- (1) 実際例や体験談を交えた、わかりやすく丁寧な説明
- (2) 興味と動機づけを高める授業資料
- (3) 視聴覚教材の活用
- (4) 実習：
  - ① マインドフルネスとメタ認知を促進するためのエクササイズと瞑想
  - ② リラクゼーション(自律訓練)実習
  - ③ 心理学的尺度(心理検査を含む)による自己理解
  - ④ カウンセリング的対話実習
  - ⑤ 受講生同士のディスカッション
  - ⑥ 受講生へのインタビュー

14



15

## 5. 授業の評価

- (1) 本授業のうち5回は「マインドフルネスとメタ認知を促進するための心理教育プログラム」と銘打ち、大学院生がプログラムの効果を測定
  - ⇒ マインドフルネスとメタ認知の一部の側面が促進され、その効果が持続していることを確認
- (2) 毎回感想文を提出させ、受講生の変化を追った
- (3) 評価された側面(受講生の感想より)
  - 実習により落ち着きが得られ、自分の学生生活について振り返ることができた

16

- 
- 自分の心身の状態に気づくことができた
  - とらわれに陥らないための心構えができた
  - うつ病や不安障害の心理療法について知ることができた
  - 他の学生と交流できた
  - カウンセリングの基本が学べた
  - 将来の仕事に役立つことが学べた

ご静聴ありがとうございました。

**優秀教育賞 中規模授業部門**  
**「対人援助のためのメンタライジングとマインドフルネスの心理学」**  
**講演全文**

教育学研究科の上地と申します。こういう表彰をいただきまして、大変ありがたく思っております。実はさきほどの佐藤先生の発表を聞きましてすごく力が入っているなと思いましたが、私は必ずしもこの授業に野心があったわけではありませんが、むしろ苦勞をしているのは他の科目です。佐藤先生のお話にもありましたが、一部の学生について非常にモチベーションが低いといえますか、態度に問題があるので日夜いろいろ工夫しているところですが、そういうことを労っていただいたような気持ちになっております。

それではこの授業を紹介させていただきます。この授業は非常に長い名称になっておりまして、実はメンタライジングのところは除いてもよかったです。自分の専門性をアピールしようと思っ入れて入っている次第です。私は平成20年に岡山大学に赴任しまして、平成21年からほぼ毎年のように教養教育科目を開講して参りました。その中で、わりと色々な学部から学生が授業を受けに来るのですが、とくに教育学部や医学部の学生が受けてくることが多く、医学部の学生ですと、将来、精神科医になりたいのでそのために心理学を学びたいという学生も含まれております。私の専門が臨床心理学といまして、カウンセリングとか心の問題を持った人を支援する心理学でございますので、そういったことを授業の中で取り上げております。

授業の大きな目的としましては自己理解ということで、自分の心の状態、体の状態に気づいていく、特にその中で自分についてネガティブな考えに気づき、それに囚われてしまうということに対して注意深くなる。こういったことを前半の目的といたしました。その上で後半は、もう少し他者の心、他者の感じていることに注意を向けていく方向にしまして、カウンセリング的な人の話の聴き方と基本姿勢について、非常に初歩ですけれども実習を通して学んでいくことを目的としています。

それで、この授業は言葉が非常に難しく、皆さん聞き慣れない言葉が並んでいたので、若干説明が必要なのですが、まずメンタライジングというのは最近使われている言葉で、メンタライズという動詞の動名詞形にして、一言で言えば人がある行動をするとき、その背後にどんな精神状態があるのか、どんなことを考えて、どんな感情を持っているのか、どんな欲求があるのかということを推測して理解することです。例えば、ある人がソワソワしていたら恐らく「何か気になることがあるんですか」と近くにいる人は聞くとします。つまり何かソワソワして落ち着かないということはあくまで体の動きですが、その動きから何か気になって心配であるという精神状態を読み取るわけです。こういうのをメンタライズと表現するのですが、このメンタライズができるようになることを、メンタライゼーションといえます。これがなぜ問題になってきたかといえますと、先天的な理由または後天的な理由でメンタライジングの能力が乏しい人がいるからです。先天的な理由で乏しい人

というのは自閉症の方です。自閉症の方で知能の高い方は、要するにそれほど問題がないわけですが、実はこういう人の心を読み取る力が弱いということがあります。そのためにトラブルが起きたり場違いなことをしたりということがあります。ところがもう一つ、家庭環境や親子関係などが原因で後天的にこの力が乏しくなって、対人トラブルをいっぱい起こす方もいらっしゃるわけです。

皆さんの中には、自分の気持ち、例えば自分は怒っている、悲しいといった気持ちを、生まれたときから分かると思っていらっしゃる方がいると思いますが、それは違うんですね。というのは、怒っているということでしたら、怒っているときに起こっているいろんな緊張のようなものの状態を「怒るんじゃないよ」とお母さんに何度も言われることで、こういう状態は怒っているのだということが結びついていく。出発点として、私たち人間は、ある心の中の状態を人から教えてもらうことで身に付けていきます。ある程度これが身についてきたら自分で考えて分かるようになっていきます。このように今、メンタライジングの力が弱い人に対してそれをもう少し促進してあげようという心理療法がありまして、これが今私が専門としていることなので、取り入れたということです。

それからマインドフルネスという言葉ですが、これは最近あちこちで聞かれるようになりまして本もいっぱい出るようになりました。これは、心身の状態に注意を向け、それを評価したり価値付けしたりせず、そのまま暖かく受け入れること。要するに自分の体や心の状態に敏感になることです。それを、こんなことを思っちゃいけない、根性が足りないとか切り捨てるのではなく、自分はものすごく疲れているなあ、こんなことしたくないと思っているなあなど自分に正直になることです。これがなぜ注目されるようになったかという、鬱病などの心の病気を防いだり、一度鬱病になった人の病気の再発の予防になるということが注目されるようになってきたからです。これは仏教の瞑想から来た概念でして、仏教の中でも特に瞑想を重視する東南アジアの上座部仏教、テーラワーダ仏教やチベット仏教、日本の禅、こういったところから影響を受けて欧米でマインドフルネスということが注目されて、それを心理治療に取り入れようということで、日本はそれを逆輸入している状況です。非常に恥ずかしいことなのですが、こういう概念です。

それからもう一つキーワードがございまして、メタ認知というのがあります。先ほどのメンタライジングやマインドフルネスにも含まれておりますが、例えば自分が仕事で何か失敗して、ああ自分はダメだ、無能だ、これじゃとてもこのあとやっていけない、出世もできないし家族共々路頭に迷うだろうなという考えが浮かんだときに、確かにその考えと一致する現状があるんでしょうが、その考えにずっと囚われる人がいるんですね。そうすると、必ずしもそれが全てではないのに自分はダメだ、無能だということになっていく。そういうときにそれはあくまで自分の考えであって、それが現実そのものではないということを認識することが、鬱病や心の病気の予防になるということが分かかってきて、今、精神科領域で「メタ認知トレーニング」という名前で行われています。今、私たちの世界はこんなことになっているんです。

こういうことには脳科学的な基盤がございまして、メンタライジング、先ほども説明しましたように自分の心の状態と他者の心の状態という一見違う物を一つにして良いのかということなんですが、脳科学的に画像検査で調べてみますと、自分の気持ちを考えているときも人の気持ちを考えているときも、ほぼ同じ脳の部分が動くんです。だから基本的に脳の動きは同じだということが分かっておりまして、一つにまとめると、この3つの概念は互いに重なり合う部分がございます。それぞれ違った起源を持っていますので重なるということです。

それで実際に授業において何をしたかという、とくにメンタライジングの能力というのは一朝一夕で伸びませんので、わりと動かしやすいマインドフルネス、メタ認知というところにターゲットを定めまして、学生自身の心や体に注意が向きやすくなる、意識しやすくなる、そして特にネガティブな考えに囚われたときに、これはあくまで自分の考えだ、現実そのものではない、もっと違う考え方があるかもしれないと考えられるようになることで、鬱病を防いだり不適應になることを防ぐことをしてもらおう、そうした上で次に人の話を聞く、人を理解する実習をするということをやりました。心がけたことは、先生方みなさんがやっていたらっしゃることですが、実際例や体験談を混ぜた分かりやすい説明、興味、動機付けを高める授業資料、視聴覚教材の活用などです。そして実習ですが、マインドフルネス、メタ認知を促進するためのエクササイズなどいろいろ行いました。また、リラクゼーション、リラクスの技術を身に付けるとかマインドフルネスを促進するために、瞑想が使われます。静かに心を静めて、ある何かについて考える。仏教でいう瞑想は何も考えず心を無にすることではありません。あることについてありのままに正しく考えることなので、そういうことをやってもらったわけです。そして心理検査に記入したり、最後にはカウンセリングの基本的な聞き方の講義をし、実習もしまして身に付けていただきました。授業の中では受講生同士のディスカッションとか、ディスカッションしたときに、そこで出た感想をマイクを持って歩きいて全体に聞こえるようにして、その人の声をみんなに届けるインタビューというようなことをしました。リラックスして瞑想するようなかたちで、自分のことについて考える、要するにカウンセリングの実習を試みようということでした。

レポートは途中でいくつか出していただくんですが、最後にカウンセリングに関してはだいたい15分くらい悩みを持った人の話を聞いたと仮定して、そのシナリオを作ってもらいました。例えば、カウンセラーが「どんなご相談ですか」と聞きましたら「実は友達関係で悩んでいまして」との返答に「もう少し詳しく聞かせてくれますか」というようなカウンセリングのシナリオを、15分くらいの対話と仮定して作っていただきました。それを大学院生のTAにも協力してもらい、本当にカウンセリングが分かっているかどうか確認し、OKをもらったら免許皆伝ということで、晴れてパスというかたちで評価しております。ということで、評価された側面ですけれども受講生の感想を毎回出していただいています。そこから主だったものをあげますと、実習によって落ち着きが得られて学生生活について振り返りができたとか、自分の心身の状態に気づくことができた、囚われに陥らないための

心構えができた、鬱病や不安障害などの心理療法について知ることができた、他の学生と交流できた、カウンセリングの基本が学べた、将来の仕事に役立つことが学べた、このようなことが感想として並べられております。そういう意味で非常に参加型の授業であったと思います。しかし、決してアカデミックの水準を落としているわけではなくて、私たちの世界の最先端を取り上げていたということです。

ただ最後に一言いいますと、こういう授業で気を付けなくていけないのは、こういう実習をすることで、精神的な調子を崩す学生がいる可能性があるわけで、途中で調子が悪くなるようであればすぐに中止していただきたい、私にそれを知らせていただきたい、主治医のある方には主治医と相談するというを前提として授業をしております。幸い私は臨床心理士でございますので、もし調子が悪くなったときにはそれなりの対応はできますし、その辺は倫理的な配慮をしております。以上でございます。

Q：この授業はTAを使っておられるのでしょうか。

A：確か人数的にTAが取れないんじゃないかと思えます。この授業の中の5回分は大学院生が修士論文の研究のために、あるプログラムを実施する形になっておりまして、そこに関しては大学院生が手伝ってくれています。それ以外のところも感想を大学院生がボランティアみたいなかたちでやってくれていましたし、最後のレポートのチェックには他の大学院生も借り出しまして、うちの専攻の大学院生を5人ほど手伝ってもらっております。

特別講演

「三者協働型アクティブ・ラーニングの展開：  
関西大学の事例」

---

講師： 関西大学教育推進部 三浦 真琴 教授



## 三者協働型 アクティブ・ラーニングの展開 関西大学の事例

関西大学 教育推進部  
教育開発支援センター 三浦 真琴

### 【取組の概要】

- ▶「教員中心」から「学生中心」へ
- ▶「知識の転移」から「知的好奇心の創出・発掘」へ
- ▶「勉強」から「学習(楽習)」、そして「学問」へ
- ▶「学習支援」スタッフの発掘・育成、そして協働へ

### 中教審答申(2012)では…

(アクティブ・ラーニング〔能動的学修〕とは…)  
教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、  
学修者の能動的な学修への参加を採り入れた教  
授・学習法の総称。学修者が能動的に学修すること  
によって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知  
識、経験を含めた汎用能力の育成を図る。発見学  
習、問題解決学習、本験学習、調査学習等が含ま  
れるが、教室内でのグループ・ディスカッション、デ  
ベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニ  
ングの方法である。

私たちは  
アクティブ・ラーニングを  
どのように捉えたのか

## — Learning の意味 —

学習者が能動的に意味を探索する営み

経験によって得られた知識を構築する営み

将来の基盤となる知識を構築する営み

— American Association for Higher Education 1998

## “Learning” 再定義への歩み

1983 『危機に立つ国家』

学力・教育力低下に対応するためには  
「学習への関与 involvement in learning」が重要

1987 『優れた授業実践のための7つの原則』

③ 能動的な学習を促進する

1995 『教育から学習へ 新しいパラダイムの登場』

大学とは学習を創出するために存在している  
機関である

## — アクティブラーニングの意味 —

1. 「動作・態度」あるいは「状態・姿勢」、もしくは  
そのような「習慣」 [ 語義として ]

2. 「過去」「現在」「未来」をつなぐ知識を構築し、  
意味を探索する営み [ 学生にとって ]

3. 学生を「主体的な学習者」に育てる営み  
[ 教師にとって ]

## — アクティブラーナーの姿 —

1. 自己主導的学習者 (Self directed learning)

2. メタ認知のできる学習者 (Metacognition)

3. 省察的な学習者 (Reflective learning)

4. 協同的な学習者 (Collaborative learning)

「教える」熱意は必ずしも奏功しない



学生

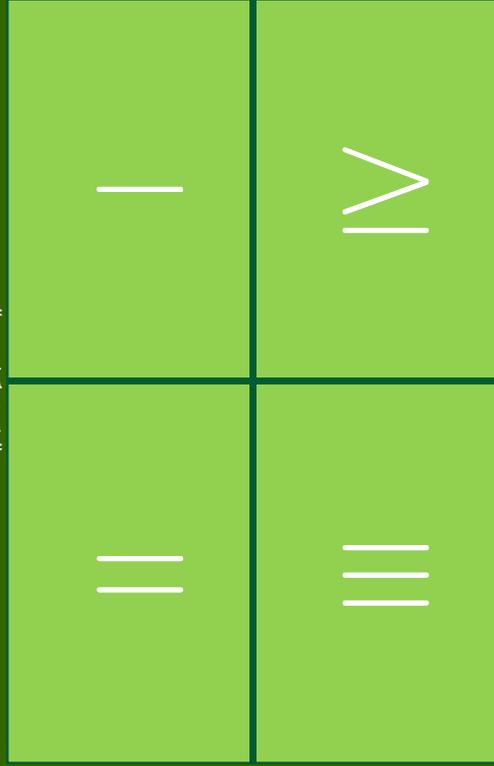


教師



よい授業とは…

《面白い》



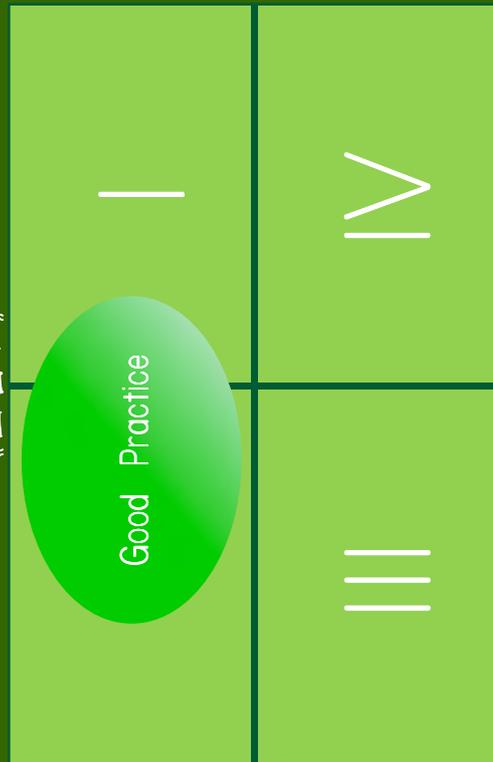
《わからない》

《つまらない》

《わかる》

よい授業とは…

《面白い》



《わからない》

《つまらない》

《わかる》

## Teaching からの解放

教える(オシ・エル)

≠ to educate

① 知っていることを人にわからせる

= to show

② わからないことをわかるように導く

= to teach

③ 訓える、さとす、いしまめる

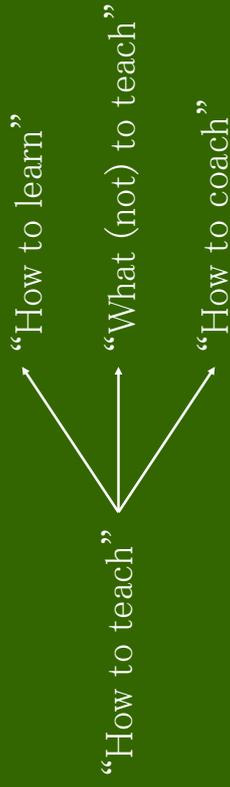
= to admonish

【日本語大辞典 講談社】

おしえる  
to teach

ひきだす  
to coach

## “How to Teach”からの解放



概念学習 ⇨ 体験学習  
(知の転移) ⇨ (知の構築)

## — アクティブラーナーを育てるために —

- ◆ 知識獲得モデルの構築
- ・『学問モデル』
- ・PBLの見直し

- ◆ 学生の参加・参画・支援
- ・学生とつくる授業
- ・学生がつくる授業
- ・学生が支える授業

## — 知識獲得モデルの構築 —

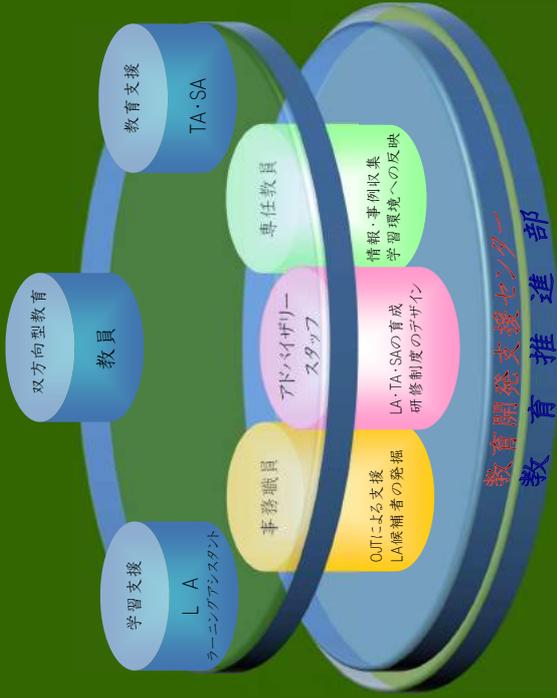
- ◇ 「勉強モデル」: 「問い」と「答え」がパッケージ
- ◇ 「学習モデル」: 与えられた「問い」の「答え」を探す
  - “teacher-centered PBL”
- ◆ 「学問モデル」: 「問い」自体も自ら探求する
  - “student-centered PBL”

区分	学習観	主導者	優先事項	知識獲得のスタイル
競争的学習	個人の営み	教師	獲得する知識の量	勉強モデル
協同的学習	社会的営み			学習モデル
協同的な学習		学生	課題の発見・定立と探求	学問モデル

正解に辿り着く知識の獲得 / 転移された知識の再現

〈仲間との協力・仲間の能力〉

## 取り組みを支える「三者協働体制」



## LA (Learning Assistant) という発想

主に初年次学生を対象とした科目(群)において

「知識の転移」という教師中心の発想から脱した

「知的プロセス」の想像的・創造的体験を核とする

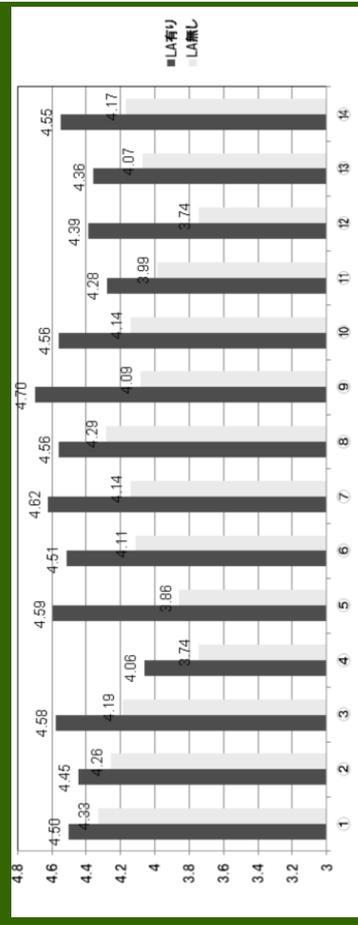
授業(学習機会)をわかりやすい「かたち」で

展開するするために必要な人材

## 【取組の成果】

- アクティブ・ラーニングを目指す科目の細分化
- 同上科目の履修(希望)者の増大
- LA活用教員ならびにクラススの増加
- LA活用授業に対する高評価(好評価)
- 他大学からの問い合わせ/同種同様の取組

## LAの有無の別にみたスタディスキルゼミの授業評価アンケート



分析方法: ★:1%有意 ☆:5%有意  
検定

説明内容:

- ①あなたはこの授業に意欲的に取り組まれましたか。
- ②教員は授業の開始・終了時刻を守ろうとしていましたか。
- ③毎回の授業のテーマは明確に示されましたか。
- ④教員の使い方は適切でしたか。
- ⑤理解しやすい話し方でしたか。
- ⑥質問や相談が出来るように配慮されていましたか。
- ⑦教員は受講生に対して公平に接していましたか。
- ⑧教室内の学習環境は適切に保たれていましたか。
- ⑨授業に対する教員の熱意を感じましたか。
- ⑩教員は受講生の反応を確かめながら授業を進めていましたか。
- ⑪この授業を受けて知的好奇心を刺激されましたか。
- ⑫友人や後輩に推薦できるような授業内容でしたか。
- ⑬この授業を受けて知識が深まり、あるいは能力が高まりましたか。
- ⑭総合的に判断してこの授業は意義のあるものでしたか。

## LA活用クラス数

	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
LAの数	12名	38名	47名	68名	68名	84名	108名
LA活用クラス数 (ほか、専門科目クラス数)	10クラス (0クラス)	23クラス (0クラス)	39クラス (3クラス)	53クラス (3クラス)	54クラス (5クラス)	72クラス (9クラス)	72クラス (9クラス)
LA活用授業担当教員数 (うち専門科目活用教員数)	2名 (0名)	11名 (0名)	14名 (2名)	19名 (2名)	24名 (4名)	30名 (6名)	30名 (6名)
スタディスキルゼミ クラス数	40クラス	46クラス	54クラス	56クラス	56クラス	56クラス	56クラス
スタディスキルゼミ 受講者数	663名	704名	1087名	1172名	1040名	1179名	1179名

## スタディスキルゼミ以外のLA活用科目例

- **大学教育論・恋する学問**
  - ◆ グループ形式で展開する全学共通科目(多人数授業)
  - ◆ 大学・恋愛(学縁)に関するテーマをグループで発掘し、調査・分析の結果を発表
- **ピアサポートのためのクリティカルシンキング/交渉学**
  - ◆ グループ形式で展開する全学共通科目(多人数授業)
  - ◆ ピアサポートの質の向上に寄与する課題解決力、コミュニケーション力、ネゴシエーション力等に焦点
- **文章力をみがく**
  - ◆ グループ形式の授業を実施(文章力を磨くは一部のクラスのみ)
- **共通教養ゼミ(文章の達人を目指す・クリティカルシンキング・交渉学)**
  - ◆ 二年以上の学生対象・学部横断的な科目・グループ形式

## 関西大学 Learning Assistant の特色

- マニュアルを持たない・作らない
- リフレクションペーパー作成・提出義務
- 教職員が用意する研修・LAが企画する研修
- 他大学のLA等との交流・他大学の研修への派遣

**特別講演**  
**「三者協働型アクティブ・ラーニングの展開：関西大学の事例」**  
**講演全文**

三浦でございます。どうぞよろしくお願ひいたします。この「三者共働型アクティブ・ラーニングの展開」はご紹介にありましたようにG Pをとりました。ただいまはA Pで悪戦苦闘しておりますけれども、G Pをとったときの海外視察でハワイ大学に行きました。ハワイ大学の生協で買ってきたのがこのアロハです。Hと書いたハワイ大学の正装でございますので、お許しいただければと思います。

さて、順にお話をして参ります。われわれがG Pで取り組んだプログラムの細かい説明ではなく、どういう発想に基づいたものか、つまり背骨に何があったかということですが、「教員中心から学生中心へ」、そして「知識の転移でなく知的好奇心の創出・発掘」を目指そうと考えました。さらに勉強は「勉めて強いる」のではなく「楽しく習う」に留まるのでもなく、「問いを学ぶ」ものであるというところまで学生を誘いたいと考えました。それから、学生中心なので、われわれ教員も事務職員も学習支援の立場、ティーチャーというよりはラーニング・アシスタントというポジションでいた方がよいのではないかと考えました。何でもかんでも教師がやるのではなくて、学習支援をする教育職員、事務職員の他に学生スタッフというものを発掘・育成し、そして教育職員、事務職員と協働していこう、こんなことを考えました。これが背骨でございます。

たぶん皆さまは、「共に育む」、「共に育つ」、学生たちをどのように援用していくか、あるいは自主的に主体的に動かしていこうかということをお考えで、そちらの方がメインでお聞きになりたいことかもしれませんけれども、私たちはアクティブ・ラーニングのとらえ方を少しクリティカルに、つまり中教審答申に与しないような定義を自分たちで築こうと考えました。それが今回の我々の柱になっているので、この話をぜひさせていただこうと思います。

スライドには私の中で悪名高い2012年の中教審答申を示してあります。日本語としてなっていないということにお気づきの方もいらっしゃると思います。「能動的学修とは何か」と立項して「能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」と受けている。これは日本語として実におかしいというか間違っています。悲しいことです。もう一つ問題なのは「教授・学習法の総称」と言い切ってしまうことです。メソッドだと言い切ると、それにはコツがあるはずだ、マニュアルがあるはずだ、それを手に入ればこれは誰にでもできるものだ、そういう誤解というか先入観が植え付けられてしまいます。それに踊らされて結局うまくいかなかった、アクティブ・ラーニングなんて万能の方法じゃないんだという諦観が、我が国の一部だと思うんですけども広がりつつある感じがしております。これは見なかったことにしました。これが成り立つのだったら学習者の受動的な学習への参加を取り入れた学習の総称という表現も成り立つことになってしまいます。そもそもが受

動的学習へのアンチ提言のはずなので、どうしたら学生が能動的な学習をすることができるようになるかをわれわれは考えました。

その前に「ラーニング」の意味をうまく説明しているものはないかと探しましたが、残念ながら日本語の文献ではあまりピンとくるものはありませんでした。こちらをご覧ください。98年ですからそんなに昔ではないですね、アメリカの高等教育協会が「ラーニング」の定義として3本の柱を立てました。「学習者が能動的に意味を探求する営み」、「経験によって得られた知識を構築する営み」、「そして「将来の基盤となる知識を構築する営み」、それがラーニングだと定義をしたわけです。私たちは果たして、こういう営みを「学習する」、「ラーニングする」と捉えて学生たちにそのような機会を提供してきただろうかと自問するわけです。答えは明確で、そうではない。自分たちが持っている知識を切り売りして、「覚えなさい」と働きかけ、どの程度正しく覚えたかをテストで試す、そんなことばかりだったのではないかと考えざるを得ませんでした。

アメリカの高等教育協会の「ラーニングの再定義」を引用しましたが、これは突然98年に出てきたわけではありません。どこまででもさかのぼれるでしょうが、たぶん大きなポイントは「A Nation at Risk」という報告書が出されたことです。発行部数は3,000万部だそうです。この報告書では、「教育力が低下しているが、それは教師の教育力を高めれば済む問題ではない。学生が学習に関与することが大事だ」ということが指摘されています。これを受けたかのように4年後には、たった5ページのリーフレットなのですが「Seven Principles」が発表されました。こちらも非常にポピュラーになりましたが、この3番目にアクティブ・ラーニングを促進しようと呼びかけていました。そして95年、これは有名な「教育から学習へ」というパラダイムシフトが示されました。高等教育機関は今まで教育を提供するための機関だと思われていたが、これからは学習を創出する機関となるということが95年に高らかに宣言されました。これを受けて98年にアメリカ高等教育協会が3つの柱から成るラーニングの定義をしたのですが、このような背景があるということ、たぶん中教審答申の委員の人たちは知らなかったか、知っていてそれを表に出さなかったのか分かりませんが、答申には理念や哲学がないような気がします。

アメリカ高等教育協会の再定義ではラーニングは基本的にアクティブな営みとして描かれているので、わざわざアクティブ・ラーニングとはそこには謳われていないのですが、われわれが外来のアクティブ・ラーニングという概念をきちんと我がもの、我がこととして斟酌し、咀嚼するためにはやはりアクティブ・ラーニングという概念をわれわれなりに捉え、関西大学の教育開発支援センターの専任教員の共通の認識としようということになりました。

アクティブとラーニングという英単語を両方とも知っている中学生・高校生にアクティブ・ラーニングとはどういう意味かと聞いたら、「手法」とは答えません。主体的な、能動的な学習であると、きっと答えるはずで、それが元々の英語の意味です。アクティブ・ラーニングとは語義にしたがえば「動作・態度」あるいは「状態・姿勢」、もしくはそのよう

な「習慣」です。それから、手法ではないという否定表現はよろしくないので、もう少しポジティブな形で捉えることにしました。学生にとってのアクティブ・ラーニングとは、先ほどの高等教育協会のラーニングの定義、3つの柱をひとつにまとめて、「過去」「現在」「未来」をつなぐ知識を構築し、意味を探究する営みとして捉えることにしました。学生にとっての知識とは自分の現在、未来に結び付くものであり、与えられるものではなく、構築する、構築しなければ始まらないものであると捉え、この構築作業にいそむことがアクティブ・ラーニングなのだと思えることにいたしました。続いて、教師にとってのアクティブ・ラーニングとは学生を「主体的な学習者」に育てる営みであると捉えることにしました。そのためには何をしたらいいのか、何をしてはならないのか、そこを丁寧に考えていこうということです。手法として捉えてしまうと「コツを掴めばササッとできるはず」、「グループワークやグループディスカッションをやれば良いらしい」とか、そのようなレベルで話が終わってしまいますが、それでは哲学がない、ノンフィロソフィーだということで、われわれはこのように考えることにしました。この能動的な学習者についてどのようなイメージを持てばいいのか、いろいろ文献を探ってみました。「Self directed learning ができる学習者」、「メタ認知ができる学習者」、「省察的な学習者」、「協同的な学習者」、この4つが主なものです。Self directed learning は、放っておいても勝手に学習するセルフスタディという意味ではなく、必ず他者の存在を前提とし、他者との関わり合いの中でどういう学びを自分はしていくべきかということ、きちんと考えられるという意味が含まれています。

学生が中心であり、学生の学習を喚起することが大事であり、そのために教師は何をしたらいいのか、あるいは何をしたらいけないのかということについて、「教える」熱意は必ずしも奏功しないと考えました。真理、Truth に対する好奇心あるいは意欲を磁石のN極で表すことにします。学生は大学では高校とは違う知的な刺激に満ちた授業がきつとあると思っ、期待に胸を膨らませてこの知的好奇心の極を教師、授業に向けています。そこに教師が「君たちに素晴らしい知を授けてあげよう」とN極を向けると、学生の磁石は反転してTruth に背中を向けてしまいます。「先生が懇切丁寧に何でもかんでも細かいところまで全部教えてくれる。だったら私たちはそれを聞いていればいい」というようなパッシブな姿勢が作られてしまうということです。学生のせつかくの知的好奇心を、Truth にもう一回向くようにするためにわれわれはどうしたらよいのでしょうか。教師が学生に背中を見せる、あなたたちと同じようにあなたたちが求めて、好奇心を持ってやまない Truth に、われわれ教師も向かっているという姿勢を示す方が良いのではないかと考えました。

時間が押しているところで、発表資料に載っていないことをお話するのは、はばかられますが、お許し下さい。ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、アメリカの哲学の教授が広口の瓶を持ってきて、そこにゴルフボールを入れ始めました。やがてゴルフボールは入らなくなります。学生に「ゴルフボールがいっぱいになりましたね」と言うと学生は頷きます。次にその教授は砂利を入れます。隙間がありますから砂利がどんどん入っていきます。砂利が入らなくなったところで、「ゴルフボールと砂利でいっぱいになりましたね」と言う

と学生は頷きます。そのあとに教授は砂を入れます。その細かい隙間に砂がたくさん入っていきます。やがて砂も入らなくなります。「さあ、砂でいっぱいになりました」。学生は頷きます。そこで教授はコーヒー2杯を瓶に注ぎます。学生はわけがわからず、何が言いたいんだ先生は、という顔をします。そこで教授は大切なことを伝えるのです。「この瓶はあなたたちの限られた時間です。とても大切なものです。人生そのものと言ってもいいかもしれません。この大切な時間を埋めるのに、砂から入れてはいけません。もっと大切なゴルフボールから入れるようにしましょう。最初にピンを砂で満たしてしまうと大切なゴルフボールが1個も入らなくなります」。とてもおもしろい話だと思います。「先生、コーヒー2杯はどういう意味ですか」という学生の問いに「どんなに忙しくても、友人とコーヒーを飲む時間は作れるという意味だ」と返したそうです。われわれ教師は自分が持っている専門に関する知識を大きな塊のまま学生に提供することはできないので、それをはさみや包丁で細かく裁断したものを与えているわけですが、言うなれば砂をたくさん学生に与えようとしているのではないかと、リフレクトする機会を得ました。大切なのはゴルフボールです。学生にとって、ゴルフボールは考え方やフレームワークに該当すると思います。それさえ与えておけば、そこに教師が砂を入れなくても、学生たちはこのフレームワークの中で何かを考えたり調べたりしていくうちに、この砂利が必要だ、この砂が必要だと自分で発見し、それを自分で探し、自分でピンの中のすき間を埋めるようになるのではないかと、われわれ教師はフレームワーク、すなわちゴルフボールを丁寧に探して、それも全てでなく、そのいくつかを与えれば、もう1つゴルフボールが入りそうだ、必要だと気がつくような、そんな接し方をしたらどうだろうかと考えました。この話をしているときに、一緒に仕事をしているセンターの事務職員が「ああ、私たちの会議は砂だらけの会議だ」といいました。以後、会議に行くときは「砂場に行ってきます」と言うようになりました。それは余談ですが、われわれは学生に砂を与えているのではないかということをお問することが大事ななという気がします。

もう一つ、こちらもお存じの方もいらっしゃるかもしれません。その昔、板倉聖宣が「よい授業とはなにか」について、面白いか面白くないか、わかるかわからないかという2本の軸で4つの象限を作って、考えるフレームワークを示しました。第1象限は面白くて分かる、第2象限は分からないけれども面白い、第3象限は面白くないで分からない、第4象限は面白くないけどわかる、この4つの象限を、いいと思う授業の順番に並べ替えてみてくださいと問いかけます。順番に意味があるので例えば第1象限が1番だと思う人に挙手してもらうのは本意ではないのですが、時間の関係上、そのように聞いていきます。第1象限が一番よい授業だと思う方、ありがとうございます。挙手したままでお願いします。2番目が第2象限だという方、つまり1番に第1象限、2番目に第2象限を選んだ方です。1番に第2象限を選んだ方、ありがとうございます。10年前だと第1象限が圧倒的に多かったのですが、ただ今は、第2象限を選ぶ人の方が多かったです。これは良い悪いではなく、その人の授業に対する考え方の癖みたいなもの、あるいは傾向を知るといえる意味があるとお考え

いただければと思います。1番に第1象限を上げて2番に第4象限を選んだ人は面白さよりもわかることを重視した授業を心にかけているのだと思います。第1象限と第2象限を選んだ方々は理解より面白さ、Funnyではなく Interesting、つまり知的好奇心を刺激する面白さを重視した授業のデザインを試みているということになるかと思います。とはいえ、様々な分野の様々な科目があるので、どの科目にも一様に当てはまることではありあません。生命の危険に関することなので面白いかどうか以前にきちんと理解しないといけない科目もありますので、どちらかが正しくてどちらかが間違っているということではありません。ちなみに、学生に尋ねてみると、大学らしい授業はここ（面白くてわかる・わからないの境界線をまたいだ、わからない寄り）ですね。なぜ第2象限に納まらないかという、数字で象限名を答えてもらうようにアンケートをすると1, 2, 3, 4と自然数で書く人もいれば1.8とか1.7とか、少しはわかった上で面白いのがいいということを表すために少数を用いる学生もいるからです。学生にとっては知的好奇心を刺激されるのが大学の授業らしくて良いと捉えているようです。ここにいう「わからない」というのは、あの先生は何を言っているかちんぷんかんぷんでわからないということではなくて、ここまではわかるがこの先がわからない、わからないけど面白いので自分で調べてみよう、先生に質問に行ってみよう、そのような気持ちにさせる意味での「わからない」ということなのです。わからないことが楽しめる、そのような授業が大学らしくて、良い授業であると望んでいるのだと思います。学生の中には第3象限に該当する授業が2番目に良いという者もいます。その理由は寝ていられるから、だそうです。第4象限の授業は、なまじわかってしまうので寝られないと言っていました。ということでわれわれ教師が考えるよい授業と、学生が考えるよい授業は必ずしも合致するわけではなさそうですが、最近は第2象限に着目する先生方も増えているようで、なかなか楽しく面白い傾向にあると思います。

先ほど教師中心から学生中心にシフトすると申し上げました。これは別の言い方をすると Teacher が teaching から解放されるという意味です。「教える」という日本語の語義を調べましたら、知っていることを人にわからせる、わからないことをわかるように導く、訓える・さとす・いましめる、概ね、どの辞書にもこの3つが記載されています。今日ご紹介するのは日本語大辞典—講談社の面白い辞書で、語義に相当する英単語がある場合にはそれを示してくれます—の記述です。「教える」という日本語が持っている3つの語義に対応する英単語は、それぞれ show, teach と admonish とあります。ここで大事なことに気がつかなければなりません。ここには educate という単語が登場しないのです。日本語の「教える」には educate という意味はないということです。「教える」の語源には二説あって、「おしゆ」と「おさえる」です。私は「おさえる」の方が、「順える・さとす・戒める」という語義にDNAが伝えられているように思います。他方、educate の語源はご存じの方もいらっしゃると思いますが、educate (引き出す) と同じです。かたや「おさえる」、かたや「引き出す」、両者がイコールであるわけがないので、講談社はとても正しい辞書の編み方をしていると思います。われわれが teaching 「教える」から解放されるということはどう

ということかという、ここに登場していない「引き出す」ということに目を向けるということになるかと思えます。今までのように「教える」のではなく「引き出す」。学生が自分で気がついていない、遠い昔に置き忘れたかのように錯覚している知的好奇心を引き出してあげる、そのことがとても大切であると思うのです。

少し前まで、FD活動に関して、ティーチング・ティップスなどのHow toモノが結構ありました。名古屋大学の近田くん（当時）が中心になって作成しましたが、後に関西大学のフォーラムで登壇してもらったときに、彼は「あんなものを作るから先生がアクティブにならないんだ」と謝罪していました。私達がteachingから解放されるというのは、このようなHow toモノからも解放されるということです。われわれ教師にとって大切なことは、どうやって学生が学ぶのか、すなわちHow to learnに目を向けることです。Teachingから解放された後は学生のlearningを促すcoachingを目指そうということです。「どうすれば早く走れるようになりますか」と質問されたときに、今までのcoachingでは「腕の角度が悪いから直せ」とか「腿の上げ方が低いから直せ」と指導していました。しかし、これからのcoachingは、「どうして」という問いに答えを示すのではなく、「どうしてだと思おう」と問い返し、「自分で考えてごらんください」と促すことが求められます。これはスポーツの世界では常識になっていますが、教育の世界では一少なくとも我が国ではあまり浸透していません。われわれは自らをteachingから解放し、学生がどうしたら学ぶようになるか、それを支えるcoachingについて考える、そういう発想をすることが大切です。さらにもう一つ大切なことは、今までは必要だと思いを全て教えていましたが、これからは何を教えて、何を取って教えないか、教授内容を意図的に取捨選択する必要があるということです。先ほどの話を引き合いに出すならば、大切なゴルフボールを厳選しておき、そのゴルフボールについては教えるという選択をする「What to teach」、他方、砂は与えず、その砂や、あるいは砂利、そして伝えなかった他のゴルフボールも学生が自ら探しに行くように促す「What not to teach」、パラダイムシフトにはこのようなチャンスも内包されていると思います。与えたり、与えなかったりすることで、学生の知的好奇心を刺激し、自ら学ぶように導いていくこと、それがこれからの教師のミッションとなる、そのように考えました。そのうえで、高校を卒業するまで概念学習が中心だった彼ら彼女らに、体験学習の機会を何とかして提供したい、断片化された知の転移ではなく、知の構築という作業を体験させてあげたいと考えるようになったわけです。

アクティブラーナーを育てるためには、知識獲得のモデル、ならびにPBLの見直しが必要です。高校を卒業するまでに彼ら彼女たちが経験してきたのは、問いと答えがセットになったカードを集めることです。たくさんカードを集めれば集めるほど、どんな問題にも答えることができるようになる、彼ら彼女たちはそのように信じ込まされてきました。問いと答えの間には必ず距離や時間があるのに、それを不問にするような、つまり知的好奇心に照らし合わせると非常に不自然で、勉めて強いるような知識獲得のかたちです。私たちはこのような知識獲得の様態を勉強モデルと呼ぶことにしました。大学に入ると、先生が問いを示し、

学生がその問いに対する答えを探すために、調べたり、考えたりするようになります。一見、学生がとてもアクティブな学びをしているように見えます。これを私たちは学習モデルと呼ぶことにしましたが、ここには落とし穴があるのではないかと考えました。絶えず教師から問いを与えられていると、問いとは常に与えられるものであると知らず識らずのうちに思い込んでしまうようになる、ということです。ずいぶん前から企業社会では、指示されたことはすぐにテキパキとやるけれども、指示をしなければ全然動かない「指示待ち族」の存在が批判的に言及されていますが、その原因の一端は私たちにあるのかもしれないと考えました。問いとは自分の身の回りにあるもので、それを見つけ出すようなセンスやアンテナをきちんと磨いて、精度を保つようにしておく必要がある、このことを是非学生に伝えようと考えました。教師が学生に問いを与えず、学生が問いを探すように促すと学生がアクティブになるのではないかと考えたということです。関西大学では1年次の学生を対象に大学での学びについて考えるというコンセプトの科目群が「アカデミックスキルゼミ」という名前で開講されているのですが、その一部において、自分の身近なところに問いがあるということを理解し、体験してもらうために、学生自身に問いを探させる試みを始めました。しかし、長らくの間、問いを与えてもらうことに慣れきってしまった学生は戸惑います。そこで大森貝塚を発見したモースの話をしませす。そこに長年住んでいて日常的にその貝塚を見ているにも何にも思わなかった人がいるかと思えば、たまたま新橋から横浜に移動する電車に乗ったときに「やたらと崖に貝殻が詰まっているが、あれは何だ」と動物学者であるモースが気づき、それを調べたところ、それが貝塚であり、昔、そこに人が集落を作って住み、貝を食していたことを発見した人もいる、その違いはどこから生まれるのだろうか」と学生に問いかけるのです。日頃から身の回りに対して好奇心を持っているか持っていないかで、このような違いが出てくる、それは身の回りには様々な事柄に対して疑問を持つことができるか、何も思わずに見過ごすのかということにつながる、さて、あなたたちはどちらでありたいと願うか、いや、あなたたちなら、きっと身の回りに問いを発見することができるはずだ、だから問いを発見することから始めよう、そのように励まし、背中をそっと押してあげます。このようなコンセプトの授業を複数の科目ではじめたところ、当初、学生は短答式のクイズのような問題ばかり持ってきました。「問い」がどのようなものなのかを理解していなかった、ということです。そこで、問いには構造があり、それが成立する理由があり、新しい別の問いを生み出すものであるということに学生たちが気付くように手ほどきをします。それがこのクラスで学生に手渡すゴルフボールです。大切なのは「問いに関するリテラシーを学ぶ」ことなのです。このような知識獲得モデルのことを「学問モデル」と呼ぶことにしました。その心は、「学問」の学と問の間にレ点を付けて「問いを学ぶ」と読む、ということです。このような学問モデルを体験してリテラシーを身につけておくと、先に述べた学習モデルの授業を受けた際にも、教師が示す問いには必ず成立する理由、構造があり、新しい問いを生み出す要素が詰まっているということを理解することができます。与えられた問いに対する答えだけを探すのではなく、そこより派生する新たな問いに目を向けられ

る、そのような学習者を育てたいと願っているということです。このモデルにはPBLに通じるものがありますが、PBLにも気を付けなければならないことがあります。Problem based learningを実施する場合、教師はそのproblemを洗練しようと一生懸命工夫します。つまり教師にとっては、まさにproblem basedなのですが、それを与えられた学生は調べること、inquireが主になるので、学生にとって、これはInquiry based learningでしかなくなります。そこで、ここに学問モデルを採用し、学生が自らproblemを探しに行くように促すと、学生にとってproblemが基盤となるPBLが成立します。いふならばStudent Centered PBLというものを編み出す必要があると考えました。あるいは教師がproblemを巧みに文脈の中に隠し、学生がそれを発掘するような仕掛けを作ることも考えました。

この他に、学生が参加・参画し、あるいは支援する授業があると、学生はきっとアクティブになるだろうということも考えました。学生と作る授業、これはずいぶん前から言われていることですが、もともと授業というのは教師と学生が作るものなので、実は基本的な事柄を確認しているにすぎません。そうではなくて、学生が作る授業、こちらこそが学生をアクティブにするのだと考えました。関西大学の場合、学生が作る授業には2通りあります。1つは15回のうちの数回、90分のうちの例えば60分でもいいので、その科目を受講している学生が望む内容や方法を提案してもらい、それを実際に学生自身が実践するという試みです。そのスタイルは科目を担当する教師によってまちまちですが、なかなか好評のようです。もう一つは、科目提案学生委員会、同様のものが岡山大学にもありますが、関西大学の場合、90分×15回の授業内容ならびに方法を全て学生が考え、シラバスも作成したうえで、担当する教師を選びます。その後は、科目担当教師と学生委員が話し合っ、内容などを詰めていきます。

さらにもう一つ、学生が支援する授業ですが、関西大学では学生の学びを学部学生が支援する制度を導入しています。それが、学び(learning)を支援(assist)する学生、ラーニング・アシスタントです。

やっと本題に入ります。前置きを長くしたのは、制度に関する説明だけをしてはならないと考えているからです。前にも申し上げたように、理念や哲学こそが大切だ、そのように考えているということです。ラーニング・アシスタントが関与するのは、学問モデルを採用したり、学生中心のPBLを展開したりするなど、協同的な学習を実践するクラスです。競争的な学習に対置される協同的な学習については、教師が主導している場合と学生が主導している場合とがあります。ラーニング・アシスタントは後者に関わるのですが、念のため、それを一覧表にしました。図はGPの申請書に付けた絵です。TAはご存知のようにティーチング・アシスタントです。授業支援SAとは、PCやプロジェクタなどの機器の設置やミニッツペーパーの配付などの手伝いをします。TA、SAとLAを教育開発支援センターの専任教員と事務職員が支え、大学院生のアドバイザースタッフがTA、SAにアドバイスをしたり、LAやTAの研修をデザインしたり、というかたちで進める、これが当初の「かたち」でした。ここで再びLAの説明をしておきましょう。LAとは「知識の転移」という

教師中心の発想から脱した「知的プロセス」の想像的・創造的体験を核とする学習機会をわかりやすい「かたち」で展開するために必要な人材なのです。ティーチング・アシスタントは学生の質問に対しては答えを示したり、考え方を伝えたりして「教える」のですが、ラーニング・アシスタントは先ほどのコーチングのコンセプトに基づいて活動するので、学生から質問が出てそれには答えません。「ここがわからないんですけども」という問いに「どうしてわからないと思う。どこまでわかっているの」というように問いに問いで返す、それをわれわれ教師がやればいいんですが、教師がやるのと年齢に近い学生がやるのとでは受講生のレスポンスが異なります。LAと私と同じように対応した場合に、LAによるヒントの提示に対して学生が「わかった」という表情をすることがあるのですが、教員には何か欠けているのだと、省察の材料にしようと考えられるようになりました。

ラーニング・アシスタントを授業で活用しながら、アクティブ・ラーニングの浸透や展開を図ってきましたが、最初の大きな変化は「アクティブ・ラーニングを目指す科目の細分化」です。元々、スタディスキルゼミという名称の科目のコマ数は多かったのですが、科目の種類としてはわずかに一つだけでした。高等学校では身に着けられなかったスキル、というよりは考え方を身に着けてもらうためには、初年次学生向けの科目を、例えば、課題探求、ディベート、ノートテイキング、プレゼンテーションというように細かく分け、それぞれに特化した授業を実施するようにしました。現在は7～8科目くらいでしょうか。このように科目を細分化したところ、履修希望者がとても多くなりました。さらに、ラーニング・アシスタントを活用する教員あるいはクラスも増えました。LAを活用しているクラスの受講生による評価は非常に高くなっています。また、他大学からの問い合わせも多数あります。ラーニング・アシスタント制度の導入を検討している大学関係者が授業見学のために来校したり、LAと私が他大学に足を運んで講演会や研修をしたりする、そのような機会がたいそう増えております。

LAの人数は2016年度の春学期に108名を数えていますが、これがアッパーリミットだと考えています。予算の関係でLAを任用するクラスもただいまの72が上限で、これ以上はリクエストがあっても増やせない、少々、困惑しています。LAを使っている教員は30名ほどで、そのうち6名が専門科目で使っています。LA制度を設計した私たちとしては、LAには初年次向けの共通科目、できることなら学問モデルに則ったクラスやPBLを展開するクラスでぜひ活躍してほしいと願っていますが、専門科目の担当者の中にはTAではなくてLAを使いたいという教師がいるので、このような数字となっています。

LAを活用する授業の受講生がクラス増に伴って増えてきているので、現在、ラーニング・アシスタントの存在を知らない学生は少数派となりました。大多数の学生がLAの存在を知っているばかりか、「あのLAさん素的だな。できたら自分もLAになりたいな」と思う学生もかなりいるようです。そこでLAの採用についてですが、これはLAを活用する教師によってまちまちです。教育開発支援センターの専任教員のほとんどが15回にわたる授業の中で受講生の様子を見ながら次なるLAを決めます。つまり一本釣りですね。教員

がLAとして適任だと考える学生と、LAが次期LA候補として考える学生は、ほぼ常に一致します。そればかりか、声を掛けた学生自身もLAをやってみたいと願っていたケースがほとんどで、つまりはほぼ毎回ハッピーマリアージュとなっています。15回にわたってつぶさに観察してきたわけですから、そこに志願理由書や面接などは必要ないのです。そのようにして選ばれた学生は、原則として自分が受講した科目にLAとして入ります。それはその科目のコンセプトや教員の願いとねらいがわかっているからなのですが、時間割の都合でその科目の既修者がLAとしてそのクラスに入れないこともあります。しかし、LAとしての経験を積むに連れ、ホスピタリティやアビリティが向上していくので、他の教員が担当するクラスであっても、遜色なくLAとして活動することができるようになります。このように自由度の高いのが関西大学のLA制度の特色です。

特筆すべきことはまだあります。関西大学のLA制度には、マニュアルがないのです。新任のLAは参考にできるものがないので、大いに不安にかられるようですが、私たちはマニュアルを作らないようにしています。一時期、学生の中からマニュアルを作ろうという不穏な動きが芽生えたことがありましたが、その芽は摘み取りました。合点のいかない表情の学生には、マニュアルを作ると、マニュアルに書いてあることしかできなくなるし、書いていないことには目を向けなくなるからだと説明をしました。しかし、全くのいないない尽くしではありません。授業で活動した後は48時間以内にリフレクションペーパーを作成し、提出することをオブリゲーションにしています。このリフレクションペーパーは、教育開発支援センターの中に限り、公開されているので、他のLAが書いたものを誰でも閲覧することができます。皆さまにお配りした資料の中に、ステープラーで留めてあるのがリフレクションペーパーです。先輩に憧れてLAになった後輩は、その憧れの先輩が書いたリフレクションペーパーを実につぶさに読みます。そこで、例えば、このような場面では、このように考え、行動すればいいのか、あるいは先輩にも悩むことがあるのか、ということを知ります。同期のLAのリフレクションペーパーも、励みになったり、共感を覚えたりするものになります。

自分の仕事に自信が持てない新任の時期、リフレクションペーパーだけがヒントになるわけではありません。原則として1クラスには3名までLAの登録が認められていますが、必ずベテランLAと新任LAとを同じクラスに配置するようにしています。つまり、授業の中で先輩LAがどのような言動をするのかを常に観察できるようにしているのです。言うなればオン・ザ・ジョブトレーニングですね。このほかに研修も実施しています。現在、三種類の研修をおこなっています。一つは、新学期開始前に教育開発支援センターが企画・実施する研修です。さらに一つは、LA自身が企画する研修です。それはわれわれが用意する研修もあればLAが自分たちで企画する研修もあります。現在、それは多くの場合、合宿形式で実施しています。この他に、民間企業に研修プログラムを依頼して、実施しています。LA自身が企画する研修(合宿)は、クオリティが高く、GPの取り組み当初に外部に依頼していたファシリテーション研修を超えたものになっています。また、すべての研修企画に

において他大学でL A（あるいはL A相当の学生アシスタント）として活動する学生の参加も受け容れています。

他大学との交流については、この他に、例えば私が招聘されたF D研修会や講演会にL Aを随伴することがしばしばあります。そこでグループワークのファシリテーションをするL Aの姿を見た先方から再放送のリクエストを受けたこともあります。また、年に一度、台湾で開かれる国際学会に学生スタッフとして参加しています。旅費は自前ですが、滞在費と食費は全部学会が持ってくれるほど、学会の活動でも重宝されるようになっています。

現在、関西大学では先ほど申し上げたスタディスキルゼミの他に、スライドにお示した科目でL Aを活用しております。つまり、L A制度はG Pの取り組み当初の予定、計画を超えたものになってきているのです。さて、お約束の12時に間に合うように、なんとかディレイを取り戻しました。司会者にマイクをお返し致しますが、どうしても今、ここでお尋ねになりたいことがある場合には、そのご質問をお受けして、ここでお答えしますし、後でメールで質問するという方は、別刷りの資料の最後に付けました、ラーニング・アシスタント利用申請書のフォーマットにメールアドレスを書いてありますので、こちらあてに質問をお寄せいただければ可能な限りお答えしようと思います。ということで、2分過ぎてしまいましたが、私の話は終わりたいと思います。ありがとうございました。



# 第 1 分 科 会

## 「学生の共育力を活用する教育の実際」

座長：和賀 崇 全学教育・学生支援機構 准教授

---

### 概要

午前の部を踏まえ、学生の力を活用する教育の実際について、成果や課題、推進にあたり必要な施策等を考えます。

### コメンテーター：

三浦 真琴（関西大学教育推進部教授）

### 話題提供者：

#### 1. 「岡山大学のTA制度の現状について」

全学教育・学生支援機構 和賀 崇 准教授

#### 2. 「愛媛大学『スタディ・ヘルプ・デスク（SHD）』の取り組み

～先輩から学ぶ：大学院生による学習支援～

愛媛大学 阿部 光伸 講師

#### 3. 「法政大学における学習活動支援の取り組み」

法政大学 近藤 清之 学務部長



## 第1分科会 「学生の共育力を活用する教育の実際」 報告

座長：和賀 崇（全学教育・学生支援機構 准教授）  
（FD専門委員会教授法開発WG座長）

平成12年にまとめられた「大学における学生生活の充実方策について（報告）－学生の立場に立った大学づくりを目指して－」（「廣中レポート」ともいわれる）は、冒頭において「大学における主役は教授研究を行う教員であり、学習する側である学生が常に脇役であり続けた」と指摘し、「学生中心の大学」への視点の転換を提言した。同時期に、本学では、学生参画型FDを組織的に展開し、学生の意見を取り入れたFDに取り組み始めた。

その一方で、「学生に対する教育・指導に学生自身を活用することは、教育活動の活発化や充実に資するのみならず、教える側の学生が主体的に学ぶ姿勢や責任感を身に付けることができることにもなり、非常に意義深いものである」（同報告）との提言に対しては、TA・RAの活用以外に必ずしも積極的には取り組んでこなかった。そこで第1分科会では、午前の部の特別講演を引き継ぎつつ、「学生の共育力を活用する教育の実際」をテーマとし、学生の力を活用する教育の実際について情報共有し、成果や課題、推進にあたり必要な施策等を考える機会とした。

和賀からは、本学におけるTA制度の現状に加え、過去に行ったTA学生の調査をもとにTA雇用制度の改善、業務内容の再考（高度化、授業外業務）、TA制度をより活用するための方策（登録制など）についての報告があった。また、学生雇用制度、学生参画型FDの現状と課題についても報告があった。

愛媛大学の阿部光伸講師からは、「愛媛大学『スタディ・ヘルプ・デスク（SHD）』の取り組み～先輩から学ぶ：大学院生による学習支援～」をテーマに、当該大学の取り組み及びその成果や課題等についてご紹介いただいた。スタディ・ヘルプ・デスクは、愛媛大学が「第3のステージ」と位置づける準正課教育の一環をなす取り組みで、大学院生のアドバイザーが共通教育科目を中心に個別指導を行うほか、勉強の仕方についてもアドバイスを行い、大学での様々な面での学びをサポートする取り組みである。平成17年度の取り組み開始から10年間で利用者は倍増し、大学院生の能力開発の場としても有効に機能している現状について報告があった。今後の課題・懸案事項として、学生の成績へのアドバイザーの影響度や学部教育との連携、支援すべき学生の来室状況に関する調査などが併せて報告された。

法政大学の近藤清之学務部長からは、「法政大学における学習活動支援の取り組み」をテーマに、当該大学におけるピア・ネットの取り組み、成果や課題等について、ご紹介いただいた。当該大学では、「支援される側から支援する側へ」という理念のもと、平成19年に「ピア・サポート・コミュニティー」を立ち上げ、その後全学的に発展させた「ピア・

ネット」を組織して、各部署が連携しながら学生のピア・サポート活動や学生スタッフが参加する各種プログラムの充実を図ってきた。近年では、ピア・ネットの成果外教育としての成果を測定するために、ピア・ネット・コンピテンシーを設定し、学生の成長の「見える化」に取り組んでいるとの報告があった。

短い時間しか確保できなかったが、各報告の後及び全報告の後に質疑応答を行い、発表者と参加者との間で意見交換することができた。また、コメンテーターとして参加していただいた関西大学の三浦真琴教授から学習支援等に関わる教師の役割と責任について指摘があり、学生・大学院生という学生同士の学びとともに教師も学び、成長すること、ロールモデルとして在ること、成長を把握するための日常的な情報交換のチャンネルが必要とのコメントをいただいて分科会を終了した。

## 第 1 分科会「学生の共育力を活用する教育の実際」

座長 和賀 崇（全学教育・学生支援機構准教授）

平成 12 年にまとめられた「大学における学生生活の充実方策について（報告）－学生の立場に立った大学づくりを目指して－」（「廣中レポート」ともいわれる）は、冒頭において「大学における主役は教授研究を行う教員であり、学習する側である学生が常に脇役であり続けた」と指摘し、「学生中心の大学」への視点の転換を提言した。同時期に、本学では、学生参画型 FD を組織的に展開し、学生の意見を取り入れた FD に取り組み始めた。

その一方で、「学生に対する教育・指導に学生自身を活用することは、教育活動の活発化や充実に資するのみならず、教える側の学生が主体的に学ぶ姿勢や責任感を身に付けることができることにもなり、非常に意義深いものである」（同報告）との提言に対しては、TA・RA の活用以外に必ずしも積極的には取り組んでこなかった。

そこで第 1 分科会では、午前の部の特別講演を引き継ぎつつ、「学生の共育力を活用する教育の実際」をテーマとし、学生の力を活用する教育の実際について情報共有し、成果や課題、推進にあたり必要な施策等を考える機会としたい。

和賀が話題提供するのは、本学における学生生活用の現状である。具体的には、TA 制度の現状及び学生雇用の現状について報告し、他大学の事例を学ぶ際の参考としたい。

参考となる他大学の事例として、2 名の方から各大学の取り組みについてご紹介いただく。大学院生が行う学習支援、ピア・サポートを教育に活かす取り組みの 2 例であり、概要を簡単に紹介する。

愛媛大学の阿部光伸講師からは、「愛媛大学『スタディ・ヘルプ・デスク（SHD）』の取り組み～先輩から学ぶ：大学院生による学習支援～」をテーマに、当該大学の取り組み及びその成果や課題等についてご紹介いただく。スタディ・ヘルプ・デスクは、大学院生のアドバイザーが共通教育科目を中心に個別指導を行うほか、勉強の仕方についてもアドバイスをを行い、大学での様々な面での学びをサポートする取り組みであり、平成 17 年度から取り組まれている。相談内容を教員にフィードバックすることで、教育改善にも役立つ取り組みである。教員とは異なる学習支援、学生の授業外学習を支援するもので、学習支援策の一つとして参考にしたい。

法政大学の近藤清之学務部長からは、「法政大学における学習活動支援の取り組み」をテーマに、当該大学におけるピア・ネットの取り組み、成果や課題等について、ご紹介いただく。当該大学では、平成 19 年に「ピア・サポート・コミュニティー」を立ち上げ、その後全学的に発展させた「ピア・ネット」を組織して、各部署が連携しながら学生のピア・サポート活動や学生スタッフが参加する各種プログラムの充実を図ってきた。近年では、ピア・ネット・コンピテンシーを設定し、その測定まで試みており、正課外教育の一つのあり方として参考になる取り組みである。

## 岡山大学のTA制度、学生雇用制度の現状について

和賀 崇（全学教育・学生支援機構准教授）

特別講演や第1分科会の他の話題提供で示される事例のような学生の活用は岡山大学では行われていないが、現在行われている取り組みのうち「学生の共育力を活用する教育」として考えられるものとして、TA制度と様々な場面での学生雇用がある。本話題提供では、他大学の事例との差異をより明確に確認するために、また、本学における学生生活用の出発点にするために、それらの制度の現状等について報告したい。

### TA制度

TA制度は、本学大学院在籍の優秀な学生を雇用し、大学教育の充実や指導者としてのトレーニング機会の提供を図り、これに対する給与支給により大学院学生の処遇の改善に資することを目的とする制度である。

「今後、TAに関する制度が整備されるとともに、有効活用が図られるものと期待します」（平成21年度監査報告書）といった指摘があったため、FD委員会では平成23年度からTA研修会を開始し（当初は教養教育担当のみ、その後全科目に拡大。オンライン研修も実施）、平成27年度には「TAガイドライン」も制定した。

また、過去2回TA制度及び業務に関するアンケートも行い、業務として「資料配付」、「出欠確認」、「学生の質問への対応」、「実験・実習・演習補助」、「教育機器等の準備」等を行っていることや（平成24年度調査）、大学院生がメリットとして「知識の獲得」、「授業の観察」、「学生との交流」等をあげていることが結果として得られた。一方で、教員からはTAの勤務態度やTA雇用制度（勤務時間、選任方法）の改善を求める声も複数あがっており（平成24年度調査）、TA制度の有効活用のためには解決すべき課題である。

現在、FD委員会では「TAの組織化」を課題としており、例えば、大学院生が専攻等の情報等を登録し、その情報をもとに適した科目のTAに採用される仕組みなどが構築できないか検討しようとしている。

### 学生雇用制度

学生雇用制度は、単なる経済支援だけでなく、教育的配慮に基づいて自校への帰属意識の育成や就業意識の向上、対人関係スキルやマナーの習得などの習得までをねらいとする取り組みもなされている。本学では、過去に検討されたものの、TAやRAなどの一部を除けば、必ずしも上記のような制度として確立されていない。

本学でなされている学生雇用は、例えば、広報誌「いちよう並木」の学生スタッフ、新入生配付物封入・袋詰・搬送業務、津島キャンパスウォークツアー学生スタッフ、ノートテイク業務、チューター、図書館のカウンター業務などであり、各々の部局がそれぞれに雇用している。

## 分科会の趣旨

- 個々の授業、研究室等では、「学生の力」、「共育力」は活用されている（はず）。
- しかし、大学全体として、支援や振興してはいない。



他大学の事例に学んでみよう

- 愛媛大学の事例：大学院生、正課に近い学習支援
- 法政大学の事例：学士課程学生、正課外教育、ネットワーク

0

## 分科会の趣旨

- 「学生の共育力を活用する」教育の実際（工夫、成果、課題など）はいかなるものか？
- 「共育」を促進するにはどのような支援、環境があるとよいか？
- 教員・職員・学生はどのように協働すればよいか？

1

平成28年度桃太郎フォーラム19  
第1分科会「学生の共育力を活用する教育の実際」

## 岡山大学のTA制度 (学生雇用制度) の現状について

和賀 崇 (全学教育・学生支援機構)

## 本学における「学生の共育力を活用する教育」とは？

(※センターに関しては旧組織)

1.TA制度	学務部、人事課、各研究科、FD委員会など
2.学生雇用制度	各部局、学生支援センター、教育開発センター、学生支援課
3.学生参画型FD (学生・教職員教育改善専門委員会)	教育開発センター
4.正課外活動支援の活動 就活オ・レ! 岡プロ! 校友会総務委員会 課外活動リーダーズ合宿	キャリア開発センター

3

## 本学のTA制度

- TA制度は整備、活用されており、一定の条件を満たせばTAを使用できる。
  - 講義は、受講学生100人以上 TA1人
  - 実技は、受講学生30人当たり、TA1人
  - 実験は、受講学生10人当たり、TA1
  - 情報処理科目は、受講学生20人以上 TA1人、受講学生50人以上はTA2人
- 平成23年度以降、TA学生及び担当授業の教員を対象に研修会(任意)を行い、修了証を渡している(開始当初は教養教育科目担当のみ、後に全科目に拡大)。
- 平成27年度にガイドラインを制定した。

4

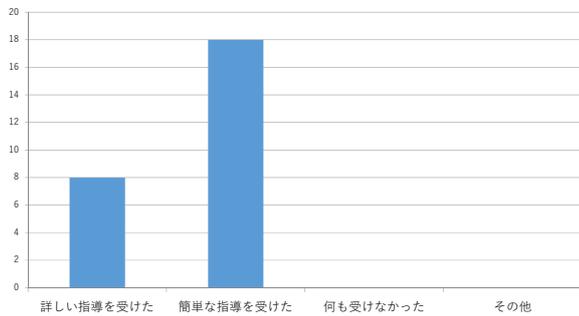
## TA等へのアンケート

- FD委員会においてTA等を対象にアンケートを実施  
平成24年度アンケート：TA及び授業担当教員を対象。  
平成27年度アンケート：TAを対象。
- いずれも、無記名。e-learning システム(WebClass)にアンケートのためのサイトを構築、メールで案内を送付し、回答を依頼

5

問題6 担当科目のTAの仕事について、授業担当教員から指導を受けましたか。

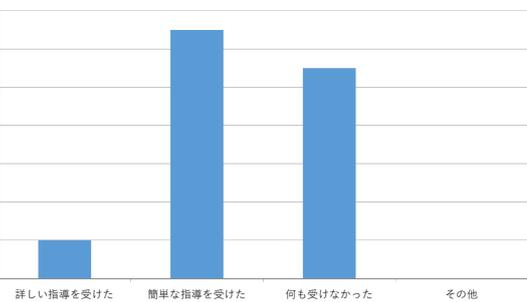
H24、TA



6

問題7 学生への接し方やTAとしてとるべき態度、言葉遣いなどについて担当教員から指導を受けましたか。

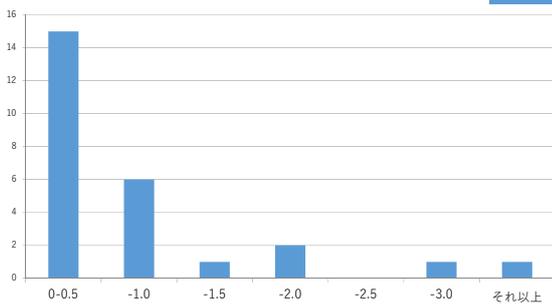
H24、TA



7

問題8 あなたは授業時間以外、担当科目のTAの仕事（実験の準備、打ち合わせ、採点、質問への対応など）を週当たり平均何時間ぐらい行っていましたか。

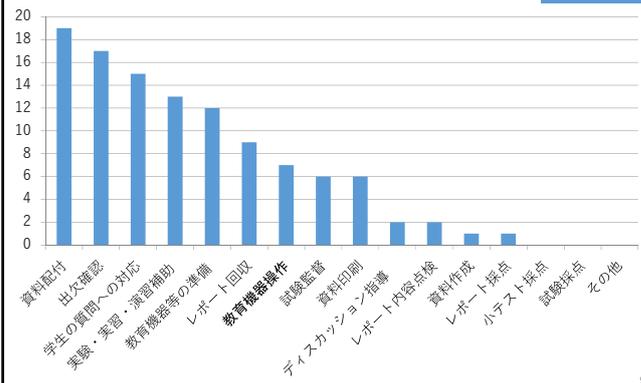
H24、TA



8

問題9 具体的な業務内容は何でしたか。（複数回答可）

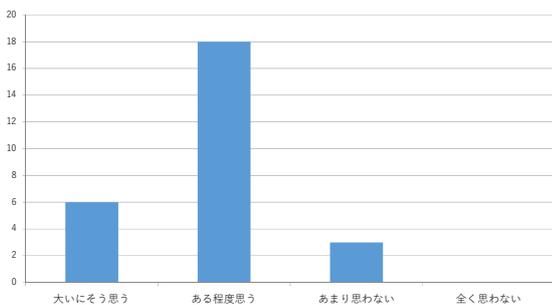
H24、TA



9

問題10 担当科目のTAをやった自分のメリットになったと思いますか。

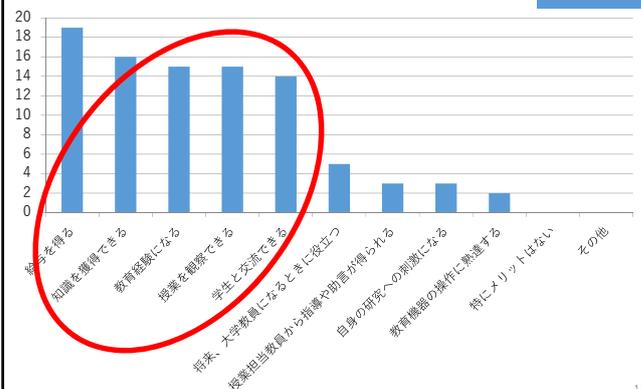
H24、TA



10

問題19 TAの経験はあなた自身にとってどのようなメリットがありましたか？（複数選択可）

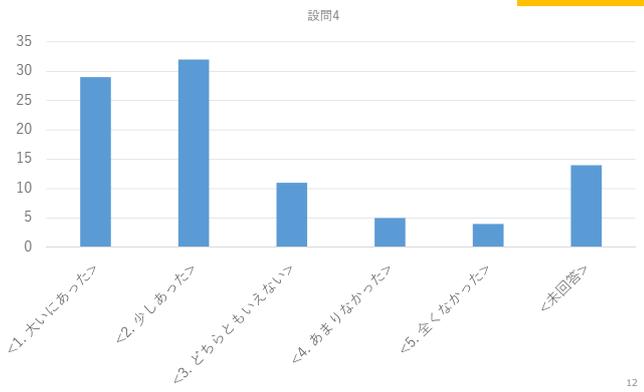
H24、TA



11

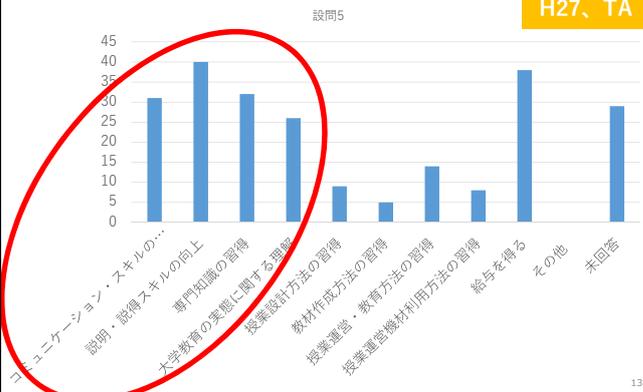
設問 4 TA業務を行うことで、自身にメリットはありましたか。

H27、TA



設問 5 TAの経験はあなた自身にとってどのようなメリットがありましたか。(複数回答可)

H27、TA



問題21 担当科目のTAの仕事を行うにあたって問題やトラブルはありましたか。(自由記述)

H24、TA

- 講義終了後に教室内に来て、出席用紙を下さいというモラルのない受講生が数名いたことに驚いた。
- 名簿作成を行っていたが確認せずに印刷したものが名前の間違いが多く、大変だった。
- 実習内容が簡単すぎて生徒が暇な時間が多く、雑談が目立った。
- 平時の講義の日時が急きょ変更となり、TAとかぶってしまった。

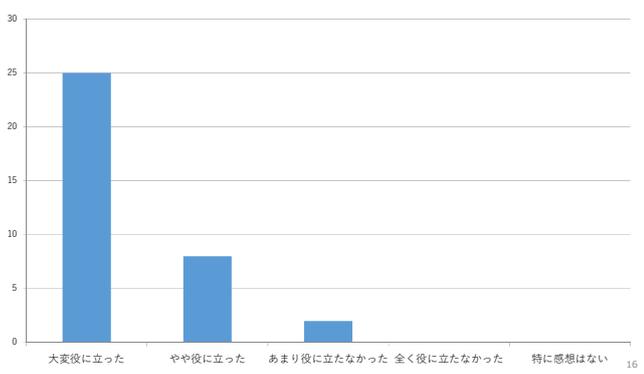
問題22 教養教育科目のTAについて意見があれば教えてください。(自由記述)

H24、TA

- 今回担当した講義はとても熱意のある講師で、私自身も講義を聞いて大満足でした。しかし、給料を頂いているTAの身分としてもう少しできることは合ったかと思えます。TAとしての役割をもう少し確立してはどうかと感じました。
- 200名弱の受講生に毎回課される出欠を兼ねた小レポートの採点および整理について、申請した勤務時間帯(金曜2限)を超過して行っていたので、仕事内容に応じて(私の場合は、講義中の機器操作の補助と小レポート採点、出欠整理)、もう少し幅を持たせた雇用時間が必要ではないかと思う。

問題9 TAを使用した感想を教えてください。

H24、教員



問題10 【問9を踏まえて】具体的にどういった点でそのような感想を持ちましたか。(自由記述)

H24、教員

- 受講生の多い授業は、出席確認だけでかなりの時間をとられる。また、授業前の資料配布も大変なので、TAに手伝ってもらえて大変助かった。
- 大人数の講義でレポートとチャトルカードの回収を行っていたため、その整理および提出の有無チェックを教員が行わなくて済み、時間削減が達成され、そのため他の業務が行えた。(意味のある教育を効率よく行うために大変有用である)
- 実験準備や授業用の100-150部にも及ぶ副読本作成は教官1人のみでは到底できない。
- 資料の作成など単純な作業の効率化に役立った。
- その他雑務で絶対的な時間が足りない中、少しでも時間を確保できたので助かった
- 実験実習の場合、実習を受ける学生のグループに配置するため、目が行き届く。また、先生には聞き辛い簡単な(基本的な)質問も学生TAにはしやすい様に思えます。



## 学生参画型FD (学生・教職員教育改善専門委員会)

本学では、この点で大学という**知的共同体の構成員全体**が、しっかり関わらなければ教育改善の実効性は上がらないと考えている。教員と職員の連携ももちろん重要であるが、**教育サービスの受容者である学生たちが、この問題と真剣に向き合っこそ、よりよい教育がなされるのである。**

「授業改善のためのティーチングチップス集 (2009年度版)」  
(<http://cfd.cc.okayama-u.ac.jp/fd/tc/2009/>) より

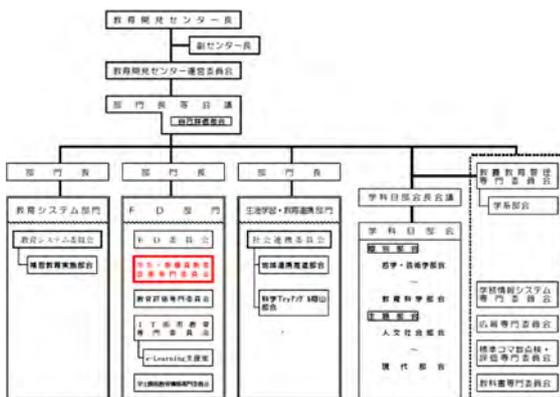
24

## 組織の発足

- ◆ 「学生参画型FD」を岡山大学の特色と位置付け、トップダウンで組織を構成
    - 学生・教員FD検討会 (2001.6)
    - 学生・教職員教育改善委員会 (2003.7)
    - 文科省特色GPに採択 (2005.9)
    - 学生・教職員教育改善専門委員会 (2010.4)
- 通称：改善委員会  
愛称：SweeTFood (Student, Teacher, Faculty Development)
- ◆ FD委員会と密接な連携を図りつつ、学生・教員・職員相互の協力のもと、教育全般に関する企画・提言を行い、岡山大学の教育の改善を推進することを目的とする。(岡山大学教育開発センター学生・教職員教育改善専門委員会内規第2条)

25

## 組織における位置づけ



26

## 改善委員会の構成員

- ◆ 学生委員：40名ほど
  - 11学部から推薦
  - ※1年生の5月に各学部から推薦 (任期2年)
  - 委員会が必要と認めた者も若干名
- ◆ 教員委員：15名ほど
  - 11学部、FD委員会から
  - ※3月末に推薦 (任期1年)
  - 世話人的な教員が2名
- ◆ 職員委員：1名 (学務部)

27

## どんな学生が選ばれてくるのか？

- ◆ 「やる気のある学生」ばかりではない！
  - ジャンケンで負けて仕方なく
  - 学部の先生と目があって
  - バイト (部活) があるから出られない
- ◆ 「やる気のない学生」は想定範囲内
  - やる気まんまんの学生ばかり集めてもダメ
  - 大多数の「学生の声」にはならない

28

## 改善委員会の活動

- ◆ 月1回の全体会議 (全体会)
  - 教職員の各種委員会と同等の扱い
- ◆ 具体的な活動はWG単位で行われる
  - 学生交流、システム改善、授業改善
- ◆ 週1回のWG活動
  - 専用の「委員会室」で活動
  - 委員会室にはPC、プリンタ等

29

## 学生の声が届く仕組み

- ◆ 各WGで議論・検討  
→WGの教員委員との議論
- ◆ 全体会議で審議  
→全学部の教員委員との議論
- ◆ 運営委員会で審議 ※教員のみ  
→教育担当理事が議長の委員会で審議
- ◆ 教員FD研修会（桃太郎フォーラム）  
等で意見

34

## 教員FD研修会での話題提供

- ◆ 教員FD研修会（桃太郎フォーラム、毎年9月）
- ◆ 分科会やシンポジウムに登壇し、学生  
の声を届ける
  - H28年：学生は60分授業・4学期制をどう思っているか
  - H27年：学生から見た60分授業・4学期（クォーター）制
  - H26年：ベストレクチャーとは？
  - H25年：アクティブ・ラーニングに意見
  - H24年：グローバル人材に意見  
授業評価アンケートの改善案
  - H23年：ベスト・ティーチャーとは？
  - H22年：授業評価に学生の視点を採用
  - H21年：学内における学生FD活動

35

## 改善委員会は「共育」しているか？

- 学生は成長する
  - 責任感、対人関係能力、課題発見・解決能力等諸能力の涵養
- 委員会内（同輩間、先輩－後輩間）  
での「共育」  
しかし・・・
- かなり粗放的
- 委員会外への波及は？

36

# 愛媛大学『SHD』の取り組み

スタディ・ヘルプ・デスク

～先輩から学ぶ：大学院生による学習支援～

国立大学法人 愛媛大学 学生支援センター

阿部 光伸

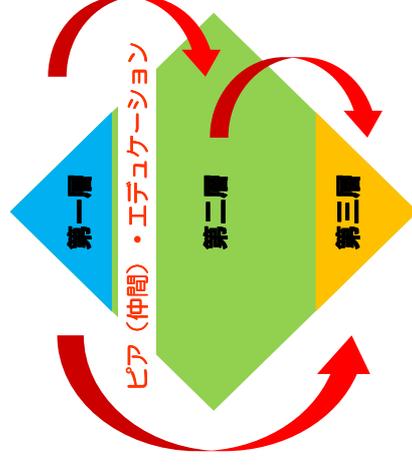
abe.mitsunobu.mk@ehime-u.ac.jp



## 本発表の内容

1. 愛媛大学の学生支援
2. SHD (スタディ・ヘルプ・デスク) について
  - 1) 設置の目的
  - 2) SHDの活動概要
  - 3) 教育的効果
3. 今後の課題

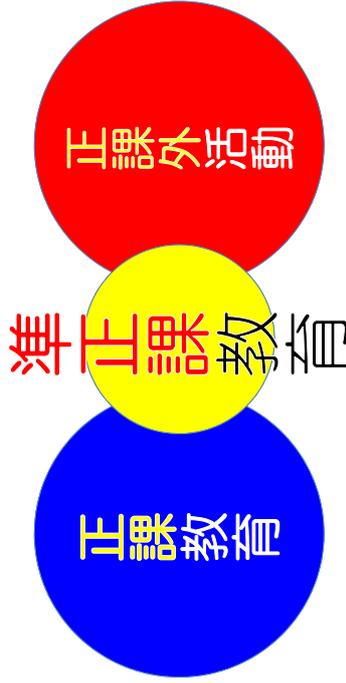
## 1-1. 愛媛大学の「学生支援」の捉え方



学生の行動変容に最も影響を与えるのは、他ならぬ学生である。

## 愛媛大学の学生支援

### 1-2. 愛媛大学の「準正課教育」



愛媛大学の「準正課教育」とは、卒業要件には含まれない、あるいは単位付与を行わないが、大学の教育戦略と教育的意図に基づいて教職員が関与・支援する教育活動や学生支援活動のこと。

### 1-3. 愛媛大学の「準正課教育」

愛媛大学は、準正課教育を「第3の学生の能力育成ステージ」として位置付け、このステージが、学生の様々な出会いや経験の場となり、学生生活の充実と将来の可能性の拡大につながることを期待している。

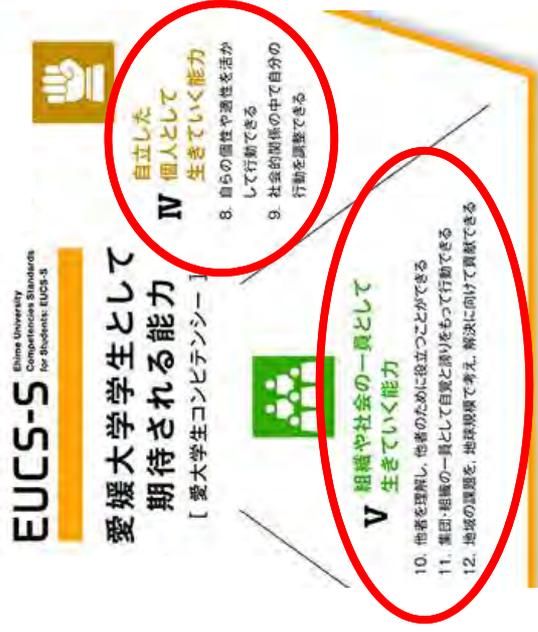


### 1-4. 「愛大学生コンピテンシー」

愛媛大学が、学生が卒業時に身に付けていることが期待される能力（育成したい学生像）



### 1-3. 「愛大学生コンピテンシー」



## 2-1. 「SHD」設置の目的・経緯

学生の学力低下（学業について行けない）等の抑止力として多様な学習ニーズに応えるため。

① 高等学校と大学の講義スタイルのギャップ  
⇒ 「新入生セミナー」へ

② 基礎力の欠如

〈当初〉 数学のリメディアル教育（正規科目）  
〈現在〉 理系基礎科目の個別フォロー

⇒ 「SHD」へ（平成17年度開設）



10

SHD（スタディ・ヘルプ・デスク）について



9

## 2-2. 「SHD」のミッション

愛媛大学生が大学で、より良く学ぶために必要な基礎学力の習得を支援する

- ① 学生の学力低下や多様な学習ニーズに応える
- ② 勉強がわからなくなり退学する学生を減らす
- ③ 学生の声を拾い教員にフィードバックすることにより、学生の声を教育改善に活かす



11

## 2-3. 「SHD」の特徴と活動概要

大学院生による「スタディ・アドバイザー」

年度	S.A. 人数	担当科目
2016年度	12名	物理(5)、数学(4)、 英語(3)、化学(1)、 レポート作成(1)

※カッコ内の数字は担当S.A.数(重複担当あり)

〈人選方法〉

学部教員の推薦、  
SAからの紹介、  
T.A.研修での告知

〈応募動機〉

ピアサポート精神、  
就職希望者



12

## 2-4. SHD週間スケジュール (例)

時間帯	月	火	水	木	金
<b>第3 時限</b> 12:40 - 14:10	数学(H, T) 物理(Ma) 英語・文系 レポート(Mi)	数学(H, N) 物理(Y) 工学系物理(Y)	数学(H, A) 化学(S) 英語(K)	数学(N, A) 物理(Ma) 工学系物理(T)	物理(Y) 生物(N) 英語(M)
<b>第4 時限</b> 14:30 - 16:00	数学(H, T) 物理(M) 化学(F)	数学(H, M) 工学系物理(T)	数学(N) 英語(Nk) 生物(Nk) 工学系物理(K)	数学(T) 物理(M) 工学系物理(K)	数学(T) 物理(Y) 生物(N) 英語(M)
<b>第5 時限</b> 16:20 - 17:50	数学(H) 物理(Ma) 英語(Mi) 工学系物理(K)	数学(T) 工学系物理(K) 英語(M)	数学(N) 英語(Nk) 生物(Nk) 工学系物理(K)	数学(T) 物理(M) 工学系物理(K)	数学(T) 物理(Y) 化学(S) 工学系物理(K)
閉室18:00	* 相談受付は17:30まで				

有償ボランティアとして  
時給900円を支給

※カッコン内のアルファベットは担当S.A.名

## 2-5. スナップ



## 2-6. 利用者実績



## 2-7. 数学・物理の利用学生が多い背景

● S.A.が支援中に利用学生から聴取

- ① 理系学部1回生の中に、高校で「数Ⅲ」を履修していないと申告する学生が一定数在籍している
- ② 高校で「数B」を履修していない学生は、バクトルを学習していないので、物理学の授業についていけない
- ③ 数学力テストで下位50人を対象に補完授業（数学入門）を開講しているが、それ以上に対象者が存在する
- ④ 同じ「物理」でも、学部により求められる理解度（教え方の基本スタンス）が異なる

## 2-8. 大学院生による支援の教育的効果

- ◆ (過去には) 教員もアドバイザーを担当したが、学生は、ほとんど訪れなかった

**学生が欲しいサービスは、学生が最もよく知っている**

- ① 学部生より年齢が少し上で、同じ経験をしてきている大学院生は、教員や友人と違った視点から助言できる点が良いのではないかと
- ② 勉強を教えるだけでなく、学び方を教え、学生の学習意欲を高めているのではないかと

**支援者である大学院生の能力開発の場としても有効**

## 今後の課題

## 3-1. 起こりうる問題

- ① **自立、組織の一員として成長できる一方…**

⇒ 大学院生の逃げ場/バイト

- ② **学生間のトラブル**

⇒ 個人的活動への勧誘

⇒ 社会人学生の居座り

**事案が発生した場合、教員が関与し解決へ**

## 1-2. SHDの課題・懸案事項

- ① **SHDとアドバイザー (S.A.) に対する評価**

⇒ 相談した学生の成績への影響度

- ② **学部教育との連携**

⇒ 科目担当教員との意見交換

- ③ **アドバイザーのスキル向上**

- ④ **本場に支援が必要な学が来室しているか?**

法政大学における学習活動支援の取り組み  
ーピアネット活動の可能性を中心にー

法政大学学務部長 近藤 清之

1. 法政大学におけるピアサポート活動開始の契機
  - (1) 学生支援 GP で「学生の力を活かした学生支援体制の構築」が採択(2007年度)  
＜基本コンセプト＞
    - ・教職員と学生の協働体制
    - ・第3のコミュニティ
    - ・支援される側から支援する側へ
    - ・学内インターンシップ
  - (2) ピア・サポート・コミュニティ(PSC)構築と成果
  
2. 正課外教育の必要性の検討
  - (1) 組織的な学生の学習活動支援の取り組みの必要性
  - (2) 学習活動支援の拠点となる「学習ステーション」の設置(2011年度)
  - (3) 学習ステーション(通称「Lステ」)の活動概要
    - ・Lステゼミ
    - ・職員トーク
    - ・新入生サポーター
    - ・学生スタッフ企画
  
3. 「ピアサポート」から「ピアネット」へ
  - (1) ピアネットを核とした正課外教育の可能性  
＜ピアネットの目標＞
    - ・支援される学生の成長
    - ・支援する学生の成長
    - ・教職員の成長
  - (2) 正課外教育としてのPBL活動実践例
    - ・JT B との コラ ボ による 商品 開発
    - ・学生進学アドバイザー(旧 恩師に会おうプロジェクト)
    - ・法政グッズ企画・製作プロジェクト
    - ・「思い出の55・58年館メモリアル写真集」製作プロジェクト
  
4. 正課外教育としてのピアネットの課題
  - (1) ピアネットコンピテンシーの設定とルーブリック化
  - (2) ピアネットコンピテンシーの測定(試行)
  - (3) ピアネット研修の実施
  - (4) ピアネットの課題と展望

以 上

## 法政大学における学習活動支援の取組み —ピアネット活動の可能性を中心に—

第19回桃太郎フォーラム第1分科会話題提供



法政大学学務部 近藤清之

2016年9月1日

## 自己紹介

### ＜経歴＞

- 学務事務(7年)
  - ⇒ 学生部(7年)
  - ⇒ 通信教育部(4年)
  - ⇒ 人事部(3.5年)
  - ⇒ 国際日本学研究所(0.5年)
  - ⇒ 学生部(学生センター)(5年)
  - ⇒ 小金井事務部(2年)
  - ⇒ 入学センター(5年)
  - ⇒ 学務部(3年目)
- …社会学部事務担当/キャンパス移転
  - …学生運動の真っ只中
  - …システム開発
  - …職員の採用・研修
  - …COE業務
  - …学生運動対策から学生支援
  - …理系学部の教務事務
  - …入試改革
  - …SGUを初めとした教学改革

### ＜学生支援との関わり＞

- ・学務事務時代の多摩キャンパス移転と教学改革の経験
- ・学生部・学生センターで学生支援業務に携わる

## ピアサポート活動開始の契機

「ピアサポート・コミュニティ(PSC)」の提案(2007年)

### ＜コンセプト＞

- ・教職員と学生の協働体制
- ・第3のコミュニティ
- ・支援される側から支援する側へ
- ・学内インタナーシップ



### ＜基本的なスキーム＞

- ・学生スタッフを運営の中心に位置づける
- ・部局の垣根を越えた連携

## PSCの構築

学生の自主的な企画が教養習得型・自己啓発型に発展

## PSCの成果

## ・ピサポートの学内拡大

- ①各部署への拡大(キャリアセンター、グローバル教育センター、図書館・・・)
- ②既存のサークルを巻き込んだ活動

※PSC学生スタッフとサークル共同企画「大学生が考える薬物乱用防止の取り組み」の実現

- ③350名の学生スタッフ、557名に7500名が参加(2010年度)



## ・ボランティアセンターの設置

## ・職員の活躍と成長

## ・正課外教育の必要性(学生のニーズ)

5

## PSCの成果

## ＜学生は＞

- ・授業以外にも何かやりたい(or やり遂げたい)(達成志向)
- ・仲間をつくり一緒に何かがしたい(グループ志向・所属志向)
- ・自分の経験を伝えたい(発信志向)
- ・幅広い教養を身につけたい(自己啓発意欲、成長意欲)

## ＜職員に求められる力＞

- ・学生との会話が必須(コミュニケーション力)
- ・学生を理解する姿勢(ニーズ把握、カンセリング力)
- ・学内外との調整(企画・調整力)
- ・大学職員の役割の理解(ミッションの(再)確認)

OJTによるSD効果

6

## 正課外教育の必要性

-組織的な学習活動支援へ-

## 「学びのワンストップサービス」構想

- ①学生生活実態調査による学生の実態把握  
学生の1日の自習時間は1時間以内(09年度調査69.5%、10年度調査72.5%)

- ②学生の学びへの欲求(PSCの経験)

学生企画の推移・・・「見学もの」から「教養」「自己啓発」にシフト  
⇒潜在的に学生は学びに対する欲求を持っているのでないか

- ③学生の不安・疑問解決の必要性(学生相談室、PSCの経験)

「勉強のしかたが分からない」「何を勉強したらよいか分からない」  
・・・従来から学生相談室にこうした相談が一定数あった

⇒「学び」の悩み解決の必要性

⇒「学習活動支援」

- ・目的意識(大学選択/学部選択)が希薄
- ・第1志望層が多くない現実
- ・受験勉強から抜け出せない層の存在

7

## 正課外教育の必要性

-学習ステーションの設置-

## (背景)「教育支援機構」の設置

※教育支援機構

- ・・・教育改革への情報提供と学士課程教育の再構築の取り組みをサポートする全学的な企画・調整・支援する組織として設置(2009年)

- ①FD推進センター

- ②市ヶ谷リベラルアーツセンター

- ③学習環境支援センター 3つの柱として活動を開始

学習に関わる施設改善、学習施設紹介パンフの作成等学習環境改善を目的にスタート

⇒「学習ステーション」設置へ

8

## <目的>

学習環境支援センターの活動の一環として、学生・教員・職員が協働して、**学生の学習活動を支援する。**

## <業務>

- ①学習活動へのアドバイス
- ②学習施設・制度の紹介、利用促進
- ③学生の学びのニーズ把握と実現
- ④スタッフの研修 その他

⇒ 7学部が混在する市ヶ谷キャンパスでパイロットの  
に、実施可能な内容からスタート

## A A A (トリプルA)のサポート体制 Association(つながる場)

学生と教職員の協働体制で学生の学習のサポートを行います。学生アシスタントは教職員と議論を繰り返しながら、大学教育のインタープリターとして大学教育に馴染めない学生の「学び」を様々な形でサポートします。

## Active Support(アクティブ・サポート)

従来の「相談室」形式でなく、様々な公開プログラムを行い、1人でも多くの学生の「学び」のニーズを発見するよう努め、新たなニーズには、それを解決するための新たなプログラム開発を行います。

## Active Learning(アクティブ・ラーニング)

専門のファシリテーターが常駐し、PBL、ディスカッション、プレゼンテーションなど学生の能動的な学習のサポートを行います。1人で解決できない問題も、皆でわいわい解決するための方法を伝授します。

## <人員構成>

2016年5月現在  
 学習ステーション長(教員1名)  
 専任職員1名(他に兼務で1名)  
 嘱託職員2名  
 学生スタッフ22名(前期)  
 運営委員会(教員6名、職員14名)

## <主な活動>

- ◎新入生サポート ◎Lステゼミ
- ◎学生アシスタント ◎職員トーク
- ◎PBL企画 ◎学生スタッフ企画

# 学習ステーションの活動概要



学習ステーション入口



学習ステーション内



新入生サポーター



新入生サポーター



学習施設見学ツアー



学習施設見学ツアー



新入生サポーター



新入生サポーター



Lステゼミ



Lステゼミ



職員トーク



職員トーク

-2014年度までの活動統計-

総学生数	2011	2012	2013	2014	参加学生数	2011	2012	2013	2014
新生入生サポート	1,467	1,459	1,611	1,724	新生入生サポート	1,091	1,143	1,351	1,458
レステゼミ	178	262	218	245	レステゼミ	178	262	218	245
職員トーク	136	159	129	151	職員トーク	136	159	129	151
常駐	300	710	1,239	1,318	常駐	104	163	476	643
学生企画	79	90	87	41	学生企画	79	75	65	27
PBL	0	148	160	305	PBL	0	148	160	305
SSD	110	245	222	378	SSD	110	245	222	378
その他	0	0	42	42	その他	0	0	0	42
合計	2,270	3,073	3,666	4,205	合計	1,688	2,195	2,621	3,250

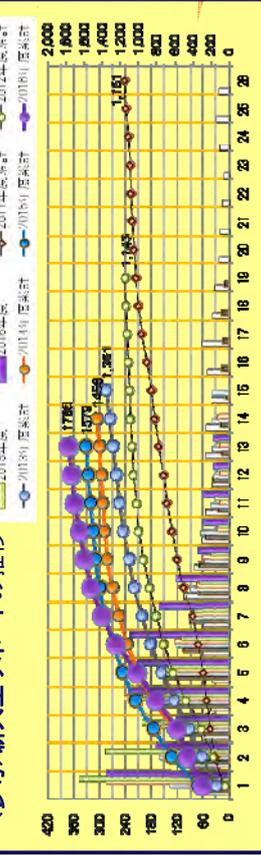
  

開催数	2011	2012	2013	2014	毎回の出席者数	2011	2012	2013	2014
新生入生サポート(日数)	26	19	15	14	新生入生サポート	42.0	60.2	90.1	104.1
レステゼミ	28	42	32	34	レステゼミ	6.4	6.2	6.8	7.2
職員トーク	17	21	20	21	職員トーク	8.0	7.6	6.5	7.2
常駐	92	227	369	307	常駐	1.1	0.7	1.3	2.1
学生企画	11	3	7	4	学生企画	7.2	25.0	9.3	6.8
PBL	0	21	21	19	PBL	0.0	5.5	7.6	16.1
SSD	11	23	16	30	SSD	10.0	10.7	13.9	12.6
その他	0	0	0	33	その他	0.0	0.0	0.0	1.3
合計	185	382	480	462	平均	9.3	14.5	16.9	19.7

-2015年度活動概況-

取り組み	プログラム数	参加人数
新生入生サポート	1	1,579人
レステゼミ	23プログラム	277人
職員トーク	21プログラム	187人
常駐スタッフ企画	30プログラム	1,904人
学生企画	8プログラム	343人
PBL	5プログラム	161人
SSD	4プログラム	

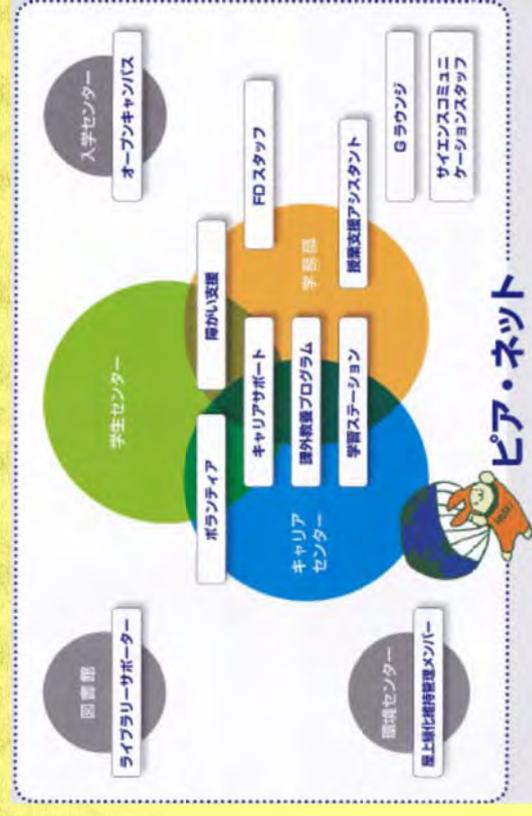
<参考>新生入生サポートの推移



## 学生支援に関する経験から

- ・少し背中を押してあげると大きな成長が期待できる。
- ・授業だけでは満足していない学生が多い。
- ・学生の成長志向、発信志向は我々が考えている以上。
- ・学生の発信力・企画力は学生支援に活用可能。
- ・法政ピアサポートの理念「支援される側から支援する側に」は様々な可能性を持っている。

## ピアサポートからピアネットへ





# 正課外教育としてのPBL実践例①



**キャンパス de よるごはん**

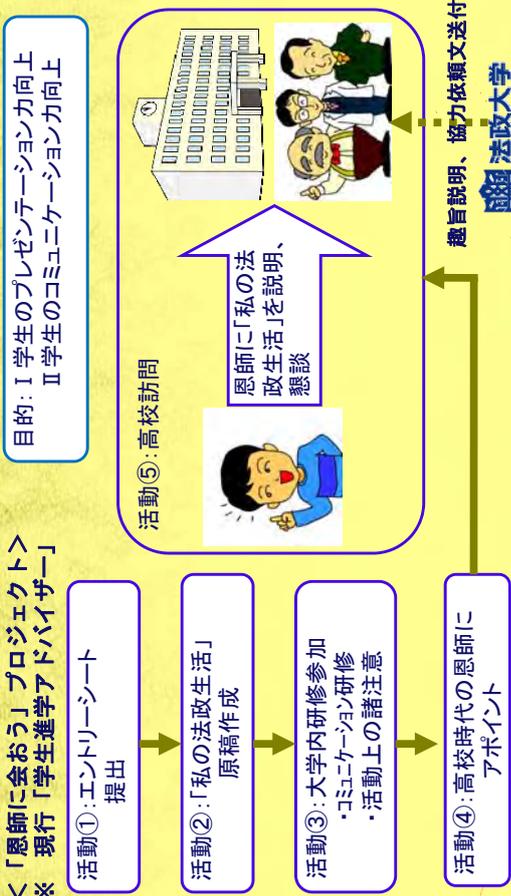
— 法政大学と大学各教員によるプロジェクト —

「キャンパス de よるごはん」は、法政大学と大学各教員によるプロジェクトです。このプロジェクトは、法政大学のキャンパスをより魅力的にするために、各教員がそれぞれの専門分野に基づいて、キャンパス内の様々な場所を「よるごはん」の舞台として活用し、学生と教員が一緒に楽しむことを目指しています。

このプロジェクトは、法政大学のキャンパスをより魅力的にするために、各教員がそれぞれの専門分野に基づいて、キャンパス内の様々な場所を「よるごはん」の舞台として活用し、学生と教員が一緒に楽しむことを目指しています。

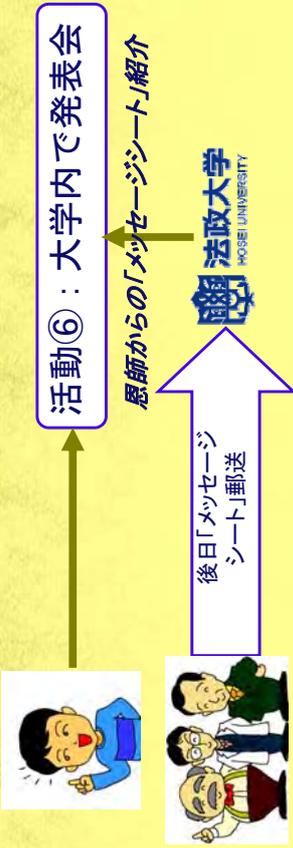
# 正課外教育としてのPBL実践例②

＜「恩師に会おう」プロジェクト＞  
※ 現行「学生進学アドバイザー」



# 正課外教育としてのPBL実践例②

＜「恩師に会おう」プロジェクト＞  
※ 現行「学生進学アドバイザー」



先生方からのメッセージ例

きてくれてありがとうごさいます。高校時代に英語の読解が得意でなくて苦戦していましたが、大学でも勉強を怠らなな柔軟な思考力を身につけた素晴らしい人間になりました。ぜひ、先生方からメッセージを送って下さい。

# 正課外教育としてのPBL実践例③

＜法政グッズ企画・製作プロジェクト＞

回	日時	内容
第1回	10月2日 (金) 6限	プロジェクト趣旨説明 企画発想力養成講座 (情報堂コンサルティング)
第2回	10月9日 (金) 6限	マーケティング講座 (経営学部 西川英彦教授)
第3回	10月16日 (金) 6限	グループワーク (探索的調査・コンセプトデザイン・アンケート作成)
(調査)	11月7日 (土) 17:30	「第23回法政大学全国卒業生の集い」に参加。卒業生に対してのアンケート調査 (検証的調査) ※各チーム1名の参加 (交通費支給)
第4回	11月13日 (金) 6限	グループワーク (企画書作成・プレゼンテーション準備)
第5回	11月20日 (金) 6限	企画商品コンテスト (審査を行い、製作する商品が決定する)
(実践)	1月23日 (土) 13:00	「2016年オール法政新年を祝う会」に参加。卒業生に対しての販売 ※コア入優勝チームのみ
第6回	2月2日 (火) 13:00	活動報告会 (振り返り)



# 正課外教育としてのPBL実践例④

<「思い出の55・58年館メモリアル写真集」製作プロジェクト>

回	日時	内容
第1回	10月7日(水)	キックオフミーティング 台割り講座
第2回	10月21日(水)	大学生講座(大学史センター見学)
第3回	11月4日(水)	ミーティング(台割り決定)
第4回	11月11日(水)	グループワーク(ラフ作成・取材・写真選定)
第5回	12月9日(水)	グループワーク(原稿作成) →12月下旬に入稿予定
第6回	2月2日(火)	活動報告会(振り返り) ※写真集配付



# ピアネットの課題

-ルーブリック-

## スケジュール管理能力

【概要】学生時代は時間があるようで、実は授業・バイト・友達の付き合いなどいろいろと多忙です。そんな中で、自らのスケジュール管理ができないとピアネット活動はできません。特に、複数のメンバーが協働する過程では、自らのスケジュール管理だけでなく、そのスケジュールを調整する能力が鍛えられます。

【レベル5】(マルチタスク管理)  
同時期に重複して行われている複数のタスクについて、それぞれ進捗状況を念頭に入れた上で優先順位をつけながらスケジュール管理を行っている。

【レベル4】(タスク管理能力)  
タスク(プロジェクトや会議)で発生する複数のスケジュールを開始から終了までの「線」としてとらえ、終了に合わせて逆算する形でスケジュール管理を行っている。

【レベル3】(個別スケジュール管理 点と点の調整)  
複数のスケジュールが重複した場合、単に先約優先で無く、必要度に応じた調整をしている。

【レベル2】(スケジュール管理ツールの利用)  
ピアネット活動においてスケジュール表を常に携帯し、スケジュールの重複が起きないようにしている。

【レベル1】(参加者としての対応)  
ピアネット活動のスケジュールは、友人に合わせることが多い。

【レベル0】  
ピアネットで該当する活動は、未だ行っていない。

# ピアネットの課題

-ピアネットコンピテンシーとルーブリック-

<ピアネット3つの課題>

- ◎学生の成長測定 ⇒ピアネットコンピテンシー
- ◎評価に係る共通尺度の設定 ⇒ルーブリックの確立
- ◎学生の活動記録の蓄積 ⇒eポートフォリオの構築



学生の成長の見える化

<ピアネットコンピテンシー>

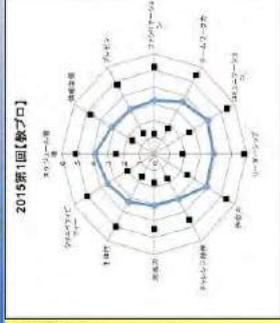
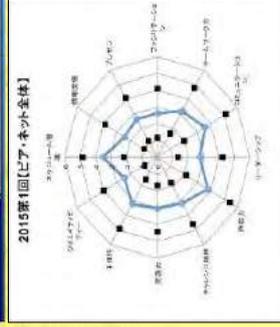
スキル・アップ	ネットワーキング力	自己成長
スケジュール管理能力	チームワーク力	チャレンジ精神
情報発信力	コミュニケーション力	完遂力
プレゼン・スキル	リーダーシップ力	主体性
ファシリテーション・スキル	許容力	クリエイティブイヤー

<ルーブリック化>

ピアネット活動における具体的な行動特性を、各コンピテンシーのレベルに合わせて配置することで、学生が自分の活動と能力の向上過程を意識できるような形でルーブリックを作成した。

# ピアネットの課題

-コンピテンシーの測定(試行)-



「数プロ (Keipro)」では全体平均に比べて全般的に優れているが、とくにリーダーシップにおいて高いレベルである事  
 「テスト (学習ステーション)」では、4月と7月に同一学生に對して2回の提出を求め、その間の成長を測定した。その結果、リーダーシップの形が比較的維持されたまま拡大していることが判明した。しかしリーダーシップについては、ほとんど全体平均より低く、かつ顕著な成長も見られない項目となっている。

# ピアネットの課題

ピアネット研修の実施

**目的**  
ピアネットに所属する学生が自身のスキルアップとス  
タッフ間の連携を深めること、各ユニットのプログラム  
を充実させるために実施します。  
※チームワーク力、クリエイティブ力、情報発信力、  
プレゼン・スキルの向上につながります。

**内容**  
「多摩のおすすすめスポット」を題材に各チームで取材・  
プレゼン準備、プレゼンを行います。プレゼン後にはク  
リッカーによる投票を行います。票が多く集まったチームに  
は賞品が贈呈されます。  
(1)【バスの中】「多摩キャンパスのおすすすめポイント」  
を1カ所ピックアップします  
(2)【到着後～60分間】ピックアップした場所の良さや特  
徴等について、取材し、プレゼンの準備をします。  
※バス到着後の取材、プレゼンの準備時間が短いため、  
できるだけ準備はバスの中で行ってください。  
(3)おすすすめポイントの写真をスクリーンに投映し、プ  
レゼンを行います。  
※パワーポイントなどは作成せず、口頭にてプレゼンを行  
ってください(各チーム3分)。  
■プレゼン3分

チーム名	名前	バス乗車	通学地域
Aチーム	◎斉藤 悠志 (L学生) 藤原 聖 (M学生) ◆藤原 聖 (M学生)	●目黒駅 (M学生)	目黒区 目黒
Bチーム	◎藤原 聖 (M学生) ◆藤原 聖 (M学生)	●目黒駅 (M学生)	目黒区 目黒
Cチーム	◎林 悠志 (L学生) 北山 正司 (M学生) 藤原 聖 (M学生)	●目黒駅 (M学生)	目黒区 目黒
Dチーム	◎藤原 聖 (M学生) ◆藤原 聖 (M学生)	●目黒駅 (M学生)	目黒区 目黒
Eチーム	◎藤原 聖 (M学生) ◆藤原 聖 (M学生)	●目黒駅 (M学生)	目黒区 目黒
Fチーム	◎藤原 聖 (M学生) ◆藤原 聖 (M学生)	●目黒駅 (M学生)	目黒区 目黒
Gチーム	◎藤原 聖 (M学生) ◆藤原 聖 (M学生)	●目黒駅 (M学生)	目黒区 目黒
Hチーム	◎藤原 聖 (M学生) ◆藤原 聖 (M学生)	●目黒駅 (M学生)	目黒区 目黒
Iチーム	◎藤原 聖 (M学生) ◆藤原 聖 (M学生)	●目黒駅 (M学生)	目黒区 目黒
01グループ ◆多摩学生			



# ピアネットの課題

課題と展望

- ◎ 正課外教育の認識
- ◎ 教員理解者の獲得と協働
- ◎ 職場リソースの把握とコーデイネート
- ◎ 職員のミッションの自覚  
 ……事務処理、サービス、教育支援 等
- ◎ 組織的な活動
- ◎ 仕事を進化させる意識
- ◎ 学生との協働を喜ぶ気持ち



ご清聴有難うございました。



## 第 2 分 科 会

### 「60分授業・4学期制に対応した授業改善事例」

座長：矢野正昭 全学教育・学生支援機構 准教授

---

#### 概要

平成28年度から導入した60分授業・4学期制に対応した授業改善の事例について発表し、学生の意見を交えて、メリットや課題、改善策等を考えます。

#### 話題提供者：

1. 「ミニ実験で体験する物理入門」

異分野基礎科学研究所 野原 実 教授

2. 「半強制的な反復学修による基礎科目の徹底教育」

環境生命科学研究科 泉 実 准教授

3. 「学生は60分授業・4学期制をどう思っているか」

学生・教職員教育改善専門委員会委員

酒井 也実（環境理工学部2年）

弓岡 弘樹（文学部1年）



## 第2分科会 「60分授業・4学期制に対応した授業改善事例」 報告

座長： 矢野正昭 (全学教育・学生支援機構 准教授)  
(FD専門委員会大学院WG座長)

第2分科会では、今年度(平成28年度)から新たに60分授業・4学期制が導入されたことを受け、そのメリットを最大限に生かし、デメリットを最小限に抑える方策を探るため、教員側の先進的な試み(2事例)と学生側の受け止め方についてご報告頂いた。

まず話題提供(1)として、野原実・異分野基礎科学研究所教授から「ミニ実験で体験する物理入門」と題して報告があった。現在の初等中等教育における理科の授業では、多くの場合、知識を教えるのみで実験にまで手が回らず、いわゆる理科離れにつながっている。今年度の第2学期に理系学生向け科目として開講した「物理の法則と科学技術」(2コマ×8週)では、1コマ(60分)あたり1件、合計16件の科学実験を教室内で行い、その一環として学生にモーターを実作させるなどして、定理・法則へのより深い理解を促している。同種の授業は文系学生にも意義深いものと思われるので、第3学期に「ミニ実験で体験する物理入門」として開講する。なお、教室の設備として①上下交換可能な広い黒板2面、②黒板を隠さず板書と併用できるスクリーン、③広い教卓と教壇、④学生が教壇を囲んで見下ろせる階段教室、⑤実験準備室の併設、が望まれるとのことであった。

次に話題提供(2)として、泉実・環境生命科学研究所(農学系)准教授から「半強制的な反復学習による専門基礎科目の徹底教育」と題して報告があった。専門基礎科目の内容は農学部学生として必ずマスターしておくべきものであるが、予復習をしないと容易に忘れてしまう。予復習を自主性に委ねることは現実的でない。今年度から60分授業の導入により2コマ連続の授業となったが、その2コマ目に演習を取り入れることで、1コマ目で教えた内容の理解度を直ちに測定・向上させることが可能となった。また4学期制の導入により、1学期ごとに前学期の内容を振り返って復習することで、よりきめ細かな反復学習を行うことが可能となった。農学部では有機化学・生物化学の専門書・問題集を一括購入して学生に貸与し、同一問題群を繰り返し解かせるなどして得点数の推移をデータ化しているが、その結果からも反復学習の有用性が示されたとのことであった。

最後に話題提供(3)として、学生・教職員教育改善専門委員会の酒井也実・弓岡弘樹両委員から「学生は60分授業・4学期制をどう思っているか」と題して報告があった。同専門委員会は毎年4月に新入生を対象とした履修相談会を開催し、履修方法の指導、時間割作成の支援等を行っているが、今年度は60分授業・4学期制など制度上の大きな変更があり、種々の困難が生じていることが推測された。このため、今年6月下旬から7月上旬にかけて各学部約20名の学生を対象に予備的なアンケート調査を行ったところ、授業間の休憩時間が短く教室移動が困難な場合があること、昼休みの不統一、授業選択の不自由・不具合(時間帯の重複など)、テスト・レポートなど負担が重いこと、自主学習や課外活動のための時間が確保し難いこと、などについての意見が寄せられた。今後は同種の調査を継続するとともに、問題解決のために教職員との協力を進めたいとのことであった。

## 第2分科会 60分授業・4学期制に対応した授業改善事例

座長： 矢野 正昭（全学教育・学生支援機構准教授）

本年度（平成28年度）から60分授業・4学期制が導入されたが、同時に教養教育の抜本的な改革が行われるなど全体として変化が大きかったこともあって、それらに対応した授業改善や新たな授業のあり方については現在も模索が続いている。

この分科会では、まず教員側から「ミニ実験で体験する物理入門」（異分野基礎科学研究所 野原 実教授）、「半強制的な反復学修による専門基礎科目の徹底教育」（大学院環境生命科学研究科 泉 実准教授）の2つの事例をご発表願ひ、ついで学生側から「学生は60分授業・4学期制をどう思っているか」と題して学生・教職員教育改善専門委員会の酒井也実委員と弓岡 弘樹委員にご報告頂く。その上で、新制度のメリットを活かすとともに、なお残る課題とその改善を図るための方策について、質疑や討論を通じて考える。

参考 平成28年度入学生（現1年次生）の時間割例

曜日	時限 / 学部群	文・教・法・経	医・歯・薬+G	理・工・環・農
月	1 (8:40-9:40)	英語	初修外国語	知的理解科目
	2 (9:50-10:50)	(必修)	等	等
	3 (11:00-12:00)	知的理解科目	英語	初修外国語
	4 (12:50-13:50)	等	(必修)	等
	5 (14:00-15:00)	初修外国語	知的理解科目	英語
	6 (15:10-16:10)	等	等	(必修)
	7 (16:20-17:20)	補習科目、実践知科目、		
	8 (17:30-18:30)	その他特別な科目		
火	専門科目			
水	専門科目			
木	1 (8:40-9:40)	初修外国語	英語	知的理解科目
	2 (9:50-10:50)	等	(必修)	等
	3 (11:00-12:00)	知的理解科目	初修外国語	英語
	4 (12:50-13:50)	等	等	(必修)
	5 (14:00-15:00)	英語	知的理解科目	初修外国語
	6 (15:10-16:10)	(必修)	等	等
	7 (16:20-17:20)	補習科目、実践知科目、		
	8 (17:30-18:30)	その他特別な科目		
金	専門科目			

※学期により多少異なる

※2年次生の教養教育科目は火・金曜日に、専門科目は月・水・木曜日に開講される

## ミニ実験で体験する物理入門

野原 実 (異分野基礎科学研究所)

### 1. はじめに

小学生の息子と米村でんじろう先生のサイエンスショー（岡山公演）に行ってきました。空気砲など、テレビでもおなじみの素晴らしい実験を親子で（親だけ？）楽しみました。会場にいる子供の中から、将来、ひとりでも物理の分野に（岡山大学理学部に）進んでくれたら良いなと思いつきながら帰途につきました。ところで空気砲の実験、小学生は「あー面白かった」で終わってしまうかもしれませんが、電磁気学などの講義で数学の渦度や循環（ベクトル解析のストークスの定理ですね）を習い始めた大学生が見れば、その定理や法則が実感として理解できるに違いありません。そのような考えもあり、2013年度から「物理の法則と科学技術」という一般教養の科目をスタートさせました。15回の講義すべてに見応えがあり、同時に学問的にも教育的にも意味がある実験を準備できている訳ではありませんが、毎年少しずつネタを仕込み、改善を続けてきたつもりです。この度、60分授業・4学期制の導入に伴ってカリキュラム開発経費を頂いたという経緯もあり、話題提供をさせて頂くことになりました。

### 2. 90分授業から60分授業への切り替え

今年度の第2学期に主として理系学生を対象とする「物理の法則と科学技術」を開講しました。従来の90分授業から60分授業への切り替えるために、冗長な部分を削除し、題材の整理を行いました。冗長な部分にこそ（様々な学生がいる教室における）教育の神髄があるようにも思います。一方で、講義のストーリーを良く練れば60分で十分な場合もあるようです。さらに数年間の試行錯誤が必要です。第3学期には主に文系学生を対象に「ミニ実験で体験する物理入門」を開講します。この講義が通用するのか、私にとって（今年度の）大きな挑戦のひとつです。

### 3. カリキュラムの概要

例えば、光の偏光題材にした回では、偏光の法則を学んだあとで、学生ひとり一人が偏光板を用いて法則の通りになっているか実験で確かめます。その偏光板を通して虹の偏光を調べ、偏光板を通して見た虹の写真を撮るのが宿題です。講義の最終回で、科学的に優れた写真を撮った学生を表彰します。

光ファイバーによる通信を題材にした回では、スネルの法則と全反射を学びます。ここでは、数人のグループでプリズムを用いて全反射の実験を行います。地球温暖化を題材にした回では、

数人のグループでペルチェ素子による発電実験を行い、電子が電気を運ぶだけでなく熱も運ぶことを体験します。その他にも、世界最強磁石（日本人が発明）、青色LED（日本人ノーベル賞）、空気を凍らせる、液体窒素の三重点を観察、超伝導を体験、空気砲で渦を作る、電気パンなど、教育効果が高く見応えのある（と思われる）実験を準備しています。

気相・液相・固相の三重点は、知識としては高校化学で学びます。しかし実際に見たことのある学生はこれまで皆無でした。恐らくこの講義での観察が、人生最初で最後になるでしょう。

最終回では、学生ひとり一人が与えられた素材だけを使ってモーターを作り、どれだけ回るかを競うモーターコンテストを行います。一人ひとり教壇にたって、書画カメラで作品を写しながらプレゼンを行います。毎年、ひとりか二人の学生が、あっと驚くような工夫をしたモーターを作ってきます。

#### 4. カリキュラム開発経費で改善できたこと

例えば、プリズムを用いた全反射の実験や、熱電発電の実験を2人一組で行うことが可能になりました。講義を聴くだけでなく、現象をその場で体験することで、知識の定着率が高くなるのではないかと思います。また2人組で実験することで、学生相互に相談しながら講義を進めることが可能になりました。

#### 5. おわりに：こんな講義室がほしい

一般教養棟の講義室は、従来型の講義スタイル、つまり教員が板書し（あるいはプロジェクタで写し）学生が一生懸命ノートを取るような講義に最適化(?)されているように思います。

教員の講義スタイルの幅を広げるために、また学生の講義への参加を促すために、新しいスタイルの講義室がほしいと思います。その一例を示します。(1) 広い黒板2面以上。上下で交換できること。講義の最初の板書（例えば数式）を途中で消すことなく、講義の最後まで残しておきたい。(2) プロジェクタのスクリーンが黒板を隠さないこと。プロジェクタで資料を提示しながら（実験を書画カメラで写しながら）板書で説明したい。(3) 広い教卓と広い教壇。実験器具や資料がおけるように。(4) 教壇を取り囲み、見下ろすような階段教室。教員の手元にある資料や実験が良くみえるよう。(5) 実験準備室。実験機材を毎週運び込むのは大変です。大雨の日もあります。

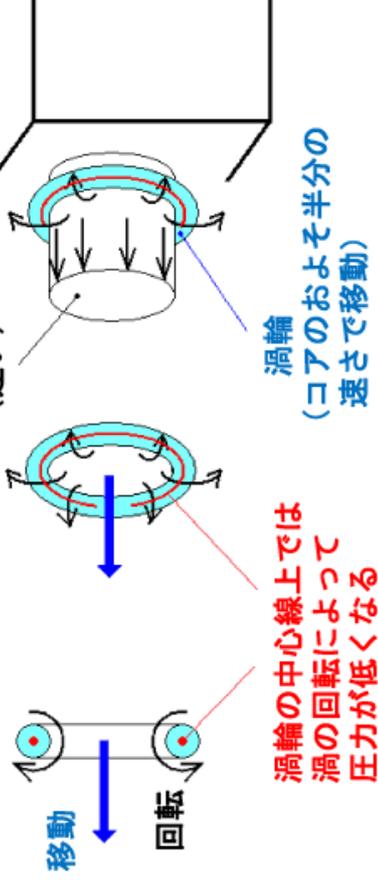
話題提供

## ミニ実験で体験する物理入門

異分野基礎科学研究所  
野原 実



## 空気砲



## 「物理の法則と科学技術」 シラバス

担当教員によるデモ実験や学生参加のミニ実験によって、様々な物理法則の理解を深める。さらに、それらの物理法則が、どのように現代の科学技術に活かされているのかを探る。

身の回りの自然現象を物理法則を通して眺める素養を身につける。また、現代社会を支える科学技術と物理法則の関係を理解する。

1. 体温で発電できるか
2. 仕事とエネルギー
3. 光の性質
4. 光ファイバー通信
5. 虹、日暈、プロミネン現象
6. 月面との通信
7. にんじんはなぜ赤い？
8. 発光ダイオード
9. 超伝導を体験する (摂氏マイナス200度の世界)
10. 世界最強ネオジム磁石
11. モーターと発電
12. モーターを作る (実習)
13. 洞と空気砲
14. 望遠鏡の三重点 (固体要素をつくる)
15. モーターを作る (実習)
16. モーターコンテスト (発表会)

授業計画

授業の概要

学習目標

授業形態・使用機器

ミニ実験を行いながら講義を進めます。各自、モーターを制作し(材料は支給)、最終回にコンテストを行います。

## 「ミニ実験で体験する物理入門」 シラバス

**授業の概要**  
担当教員によるデモ実験や学生参加のミニ実験によって様々な物理の現象を体験する。さらに、毎日の生活と物理との関係を探る。

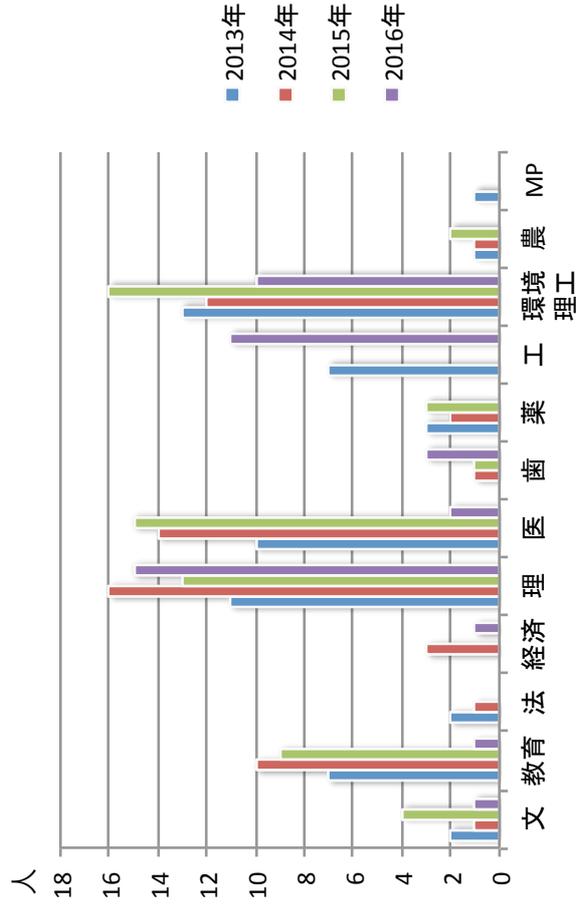
**学習目標**  
身の回りの自然現象を物理法則を通して眺める素養を身につける。また、現代社会を支える科学技術と物理法則の関係を理解する。

- 授業計画**
1. 火を使わずに水を温める
  2. 仕事とエネルギー
  3. 体温で発電できるか
  4. 発光ダイオード
  5. 光の屈折と全反射 (角から見た世界)
  6. 虹、日暈、ブローケン現象
  7. 電気バンを焼く
  8. 電気とエネルギー
  9. 超伝導を体験する(張氏マイナス200度の世界)
  10. 世界最強ネオジム磁石
  11. モーターを作る(実習)
  12. モーターと発電
  13. 源と空気の泡
  14. 窒素の三重点(固体窒素をつくる)
  15. モーターを作る(実習)
  16. モーターコンテスト(発表会)

**授業形態・使用機器**  
ミニ実験を行いつながら講義を進めます。各自、モーターを製作し(材料は支給)、最終回にコンテストを行います。

3学期 金曜 3・4限

## 「物理の法則と科学技術」受講生の分布



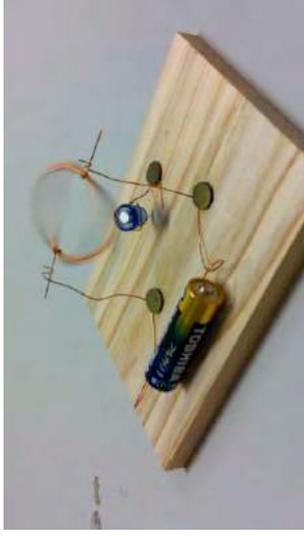
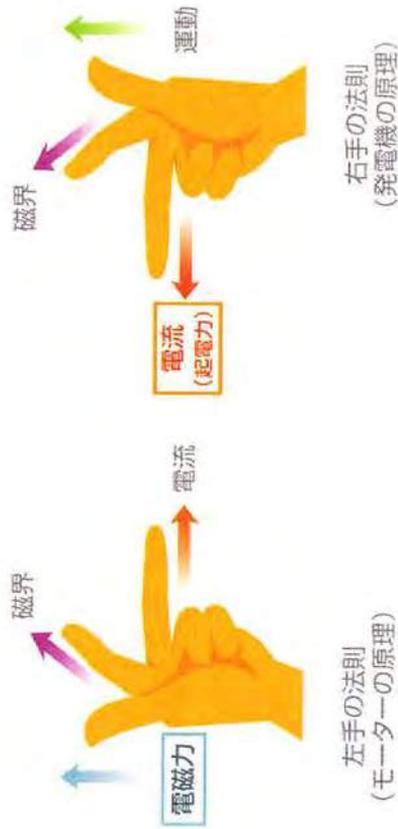
## 配付物

- (1) ネオジム磁石 1個
- (2) 板 1枚
- (3) 単三電池 1個
- (4) 押しピン 3個
- (5) エナメル線 約 130 cm × 2本

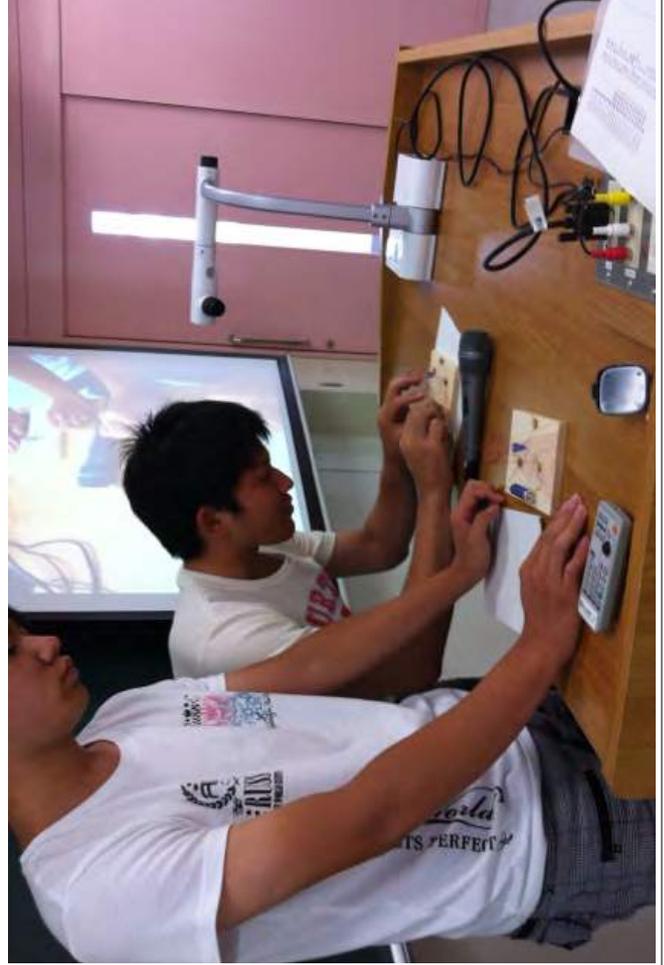
## モーター製作コンテスト

## (6) フレミングの法則

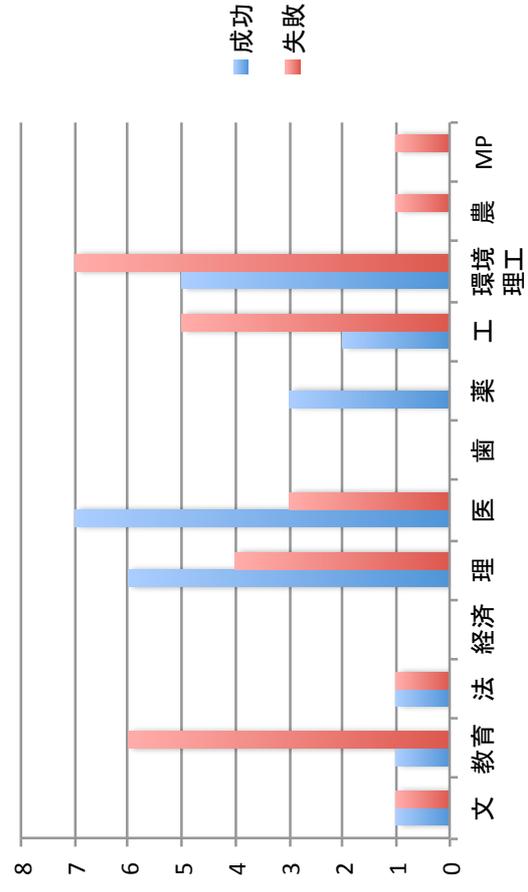
### フレミングの法則



## モーターコンテスト (講義最終回)

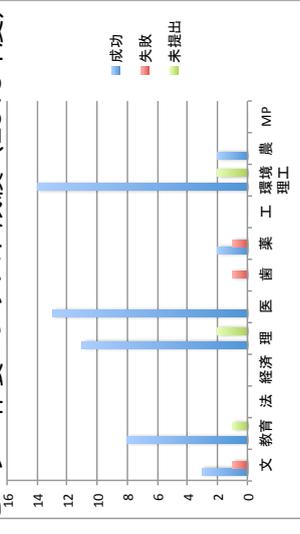


## モーター製作コンテスト成績 (2013年度)

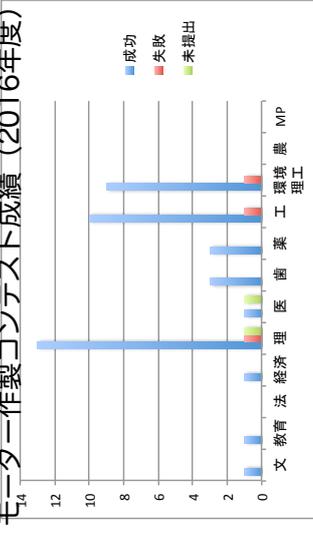


医・保健 6人全員成功 (前日に全員で集まって回るようにしたそうです)

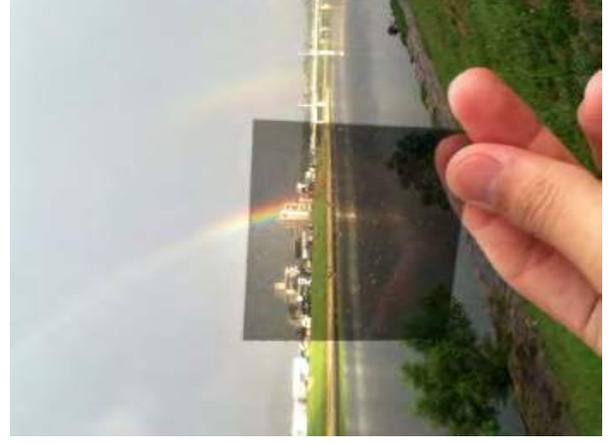
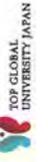
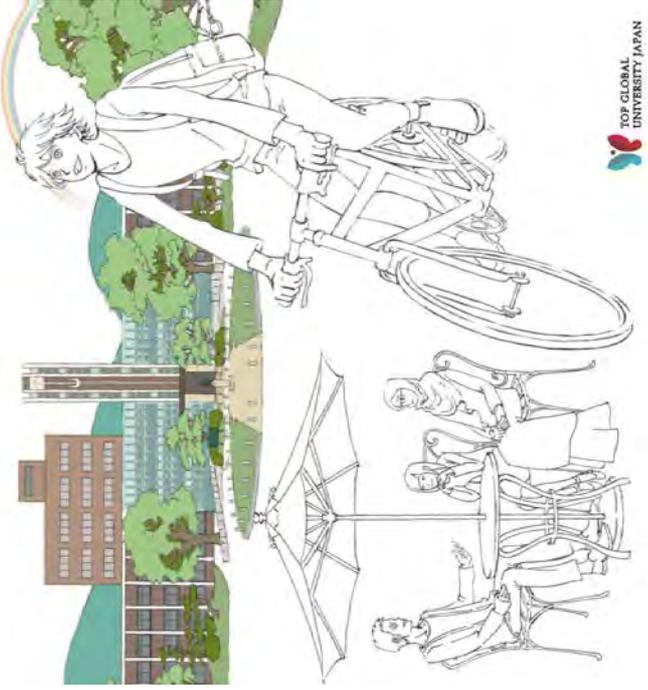
モーター作製コンテスト成績 (2015年度)



モーター作製コンテスト成績 (2016年度)



# 虹の偏光

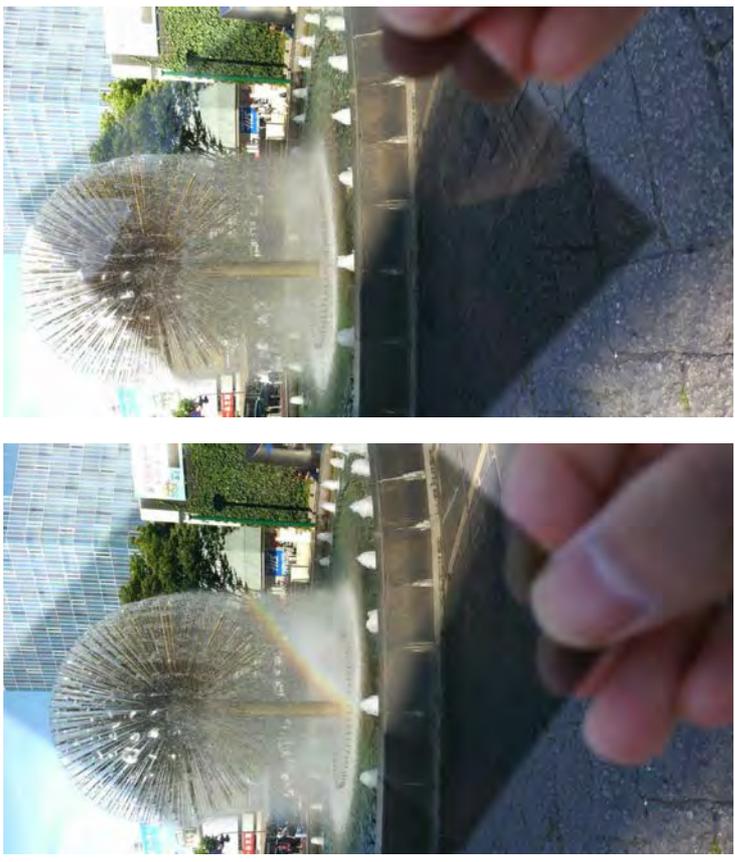


2013年最優秀賞

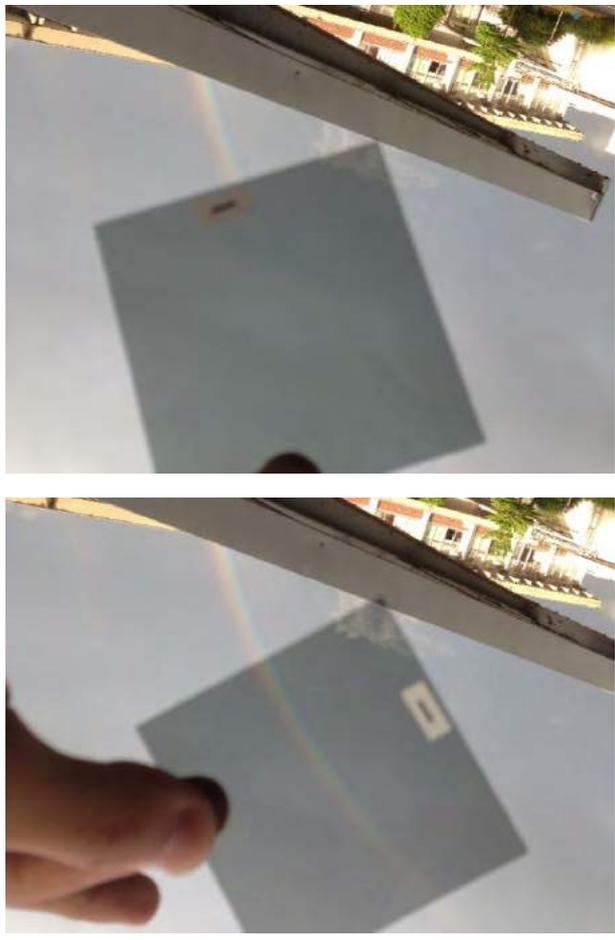
片山 颯高  
環境理工学部

2015年

環境理工  
木徳雅弘

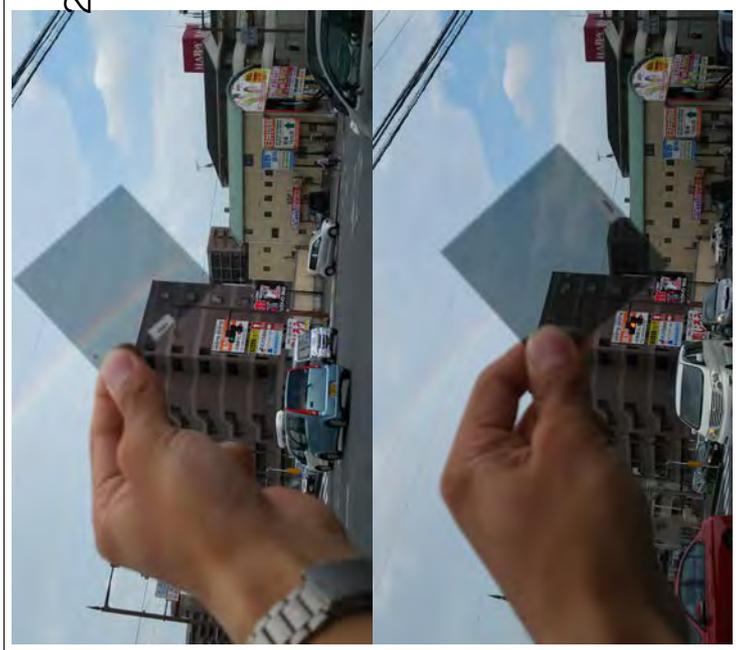


# 超伝導



2015年最優秀賞

環境理工学部 橋口侑生



2016年最優秀賞

理学部 生物学科  
徳下貴一

(1) 永久電流の実験

電気抵抗ゼロを確かめる

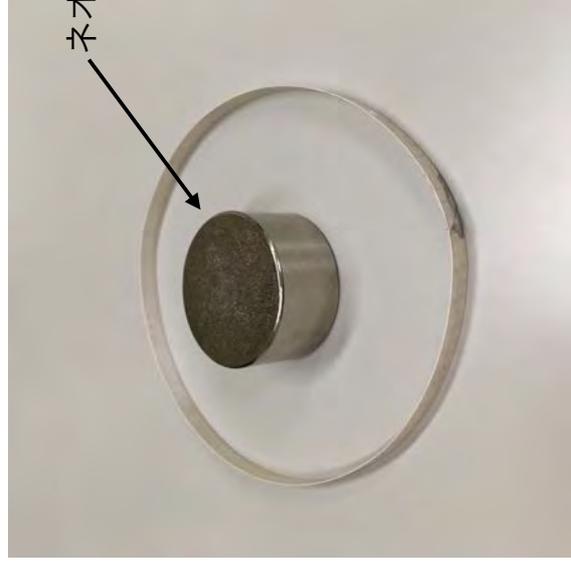


超電導線でループを作る



住友電工 Bi-Sr-Ca-Cu-O

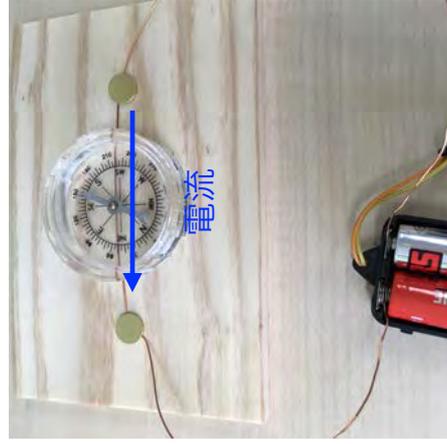
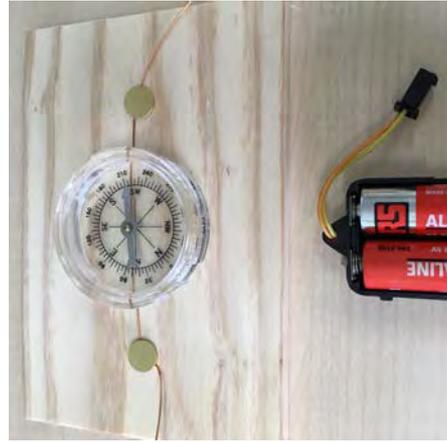
電流を流すには、磁石を遠ざけたり、近づけたりする。発電機の原理



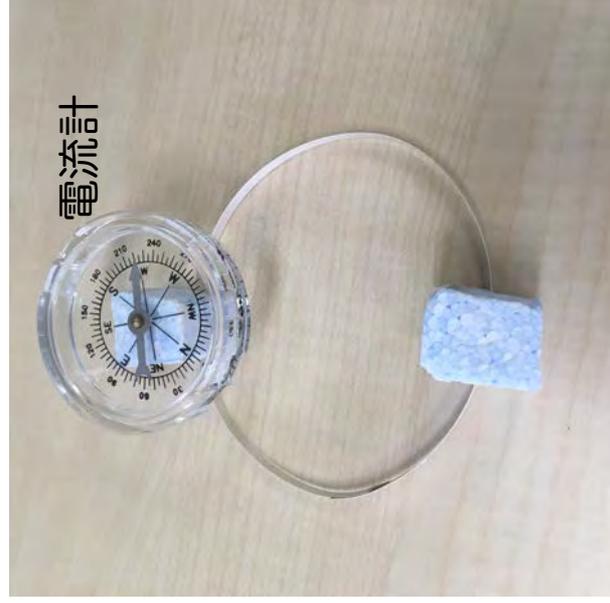
ネオジム磁石

電流計

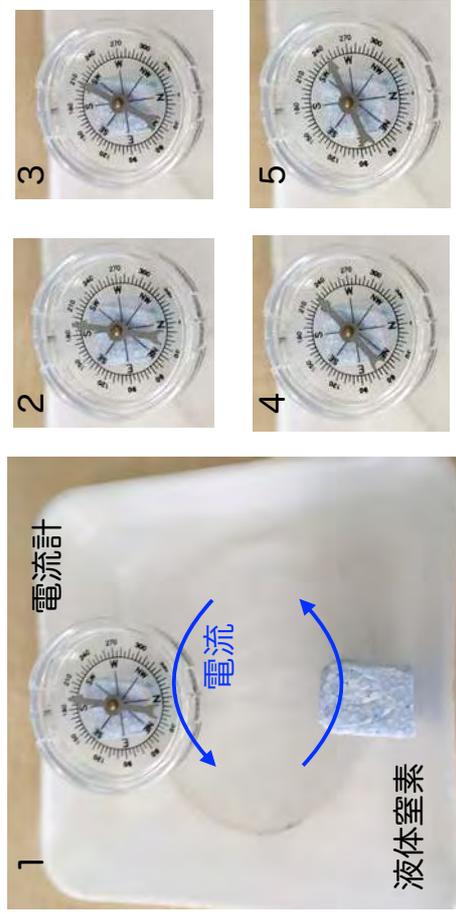
電流により、針の向きが変わる。



室温では、電流は流れ続けないが…



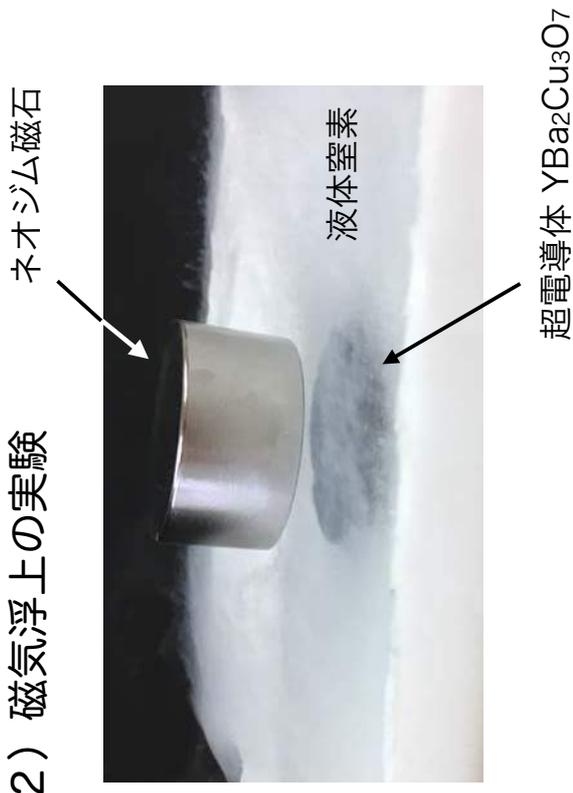
超電導状態では、電流が流れ続ける。



磁石を使って電流を流した直後

時間が経過すると…弱まる  
超電導ループの接合部で電流が失われるから。

(2) 磁気浮上の実験



(3) フィッシング効果の実験



理想の講義室

黒板を隠さないスクリーン 広い黒板2面以上



広い教卓、広い教壇

教卓を見下ろす階段教室

## 半強制的な反復学習による専門基礎科目の徹底教育

泉 実 (農学部准教授)

### 1. 背景

岡山大学は平成28年度より「60分授業・4学期制」を導入した。これまで90分授業×15回=2単位、つまり90分を2時間と捉えて授業をしてきたが、平成28年度より2単位取得には60分×30回(120×15)の講義受講が必要となった。教員や学生の講義に係る負担が増えたと言えるが、その増えた30分間、講義をする時間に余裕が出来たとも言える。専門書などを教科書として用いている講義では、60分では教科書の内容を教えるには短い。60×2=120分と考えると、今まで以上に講義のバリエーションが増える。これまでの90分講義は学生の自主的な予習・復習・演習がなされているとの考えのもとであるが、現実的にはほとんど皆無と言える。また、パワーポイントやスライド主体の一方通行の講義では学生の理解度を知ることは難しい。

### 2. 理解度向上のために

エビングハウスの忘却曲線によると、一度記憶したものは1時間後に56%、1日後に74%忘れていたそうである。つまり、学生は講義中に講義開始時の内容を忘れ、次の日にはほとんど忘れていたことになり、学生が真に講義内容を理解しているかどうかを知る事はやはり難しい。そこで、連続した講義の2限目に演習を取り入れる事により講義内容の理解度を測る事とした。つまり、演習による「半強制的」に何回でも繰り返し問題を解かせて理解させる「反復学習」によって、教員は学生の理解度を測り、学生には学生自身の理解度を認知・向上させる事を目指した。「日本の大学に入学するのは難しく、卒業するのは簡単である」と揶揄されるように、大学生は自主的に勉強するのは苦手である反面、受験勉強のような強制的に問題を解く勉強には慣れていることも、演習による勉強効果が期待できる点であると考えた。また成績の評価は講義への「出席」ではなく、演習により講義の内容を「理解」したことを「評価」することとし、その結果、代筆や代返などの不正(カンニングなども含む)も排除できると考えた。

本講演では、岡山大学農学部農芸化学コースにおける具体的な取り組みについて紹介する。なお本取組は「60分授業・クォーター制の導入に対応した教育効果の向上を目的としたカリキュラム開発経費(平成27年度)」に採択されたものであり、経費終了後の現在も引き続き検討を行っている。

### 3. 方法

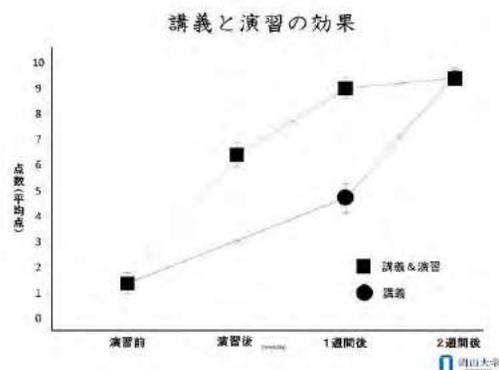
「有機化学・生物化学・微生物学」の専門基礎科目において、「微生物学」の演習用問題集の選定は困難であったため、比較的多くの専門書・問題集が市販されている「有機化学・生物化学」の講義を検証の対象とした。「有機化学・生物化学」の関連講義を受講している学生数分（約120冊）の専門書・問題集を「カリキュラム開発経費」にて購入し、学生に貸出した。なお講演では有機化学の講義について紹介する。

有機化学系研究室に所属する大学院生を講義のTAとして雇用した。講義を1時間行った後、前もって準備した問題を受講学生に回答させ理解度を測った。次いでアクティブ・ラーニングとして「学部生5人とTA 1人の対話形式」による演習を行った。演習を30分程度行った後、再度問題を受講学生に回答させて演習による効果を検討した。TAが不在時には、学生同士にコミュニケーションをとらせて、学生の能動的な活動を取り入れた演習を行った。コミュニケーション能力の乏しい学生や演習スタイルを嫌がる学生もいたが、半強制的に会話形式の演習を行わせた。また講義終了後には復習するように指示し、後日（1週間後など）、問題を受講学生に回答させて演習・復習による効果を検討した。

### 4. 結果

横軸には問題を解答した時間（演習前、演習後、1週間後、2週間後）を、縦軸にはそれぞれの時間における平均点を示した（右図）。

講義に演習を組み込んだ場合（■）、演習前には講義の理解力が乏しいせいで平均点が1～2点であったものが、演習を行うことによって6～7点に向上した。演習終了後に自宅などでの復習を徹底させたことにより、1週間後の点数はさらに向上した。しかしながら、演習を行わなかった場合（●）では、1週間後の平均点は4点前後であり、演習をする効果・意義があることを確認できた。



### 5. まとめ

「60分授業・4学期制」の導入を受け、授業改善の方法として連続した講義の2限目に積極的に演習を取り入れ、演習を行う事によって講義内容の理解度を測る事が可能かデータを収集・解析して検討を行った。その結果、演習により半強制的に何度でも問題を解かせて理解させる「反復学習」によって、教員は学生の理解度を測ることができ、学生には学生自身の理解度を認知・向上させる事ができた。

# 半強制的な反復学習による

## 専門基礎科目の徹底教育

岡山大学  
大学院環境生命科学研究科（農学系）  
泉 実

60分授業・クォーター制の導入に対応した  
教育効果の向上を目的としたカリキュラム開発経費  
（岡山大学農学部農芸化学コース）  
代表：村田 芳行

第19回練太郎フォーラム：第2分科会  
（2016年9月1日）



# 概要

平成28年度より、岡山大学は「60分授業・4学期制」

専門科目の講義は1時間では不足なため  
2履修単(60分X2)で同じ科目の講義を行う  
連続した講義の2履修に演習を取り入れる

講義の問題点：(ババボ主体など)一方通行の講義では学生の理解度を高めることは難しい

演習を取り入れ、半強制的に問題を解かせることにより、直ちに理解度を計ることが出来る



講義に「出席」したことではなく、演習により講義の内容を「理解」したことを成績の「評価」につなげる。

(教育)  
成績ビッグデータによる  
演習効果の見える化  
(可視化)

注意！ ⇒ 授業評価アンケート随時 ⇒ 給与反映？！



# 大学生の学習・生活実態を調査

「ベネッセ教育開発センター」では、2012年11月上旬に、全国の大学1～4年生4,911人を対象に、大学での学習や生活に関する意識・実態について、インターネット調査を実施

0. 本学教育について、あなたに対してあげられる、Bのどちらの考え方に近いですか、近いものをお選びください。



**出席点を重視**  
出席が授業の重要な要素であるという意識が強い。授業の進捗や理解度を確保するために出席を重視している。

学習方法の指導を受けるのが良い  
学生自身が能動的・主体的に学ぶ理由：おそれなく、素直に質問できる。

「あまり興味がない」(54.8%) 楽々  
学生が調べ、発表する演習形式の授業より、「教員が知識・技術を教える講義形式の授業が多い方がよい」(83.3%)

授業評価アンケートで高評価  
学生の基礎学力の低下  
学力向上のためには

単位を楽に取れない  
演習形式の授業  
授業評価アンケートで低評価、だが必要な事！



# 基礎学問の必要性



生命の科学を説明する  
⇒ 炭素・酸素・窒素から成り立つ  
⇒ 「有機化学の知識が重要」

問題点は？  
基礎学問の必要性を学生に理解させることが出来ない。

基礎学問の「生物化学」「農生化学」などと同様

勉強法として、受験勉強！  
問題を学生自身が「解く、作成する」そして「話し合う」。さらに繰り返すことが重要！

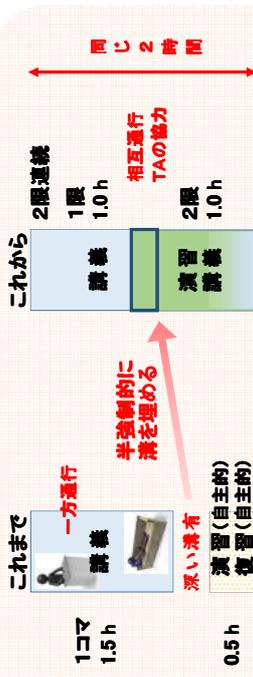
講義・演習を区別せず、通常の講義にも徹底的に演習を取り入れるべきである  
⇒ 受験勉強には使われている

農学部に限らず、最近の研究のスタイルは共同研究を含めて複合型・融合型の研究が多く、その研究領域は多岐に亘っている

⇒ 様々な知識が必要である



## 講義に演習を取り入れるには



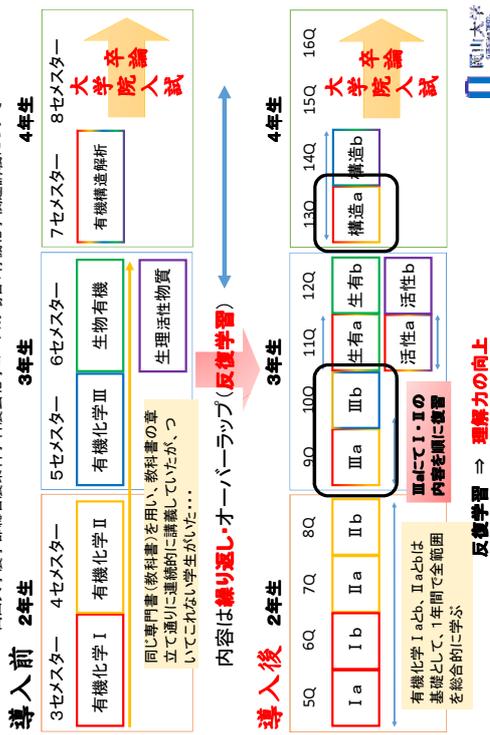
復習や演習は学生の自主性に任せていたが、全ての学生が演習をするわけではない。講義の中に半強制的に演習を組み込んでしまい、問題を解かせる事で理解力を高める。

### 成績の評価は？...理解度を確認

講義に「出席」ではなく、演習により講義の内容を「理解」したことを「評価」  
 利点：「代返」などの不正(カンニングなども含む)も排除できる

## 4学期制への対応

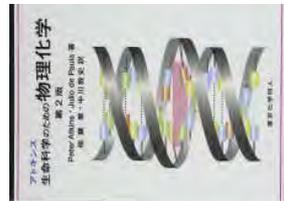
岡山大学農学部総合農業科学科農芸化学コースの場合、有機化学関連講義について



## 具体的な取り組みについて

- ・有機化学・生物化学の講義を検証の対象
- ・関連講義を受講している学生数分の専門書・問題集を力リキュラム開発経費にて購入し貸出
- ・専門書・問題集にはすべて管理番号を割り当て、受け取った学生個人(貸出申請書を準備)にて管理
- ・4年生終了(大学院入試後など)を目的に、専門書・問題集を返却
- ・次年度以降の学生に再貸出(再利用によるコストカット)

## 講義用教材(専門書・問題集)



専門書  
 生物化学II  
 生物物理化学  
 30冊



問題集・II  
 生物化学II  
 生物物理化学  
 生体高分子化学  
 120冊



問題集  
 有機化学I・II・III  
 生物有機化学  
 生理活性物質化学  
 有機構造解析学  
 120冊



### 模擬講義の様子



TA(大学院生)

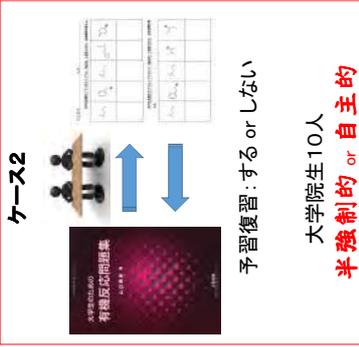
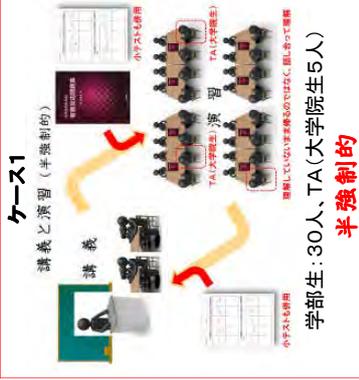
TA(大学院生)



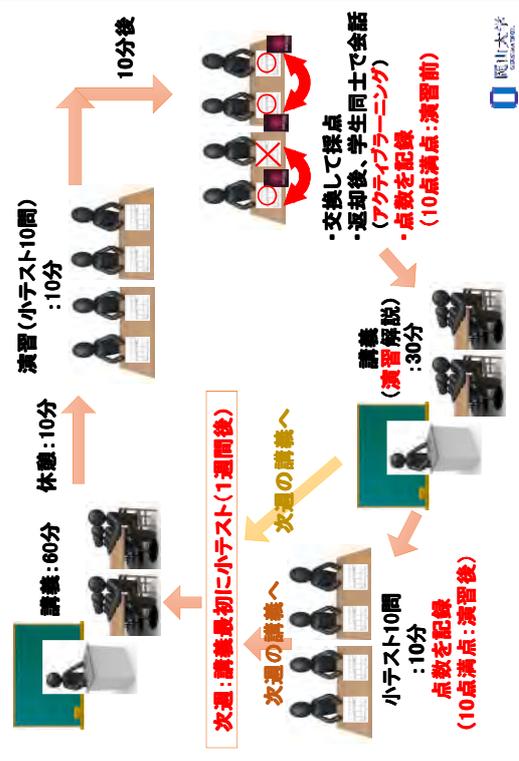
### 実施概要

学部生: 30人、大学院生: 15人  
 テストを数回行い、その成績データを解析(講義当日、1週間後、2週間後 etc.)  
 予習・復習をしたか毎回確認

### 模擬講義 (平成27年度)



### 現在の講義スタイル (有機化学Ⅲ : 農学部3年生)



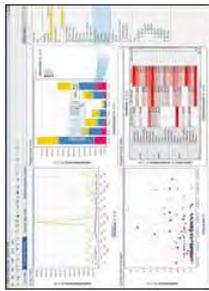
### 試験結果: データベース化



# データ解析: TIBCO Spotfire

## 意思決定支援ツール

- ユーザー・ドリブン
- 自由にデータを探索
- 発見する力
- コラボレーションを促進
- 事象に即座に対応



## 有効な手段: データの可視化

広い層に伝達、議論しやすい  
統計解析の知識をあまり必要としない  
可視化のもたらす「気持ち」の効果

構造-活性相関 (クマリン誘導体)



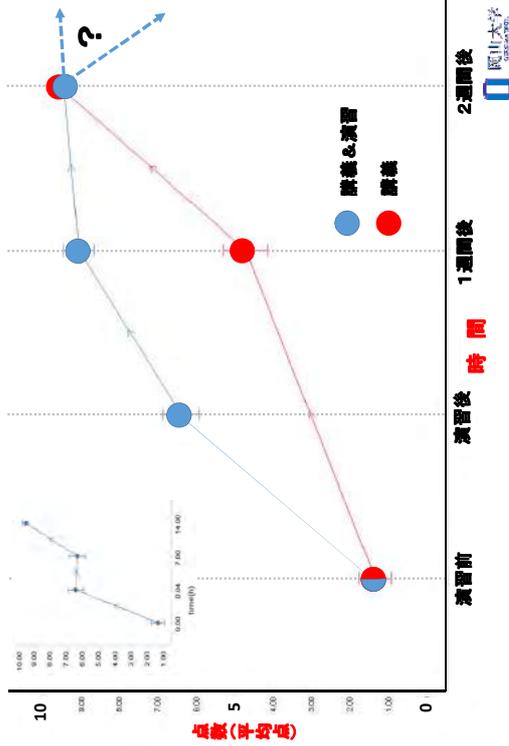
## 構造式描画ソフト ChemDraw とリンク

- 構造-活性相関の解明に利用
- リード化合物の探索

TIBCO Spotfire (<http://informatics.perkinelmer.co.jp/products/spf.html>) より転用



# 講義と演習の効果



# 受講生コメント (チャットカードより)

4 砂糖の甘味は何故砂糖よりも強いのかという疑問に、砂糖は甘味成分として砂糖よりも強いからという理由がわかりました。砂糖は甘味成分として砂糖よりも強いからという理由がわかりました。

10 有機化学で問題演習をしたことがなかったのですが、それが定着していったのが驚きました。

10 砂糖の甘味は砂糖よりも強いからという理由がわかりました。砂糖は甘味成分として砂糖よりも強いからという理由がわかりました。

10 砂糖の甘味は砂糖よりも強いからという理由がわかりました。砂糖は甘味成分として砂糖よりも強いからという理由がわかりました。



# まとめ

講義の一環として積極的に演習を取り入れ、半強制的に問題を解かせた。

**成績(教育)ビッグデータによる演習効果の見える化(可視化)**

**結果**  
教員も学生も講義内容の理解度を知ることが出来た。

**演習**の有用性と予習復習の必要性を(データから)確認できた。

演習の結果も成績に用いるため、講義に対する**集聚力**が上昇した。

## 問題点

- ・学生の意識・やる気
- ・学生の所属(所属予定)研究室

**教育改善(改革)の方法は?**  
1年次生の段階で専門基礎科目の重要性を徹底する?

**学生の意識改革も必要!**  
何をしに大学に来てるのですか?

- 謝 新(顧問)
- 村田 秀行教授
- 神崎浩 教授
- 田村 隆 教授
- 仁戸田黒彦准教授



## 学生は 60 分授業・4 学期制をどう思っているか

酒井 也実（学生・教職員教育改善専門委員会副委員長、環境理工学部 2 年）

弓岡 弘樹（学生・教職員教育改善専門委員会委員、文学部 1 年）

### 背景

学生・教職員教育改善専門委員会は、平成 14 年度から毎年度、新入生を対象に学部ごとの履修相談会を実施している。新入生の 9 割程度が参加し、先輩学生が授業の取り方、単位制度、シラバスの見方、抽選カードの書き方といった履修方法の基本を教えるとともに、個別相談を交えて時間割作成を支援するものである（今年度は諸事情から個別相談の時間をプログラム上は設けていない）。

今年度の履修相談会においては、例年の質問に加え、60 分授業・4 学期制に関わる質問（週 2 回ある授業の取り方など）、新教育課程に関する質問（必修科目と選択必修科目が重なる場合どうしたらよいかなど）もあった。また、新入生に限らず、教科書入手の方法（1, 2 学期分を 1 学期前に購入）や 2 学期に足りない科目を追加履修したい場合など、学生が対応に困る場面があることが予想された。

そこで、60 分授業・4 学期制において、学習上、学生生活上で「困っていること」などを全学士課程学生対象で調査し、学生の意見を取り入れた教育改善・学習支援策を検討・提案する企画を立てた。

今後、データ収集のためのアンケートを行う計画であり、本話題提供は、質問項目を選定するために実施した予備調査の結果をまとめたものである。

### 予備調査の概要

予備調査は、6 月下旬～7 月上旬に、各学部 20 人程度にアンケート用紙を配布して行った。質問は、「Q1：60 分授業・4 学期制に関して困っていること」、「Q2：今後、60 分授業・4 学期制が適切に機能するために、どのような改善が必要か」の 2 問のみで、いずれも自由記述で回答を求めた。

得られた回答は、この企画を進めている授業改善 WG の学生委員で内容に従ってグループ分けし、それぞれのグループの意見をまとめる形で集計した。

結果は、学部により若干傾向は異なるが、休憩時間の短さに関する意見、終業時刻が遅くなることへの意見、集中力の持続に関する意見、試験やレポート等の回数に関する意見などが多く見られた。詳細は、当日発表したい。

### 今後の本調査について

現在、予備調査結果を踏まえて、本調査の質問項目の検討を進めている。なお、大学においても改善策が進められているので、その情報収集も行い、質問項目を作成する予定である。

# 学生は60分授業・4学期制を どう思っているか

学生・教職員教育改善専門委員会

環境理工学部 酒井 也実  
文学部 弓岡 弘樹

## アンケートに関して

- 目的: 60分授業・4学期制に関する学生の現状把握
- 方法: 各学部20人程度に紙媒体で記述式アンケートの配布
- Q1: 60分授業・4学期制に関して困っていること
- Q2: 今後、60分授業・4学期制が適切に機能するために、どのような改善が必要か

## 文学部からの問題点

### 勉学について

60分では短く120分では長い  
(帯に短し楯に長しの感がある)

テストやレポートが多い

覚えるだけで学問ができない

講義数が多い一方、思ったように履修することはできない

留学や資格などの+αができない

学習量に対して、単位が少ない

### 休憩時間

休憩時間が10分

→移動時間が足りない＆休めない

休憩時間が短く、バラバラ

→ミーティングなどの開催困難

∴ないと困るが、あっても邪魔

### 終業時間

8限までであると

→疲労が大きい

→課外活動が難しい

→自習の時間がとりにくい

## 文学部からの改善策

### 時間的枠組み変更

90分2学期制に戻す

実際には2学期制として運用する

60分→50分授業へ

3,4限のみ90分に戻す

休憩時間・昼休みを長くする  
(∴移動時間が足りない)

終業時間を早める

### 単位取得枠組み変更

単位数を1→4/3単位に

卒業要件単位を調整

### 学修のために

時間割を精査

→資格・副専攻と両立が可能に

→ゆとりのあるカリキュラムに

授業自体をブラッシュアップ

(詰め込みすぎず、変化をつけて)

## 教育学部からの問題点

### 講義がらみの時間問題

休憩時間が10分のみ  
→移動の時間が足りない  
→十分に休むことができない  
60分×2の講義  
→連続120分は集中力がもたない  
→同じ内容が続いて集中できない  
→教員ごとに時間配分がきつそう

### 昼休み

→後ろにずれると集中が続かない  
→間にあっても落ち着かない  
→友人と予定を合わせにくい

### 終業時間が遅い

帰るのが遅くなる  
課外活動がしにくい  
自学の時間が減る  
:8限に講義を入れられないでほしい

### 教職をとろうとすると

副免許がとりにくい

## 教育学部からの改善策

### 制度について

前期後期 and/or 90分に戻す  
始めたからにはきちんとした時間割を  
単位の上限制をなくす

### 情報共有

学生に必要な情報をきちんと説明してほしい

### 学生の自由度UP

休憩時間を長くする  
休みの日を確認する  
自主学習日を作る

“原則7限まで”を守ってほしい  
8限までであると、課外活動が難しい

## 法学部からの問題点

### 学生、成長しにくい？

現制度が学力向上に繋がっていない  
「2つ目の60分」は集中できない  
テスト勉強が十分にできない  
(試験の間隔が狭い・時間が短い)

現在社会で求められる勉強以外の活動を  
する時間が確保できない  
多様な授業を履修しにくくなった  
公務員講座の負担が増えた  
専門科目が少ない・履修しにくい

### 休憩時間

休憩時間が短い  
教室移動が間に合わない場合もある

### 終業時間

終業時間が遅い  
→帰宅が夜中になる学生も  
自由に使える時間が少ない  
課外活動に使える時間が減った

## 法学部からの改善策

### コミュニケーション

学生の意見を聞くべき  
現場の教員の声を聞くべき

### 制度運用を改善

同じコマが連続しないようにする  
3、4限の間の昼休みをなくす  
講義の時間が重ならない時間割を  
教養と専門の曜日を分けない  
単位取得を容易にする  
先生方にしっかりと授業計画を  
たてて授業に臨んでもらう

### 制度そのものを変更

前期後期 and/or 90分に戻す  
テスト実施は90分制度と同様に  
講義時間を短く

## 経済学部からの問題点

### 60分・4学期制が…

2か月では学びが定着しない  
学びの質が低下している感じがする  
休憩時間が短すぎる&変則的  
→教室移動が間に合わないことも  
→昼食の時間が遅くなる  
多様な講義を履修できない  
120分講義は集中がもたない  
原則存在しない8限が週に3回

テストが増えて勉強しかできない  
レポートが多すぎる

自分なりの勉強・課外活動・バイト  
をする時間が確保できない

### その他にも

シラバス通りに進む科目が少なすぎ  
立ち見の講義がある

## 経済学部からの改善策

### 制度そのものを変更

集中講義を増やして、講義を分散させる  
1コマ講義と2コマ講義を柔軟に活用する  
履修選択の幅を広げる  
中間テストをレポートに変えるなど、  
テストの回数を減らす  
大学側が慣れるのを待つ

### 制度運用を改善

前期後期 and/or 90分に戻す  
45分授業にする  
単位認定のみ、前制度に戻す  
休憩時間を増やすor移動時間等を  
考慮して不規則にする

### 制度に関係はないが…

広い講義室を使ってほしい

## 理学部からの問題点

### 勉学について

授業時間が単純に増加し（休憩がないこともある）集中が続かない  
延長された授業時間が有効活用されていない  
テストの回数が増え、期間は集中し、救済措置はなくなつた  
復習する時間がない

### システムについて

集中講義が増えて留学しにくい  
講義選択の自由がなくなつた  
教員側もシステムを理解していない

### 学生生活について

休憩が短いので、教室移動が困難  
休憩時間がバラバラ  
→昼食をとるタイミングが難しい  
→ミーティング等が行えない  
帰宅時間が遅くなる  
(課外活動もできなくなる)  
勉強以外のことがやりにくい

### 休憩時間について

10分休憩に小テストはやめて  
休み時間はとってほしい

## 理学部からの改善策

### 制度はそのまま

講義時間を延ばさない  
増えた時間をALや演習に充てる  
休憩時間を確実にとる  
昼休みの時間を統一  
成績評価のタイミングを明確に  
卒業に必要な単位を減らす  
教員・学生双方が十分制度について  
議論・理解する

### 制度を戻す

前期後期 and/or 90分に戻す

### さらに制度変更

45分 or 50分×2コマとする

### その他にも

教養と専門の日を分けない  
履修登録変更期間を延ばす  
講義によっては、通年（期）にする

## 医学部からの問題点

### 学修と単位取得

要点羅列のみで授業に面白くない  
授業のペースが速い  
教員の講義が雑  
テストが多く、重い  
2か月では考えて学修できない＆詰め込み学習になってしまう  
120分講義をする先生がいる  
欠席が重い  
多様な講義を受けられない

結局講義が多く、留学しにくい  
即留年となる講義が発生している  
履修登録が不自由

### 学修外の問題

4回時間割が変わり予定が立たない  
課外活動をしにくい  
3,4限に昼休みを挟まないで  
授業が終わる時間が遅くなった

## 医学部からの改善策

### 講義そのもの

60分制に合わせて講義・時間割を作り直してほしい  
学習内容を、時間をかけて考えられるようにしてほしい  
削られた授業内容について、いつでも質問できるようにしてほしい  
学期ごとの勉強量を平均化する  
時間不足をカバーできる教材を  
教員が60分になれるのを待つ

### 新制度について

前期後期 and/or 90分に戻す

### 制度の使用

時間割を改善する  
新制度についての理解を深める  
始業時間、終業時間を考えるにあたって、学生のライフサイクルを考慮してほしい  
カリキュラム・試験期間の見直し  
シラバス・体験授業を充実させる

## 歯学部からの問題点

### 講義そのもの

講義の時間が教授によって違う  
欠席や遅刻が重く響く  
テストが多い（重なる）  
単位がとりづらい・授業時間増加

### 休憩時間

3,4限の間に昼休みがあるのは微妙  
昼ごはんをきちんととりたいが、休み時間が短い

### システム

単位の計算がよくわからない  
テスト範囲が前と変わりややこしい  
忙しい。高学年で負担が減るの？  
成績開示から履修登録まで短い  
登録の抽選期間が短い  
1学期と2学期の間に休みがなく、メリハリがつかない  
教員が新制度に対応できていない

## 歯学部からの改善策

### 制度の中核について

前期後期 and/or 90分に戻す  
試験を2Qに一度にする  
60分・4学期制について、メリットやデメリットを含め、きちんと説明をする

### 昼休み

昼休みの時間帯を2or4限後にする  
昼休みを早くする

### その他にも

60分授業に変更したのだから、授業内容も変更する必要がある  
60分を教授にも浸透させる  
タイムテーブルを遵守する  
履修を決定しやすいように、成績開示を早める  
履修登録期間を延ばす  
テストのタイミングを分散させる

## 薬学部からの問題点

### システム面

単位習得が困難  
(:取れる単位数の減少)

欠席が重い

テスト期間が長く、被りが多い

### 薬学部特有

水曜日の午後にも授業がある

授業と実習がぶついたら

4限連続で同講義だとキツイ

### 時間割関連

昼休みの取り方が授業によって異なる

10分休憩で移動が大変

終業時間が8限だとキツイ

120分連続だと講義が長い

8限までのフルコマが多い

自主学習の時間が取れない

専門科目と教養科目の曜日での忙しさの差が大きい

## 薬学部からの改善点

### 休み関係

学期間に休みをとる

同じ講義の休み時間を5分に  
異なる講義の場合15分に  
→移動&質問がスムーズに

### システムについて

60分授業・4学期制の見直し

テスト期間の分散

教員職員が本制度への理解を深める

### 時間割関連

終業時間を7限にする

教養科目と専門科目の曜日を  
分けない

専門科目と教養科目を午前午後で  
分ける

昼休憩の時間の見直し

同一授業の連続を2限までに抑える

時間割の精査

## 工学部からの問題点

### 講義と単位

授業が長い

テストが毎月になるので大変

テストが集中する

追試がなく、すぐ単位落ちする

### 課外活動

高頻度のテストと部活動（大会等）  
の兼ね合いが難しい

土日に補講があり、課外活動（部活  
動・バイト）に差し障る

### 休み時間

休み時間が短い

→移動が間に合わない

→講義が延びるとさらに大変

休憩時間をとらない教授も…

→120分授業になる

お昼の時間が授業によって違う

3限と4限の間に昼休みを挟むのは  
よくないと思う（面倒）

## 工学部からの改善策

### 勉学に関して

90分制に戻す

テストは学期に一度（期末のみ）に

専門科目のテストの日をずらす

専門の日を分散させる

専門の日を集中させ、移動しやすく

### 休み関係

3限前 or 4限後に昼休みを

休み時間を15分にするか（異なる  
授業間の休みを15分に）、授業を  
早く終える

各学期の間に休みを取る

### そのほかにも

1単位あたりの授業数が増えている  
ので、必要な単位数を減らすか、各  
学期の単位数を均等に

授業時間は増えたが授業内容は減っ  
て意味がないので、（中略）クオー  
ターですべての授業を統一すべき

## 環境理工学部からの問題点

### システム関連

60分では講義が終了しない  
→120分連続の講義に  
テストが多い  
単位がとりにくい  
専門科目が集中して効率が悪い  
多くのor取りたい講義がとれない  
自習時間や課外活動に充てる時間が減った  
終業時間が遅い

### 休み関連

講義で昼休みを跨がないでほしい  
休憩が短く、移動が間に合わない  
学期の移り変わりが不明瞭

### 学部間の問題

専門科目の重複が多い  
専門の教室の数が足りていない  
→講義棟移動のための時間が…  
必修科目が抽選に入っている  
必修科目と初修外国語が同時刻開講

## 環境理工学部からの改善策

### システム運用

60分4学期制度について、質問ができる場所がほしい  
大学内で、十分な議論を行う  
不具合があった場合に変更できるような運用を行う  
前期後期 and/or 90分に戻す

### 学生の学び等

空きコマが活用できるような工夫  
できるだけ、1つの授業を2コマ連続にする  
テストの日程を再考する  
講義の準備等のため、学期の区切りを明確にする（休暇を入れる等）

### 昼休み

昼休みを同一教科で跨がないように  
休憩をきちんととる/統一する

### 今後のために

本気でこの制度を今後も続けていくためには、他大学や文科省との連携を。単体で取り組み問題ではない。

## 農学部からの問題点

### 勉学について

多様な講義を履修できない  
講義（単位取得）が負担が大きい  
結局、120分授業になっている

### 休憩時間について

休憩が短い  
→教室移動が困難  
休憩時間がバラバラ  
→昼ごはんが遅くなることも  
→課外活動がやりにくい  
休憩時間が細切れ  
→授業（集中）が途切れる

### 履修システムについて

学生へのシステムの説明が不十分

### その他にも

終業時間が遅い  
→自由時間が減る

## 農学部からの改善策

### 2学期90分に戻す

90分制に戻す  
成績評価は2学期ごとに  
7限までにする  
授業時間を減らす  
授業科目を少なく  
テストを少なく

### 休憩時間の改善策

5分休憩と15分休憩を交互に  
休憩時間を15分に  
休憩時間を5分に  
細切れの休憩を減らす

### その他の改善策

学生へのシステムの説明を  
先生、時間管理をしっかりと！  
先生同士の情報共有を強化  
一般と専門の日を分けないほうが…

### せめて余裕を…

## 大学全体の問題点

### 休憩時間

10分休憩  
→移動が困難&休めない  
昼休みがややこしい

### 時間割関連

終業時間が遅い  
とりたい講義が重複して取れない  
課外活動・自主学習に充てる時間が少ない  
同講義が連続し、集中が続かない

### システム関連

単位修得が困難  
留学が専門科目の関係上困難  
テストの回数が多い  
レポートが多い

### 本制度導入にあたって

学生側の制度を理解できていない  
教員側も理解できていない  
→他の講義を行う教員との連携×

## 大学全体の改善策

### 休み関係

休み時間の見直し  
昼休みの調整

### 時間割関係

“原則7限まで”を守る  
とりたい講義が履修できるように  
必修科目の被りをなくす  
→時間割の精査を

### 理解を深める

学生側の理解を深める  
教員側の理解を深める  
→大学側が説明をきちんと行う

### 学生の自由度

自主学習の時間を設けられるような  
時間割設定に  
課外活動と学習を両立できるような  
時間割設定に

## 第 3 分 科 会

### 「アクティブ・ラーニングを支える学習環境デザイン」

座長 : 長 瀧 寛 之 全学教育・学生支援機構 准教授

---

#### 概要

アクティブ・ラーニング実現に必要な学習環境に関し、「授業改善」「動画教材の活用」等の観点での実践例を紹介し、「学びを支える工夫」についてディスカッションします。

#### 話題提供者

1. 「授業を変える, そのためのトライ」

社会文化科学研究科 本村 昌文 准教授

2. 「学生の学びを深めるための, 反転授業導入の試み」

教育学研究科 山田 剛史 教授・TA学生

3. 「いま, なぜ, アクティブ・ラーニングか？」

全学教育・学生支援機構 大崎 理乃 助教  
地域総合研究センター 山田 一隆 准教授・受講生



### 第3分科会 「アクティブ・ラーニングを支える学習環境デザイン」 報告

座長：長瀧寛之（全学教育・学生支援機構 准教授，学習環境ラボ）

ファシリテータ：大崎理乃（全学教育・学生支援機構 助教，学習環境ラボ）

「アクティブ・ラーニング」が公に注目されたきっかけとなった「質的転換答申」から4年、岡山大学では更なる学びの充実を支援するために、2016年8月に全学教育・学生支援機構 教育開発センター内に「学習環境ラボ（通称，学ラボ）」が設立されるなど，学内の支援体制が整備されつつある。この状況を背景とし本分科会では，アクティブ・ラーニング，すなわち主体的な深い学びを積極的に実現させることを目的として，そのような学習環境をどうやって実現するか，勉学環境や授業をどのように支援するかという課題に対するアイデアを情報共有し，考えを深めることをテーマとした本分科会を開催した。

分科会では，まず座長から本分科会の趣旨について説明を行い，その後は学内の様々な授業設計の支援を行ってきた学習環境ラボの大崎理乃先生をファシリテータとして，学ラボがこれまで支援した学習環境デザイン活動から「授業改善」「動画教材の活用」「アクティブ・ラーニング」の観点で，それぞれ実際に教育活動を実践した先生及び学生などの関係者からの話題提供が行われた。

文学部の本村昌文先生からは「授業改善」の観点で，文献読解のトレーニングを行う授業において「自分の担当分しか努力をせず，他者の担当分になかなか興味を持たない」という課題があったところ，「ジグソー法」を取り入れることで改善効果があった事例が紹介された。質疑応答を通して，適切なグルーピングには個々の学生の観察が重要であること，時間配分は60分×2の枠がジグソー法のグループ入れ替えという形がうまくはまった，互いに文献を紹介しあうことで自分が担当していない文献に対して興味をもたせるという効果があった，などジグソー法実践の工夫やその評価に対する情報が提供された。なおジグソー法は120人での実践事例もあるという情報提供も行われた。

続いて「反転授業」の事例として，教育統計の基礎を学ぶ授業科目の事例紹介が行われた。当科目のアシスタントを担った学生が登壇し，ファシリテータからのインタビュー形式で授業内容の紹介が行われた。履修生は予習として教科書熟読と動画視聴，要点をまとめたノート作成，さらに確認テストを実施した上で授業に臨み，授業内では講義は行わず，20問程度の問題演習に2-3人グループで取り組むという授業形態。動画内容は10分程度で，紙に書き込みながら思考プロセスを意識した見せ方を工夫する内容で構成されていた。反転授業の導入後，それ以前と比べて授業中の主体的な活動が促進される効果があった。その一方教師側では，動画作成の負担や，授業進度・学生のモチベーション向上の調整に苦労したことなども紹介された。なおここでも，授業内のグルーピングは，例えば社交的なメンバーを単独学生と合わせるなど，適切なグルーピングを教師側で管理する形が重要

であることが紹介された。

「アクティブ・ラーニング」の視点からは、学生自身がアクティブ・ラーニングを背景や必要性を学ぶというテーマの2授業の実践事例が紹介された。ここでは各授業での実際の受講生が登壇し、受講生からの視点でどのような「学びのデザイン」「アクティブ・ラーニング」についての学修活動が授業内で行われ、どのような成果を得たかについて紹介が行われた。

講演の後は、「学びを支える工夫」をテーマとした参加者同士によるディスカッションを実施した。「主体的・深い学びを実現するために何ができるか？何が必要か？」について、グループに分かれ、ホワイトボード様シートに議論内容をマーカーで書き込むというスタイルでディスカッションを実施した。その後いくつかのグループにディスカッションの結果を紹介してもらおうという形で、全体での情報共有を行った。学生グループからは「楽しさ」「今どきさ」など興味を喚起するトリガーの必要性が挙げられ、また教員のグループからは「教員と学び合える良い学生アシスタントの育成」「興味をもたせる授業を準備するための、良質なテキスト」が提案された。講演に時間を割いた結果、議論が15分程度、その後のグループ間情報共有に10分程度という短い時間配分になってしまい、分科会の時間中は十分な情報共有が取りにくかったのが残念であった。

その他全体を通しての質疑応答の中で、ファシリテータからの情報提供として、純粋な「アイスブレイク」を60分授業で取り入れるのは時間的に難しいため、「知識構成型ジクソー法」で知識を獲得しながらアイスブレイクする手法が有効である、また「カタルタ」という“出てきたカードにそってしゃべらないといけない”というゲーム的ツールを使うことで違和感なく発言できる、などのアイデアも紹介された。

本分科会では、「質疑応答が活発にならない時に、まず1-2分周囲と意見交換する時間を設けて質問を創発する」など、実際の授業実践に有効なアクティブ・ラーニングの手法を、その紹介も兼ねて取り入れながら進められた。分科会終了後も、ディスカッションで作成された各グループのシートを眺める参加者や、参加者と講演者、また参加者同士で個別に意見交換を行うといった光景が多く見られ、アクティブ・ラーニングの実践に対する参加者の関心の高さが伺えた。また他大学からの参加者からは、学習環境ラボのようなアクティブ・ラーニングの実践をサポートする学内の体制に共感を覚えるといった意見も得られた。今回の分科会を経て、個々の授業改善への有用な情報提供となるだけでなく、その実践を支える学習環境デザイン、またその実現をサポートする体制に重要性について、関心の向上への一助となれば幸いである。

## アクティブ・ラーニングを支える学習環境デザイン -これからの「学びを支える工夫」に向けて-

長瀧 寛之（全学教育・学生支援機構 准教授、学習環境ラボ 部長）

### <分科会の概要>

「アクティブ・ラーニング」が公に注目されたきっかけとなった「質的転換答申」<sup>[1]</sup>から4年、岡山大学では更なる学びの充実を支援するために、2016年8月に全学教育・学生支援機構 教育開発センター内に「学習環境ラボ（通称、学ラボ）」が設立されるなど、学内の支援体制が整備されつつある。

本分科会では、アクティブ・ラーニング、すなわち主体的な深い学びを積極的に実現させることを目的として、勉学環境や授業への支援について情報共有し、考える。

前半は、学ラボがこれまで支援した学習環境デザイン活動から、「授業改善」「動画教材の活用」「アクティブ・ラーニング」の観点で、それぞれ実際に教育活動を実践した先生及び学生などの関係者からの話題提供をして頂く。後半は話題提供の内容をもとに、「学びを支える工夫」をテーマとして、これからの学びの充実に必要なことや取り組んでいきたいことを参加者同士でグループディスカッションし、その結果を全体で共有を図る。

本分科会では、学ラボと連携して授業改善や動画利用教育などに取り組んで来られた先生に話題提供をお願いした。さらに、桃太郎フォーラムのメインテーマである『共育力』の観点から、授業を支援した学生スタッフや受講生の視点からの話題提供もお願いした。ここに登壇する学生の氏名を記すとともに、協力を快諾して下さった全ての関係者に感謝する。

- ・井上 大吾（教育学部4年次、「教育統計学Ⅰ(2)」学生スタッフ）
- ・森崎 大貴（教育学部3年次、「教育統計学Ⅰ(2)」学生スタッフ）
- ・植田 真由（文学部1年次、「実践型教育/学習概論」修了者）
- ・吉村 利佐子（経済学部2年次、「主体的に学ぶということ」修了者）

### <学習環境ラボ>

学習環境ラボ<sup>[2]</sup>は、学習環境デザインのコンサルティング&支援を行う部門である。主な業務は、ICTを使った教育活動の授業設計支援、経験的学習の授業設計支援、授業検討に必要な機器等の案内・貸出などがある。また、学習管理システム WebClass の利用方法の相談や、実践的活動を取り入れた授業の設計、ルーブリックの開発などにも取り組んでいる。

### <参考資料>

[1]中央教育審議会、新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）,2012年8月28日

[2]学習環境ラボ Facebook ページ, <https://www.facebook.com/gakulab/>

はじめに－「授業を変える」のはなぜか？

報告者が「授業を変える」必要性を感じた理由は、主に以下の2点である。

①2016年度より文学部の教育カリキュラムが変わり、各分野において4年間の学びのプロセス、履修科目などを可視化する必要が生じたこと（所属分野の課題）。

→これまでは各教員の裁量に依存した教育のあり方（各教員の評価軸、教育内容の相違およびその相違が共有されていないなど）という課題も存在している。

②専門教育（先行する研究の整理や1次資料の読解のトレーニング）が学生にしっかりと伝わっていないという実感から、「日本思想史」を学ぶ学生に対し、学びのプロセスを可視化する必要性を感じたこと（個人的な課題）

以上の課題をもって、「学習環境ラボ」の先生の協力のもと、報告者が所属する哲学倫理学分野における専門教育への導入科目（人文学入門演習）およびカリキュラム全体の構成と評価軸の作成（カリキュラムマップ、ループリック、所属分野の課題解決）、専門科目「実践演習」（個人的な課題解決）の改善を試みてきた。

本報告では、後者の専門科目の授業改善について話題提供を行う。

## 1、授業の性格と具体的に行った改善

改善を試みた授業「思想史演習」。

対象は2年～4年（中心となるのは2年・3年）で、これまでは1次資料の読解トレーニングを行い、前期、後期でテキストを変更、担当を決め、順番に準備をして、報告→質疑応答という形式の授業であった。この授業形式での主な課題は、受講生は担当のときにしか取り組まず、効果がなかなかあがらないということであった。また、内容としては、卒業論文作成において重要な柱である研究史の整理について、これまで「思想史演習」で扱うことができなかつたので、この内容も加味する授業改善を目指した（これによって、「日本思想史」研究の最も基本的な研究のルールを身につけられるようにする）。

具体的に行った改善は、①ジグゾー学習法の導入、②「研究史を整理する」ための演習と「1次資料を読む」ための演習の切り分け、③各回目標の明確化（学生の到達度の可視化、また求められる研究のしかたの可視化）である。

## 2、効果と課題

改善の効果としては、①ジグゾー学習法の導入により、学生の主体的な取組（当日までの準備、ディスカッションなど）が向上した（効果）、②学生が自分の到達度をよりリアルにわかるような場になった、ということが挙げられる。課題としては、①ジグゾー学習法の導入により、基本的な部分で解説を要するようなところへの時間配分が難しくなったこと、②授業で得たスキルを自分で行うことへの橋渡しがまだ不十分であること（特に卒論への橋渡し）が挙げられる。

## 学生の学びを深めるための、反転授業導入の試み

山田 剛史（大学院教育学研究科 教授）

大崎 理乃（高等教育開発推進室 助教）

### 1. 対象授業の概要

教育学部学校教育教員養成課程小学校教育コース教育心理学専修では、心理統計学に関連する大学1年次対象授業として、教育統計学I(1)(2)と教育統計学II(1)(2)が用意されている。教育統計学I(1)は、1学期に開講され、記述統計と推測統計の基礎を学ぶ。教育統計学I(2)は、2学期に開講され、推測統計と統計的仮説検定の基礎が学習内容である。本セッションでは、2016年度2学期の教育統計学I(2)で実施した反転授業について報告する。反転授業を導入しようと考えたのは、①受講生の授業への動機付けを高める、②授業時間以外での自主学習の時間を増やす、③授業中に演習問題に取り組む時間を増やす、といったことを踏まえ、教育統計学の学習内容の定着を企図したことによる。

### 2. 反転授業のデザイン

教育統計学I(2)の反転授業のデザインを表1に示す。受講生は授業前の予習として、①WebClassにアップロードされた15分程度の動画を視聴し、②動画の内容を予習ノートにまとめ、③WebClassに用意した5分程度の確認テスト（動画を見ていれば解ける簡単なクイズ）に解答する。これらは、単位取得のために必要な活動であると教員から示されている。

表1 反転授業のデザイン

1	資料の配付、シャトルカードの返却
2	前回のアンケートに対する回答
3	個別での演習（20分）
4	グループでの演習・個別での学習を適宜柔軟に（45分）
5	今回の授業内容についての復習テスト
6	授業についてのアンケート（シャトルカードに記入）

授業では、教員による講義は行わず、配付資料をもとに受講生が各自演習問題に取り組むことを活動の中心とした。まずは一人で演習問題に取り組んだ後、ペアあるいはグループで演習を行った。ペア・グループ分けは、話し合いが円滑に進むことを狙って、仲の良い者同士が同じペア・グループになるように調整した。提出された予習ノートは、個別での演習中にルーブリックに基づいて採点し、授業時間中に受講生に返却した。

### 3. 話題提供の概要

今回は、授業を作り上げるメンバーとして、重要な役割を果たしてくれたTAと学生スタッフ（以下、SS）のうち、SSへのインタビューという形で話題提供を行う。TA・SSは、毎回の授業に参加し、ノートの採点、机間巡視、学生の活動のファシリテーションを行ってきた。しかし、TA・SSは、授業者（教員）でもなく、授業を受ける者（学生）でもない、両者の中間のような立場である。そのTA・SSという立場から反転授業に関わり、どのようなことを考えたのか、反転授業のメリット・デメリットは何かなど、様々な思いにインタビューを通じて迫っていく。本話題提供を通じて、反転授業の枠組みだけでなく、TA・SSの役割についても検討したい。

## いま、なぜ、アクティブ・ラーニングか？

大崎理乃（高等教育開発推進室 助教）

山田一隆（地域総合研究センター 准教授）

### 1. はじめに

大学は、教職員と学生が共に学びをつくる場所である。学習環境ラボでは、新たな教育方法開発の一環として、「いま、なぜ、アクティブ・ラーニングか？」を学び手である学生と共に考える授業実践を行っている。

### 2. 課題と提案

「アクティブ・ラーニングとは何か？」 「アクティブ・ラーニング型授業とはどのようなものか？」これらの問いは、これまで多くの教職員によって考えられ、様々な指導の工夫がなされてきた。しかし、その問いは教職員だけのものではなく、学生のものである。大学教育の課題の一つが、高校までに受けてきた知識伝達型の授業から主体的な学びへ、学生自身の学習観が転換できていないことであることは、様々な調査によって明らかにされている<sup>[1][2]</sup>。

そこで、「なぜ、グループワークで学ぶのか？」「どうして地域と連携して学ぶのか？」といった学びの方法について、そのねらいや理由を、大崎は“人はいかに学ぶか”を研究する「学習科学」の学びを通して、山田は「ボランティア学習」の視点からの学びを通して、学生と共に考えることを試みている。

### 3. 実践内容

大崎の実践は、共通教育科目の「主体的に学ぶということ」として開講されている。具体的には、第1回授業にて社会の変化とそれに対応する学びの変化の動向について学び、その後、人の学びのメカニズムとその理論を元にした学習法である協調学習について学ぶ。さらに評価や学習の動機付けの理論について協調学習で学ぶ。これらの学習を通して、学生自らが学びを主体的にデザインできることを目指す。

山田の実践は、「高校での勉強と大学での学修との違い」との発問から始まる。その後、地域や現場で学ぶ意義と作法、グループで学ぶ方法について概説し、行政や市民活動団体からゲスト講師を招いた講話を実施した。これらを通して、大学で学ぶことの意義を、社会や現場の課題に関連づけて、自分のことばで語れるようになることを目指す。授業名は「実践型教育/学習概論」であり、共通教育科目として開講した。

### 4. 当日の発表内容

本セッションでは、これらの授業の受講経験をもつ修了生に、「いま、なぜ、アクティブ・ラーニングか？」をテーマに（1）授業を通してどのようなことを学んだか、（2）自分たちがアクティブ・ラーニングを求められる理由をどのように捉えているか、の2点について報告してもらい、参加者による議論への情報提供とする。

<参考資料>

[1] ベネッセ教育総合研究所，第2回 大学生の学習・生活実態調査報告書，2013年4月23日

[2] ベネッセ教育総合研究所，高大接続に関する調査，2014年1月23日

## 第 4 分 科 会

### 「ルーブリック評価の導入～信頼性の高い成績評価を目指して～」

座長：花谷正 全学教育・学生支援機構 教授

---

#### 概要

成績評価の客観性・厳格性を確保するための評価手段としてルーブリックを取り上げ、学内での導入事例を基に成績評価について考えます。

#### 話題提供者：

1. 「文学部哲学・倫理学分野でのルーブリック構築の試み  
-プロセスで得られたもの-」

社会文化科学研究科 出村 和彦 教授

2. 「薬学部でのルーブリック導入事由と事例」

医歯薬学総合研究科 竹内 靖雄 教授



## 第4分科会「ルーブリック評価の導入～信頼性の高い成績評価を目指して～」 報告

座長：花谷 正（全学教育・学生支援機構 教授）  
（FD専門委員会学士課程WG座長）

本分科会では「ルーブリック評価の導入～信頼性の高い成績評価を目指して～」をテーマにして開催した。成績評価の厳格性を確保しながら、評価の信頼性を高めるための手段のひとつとしてルーブリックに注目し、ルーブリックを用いた評価手段の有効性、さらにルーブリックの導入・開発の課題・可能性なども含め、様々な要素や側面から成績評価について考えてみようという趣旨である。

成績評価は、授業の到達目標の達成度で測られるものであり、到達目標を明示し、それに照応した成績評価の基準を示すことが必要である。近年、学修成果の評価において、知識の量を測るだけでなく、どのような能力をどの段階まで高めたかという到達度を重視するパフォーマンス課題の評価が求められており、そのための評価手段として、ルーブリック評価が注目されている。

本分科会では、2件の講演に先立ち、まず座長からルーブリックの概略について紹介があった。続いて、学内のルーブリック導入事例に関して文学部と薬学部から話題提供を頂いた。最後にこれら2件の講演を承けて、ルーブリックの活用を含め、成績評価の方法と基準の設定などに関する意見交換を行なった。

### 【話題提供1】 「文学部哲学・倫理学分野でのルーブリック構築の試み ープロセスで得られたものー」

出村和彦 先生（社会文化科学研究科・文学部）

文学部「人文学入門演習」の成績評価にルーブリックを導入した経緯と開発の取り組みについて紹介された。文学部哲学・倫理分野の導入教育・専門教育において、複数の教員に係る「概説」「講義」「演習」などの成績を評価する際に、評価基準を明示するだけでなく各科目の位置付けと到達目標を明確にすることが必要になったこと。その解決法としてルーブリックとカリキュラムツリーの構築に取り組んだこと。ルーブリックはまだ未完成ながら、その構築の過程で教員間の共通認識が確認され、ルーブリック開発を始めた意義は大きいということが述べられた。

### 【話題提供2】 「薬学部でのルーブリック導入事由と事例」

竹内靖雄 先生（医歯薬総合研究科・薬学部）

薬学部「卒業研究」の成績評価にルーブリックを導入した経緯と活用状況について報告された。薬学部が薬学教育評価機構の教育評価を受けたことに関連して、「卒業研究」の成績評価に「問題解決能力の醸成のための教育における技能・態度の目標達成度を評価するための指標」を設定することが必要になったこと。その解決策として、ルーブリック評価を導入し成績評価の厳格化に努めたこと。現在ではルーブリック評価を「学生実習」など他の科目にも拡張させ、さらに評価内容をネット登録できるシステムを構築したことについても紹介された。

全体討論では、2件の講演に関する質疑応答を中心に、ルーブリックと成績評価基準に関する意見交換が行われた。意見交換でも、ルーブリックは、(ペーパー)テスト法では評価が困難なパフォーマンス評価に有効であることは共通認識されただけでなく、今回話題提供された事例のように、複数の教員が同一の教科を受け持つ場合、教員間で共通の評価基準を設けておく必要があり、その解決手段としてもルーブリック評価が有効であることがわかった。今回の質疑を通じて、またアンケートからも、多数の参加者がルーブリックへの関心をもっていることがわかったが、ルーブリックそのものを作成あるいは活用されている参加者は会場にはほとんどいらっしゃらなかったようである。会場からもルーブリックの活用事例の紹介をして頂けることを期待していたのだが残念である。

薬学部には担当者がルーブリックをネット登録できるシステムが設けられており、そこには既に約20科目のルーブリックが登録されているそうである。まだ学内でのルーブリックの知名度・普及度は低いと思われる一方で、このようにルーブリック利用度の高い部局があることが今回の講演でわかったのはうれしい誤算であった。今後他の部局でも、成績評価の厳格性を確保しながら、評価の信頼性を高める方法としてルーブリック評価の利用が増えることが期待される。

## 第4分科会 ルーブリック評価の導入～信頼性の高い成績評価を目指して～

座 長： 花谷 正 （全学教育・学生支援機構 教授）

本分科会では、昨年の桃太郎フォーラムに引き続き、「成績評価基準の制定」について取り上げます。成績評価の厳格性を確保しながら、評価の信頼性を高めるためにはどのような評価方法があるのか、その手段のひとつとしてルーブリックに注目し、成績評価の基準をどのように設定するかを考えます。

成績評価は、授業の到達目標の達成度で測られるものであり、到達目標を明示し、それに照応した成績評価の基準を示すことが必要です。近年、学修成果の評価において、知識の量を測るだけでなく、どのような能力をどの段階まで高めたかという到達度を重視するパフォーマンス課題の評価が求められており、そのための評価手段としてルーブリック評価が注目されています。

ルーブリックは、**課題**、**観点**（学修規準）、**尺度**（評価レベル）、**評価基準**（観点と尺度に規定される内容）の4要素からなり、学修到達度を示す評価基準をいくつかの観点と数段階の尺度からなる配点表として示した学修評価基準の作成方法です。ルーブリック評価が広く用いられる理由として、使いやすく説明しやすい、教師の期待（達成目標）を明確にできる、長所と改善の必要な個所を学習者にフィードバックしやすい、評定に関する評価者間の信頼性を高められる、などがあげられます。

本学FD委員会では、学生の成績評価の客観化・透明化を推進する観点から、全学的にルーブリックを導入する必要があると考えていますが、まだ学内でのルーブリックの知名度・普及度は低いため、今後のルーブリックの整備・導入の拡大が望まれます。

本分科会では、まず学内のルーブリック導入事例に関して2件の話題提供を頂き、これを承けて、成績評価の方法と基準の設定などについて意見交換を行ないます。

最初に、出村和彦先生（文学部）より「**文学部哲学・倫理学分野でのルーブリック構築の試みープロセスで得られたものー**」のタイトルで、文学部「人文学入門演習」の成績評価にルーブリックを導入した経緯と開発の取り組みについて、さらに、ルーブリック及びカリキュラムマップ構築の過程で認識された事項、課題等をお話頂きます。

次に、竹内靖雄先生（薬学部）より、「**薬学部でのルーブリック導入事由と事例**」のタイトルで、薬学部「卒業研究」の成績評価にルーブリックを導入した経緯と活用状況について御報告頂きます。また、ルーブリック評価を「学生実習」など他の科目にも拡張させ、さらに評価内容をネット登録できるシステムを構築したことについても紹介して頂きます。

2件の講演の後には、分科会参加者による全体討論の時間を用意しています。成績評価の客観性・厳格性を確保するための評価手段としてルーブリックは有効か、ルーブリックの導入・開発の課題・可能性などについて意見交換、情報交換を行いたいと思います。他にもルーブリックの利用事例がございましたら、会場からもぜひ御紹介下さい。多くの方々の御参加を願っております。

## 文学部哲学・倫理学分野でのルーブリック構築の試みープロセスで得られたものー

出村 和彦 （大学院社会文化科学研究科 教授）

### 1. 文学部のカリキュラム改革

平成28年度から文学部のこれまでの5つの専修コースに代わり、新たに8つの教育分野を立てるカリキュラムをスタートさせた。これを通じて、(1) 早期に学びたい学問に出会い、分野横断もできるようにする。(2) 卒業要件を単純化して、学生ごとの目標に沿った学修を可能にし、留学や資格取得を行いやすくする。(3) 学生の主体性を重視するとともに、アカデミックアドバイザー制の導入によって学修のサポートを強化することを目指している。

古代ギリシアから近現代にいたる哲学倫理学、キリスト教思想や日本の思想等多様な視点から知を探求する哲学倫理学分野では、「人文学入門演習」「人文学概説」「人文学講義」「人文学実践演習」「課題演習」等の学年配置や留学時期の位置づけを示した『カリキュラムマップと分野の紹介：哲学倫理学のセカイ』（A3表裏カラー印刷）を独自に作成し1年次オリエンテーション時に入学者全員に配布して分野の全体を俯瞰できるようにするとともに、第3第4学期開講の「人文学入門演習」のために、独自教科書『Philosophical Reading and Writing: 哲学・倫理学・日本思想史の道しるべ』（非売品）を作成して、これを通じてわれわれの分野の様々なジャンルのテキストに早期に触れさせ、またレポート学術論文の書き方の最初の手ほどきをする準備をした。

### 2. ルーブリックの構築が必要になってきた経緯とその取り組み

以上を通じて素材は準備できたが、これを活用する専門への導入教育を始めるにあたって、複数の教員が関わるこの入門演習の成績を評価する際、それぞれの教員の要求がまちまちでは混乱をきたすので、評価基準を教員同士及び教員と学生とが共有することの必要がでてきた。教育工学の専門家のアドバイスを受けながら哲学倫理学思想史の教員全員でのブレインストーミングとディスカッションを開始したが、しかし、実はそれは導入教育だけにとどまらず、分野のカリキュラム全体に対する個々の専門科目の位置付けを明確にする一環として行われるべきで、「概説」「講義」「実践演習」そして「課題演習」とその成果である「卒業論文」について、学生がそこで何を踏まえねばならないかを示しそれに基づく評価基準を明示するルーブリックとカリキュラムツリーを総合的に構築することになった。

とりわけ学生の主体性を重んじ、学生の自由な選択の幅が広がる中で、哲学倫理学に関連した事項について、単に「読んでまとめました」とか「私なりの考えや感想を一方的に開陳する」というのでは、人文学探究として全く不十分なのであり、学問的な論証の手続きこそが自身の

主張の確かさを支える根幹であることを学生が理解し、そのスキルを高めるところにこの分野で教育の目標があることを見定めて、本分野の教育の到達目標を明確にすべきことが教員相互に自覚されてきた。また、学生がなぜそうしないといならないのかを自発的に考えつつ、何を、どこまで、どのように、という点を自覚するためには、教員が個々の授業について、その特性を踏まえつつ、各学年各授業での最低の到達要件ラインと望ましい到達ラインさらにその先の達成目標ライン等を示すことが効果的である。そのために、調べる、読む、書く、コミュニケーション（発表する）の観点ごとにディプロマポリシーを見据えて構造化された成績評価システム、つまりは分野全体のルーブリック&カリキュラムマップ（カリキュラムツリー）を構築しようと模索している。現在、これらを来年度の学部生に配るようにするため、（１）最低到達度でルーブリックを作る、（２）ゴール地点を分ける（レベル、領域）、（３）各学年のゴール地点を決める、（４）一つの基準的マスター版に対して、領域（哲学領域・倫理学領域・日本思想史領域）の特性を生かし領域ごとに抜き差しができる版をつくる（全部合わせたら、マスター版になる）というような仕方では整備しようと議論を進めているのである。

### 3. プロセスで共通認識されてきた点

- ・まず、共同討議を通じて、それぞれの教員の受けてきた教育経験や哲学倫理学思想史各領域のディシプリン背景には、お互いに気づかなかった大きな相違点があることがわかった。それにも関わらず分野としての集約点を目指していくべきであるという相互認識ができたこと。
- ・作業の過程で、哲学倫理学の授業を通じて到達すべきゴールが単に特定の職業人育成のための分野で想定されるような仕方では検証できるものではないこと。しかしそれはゴールが見いだせないとか確認できないということではなく、質的な相違をきめ細かく測っていくことへ向けての探索が続くということが自覚されたので、ルーブリック構築作業を始めた意義は大きい。
- ・人文学科の学部教育の意味は、専門研究の道筋を軸に評価基準を定めるとしても、特定の職業人の育成ではなく、優れた社会人の育成にあり、各分野の専門性の根は多様な知を紐つけるちからにあるとすれば、主として文献や様々な発言に対して一つのことばに他のことばで照応し吟味・対応するための「作法」を学ぶことが哲学・倫理学の学習の要として挙げられること。
- ・それを通じての主體的な学習者の育成目的には、まず勉学の意味合いへの自己理解が含まれ、すなわち、学生が自分の立ち位置を自ら知ることは長い目で見て有益と思われるということ。

### 4. 今後の課題

- ・秋からの実践を踏まえて来年度スタートさせたいうえで、大学院教育や社会での展開などより高い目標を視野に入れての分野の教育全体を再構築することに合わせた改訂を施すこと。

# 哲学倫理学

## カリキュラムマップと分野の紹介

ー 哲学倫理学のセカイー

わたしたちは世界や人間をどのように捉えてきたのだろうか  
...きつと変わるあなたの見る「セカイ」

## 哲学・倫理学分野 カリキュラムマップ

### 哲学・倫理学分野の基礎を学ぶ 人文学入門演習

1年次  
第3・4学期

2年次  
第1・2学期

2年次  
第3・4学期

3年次  
第1・2学期

3年次  
第3・4学期

4年次  
第1・2学期

4年次  
第3・4学期

**方法の習得 I**  
実践演習  
研究史の総理  
資料の読解

**方法の習得 II**  
実践演習  
研究史の整理  
資料の読解

**方法の深化 I**  
実践演習  
課題演習  
卒論準備開始  
テーマの決定

**方法の深化 II**  
実践演習  
課題演習  
テーマの深化

**成果の探求 I**  
実践演習  
課題演習  
論文の作成

**成果の探求 II**  
課題演習  
論文の作成

**知識の習得**  
人文学概説  
哲学  
倫理学  
西洋思想史  
日本思想史

\*各学問分野の基本事項を学びます。

\*卒業論文のテーマを探します。

\*概説はなるべく全て履修しましょう。

**研究の最前線**  
人文学講義  
哲学  
倫理学  
思想史

\*担当教員の最新の研究成果が生みだされる現場を体験します。

\*関心のある分野は毎学年受講し、新しい成果を生み出すための方法や視点、考え方を学ぶことができます。

**履修要望科目**  
漢文・中国語文献研究法  
日本文史  
日本語文化学  
日本美術史  
比較宗教史  
中国言語文化学  
東洋史  
ギリシア語  
ラテン語  
ドイツ言語文化学  
フランス言語文化学  
芸術学  
西洋美術史  
西洋史  
西洋古典学  
クラスタース科目  
(人文学フロンティア講義)

\*自分の関心のあるテーマに即して、積極的に他分野の授業を履修し、思考力と知識を深化させましょう。

研究の完成 = 卒論の提出



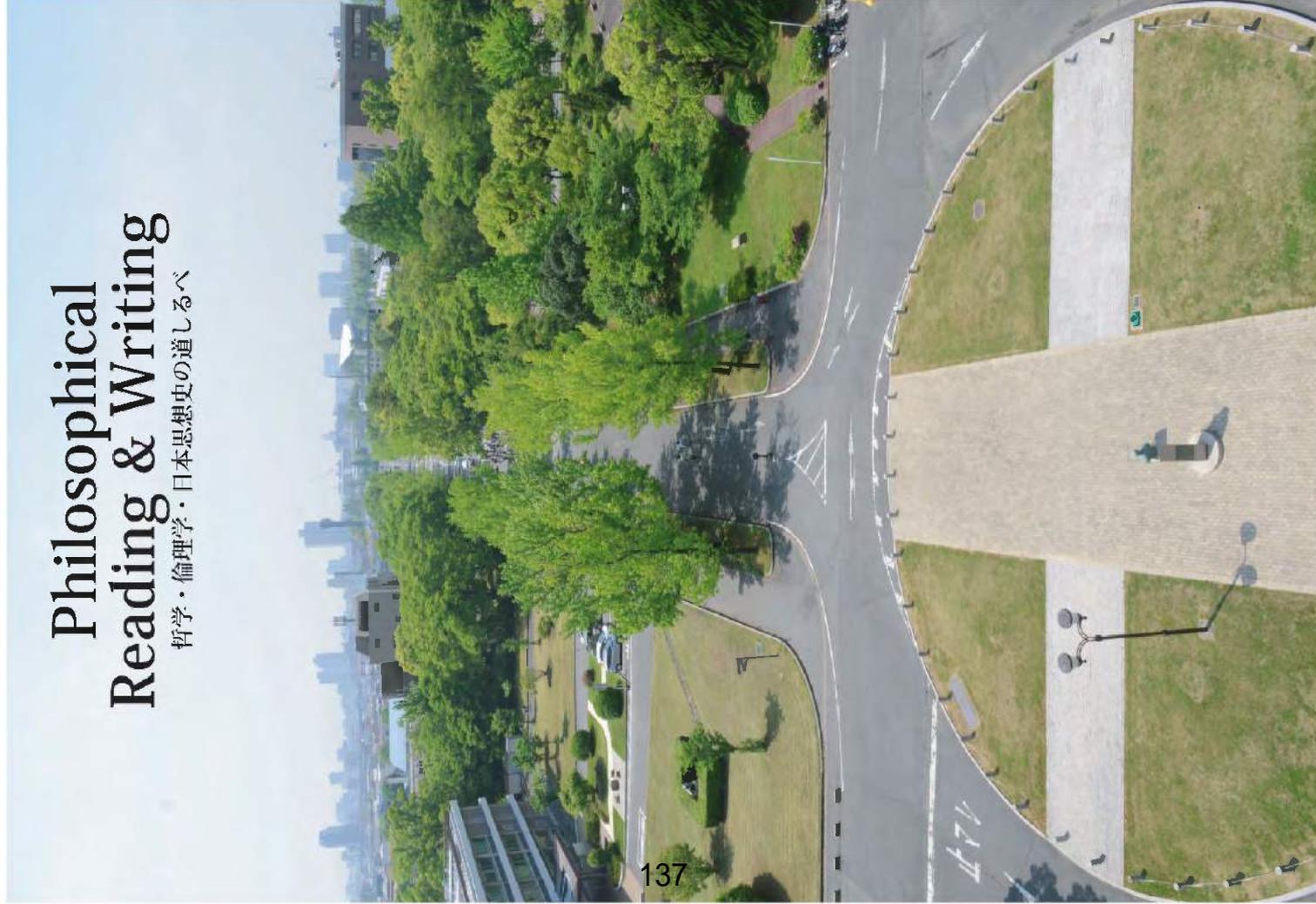
留学(ドイツ、フランス、中国など) 2年次、3年次での留学を積極的に考えましょう。

※カリキュラムのマップの見方

- 上記のカリキュラムのマップは、「2017年度文学部案内」14頁～15頁をもとに、哲学・倫理学分野で学ぶ機会を想定し、4年間の履修イメージとして作成しています。
- 具体的な履修については、関心のあるテーマなどによって、上記のカリキュラムマップとは異なる場合もあります。疑問や悩みがある場合、アカデミックアドバイザーの本村 (bntbntm@okayama-u.ac.jp) まで気軽にご連絡ください。

# Philosophical Reading & Writing

哲学・倫理学・日本思想史の道しるべ



# Philosophical Reading & Writing

哲学・倫理学・日本思想史の道しるべ

編集：本村昌文・出村和彦・竹島あゆみ



## 「薬学部でのルーブリック導入事由と事例」

竹内靖雄(医歯薬学総合研究科(薬学系)教授)

平成 18 年度に開始された薬学教育改革は、全国の薬学教育組織に年毎に大きなうねりとなって押し寄せてきています。第一波としては、第三者機関(薬学教育評価機構)の教育評価を受けることが薬学教育組織に対する義務条件となっていることです。先達の努力により、本学薬学部薬学科(6年制薬学教育プログラム)は、薬学教育評価機構の定める「薬学教育評価基準」に適合(6年後には再評価)していると認定されました(2014年度)。これは、全国薬学部での最初の事例となります。[http://www.jabpe.or.jp/special/result\\_25.html](http://www.jabpe.or.jp/special/result_25.html)



本評価は、いわゆる「大学の認証評価・法人評価」と同様に、認定後でも、「改善点・助言」に記述された改善項目について、検討・実施・報告することが要求されます。本学科が受けた「改善点・助言」の検討の中で、もっとも頭を悩ました項目は、「問題解決能力の醸成のための教育における**技能・態度の目標達成度を評価するための指標**を設定し、それに基づいて適切に評価することが必要である」でした。本学部では、「問題解決能力の醸成のための教育」を実践できる最適な授業科目については、「**卒業研究**」と定義しているため、「卒業研究」の評価指標を定める方策を立案することが必要になりました。しかし、授業科目の中で、「卒業研究」は、異なる指導者が配属学生固有の異なった課題を与えることや、その取り組みに対する記述式試験の実施が困難であることから、最も評価基準の制定が困難なものです。以前に、本学部教務・FD委員会で、各研究室の過去数年間の「卒業研究」の成績評価結果とその方法について調査しましたが、残念ながら学部全体としては評価機構の要求に応じることができない状態でした。

「**ルーブリック評価**」は、FD委員会や「桃太郎フォーラム」の議論テーマとして数年前から本学でも取り上げられ、知識の共有化が推進されてきました。この評価を活用することで「卒業研究」の成績評価の厳格化を達成することとし、年次計画のもと実行しています。本発表では、これらの経緯とルーブリック評価の内容についてお話ししたいと思います。ルーブリック導入後3年目を向かえる現在では以下のように進行しています。

- ▼ルーブリック評価の対象を「卒業研究」だけではなく、「学生実習」やSGDを多用する臨床系授業にも導入した。
- ▼ルーブリック評価はシラバスからリンクし、ルーブリック評価内容は、担当者が発生源入力でもネット登録できるようなシステムを構築した。<http://pharm.okayama-u.ac.jp/edu/rubric/>

薬学年表



第三高等学校医学部薬学科設置  
岡山大学医学部薬学科設置  
岡山大学薬学部設置(薬学科・製薬化学科)

岡山大学薬学部6年制課程設置  
(6年制:薬学科, 4年制:創薬科学科)



薬学部での  
ルーブリック導入事由と事例



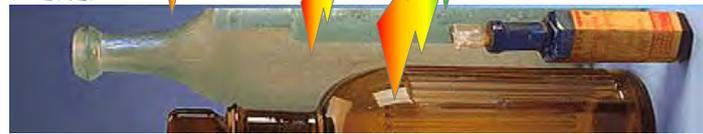
2016/9/1 竹内靖雄



薬学教育課程を6年制にする。  
ただし、4年制課程にも2017年度入学生までは、資格修得可能なコースを設立する。

- 6年制薬学教育課程に課せられた条件
- ・モデル・コアカリキュラムに添った教育 → 教務委員会
  - ・CBI・OSCEの実施 → 共用試験委員会
  - ・長期実務実習(11週×2) → 実務実習委員会
  - ・薬学教育評価の実施 → 薬学評価室

- ・モデル・コアカリキュラム
- ・CBI
- ・薬学教育評価



岡山大学薬学部の  
入学者選抜方法が変わります。

平成18年度より、AO入試と前期日程入試制になります。  
これまでの選抜試験は、AO試験に変わられ、前期日程入試制になります。

- AO入試試験
  - 入試科目: 薬学科(6年制) 10名、創薬科学科(4年制) 10名
  - 出願資格: 及びその専攻のいずれにも応募できる
  - 出願期間: 平成18年10月15日(水)～平成18年10月20日(日)
  - 試験科目: 英語(筆記)、数学(筆記)、化学(筆記)、物理(筆記)、生物(筆記)、倫理(筆記)、面接
  - 試験日程: 平成17年10月18日(水)～平成17年10月20日(日)
  - 試験会場: 岡山大学
  - 入学試験: 平成18年2月10日(日)
- 前期日程入試試験
  - 入試科目: 薬学科(6年制) 30名、創薬科学科(4年制) 30名
  - 出願資格: 及びその専攻のいずれにも応募できる
  - 出願期間: 平成18年11月30日(月)～平成18年12月7日(日)
  - 試験科目: 英語(筆記)、数学(筆記)、化学(筆記)、物理(筆記)、生物(筆記)、倫理(筆記)、面接
  - 試験日程: 平成18年11月21日(土)、22日(日)
  - 試験会場: 岡山大学
  - 入学試験: 平成18年2月25日(日)

21世紀の薬学を担う  
熱い心に燃えよ、人も歓迎します  
岡山大学薬学部

平成18年度から  
薬学教育制度が変わります。

平成18年度より、AO入試と前期日程入試制になります。  
これまでの選抜試験は、AO試験に変わられ、前期日程入試制になります。

- 1 入学者選抜方法の変更
  - 入試科目: 英語(筆記)、数学(筆記)、化学(筆記)、物理(筆記)、生物(筆記)、倫理(筆記)、面接
  - 試験日程: 平成18年11月21日(土)、22日(日)
  - 試験会場: 岡山大学
  - 入学試験: 平成18年2月25日(日)
- 2 前期日程入試試験
  - 入試科目: 英語(筆記)、数学(筆記)、化学(筆記)、物理(筆記)、生物(筆記)、倫理(筆記)、面接
  - 試験日程: 平成18年11月21日(土)、22日(日)
  - 試験会場: 岡山大学
  - 入学試験: 平成18年2月25日(日)
- 3 薬学教育制度の変更
  - 入試科目: 英語(筆記)、数学(筆記)、化学(筆記)、物理(筆記)、生物(筆記)、倫理(筆記)、面接
  - 試験日程: 平成18年11月21日(土)、22日(日)
  - 試験会場: 岡山大学
  - 入学試験: 平成18年2月25日(日)





**薬学評価機構より認定される。**  
 本学薬学部薬学科(6年制薬学教育プログラム)は、薬学教育評価機構の定める「薬学教育評価基準」に適合していると認定されました(2014年度)。これは、全国薬学部での**最初の事例**となります。



しかし...

**評価結果**の中の「ただし」「助言」「改善点」に怪しげなものが...

**最初の事例  
評価結果**



### 総合判定の結果

岡山大学薬学部薬学科(6年制薬学教育プログラム)は、薬学教育評価機構が定める「薬学教育評価基準」に適合していると認定する。  
**ただし**、6年制薬学教育限延長の趣旨に沿った薬学科の教育研究上の目的を早急に設定し、その対応状況に関する改善報告書をとりまとめ提出することを要請する。

### IV提言 (2)助言

- 1) 学習方法については、シラバスの授業計画の中で確認できる科目もあるが、統一されたフォーマットとなっていない。学習方法の項目を設定するなど、すべての科目について学習方法が明示されるようにシラバスを改定することが望ましい(4. 薬学専門教育の内容)。
- 2) 学科の教育目的を設定し、アドミッション・ポリシーをそれに基づいて再度検証することが望ましい(7. 学生への受入)。



### (3)改善すべき点

- 1) 6年制薬学科は、「臨床に係る実践的な能力を培うことを主たる目的とする」(学校教育法第87条第2項)ために修業年限が延長されている。同目的に沿った「学科の教育研究上の目的」を設定する必要がある(1. 教育研究上の目的)。
- 2) 薬学科のカリキュラム・ポリシーを「臨床に係る実践的能力を培うことを主たる目的」とする「学科であることがよくわかるもの」に改定する必要がある。(2. カリキュラム編成)。
- 3) 現在シラバスにある倫理関係の科目は、倫理観の醸成に必要な知識領域の内容が多いので、低学年から、医療人としての倫理観・態度を涵養するヒューマンズム教育、医療コミュニケーション教育の充実が必要である(3. 医療人教育の基本的内容)。
- 4) **ヒューマンズム教育・医療倫理教育**における**技能・態度の目標達成度を評価するための指標を設定し、それに基づいて適切に評価**することが必要である(3. 医療人教育の基本的内容)。
- 5) **問題解決能力の醸成のための教育**における**技能・態度の目標達成度を評価するための指標を設定し、それに基づいて適切に評価**することが必要である(6. 問題解決能力の醸成のための教育)。

### ●ヒューマンズム教育・医療倫理教育

→ 早期体験学習I, II, 薬剤師倫理学, コミュニティファーマシー, 実務実習事前教育II, III

### ●問題解決能力の醸成のための教育

→ **卒業論文実習, 卒業論文準備実習**



技能・態度の目標達成度を評価するための指標を設定し、それに基づいて適切に評価







### ルーブリック評価の検証と改善

- A～Eの評点の教員間の標準化について  
…標準化は可能か
- 評価項目のチェック(0か1)について  
…3段階評価(A, B, C)は可能か



2016/9/1 竹内靖雄



### 薬学部での ルーブリック導入事由と事例



2016/9/1 竹内靖雄

# 第 1 セ ミ ナ ー

## 「Syllabus Writing in English」

司会 : 森岡 明美 全学教育・学生支援機構 准教授

---

### 概要

This is a writing course focusing on the language and writing skills instructors need to effectively produce syllabi in English. The course will include language input mixed with writing skills work and lots of practice. By the end of the course, participants should feel more confident and able to produce syllabi in natural English that appeal to an international audience.

### 講師 :

Dean Southorn (British Council)

※実施時間 : 13:00~16:00 使用言語 : 英語のみ

※20 人が上限のため, 学内限定



## 第1セミナー 「Syllabus Writing in English」 報告

司会：森岡明美（全学教育・学生支援機構 准教授）

このセミナーは、ブリティッシュ・カウンシルから Dean Southorn 講師を迎えて、英語のシラバスの書き方を上達させるために開催したハンズオン・セミナーである。学内教員のみを対象として行ったもので、司会を含め11名の受講者は、講義を聞き、ペアワークをして考える活動をしながらか、英語でシラバスを書く実践をし、3時間じっくりと学んだ。

グローバル化を推し進めている岡山大学では、全科目のシラバスを日英両語で書くことが要求され、また英語で授業を提供することも強く推奨されている。その時にまず必要となるのが、「効果的なシラバス」である。英語で教えたり、英語でシラバスを書いたりする行為は、それまで日本語でやっていたことをただ単にそのまま英語に置き換えればよいというものではない。英語で考え、英語の論理で意味の通じるものでなければ効果がない。

講師によると、“an effective syllabus”には、以下の5項目が必ず含まれていなければならない。

1. Course description and aims
2. Student learning outcomes
3. Class procedure
4. Class schedule and required learning
5. Assessment and criteria and methods

このうち、本セミナーでは、Course description and aims および Student learning outcomes の書き方を学び、各自が担当する科目を想定して実際に書く演習を行った。

Course description and aims を書くときに大事なことは、授業の目的を明確にすることと、授業内容・トピックは、扱う順番にしたがってわかりやすく書くことである。

また、Student learning outcomes の記述には、“By the end of this course, students will be able to...”のように、修了後に何ができるようになるか明確に書くことが鍵である。その場合、(will be able to) “show, analyze, design, operate, demonstrate”などの動詞を使うと効果的である。

セミナーでは、どのような英語表現を使うとよいかなど具体的な単語や言い回しなども示され、受講者は自分が書いたものを講師に批評してもらい機会も得た。少人数のセミナーだったので、講師からのフィードバックに加え、受講者同士もペアワークなどを通じてネットワークが作れ、有意義なセミナーであったと思う。

## Syllabus Writing in English

Dean Southorn (ディーン・サウソーン)

ブリティッシュ・カウンシル

### Course Outline and Aims

This is a writing course focusing on the language and writing skills instructors need to effectively produce syllabi in English. The course will include language input mixed with writing skills work and lots of practice. By the end of the course, participants should feel more confident and able to produce syllabi in natural English that appeal to an international audience.

### Specific Learning Outcomes

After successful completion of this course you should be able to:

1. list the different parts of an effective syllabus and explain their purpose
2. write an effective course description and aims using natural language
3. write effective student learning outcomes using Bloom's action verbs
4. analyse further examples of syllabi in your own time for language you can use in your syllabi

### Course Format

The goal of the course is to give participants the language, skills and confidence to express complex ideas in coherent and well-structured English when writing syllabi. The aim is also to provide a solid foundation for participants to develop their syllabus writing skills in the future. Lessons will be student-centred and the teacher will ensure maximum time for participants to fully understand and use the language and skills they learn. There will be a strong emphasis on learning through doing and group learning.

### Outline Teaching Schedule

Lesson	Contents
<b>Lesson 1</b> <b>Writing a Course Description and Aims</b>	<ul style="list-style-type: none"><li>• What do you know about syllabi?</li><li>• What different parts does an effective syllabus have?</li><li>• Features of a course description and aims</li><li>• Useful language for describing the contents of a course</li><li>• Practice writing a course description and aims</li><li>• Evaluating a classmates' course description and aims</li></ul>

<p><b>Lesson 2</b> <b>Writing Student Learning Outcomes</b></p>	<ul style="list-style-type: none"><li>• General course goals and specific student learning outcomes</li><li>• Bloom's action verbs for writing student learning outcomes</li><li>• Practice writing student learning outcomes</li><li>• Evaluating a classmates' student learning outcomes</li><li>• Ideas for self-study</li></ul>
---	---



## 第 2 セ ミ ナ ー

### 「アクティブ・ラーニングをめぐる答申の変遷

### ～課題認識と役割の変化～（SD研修）」

司会 : 萱野 朋子 学務部学務企画課長

---

#### 概要

中央教育審議会の答申をもとに、なぜアクティブ・ラーニングが重要視されているのかなど、答申の背景にある教育動向とそれを踏まえたわが国の高等教育政策について理解を深めます。

#### 講師 :

文部科学省高等教育局大学振興課 長谷川 智 法規係長



## 第2セミナー 「アクティブ・ラーニングをめぐる答申の変遷 ～課題認識と役割の変化～（SD研修）」 報告

司会：萱野朋子（学務部学務企画課）

文部科学省高等教育局大学振興課 長谷川智法規係長を講師に迎えて、セミナー前半は、中央教育審議会の答申において、アクティブ・ラーニングに関する記述がどのように変遷しているのか、答申が出された背景を捉えつつ、解説をいただいた。

“アクティブ・ラーニング”に言及のある答申は、「我が国の高等教育の将来像（H17）」、「学士課程教育の構築に向けて（H20）」、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて（H24）」及び「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（H26）」であるが、アクティブ・ラーニングの定義が当初の「双方向型の授業」から、「学生自らが主体的に問題を発見し、解を見いだしていくもの」へと変わっていている。このことは、それぞれの答申の出された背景が、ユニバーサル段階から予測困難な時代となり、想定外の事態に想定したときに、そこに存在する問題を発見し、それを解決するための道筋を見定める能力が求められるなど、答申が意識する課題認識が異なるアクティブ・ラーニングの役割を求めているためであることが指摘された。

後半は、各人の課題意識を元に“アクティブ・ラーニングとは何か”を説明する短文を作成するグループワークが行われた。セミナー参加者は、役職にある教員から採用1年目の事務職員までさまざまであり、それぞれが考えるアクティブ・ラーニングを元に議論し、各グループとしてのアクティブ・ラーニングを取りまとめた。参加者アンケートでは、「アクティブ・ラーニングの良さ、難しさがわかった。」「抽象的だった用語が、かなり具体化できた」などのコメントもあり、アクティブ・ラーニングに対する理解を深めることができたと思われる。

なお、セミナーのタイトルが当日変更されており、本報告では、変更後のタイトルを表記している。

## 第2セミナー 「アクティブ・ラーニングをめぐる答申の変遷 ～課題認識と役割の変化～（SD研修）」

講師： 長谷川 智  
(文部科学省高等教育局大学振興課法規係係長)

第2セミナーでは、ここ10年間の中央教育審議会の各答申において、アクティブ・ラーニングに関する記述がどのように変遷しているのかを辿りつつ、その表現と、各答申が出された背景にある課題意識や答申の位置付け等について、答申の中の文言を元に照らし合わせ、アクティブ・ラーニングに求められてきている役割や期待について考えます。

具体的には、高等教育計画から政策誘導の時代への転換を謳い、今日に至るまでの高等教育のグランドデザインを示した平成17年の将来像答申に始まり、「双方向型」の授業を提示しアクティブ・ラーニングを進めるきっかけとなった20年の学士力答申、まさに「アクティブ・ラーニング」の語が初登場した24年の質的転換答申、そしてそれを初等中等教育段階から高等教育段階までを貫く考え方とした26年の高大接続答申に至るまでの答申のキーワードに触れながら、アクティブ・ラーニングをめぐる表現に込められた意図（共通点、答申ごとの力点）を探っていきます。アクティブ・ラーニングについての見方とともに、答申自体の考え方についてもヒントが得られればと思います。

また、説明自体は簡潔に留めつつ、「アクティブ・ラーニング」と「表現」を題材としたグループワーク（4～5人1グループで、全体で50分程度を想定）を行いたいと考えております。グループワークを通じて、各々がアクティブ・ラーニングに見ている可能性や、その先にある大学教育の課題等について相互理解を深められればと考えています。御協力よろしくお願いいたします。

# アクティブ・ラーニングをめぐる 答申の変遷

## ～課題認識と役割の変化～

文部科学省高等教育局大学振興課  
長谷川 智

新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、  
大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について

(「**高大接続答申**」H26年)

新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて

(「**質的転換答申**」H24年)

学士課程教育の構築に向けて

(「**学士課程答申**」H20年)

我が国の高等教育の将来像

(「**将来像答申**」H17年)

新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて  
(「**質的転換答申**」H24年)

一 教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。

新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大  
学教育、大学入学者選抜の一体的改革について

(「**高大接続答申**」H26年)

一 従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、学生が主体性を持って多様な人々と協力して問題を見出し解を見いだしていくアクティブ・ラーニングに転換

学士課程教育の構築に向けて

(「**学士課程答申**」H20年)

一 既存の知識の一方向的な伝達だけでなく、討論を含む双方向型の授業を行うことや、学生が自ら研究に準ずる能動的な活動に参加する機会を設けることが不可欠である。

我が国の高等教育の将来像

(「**将来像答申**」H17年)

一 初等中等教育を基礎として、「主体的に変化に対応し、自ら将来の課題を探索し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力(＝課題探求能力)の育成が重視されよう。

新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について

- － 従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、学生が主体的を持って多様な人々と協力して問題を発見し解をいよいよアクティブ・ラーニングに転換

学士課程教育の構築に向けて

- － 既存の知識の一方向的な伝達だけでなく、討論を含む双方向型の授業を行うことや、学生が自ら研究に準ずる能動的な活動に参加する機会を設けることが不可欠である。

我が国の高等教育の将来像

- － 初等中等教育を基礎として、「主体的」に変化に対応し、自ら将来の課題を探索し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力(＝課題探求能力)の育成が重視されよう。

新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて  
(「**質的転換答申**」H24年)

- － 従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒に切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだして、いよいよ能動的学修(アクティブ・ラーニング)への転換が必要である。

答申の文言が、アクティブ・ラーニングの位置付けを表す

各答申ごとの定義の相違



それぞれの答申が意識・強調する課題認識、要請の相違



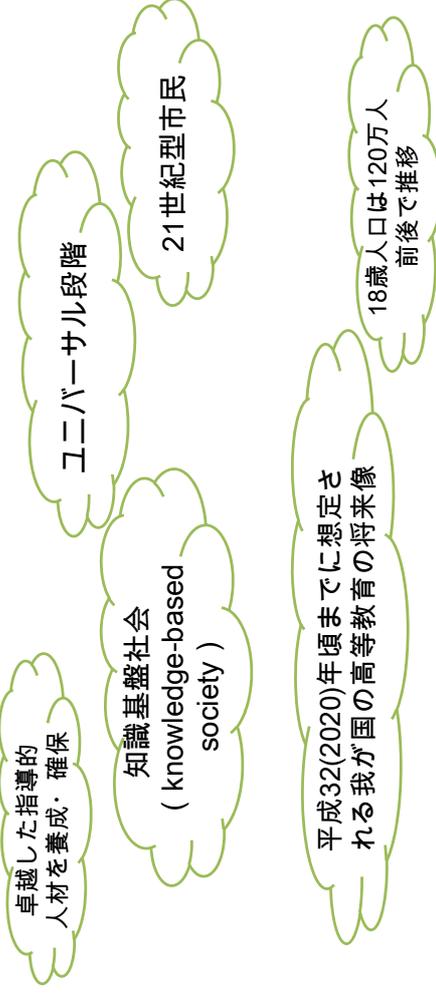
それぞれに異なるアクティブ・ラーニングへの役割・期待

それぞれの答申の課題意識(キーワード)

我が国の高等教育の将来像

- － 初等中等教育を基礎として、「主体的」に変化に対応し、自ら将来の課題を探索し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力(＝課題探求能力)の育成が重視されよう。

(「**将来像答申**」H17年)



それぞれの答申の課題意識(キーワード)

学士課程教育の構築に向けて

— 既存の知識の一方向的な伝達だけでなく、討論を含む双方向型の授業を行うことや、学生が自ら研究に準ずる能動的な活動に参加する機会を設けることが不可欠である。

学修成果を重視する国際的な流れ

ユニバーサル段階

学士の水準の維持・向上

21世紀型市民

「何を教えるか」よりも「何ができるようになるか」

教育内容以上に、教育方法の改善の重要性

8

157

それぞれの答申の課題意識(キーワード)

新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について

— 従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、学生が主体性を持って多様な人々と協力して問題を見いだしていくアクティブ・ラーニングに転換

世の中の流れは大人が予想するよりもはるかに早く、将来は職業の在り方も様変わりしている可能性が高い

もはや一刻の猶予もない

高等学校教育、大学教育を通じて育むべき「生きる力」を捉え直す

「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」

18歳人口が平成33年頃から減少に転じる

知識量のみを問う「従来型の学力」や、主体性を伴わない協調性はますます通用性に乏しくなる

10

それぞれの答申の課題意識(キーワード)

新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて

— 従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒に切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を見出し解を見いだしていく能動的学習(アクティブ・ラーニング)への転換が必要である。

高まる大学改革への期待

予測困難な時代

次代を生き抜く力

想定外の事態に遭遇したときに、そこに存在する問題を発見し、それを解決するための道筋を特定する能力

「未来を予測する最善の方法は、自らそれを創り出すことである。」

我が国の大学生の学修時間が諸外国の学生と比べて著しく短いという現実を改めて認識

9

アクティブ・ラーニングの機能=表現は十人十色

○アクティブ・ラーニングには様々な期待(ex) 学生の主体性、思考力、知識の定着…

○どの側面を意識するかで、その表現も変わる(表現に課題意識が現れる)



それぞれの表現に、(それまでの蓄積と) 込められた意図が存在。

11

Q. あなたの抱く世界/日本/大学（総論/岡大）などに関する課題意識を元に、“アクティブラーニングとは何か”を説明する短文を作成してください。  
また、その説明を読み解くためのキーワードを複数提示してください。

《進め方》

- ①個人ワーク（7分）
- ②周囲4～5人でのグループワーク（30分）
- ③発表・シェア

【！留意事項！】

- ・ 文章の形は問いません。  
例) 「ALとは…である。」  
「～するために、ALを…することが重要。」 など
- ・ 文章の長さは問いません。（目安：120字程度）
- ・ ▲全ての要素を入れる ○課題意識が読み取れる
- ・ ネット検索OK！

◆ 大学も高校も、学生（生徒）の学力・学習状況について、知識・理解、学習習慣、基本スキル、目的のいずれも不足していると認識している。

入学者の学力・学習の状況(全体)【大学】

Q. 貴校の1年生についてお聞きます。貴校の今年度の1年生で、次のような学生はどれくらいいますか。

調査項目	「半分以下」の割合		「半分以下」の割合	
	「半分以下」 3割以下	「半分以下」 3割以下	「半分以下」 3割以下	「半分以下」 3割以下
義務教育(中学校)までで身につけるべき教科・科目の知識・理解が不足している生徒	18.1	28.7	32.3	48.0
高校の教育課程で身につけるべき教科・科目の知識・理解が不足している生徒	23.4	35.0	32.6	43.3
大学の専門分野を学ぶ上で必要な教科・科目を高校で履修していない生徒	31.6	36.4	24.9	2.1
基本的な学習習慣が身につけていない生徒	37.2	39.8	17.7	4.6
文章を書く基本的なスキルが身につけていない生徒	28.0	37.4	26.7	1.8
大学で学ぶ目的がはっきりしていない生徒				8.0

注1) 「半分以下」の割合は「ほとんどない」「半分以下」の合計の値(画1～2を同じ。  
注2) 調査対象の割合は、20ポイント以上の差があるものを表す。

四年制大学に進学予定の3年生の学力・学習の状況(全体)【高校】

Q. 貴校から四年制大学に進学する予定の生徒(3年生)についてうかがいます。進学予定の3年生の中で、次のような生徒はどれくらいいますか。

調査項目	「半分以下」の割合		「半分以下」の割合	
	「半分以下」 3割以下	「半分以下」 3割以下	「半分以下」 3割以下	「半分以下」 3割以下
義務教育(中学校)までで身につけるべき教科・科目の知識・理解が不足している生徒	32.3	33.6	30.2	2.0
基本的な学習習慣が身につけていない生徒	30.0	34.4	32.2	1.9
文章を書く基本的なスキルが身につけていない生徒	37.1	34.2	24.1	2.0
大学への進学目的がはっきりしていない生徒	22.8	31.6	41.0	2.0

【調査対象】  
・全国の高等学校の校長  
・全国の大学の学部長  
【調査時期】  
・2013年11月～12月

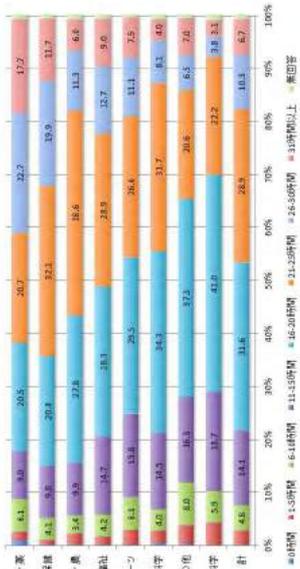
# 注目したい論点

## 授業への出席

○1週当たりの授業出席時間の平均は約20時間(1年生、2年生)

- 専攻分野別では、「医・歯・薬」・「看護・保健」では6割以上、「理・工・農」、「教育・家政」でも5割以上の学生が週に「21～25時間」以上授業に出席
- ・「社会科学」ではその割合は3割程度

図1 専攻分野別・1週間当たりの授業への出席時間(1・2年生)

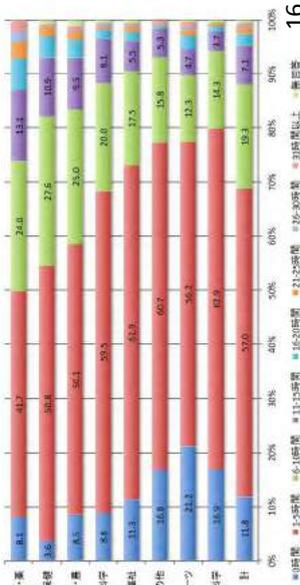


## 授業の予習・復習

○1週当たりの授業の予習・復習等の時間の平均は約5時間で、授業出席時間の4分の1(1年生、2年生)

- 専攻分野別では、「いずれの分野においても最頻値は「1～5時間」(赤色)・授業への出席時間が長い「医・歯・薬」・「看護・保健」においては比較的長い
- ・「社会科学」では週当たりの予習・復習等の時間が「1～5時間」以下の学生が8割

図2 専攻分野別・1週間当たりの授業の予習・復習等の時間(1・2年生)



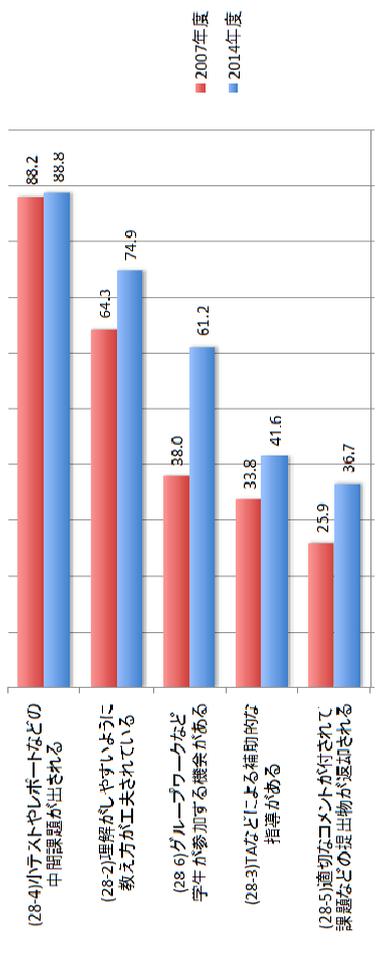
# 注目したい論点

## (参 考)

○2007年度に東京大学大学経営・政策センターが実施した調査(東大CRUMP調査)における同一項目の「よくあった」、「ある程度あった」の比率を、今回の2014年度調査の結果と比較すると、「小テストレポートなどの中間課題が出される」を除くいずれの項目とも2014年度の方が高い値となっている。

○調査方法の違い等により厳密な意味での比較はできないけれども、**授業内容・方法の工夫は近年、多くの大学で進んでいるものと考えられる。**

## 授業科目の内容・方法の変化(2007年度・2014年度)



「よくあった」、「ある程度あった」と回答した学生の比率(%)

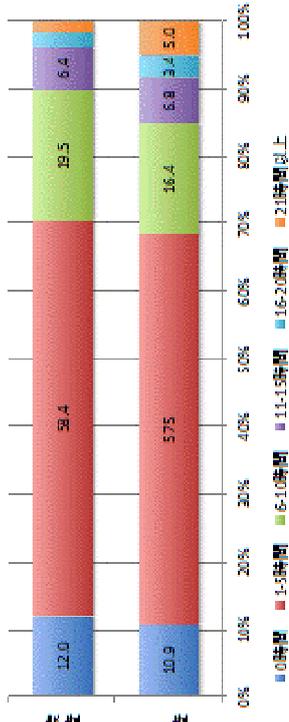
# 注目したい論点

## (参 考)

○同様の調査票を用いて2007年度に全国の大学生を対象に東京大学大学経営・政策センターが実施した調査(東大CRUMP調査)の結果(金子元久(2013)『大学教育の再構築—学生を成長させる大学へ』、東京大学出版会、p.39より引用)によれば、1年生の授業に関連した自発的学習時間は「0時間」が10.9%、「1～10時間」が57.5%、「11～20時間」が16.4%であり、今回(2014年度)の結果とほぼ同じ。

○国立教育政策研究所が実施した調査(NIER調査)と東大CRUMP調査では、調査対象者の抽出方法、調査の実施時期(実施月)が異なるため、**厳密な意味での比較をすることはできないが、この7年間で授業に関連する自発的学習時間が大きく変化したとは言いえないと解釈できる。**

## 授業に関連した自発的学習時間の変化(2007年度・2014年度)



# 参考:現在の高等教育改革の動向

「一億総活躍社会」の実現 (生産性革命や第4次産業革命による経済成長の実現、地方創生、子育て支援、教育再生、生涯現役社会など)

社会への送り出し (学校教育の入口から出口まで一貫して社会との関係を重視)

政府定率・私立は基本の方針に基づき大学教育の質を確保

## 大学の機能強化

大学教育改革の推進

- 大学教育の国際化・学生の双方向交流の推進
- 教育環境・教育内容の国際化の推進(スーパーグローバル大学創成支援等)
- 双方向の留学生交流の促進(トビタテ!留学JAPAN日本代表プログラム等)

三つの方針(卒業認定・学位授与、教育課程編成・実施、入学者受入れ)に基づく大学教育の質的転換

産業界の変化や新たなニーズへの対応

- 「実践的な職業教育を行う新たな高等教育機関」の制度化
- 専門職大学院・高等専門学校等の機能強化
- 社会人の学び直しへの促進(「職業実践力育成プログラム」(BP)認定制度等)
- AI/IT等を牽引する「第4次産業革命に向けた人材育成総合イニシアティブ」の推進(教員、情報関係学部、大学院の強化等)

カバハンス改革・基礎整備

国立大学の機能強化

- 第3期(H28年度から)の運営費交付金や評価の在り方の見直し
- 指定国立大学法人制度の創設
- 学長のリーダーシップに基づく組織再編・学内資源再配分の促進

大学のガバナンス改革

- 学長のリーダーシップの確立(学長を補佐する全学的な体制の整備等)
- 学内組織の運営・連携体制の整備(教授会の役割の明確化等)

大学入学者選抜改革

- 個別大学における入学者選抜の改革
- 大学入学者希望者学力評価テスト(仮称)の導入

高等学校教育改革

- 学習指導要領の抜本的な見直し
- 学習・指導方法の改善
- 多面的な評価の推進 → 「高等学校基礎学力テスト(仮称)」の導入



## 第 3 セ ミ ナ ー

### 「身近な人の様子が変わったと感じたとき

### ～悩んでいる人への周囲の対応～

司会 : 平田 久子 女性サポート相談室  
清水 幸登 保健管理センター

---

#### 概要

学生のこと、職場のこと等で悩んでいる人への周囲の対応について事例を通して理解を深めます。

#### 講師 :

岡山県臨床心理士会会長  
川崎医療福祉大学 谷原 弘之 教授

・教職員限定



### 第3セミナー 「身近な人の様子が変わったとき ～悩んでいる人への周囲の対応～」 報告

座長：平田久子（女性サポート相談室）  
清水幸登（保健管理センター）

（1）重篤な悩みを抱えていても、最初から専門家に相談することに抵抗感を感じる人は少なくなく、悩みを抱えている人の多くは友人や同僚といった身近な人に相談します。重篤な悩みの場合、打ち明けられた友人や同僚が困ってしまい、適切なアドバイスを行うことができず人間関係が悪化するという事態が起こることがあります。

近年、職場の人間関係や家庭の問題、業務量の多さから悩みを抱え、眠れない、食欲がないことなどを訴え、メンタル不調に陥っているのではないかとと思われる人をみかけることが増えています。身近にメンタル不調に陥っていると思われる人がいるが、どのように声をかけたらよいかわからず、声をかけないでいると仕事を休むようになり、ついには休職してしまったということもあります。

このような現状を踏まえ、悩みを抱えている人への適切な周囲の対応を考えることが重要であると思います。第3セミナーでは、川崎医療福祉大学 臨床心理学科の谷原弘之先生をお招きして、ご講演いただいた後、具体的な事例についてグループディスカッションを行い、学生のことや職場のことでメンタルヘルス不調に陥ってしまった人が悩みを相談してきた場合、周囲はどう対応すればよいかについて考えていきました。

前半のご講演では、若者世代と40～50代の特徴と最近増加してきている相談内容について紹介され、各事例について具体的に対応をシュミレーションしながら、適切な対応方法について説明されました。

後半のグループディスカッションは、5～6人のグループに分かれて意見交換をした後、グループの代表者が発表した後、各グループから出た意見をまとめました。次のような事例（架空の話）を会社の他部署の同僚に相談しているという設定でした。

#### 《事例》

子育て中の30代の女性が話している。

企業に勤務しながら小学生の子どもを育てているのですが、直属の女性上司から多くの仕事を回され残業しなければならなくなってしまったので、女性上司の上の男性上司に相談したら、きちんと仕事をしたことを報告書にして自分に提出してほしいと言われました。それはそれでよかったのですが、報告書を作らなければならなくなった分、余計に仕事が増えてしまい、夫からは帰りが遅いと叱られ、子どもはまだ小学生なので一人でできないことが多いし、本当に身も心も疲れ切っています。夜は眠れないし、時々おなかが痛くなって困っています。

それに、直属の女性上司と上の男性上司があまり上手くいっていないみたいで機嫌が悪

く、私だけでなく他の人にも当たり散らしていて、他の人からも睨まれています。どうしたらいいものかと思っています。

現在の業務上の立場、世代の違いから様々な意見が交わされましたが、性差についてはあまり多くの意見が出されていなかったように思います。短い時間での意見交換でしたので仕方がなかったかもしれませんが、今後は性差という視点からも検討していく必要があると思います。

参加者からは、世代間ギャップについてご講演で聴くことができてよかった、という声が多くありました（平田）。

（2）谷原先生のご講演の内容の一部が抄録に記載してあります。「**今どきのメンタルヘルス相談への対応法**」は、短文ではありますが、極めて貴重な我々へのアドバイスではないかと考えます。この内容を、個々の事例に当てはめながら、各個人が考えていくことが大事であろうと思います（清水）。

### 第3セミナー 身近な人の様子が変わったとき ～悩んでいる人への周囲の対応～

座長：平田久子（女性サポート相談室）

清水幸登（保健管理センター）

①第3セミナーでは、学生のことや職場のことでメンタルヘルス不調に陥ってしまった人が悩みを相談してきた場合、周囲はどう対応すればよいかについて事例を通して理解を深めていきます。

前半は講義形式で、近年の各世代の特徴と増加してきている相談内容について紹介し、各事例について具体的に対応をシュミレーションしながら、適切な対応方法について考えていきます。

後半は、前半の講義内容を踏まえ、具体的な事例についてグループディスカッションを行い、さらに理解を深めます。

身近な人から悩みを打ち明けられたが、適切なアドバイスを行うことができず、人間関係が悪化した経験がある、業務量の多さからメンタル不調に陥っているのではないかとと思われる人が身近にいるが、どのように声をかけたらよいかかわからない、など悩みを抱えている人への対応に困られている方は多くおられることと思います。また、世代間ギャップから学生への対応や職場の人間関係に苦慮されている方も多いのではないかと思います。

本セミナーでは、日頃の業務や指導に生かしていけるよう具体的な事例について参加者全員で検討し、よりよい対応方法を探っていく機会にできればと考えています。

多くの皆様の参加をお待ちしております（文責 平田）。

②学生のメンタルヘルスと教職員のメンタルヘルスは、相互依存的な面があります。岡山大学では全学教育・学生支援機構が直接的に学生をサポートしていますが、教職員をサポートする組織・システムが学生のそれに比べて充分ではありません。このような状況は、全国の大学で見受けられます。

今回、学生のみならず教職員の相談を受けている女性サポート室と保健管理センターが共催でセミナーを担当することは、教職員のサポートという視点から見ると、大きな意味を持つものと思います。川崎医療福祉大学 谷原弘之 臨床心理学科教授をお招きして、ご講演と事例検討を通して、教職員のサポートの礎になるものを得ることができればと期待しております（文責 清水）。

## 身近な人の様子が変わったと感じたとき ～悩んでいる人への周囲の対応～

第3セミナー：谷原 弘之（川崎医療福祉大学 教授）

### 1. はじめに

現代はストレス社会と言われ、社会問題化している。労働者健康状況調査によると「仕事や職業生活に関する強い不安、悩み、ストレスを感じる労働者」は60.9%であり、わが国の労働者の約6割が悩みやストレスを抱えながら仕事をしている実態がある（平成24年労働者健康状況調査、厚生労働省）。悩んでいる人は、その悩みを誰かに相談する場合もあれば一人で抱え込む場合もあるため、職場のメンタルヘルス対策としては自ら相談を発信して改善を目指す一次予防、周囲がメンタルヘルス不調者を早期に発見して専門家につなぐ二次予防、メンタルヘルス不調により休職をして復職した人が再休職しないための支援を行う三次予防が提言されている。

本報告では、悩みを相談された場合に周囲はどう対応すればよいか、具体的な事例に添って紹介した。

### 2. 近年のメンタルヘルス相談の傾向

私はEAP（Employee Assistance Program：従業員援助プログラム）と呼ばれる米国生まれの職場のメンタルヘルスサービスを実施する機関において、毎年千数百件の相談を受けてきた。相談内容は時代の変遷とともに少しずつ変化している。

近年の若年層からの相談は、「場の空気が読めず、コミュニケーションがうまくとれない」「相手の気持ちを察することが苦手である」「見通しをつけることができず、レポートの提出が間に合わない」「優先順位を変更することが苦手で、自分のやり方にこだわってしまう」「先生から漠然とした指導をされるとイメージができず、ハラスメントではないかと思えてしまう」といった、発達障害の傾向を感じさせる相談が多い。

一方で40～50歳代は、「これまでの学生に実施してきた指導方法が現代の若年層には通用せず、こちらの心が折れそうになる」といった、世代間のギャップに悩まされている相談が増えてきた。

### 3. 今どきのメンタルヘルス相談への対応法

今どきのメンタルヘルス相談の内容をみると、世代による価値観の相違から齟齬が起きているいたり、職場内のトラブルも、ちょっとしたコミュニケーション不足が原因だったりする。しかし、どれも対応を間違えると退職問題に発展する等、安易に相談に乗り辛い時代になってきた。

相談者の特徴は、自分の悩みに対して「言って欲しい言葉」があるようである。このため、それが外れると「相談しなければよかった」とすぐ言われるので困ってしまう。失敗しないひとつのやり方として、相談を受けた際の「ファースト・コンタクト」というテクニックがある。これはまず本人の考えを肯定するところから入り、そのあと別の視点でアドバイスをして社会における適応行動への修正を目指す。この利点は本人の自尊心を傷つけずに行動修正ができるため感謝されることが多い。

また職場の中で同僚から相談を受けた場合は、人間関係を崩さずに適切な方向に導く必要がある。かつての相談の乗り方は「自分はこうやったらうまくいった」という、自分の体験談を話すことで相手のヒントになることもあったが、今どきはそれだけでは物足らず、具体的なアドバイス（指示）を求められる。しかし安易にアドバイスをして本人が失敗をすると「あなたに言われた通りにやったら失敗した」と責任を転嫁されかねない。

このため、どこかのタイミングでは専門家に紹介する視点を念頭におきながら、抱え込まずに対応することが重要ではないかと考える。

#### 4. グループワーク（事例への対応）

上司と合わず、上司から苦手な仕事を回されるため残業が増えて子育てに影響が出てきた。思い切って上司の上席に相談したら余計にややこしくなり、精神的にしんどい状態が続いている。この架空の事例に対し、どのような対応がよいかをディスカッションを行った。

# 身近な人の様子が変だと感じたとき ～悩んでいる人への周囲の対応～

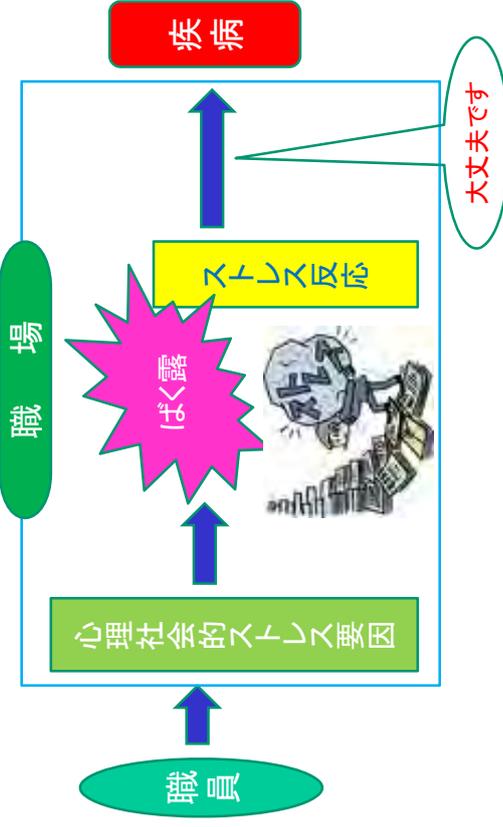
川崎医療福祉大学  
谷原 弘之

1

## 本日の内容

- ストレス社会の現状
- メンタルヘルス不調者の早期発見
- メンタルヘルス不調になりかかっている事例への対応(シミュレーションゲーム)
- さとり世代(若年層)との付き合い方
- グループワーク(事例への対応)

## メンタルヘルス不調者の早期発見



4

### 近年のメンタルヘルス相談の特徴

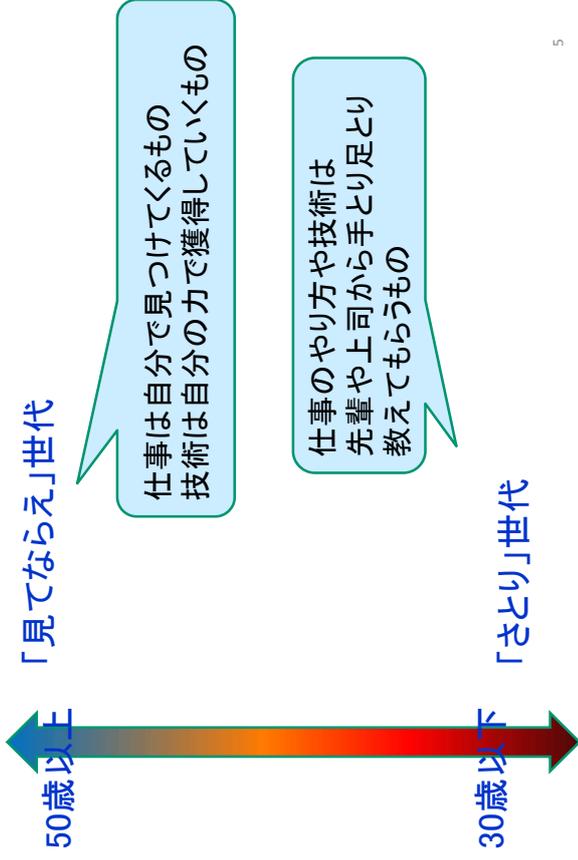
ハラスメントの相談が増加

40歳代・50歳代で心が折れる人が増加

若年層の発達障害傾向の人からの相談が増加

3

## 世代間ギャップ



5

どのようなアドバイスをしますか？

ファースト・コンタクト

同僚の人が困っていたので、  
課長のところへ抗議に行ったのですね

「愚痴」の意味の理解が困難だった場合

指示

具体的な行動課題を提示

## 事例 愚痴が通じない

- 25歳 女性 事務
- 昼休み、同僚が「うちの課長は仕事が遅い。先日  
日も書類が遅れ、相手先から私が注意された」と  
愚痴を言った。
- 早速、課長のところへ行き、「もっと仕事を早く  
してください」と言った。

6



## 平成28年度第19回桃太郎フォーラム アンケート集計結果

---



## 平成28年度「第19回桃太郎フォーラム」 アンケート集計結果

### 1. 開催概要

平成28年9月1日（木） 9：30～15：00

岡山大学津島キャンパス創立五十周年記念館，一般教育棟A棟・B棟・C棟

### 2. 参加者数

学内/学外	人数	対前年比	比率	対前々年比
学内	217	-30	82.19%	+40
学外	47	-10	17.81%	-4
合計	264	-40	▲14%	+36

#### 【各プログラム参加者数】

午前の部		午後の部	
プログラム名	人数	プログラム名	人数
特別講演	197	第1分科会	20
ティーチング・アワード受賞者 プレゼンテーション		第2分科会	28
		第3分科会	42
		第4分科会	21
ストリーミング配信による参加者(内数)	(9)	第1セミナー	12
		第2セミナー	46
		第3セミナー	28
		合計	197

### 3. アンケート回答数

100枚（回答率37.87%）

### 4. アンケート回答内容集計

#### I あなた自身についてお教え下さい。

##### 1 職名

学内/学外	教授	准教授	講師	助教	事務	学生	その他・未回答	合計
学内	27	12	0	4	24	1	2	70
学外	9	2	1	0	11	0	1	24
無回答	2	3	0	0	1	0	0	6
全体	38	17	1	4	36	1	3	100
学内比率	71.05%	70.59%	100.00%	100.00%	66.67%	100.00%	66.67%	
学外比率	23.68%	11.76%	0.00%	0.00%	30.56%	0.00%	33.33%	
全体比率	38.00%	17.00%	1.00%	4.00%	36.00%	1.00%	3.00%	

## 2 年齢

職名	学内 /学外	人数	10代	20代	30代	40代	50代	60代	未回答
教授	学内	27		1		4	16	6	
	学外	9					5	4	
	未回答	2						1	1
准教授	学内	12			3	6	2	1	
	学外	2			1		1		
	未回答	3					3		
講師	学外	1				1			
助教	学内	4			2	2			
事務	学内	24		6	4	10	3		1
	学外	11		2	2	5	2		
	未回答	1			1				
学生	学内	1	1						
その他	学内	2						2	
	学外	1				1			
合計人数		100	1	9	13	29	32	14	2
学内比率			1.45%	10.14%	13.04%	31.88%	30.43%	13.04%	1.45%
学外比率			0.00%	8.33%	12.50%	29.17%	33.33%	16.67%	0.00%
全体比率			1.00%	9.00%	13.00%	29.00%	32.00%	14.00%	2.00%

### 3 性別

職名	学内/ 学外	男性	女性
教授	学内	26	1
	学外	8	1
准教授	学内	8	4
	学外	1	1
助教	学内	3	1
	学外		
事務	学内	13	10
	学外	9	2
学生	学内	1	
	学外		
その他	学内	1	1
	学外	1	
学内外未回答		7	
学内合計		52	17
学外合計		19	5
合計人数		71	22
学内比率		52.00%	17.00%
学外比率		19.00%	5.00%
全体比率		71.00%	22.00%

### 4 岡山大学以外からの参加ですか？

職名	教授	准教授	講師	助教	事務	学生	その他	合計	全体比率
学内	27	12	0	4	24	1	2	70	70.00%
学外	9	2	1	0	11	0	1	24	24.00%

### 5 教務やFD関係の委員ですか？（教員の方のみ）

職名	学内/学外	はい	比率
教授	学内	20	44.44%
	学外	6	13.33%
准教授	学内	12	26.67%
	学外	2	4.44%
講師	学内	0	0.00%
	学外	1	2.22%
助教	学内	4	8.89%
	学外	0	0.00%

就任している委員及び就任年数

学内：

FD 委員会 9 年目 1 名，FD 委員会 3 年目 1 名，FD 委員会 1 年目 1 名，  
 教務委員 1 年目 2 名，教務委員 2 年目 6 名，教務委員 3 年目 1 名，  
 教務委員 10 年目 1 名，教務委員・FSDS 委員 2 年目 1 名  
 教務委員・FD 委員 3 年目 1 名，教務委員・FD 委員 1 年目 2 名

学外：

FD 委員会 3 年目 1 名，FD 委員会 2 年目 1 名，教務委員 6 年目・FSDS 委員 2 年目 1 名

## 6 教員として何年目ですか？（教員の方のみ）

	1～5 年	6～10 年	11～15 年	16～20 年	21～25 年	26～30 年	31～35 年	41～45 年	合計
岡山大学での 経験 年数	13	11	2	7	4	4	2	0	43
比率	30.23%	25.58%	4.65%	16.28%	9.30%	9.30%	4.65%	0.00%	
他大学 での経験 年数	11	3	2	7	3	9	1	0	36
比率	30.56%	8.33%	5.56%	19.44%	8.33%	25.00%	2.78%	0.00%	
総経験 年数	12	5	4	8	8	16	4	2	59
比率	20.34%	8.47%	6.78%	13.56%	13.56%	27.12%	6.78%	3.39%	

7 現在の業務及び勤務年数を教えてください（事務系職員の方のみ）

	業務	1～5年	6～10年	11～15年	16～20年	21～25年	26～30年	無回答	合計	比率
学内	学務系	2	1	4	1	1		1	10	45.45%
	総務系	2						2	4	18.18%
	会計系	1	1				1	1	4	18.18%
	安全衛生									0.00%
	その他	4							4	18.18%
	合計	9	2	4	1	1	1	4	22	
	比率	40.91%	9.09%	18.18%	4.55%	4.55%	4.17%	18.18%		
学外	学務系	5	1	1	1				8	80.00%
	会計系							1	1	10.00%
	その他			1					1	10.00%
	合計	5	1	2	1			1	10	
	比率	50.00%	10.00%	20.00%	10.00%	0.00%	0.00%	10.00%		

学生と接する機会は多いですか？

	業務	よくある	少しある	あまりない	ほとんどない
学内	学務系	5	4	1	
	総務系		2	1	1
	会計系				4
	その他		1		1
	合計	5	7	2	6
	比率	25.00%	35.00%	10.00%	30.00%
学外	学務系	6	1	1	
	会計系			1	
	合計	6	1	2	
	比率	66.67%	11.11%	22.22%	0.00%

Ⅱ 今回の桃太郎フォーラムについておたずねします.

1 初めての参加ですか？

職名	学内/学外	はい
教授	学内	9
	学外	5
准教授	学内	2
	学外	2
講師	学内	0
	学外	1
助教	学内	3
	学外	0
事務	学内	10
	学外	9
学生	学内	1
	学外	0
その他	学内	0
	学外	1
合計	学内	25
	学外	18

何回目の参加ですか

職名	学内/学外	1	2	3	4	5	6	7	9
教授	学内		4	4	4		1	2	1
	学外		3			1			
准教授	学内		6	1	1	1			
	学外								
助教	学内			1					
	学外								
事務	学内		7	3	1				
	学外		1	1					
その他	学内		1	1					
	学外								

## 2 今回、参加しようと思われた契機・理由をお教えてください。

- ・ 4 学期，ティーチング・アワード，ルーブリックと興味深いテーマだったから。
- ・ 4 学期制に興味があったから。
- ・ 4 学期制導入を検討中だから。
- ・ FD の担当教員からの紹介。
- ・ HP
- ・ SD だから。
- ・ SD の取組みについて関心がありました。
- ・ FD の委員として参加を希望した。
- ・ FD を極めたいと思ったから。
- ・ すすめられたため。
- ・ アクティブ・ラーニングについての考えを伺いたかったため。
- ・ アクティブ・ラーニングについて勉強するため。
- ・ アクティブ・ラーニングに関心があった。
- ・ アクティブ・ラーニングに興味があったから。
- ・ アクティブ・ラーニングの好例，その基本の考え方 etc.を知りたかった。
- ・ アクティブ・ラーニングの実践例に興味を持ったため。
- ・ アワード受賞者のプレゼンを聞いたかったから。
- ・ クォーター制について，理解・把握したいため。
- ・ サブタイトルに興味を持ったため。
- ・ テーマがおもしろそうだった。前回参加して，有意義だった。
- ・ テーマに興味があったため。
- ・ フォーラムの題材に興味があった。
- ・ ルーブリックについて知識を高めたかった。
- ・ 扱っているテーマが興味深かったから。
- ・ 案内を見て興味を持ったから。
- ・ 以前，講師を務めたことがあるため。
- ・ 委員としての義務。
- ・ 岡山大学の取組みに興味があったため。
- ・ 学科の会議での要請。
- ・ 学生教育の充実と改善のため。
- ・ 学内の動きや今後の大学教育について理解を深めたかったため。
- ・ 学部の順番。
- ・ 基本的に毎年参加しているため。学部で教務関係の委員をしているため。
- ・ 嬉しいことに講演を依頼されました。
- ・ 教育の最前線を知りたいため。
- ・ 教員・学生・職員による三者協働型の教育に向けてのタイトルにひかれて。
- ・ 教務 FD 委員として，授業改善の参考のため。
- ・ 教務委員からの依頼。
- ・ 教務委員として。
- ・ 教務委員として強制的に。
- ・ 教務委員のため。
- ・ 興味（大学運営側の視点）
- ・ 業務の参考になることがあればと思い参加しました。
- ・ 勤務校でのルーブリック導入を検討しているため。

- ・研修機会が少ない為。
- ・講習内容に興味があった。
- ・今日無関係の委員であるため。
- ・昨年も参加し、60分授業・4学期制導入の成果を確認するため。
- ・昨年度の会で有益な情報が得られたから。
- ・三者協働型教育を実施開始とともに、全学導入を検討しており、担当となったため。
- ・時間があき、興味があったので。
- ・自分の大学でのFD活動に役立てようと思ったから。
- ・授業改善の参考にしたかった。
- ・授業改善を目的として。
- ・新しい教育手法を学びたかったので。
- ・新任教員として本学での取り組みを知るため。
- ・他の参加者がいなかったため、動員された。
- ・大学教育の動向を知りたいため。
- ・知識を増やすため。
- ・着任したばかりなので、勉強のため。
- ・答申を勉強したいと思ったから。
- ・内容が気になった。
- ・内容に関心があったため。
- ・分科会に関心があったので。
- ・勉強。
- ・毎年参加しているから。FD委員だから。
- ・要請があるから。
- ・輪番教務のため。
- ・話題提供者として。

### 3 今回、何をご覧になってご参加いただきましたか？

#### 学内

職名	メール でのお 知らせ	ホーム ページ	ちらし	口コ ミ	その他	その他の内容
教授	19	1		2	2	FD 委員会, 教務 FD 委員会 資料
准教授	7	1			1	教授会の資料
助教	3				1	会議
事務	22					
学生				1		
その他	2					
合計	53	2	0	3	4	
比率	86.89%	3.28%	0.00%	3.28%	6.56%	

#### 学外

職名	メール でのお 知らせ	ホーム ページ	ちらし	口コ ミ	その他	その他の内容
教授	5		2		1	大学へ来ました, 案内
准教授	1	1			1	紹介
講師					1	校内通知
事務	4		4		2	学内通知, 他部署からの紹介
その他	1					
合計	11	1	6		5	
比率	47.83%	4.35%	26.09%	0.00%	21.74%	

#### 4 特別講演1「三者協働型アクティブ・ラーニングの展開：関西大学の事例」は、有意義でしたか？

はい 63 いいえ 2

##### はいの理由：

- ・アクティブ・ラーニング
- ・アクティブ・ラーニングのお話。アクティブ・ラーニングの内容、どれも新鮮で岡大でも取り入れたい内容でした。
- ・アクティブ・ラーニングのことを知った。ひきだすこと、同じ方向をむくことの大切さを再認識した。
- ・アクティブ・ラーニングの意味が分かった。
- ・アクティブ・ラーニングの概念はおもしろかった。
- ・アクティブ・ラーニングの活用の事情を紹介していただき、参考になった。
- ・アクティブ・ラーニングを大学で採用してほしいと思った。
- ・「ティーチング」について根本的な話だった。
- ・アクティブ・ラーニングの意味が分かっていないことが分かった。
- ・アクティブ・ラーニングの意味が理解できた気がした。
- ・アクティブ・ラーニングの本質がわかった。
- ・アクティブ・ラーニングの本来の意味や意義について話をうかがうことができた。
- ・アクティブ・ラーニングを再定義した上で実践されている点。
- ・レフレクションペーパー，協調型学習。
- ・皆様のご意見ご感想を知りたいです。
- ・学生教育にこれから役立てたい。TAとは違った、アクティブ・ラーニングという役目について学べた。
- ・効果も課題も両方知ることができました。
- ・考え方として参考になることが多かった。
- ・考え方について、良く理解できた。
- ・私立大学の自由度を活かした活動だと感じた。
- ・時間と費用をかけていることがわかったから。
- ・自分の大学と違い、わからなかったことが参考にできると気付けたため。(マニュアルつくらない)
- ・事例だけでなく、そこにいたる工夫を伺えました。
- ・授業の意味を考えることが出来ました。
- ・詳しい事例をうかがえた。
- ・全て。
- ・他大学の事例を知れたから。
- ・大学教育に関する新しい視点の提供いただいた。
- ・知識獲得モデルについて知ることができた。
- ・定義と事例を知ることが出来た点。
- ・発想の転換を含めて、学生の意欲への刺激に満ちていたから。
- ・別の新たな視点からアクティブ・ラーニングについて考えることができた。
- ・有意義ではあったが、理系科目で同じようにできるか疑問に感じた。

##### いいえの理由：

- ・自分の授業に取り入れるための参考にはあまりならなかった。
- ・前置きが長かった。

## 5 分科会は、有意義でしたか？

分科会	はい	いいえ
第1	6	0
はいの理由	<ul style="list-style-type: none"> <li>・岡山・愛媛・法政，それぞれの取り組みを知ることができました。刺激になります。</li> <li>・色々な意見が聞けた。</li> <li>・他大学の事例を知ることができ，活用のヒントが得られたため。</li> <li>・他大学の学修支援の取組，課題がよくわかった。</li> <li>・他大学の取組み実例。</li> </ul>	

分科会	はい	いいえ
第2	9	0
はいの理由	<ul style="list-style-type: none"> <li>・60分授業の学生からのデメリットがよくわかった。</li> <li>・泉先生の反復を繰り返す授業の理念に共感しました。</li> <li>・4学期制・60分授業についての学生・教員の意見が聞けた点。</li> <li>・教員学生の双方側から意見や考え方を知ることが出来て良かったと思います。</li> <li>・議論が活発だった。</li> <li>・学生の感じている60分制のデメリットがよく分かってよかった。</li> </ul>	

分科会	はい	いいえ
第3	9	0
はいの理由	<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な例を教員，学生の視点から考え直すことができた。</li> <li>・アクティブ・ラーニングの具体的な実践例を紹介していただき，とても参考になった。学生スタッフによる発表も素晴らしかった。</li> <li>・主体的に学んでもらうためのヒントを学生さんから学びました。</li> <li>・ちょっと時間が短かった。</li> <li>・考えるヒントがいろいろもらえました。</li> <li>・他の人のやり方を知ることができた。</li> <li>・利用可能な授業は限られることを実感しました。</li> </ul>	

分科会	はい	いいえ
第4	10	0
はいの理由	<ul style="list-style-type: none"> <li>・具体的なルーブリック評価の事例を知ることができた点。</li> <li>・ルーブリック評価の考え方がとてもよく分かった。</li> <li>・分野全体のルーブリックという発想，チェックリスト。</li> <li>・事例を教えていただいたため。</li> <li>・よく知らなかったルーブリックについて，知ることができた。薬学部の取り組みは参考になった。</li> <li>・ルーブリックに対する事務の現状，動きが知れた。</li> <li>・文系の方のお話が自分にとっては理解しづらいものだった。</li> <li>・ルーブリックの要点が見えた印象があるから。</li> <li>・外部の情報を取り入れたい。</li> </ul>	

セミナー	はい	いいえ
第1	4	0
はいの理由	<ul style="list-style-type: none"> <li>・使うべき動詞について勉強になったから。</li> <li>・具体的な事例で，使える物がいくつもあった。</li> <li>・シラバスを見直す機会になったから。</li> <li>・シラバス作成の気がついていない点を多く指摘され，勉強になった。</li> </ul>	

セミナー	はい	いいえ
第2	21	0
はいの理由	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アクティブ・ラーニングの良さ，難しさがわかった。</li> <li>・アクティブ・ラーニングがあったところ。</li> <li>・答申の行間を読むという視点が面白かった。</li> <li>・ただし，最後の文科政策について，もっとお話を伺いたかったですね。</li> <li>・抽象的だった用語が，かなり具体化できた。</li> <li>・能動的に考えられた。</li> <li>・アクティブ・ラーニングについて，実質的に意義の見出せるセミナーです。</li> <li>・アクティブ・ラーニングの定義に幅があるという点。</li> <li>・アクティブ・ラーニングについて，実質的に意義の見出せるセミナーです。理解が深まりました。</li> <li>・教員や他大学の方とグループワークができた。</li> <li>・現在におけるアクティブ・ラーニングの問題意識を理解できたから。</li> <li>・グループワーク</li> <li>・アクティブ・ラーニングの利点・欠点がわかった。</li> </ul>	

セミナー	はい	いいえ
第3	7	0
はいの理由	<ul style="list-style-type: none"> <li>・若い世代の傾向についての講演が良かった。</li> <li>・心の健康について考える事ができた。</li> <li>・興味深く思いました。</li> <li>・具体例が参考になった。</li> <li>・グループで具体的に解決に向けて、話し合えたのはよかった。</li> </ul>	

#### 6 来年度も桃太郎フォーラムが開催されたら、参加したいと思いませんか？

職名	学内/ 学外	はい	はい (委員であれば)	はい (委員でなくとも)	いいえ	わからない
教授	学内	6	4	4	3	10
	学外	2	1	4		2
准教授	学内	1	4	3	2	2
	学外	1		1		
講師	学内					
	学外	1				
助教	学内	1		1		2
	学外					
事務	学内	7		4	4	9
	学外	4		4		3
学生	学内			1		
	学外					
その他	学内	1		1		
	学外	1				

#### はいの理由（委員でなくともを含む）

- ・SD だから。
- ・テーマによりますが、網羅的な企画であるから。
- ・何かの学びの機会があるだろうから。
- ・機会がありましたら参加いたします。
- ・教育、FDに関心がある。
- ・教育に関する最新の情報を知ることができる。
- ・興味深いから。
- ・現在の大学教育（高等）の課題と解決に向けた実践例を知ることができるから。
- ・今回のフォーラムが大変勉強になったから。
- ・最新の教育方法を学んでみたい。
- ・刺激になりました。
- ・刺激的です！
- ・実情がよくわかる内容で、かつ、本学でも悩んでいる課題だから。
- ・専門に実行している担当者からの説明は興味深い。
- ・前向きだから。
- ・都合がつく限り。
- ・同じ岡山市内でもあり、内容も良いと思うので。

- ・ 普段の業務では吸収できないことを吸収できる為。
- ・ 勉強になるから。

**いいえの理由：**

- ・ 4～5年に一度でいいと思う。若い人にもっと参加してほしい。

### Ⅲ 桃太郎フォーラムやその他のFD・SD研修についておたずねします。

- 1 希望するメインテーマ，分科会のテーマ，講師などがあればお教えてください。
  - ・ 4学期制，105分授業
  - ・ 60分授業・4学期制教育の検証と評価。
  - ・ GPA
  - ・ PC必携化，反転授業の好事例。
  - ・ SD研修が非常に少ない。もっと必要ではないか。
  - ・ アカデミック・アドバイザー（or リサーチ・アドバイザー）に関わるテーマの話があれば参加したい。
  - ・ アクティブ・ラーニングを実践するための具体的なやり方，アドバイスがいただけるようなワークショップ。（知識習得重視の科目など。）
  - ・ アクティブ・ラーニング授業での発達障害（の傾向のある）学生への対応。
  - ・ アドミッションポリシー，カリキュラムポリシー，ディプロマポリシーの一貫的評価→プロセスとしての学部・学科教育。
  - ・ 会議の省力化，効率化の実践例。
  - ・ 学生の参加をうながし，教員，職員の三者が接する実戦的研修。PBL課題解決型の研修。
  - ・ 学生の要望を聞くセッションもあるといいと思います。
  - ・ 学生対応
  - ・ 教職協働
  - ・ 修得済単位の少ない学生のサポート。
  - ・ 職員の意識改善の取組み。
  - ・ 大学行政に関するテーマを，旧国立と私立の立場から聞きたい。
  - ・ 反転授業について，国家試験合格率を上げる教育法，新聞記事を活用する授業，グローバル教育。
  - ・ 濱名学長

2 FD・SD活動推進のためのFD・SD研修のあり方についてお教えてください。(いくつでも○を)

学内

	教授	准教授	助教	事務	学生	合計
①有志のみの任意参加でよい	8	6	3	4		21
②研修参加を評価の加点対象とする	2		2	4		8
③年に何回かの研修参加を義務化する	4			3	1	8
④小規模な研修会を増やす	2	3	3	5		13
⑤eラーニングでの受講を可能とする	3	1		6		10
⑥他大学とのコンソーシアムを作る	2		1	4		7
⑦その他	5					5
⑦その他の内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業の英語化。</li> <li>・数年に1回の参加を義務化（同じ人ばかりが参加しても意味がない。）</li> <li>・義務化や評価の加点は、形式的参加に陥るので、すべきでない。</li> <li>・過去に参加実績のない教員に参加してもらう。</li> <li>・普段の業務では聞けないことが聞けるようなことを取り上げてほしい。</li> </ul>					

学外

	教授	准教授	講師	事務	その他	合計
①有志のみの任意参加でよい	2			2		4
②研修参加を評価の加点対象とする	1			2		3
③年に何回かの研修参加を義務化する	2			4	1	7
④小規模な研修会を増やす	1			1	1	3
⑤eラーニングでの受講を可能とする			1	2		3
⑥他大学とのコンソーシアムを作る	1		1	5	1	8
⑦その他	2	1				3

⑦その他の内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・FD・SD研修がかなり行われているので、今後は実際にどうするかを中心にするべきでは。</li> <li>・内容によっては義務、または自由で良いのでは？</li> <li>・普段の業務では聞けないことが聞けるようなことを取り上げてほしい。</li> </ul>
---------	---

### 3 本フォーラムの感想を自由にお書きください。

- ・4学期制について、実際に動き始めてからの問題点 etc.を知ることができて大変参考になりました。ありがとうございました。
- ・60分4学期制の学生の意見が聞けてよかったです。大学側としても真剣に聞いて改善すべきだと思いました。
- ・いいフォーラムだった。全教職員が前向きに取り組むべきだとも思う。
- ・このような取組みがあることを初めて知りました。来年度も参加したいと思います。
- ・ただ、アクティブ・ラーニングについて話をしているのに、フォーラム自体がアクティブ・ラーニングになっていないのには違和感を感じた。
- ・とても有意義でした。ありがとうございました。
- ・アクティブ・ラーニングの考え方が分かる気がしました。教務でのカリキュラム再編成に向けて活用していきたいと思います。
- ・スケジュールの時間が全く守られていない。前半時間を取り過ぎたので、関大の先生が時間を気にして気の毒だった。偉い人が質問しすぎでしゃべりすぎだ！第2セミナーのワークショップ形式はよかったと思う。
- ・ティーチングアワード表彰の後、かなりの人数の参加者が退席した。特別講演の講師の先生に失礼である。動員かけて参加させるのはやめた方がよい。
- ・岡山大学における60分授業・4学期制が今後どのようなようになっていくのかが気になります。
- ・我々自身アクティブ・ラーニングできていないのではないかな。
- ・楽しく学習できました。
- ・教員間の温度差（意識の相違）を解消していかないと参加者は増えないと思います。
- ・現在、取り組みを始めている活動の参考として、法政大学さん関西大学さんの事例は特に取り入れたい。職員の役割について、教員側、職員側からも疑問に思うところがあり、法政大学さんの事例は、参考にしたい。三者共に成長するという事が非常に重要。それぞれが、しっかり、影響しあい、取り組むことにより、発展していく。今回の内容を所属校に戻り、参考にしていきたい。非常に有意義な情報を得ることができ、よかったです。もっと様々なことを情報交換できればと残念に思います。（時間が不足）
- ・午後は必ずしも必要ないと思う。
- ・午前、午後の部ともに「座学」が多い。アクティブ・ラーニングを学ぶのが座学という矛盾を感じます。今回、初めてこうしたフォーラムに参加しましたが、多方面からの教育改善への取り組みの事例を学ぶ事ができました。学問分野による教育改善への取り組みの例を適用することが困難である場合もありますが、私の分野に取り入れることのできる方策も見つかりました。講師の先生方、オーガナイザーの先生方、ご苦労様でした。
- ・今回のテーマがアクティブ・ラーニングだったので、午後のセミナー形式がグループワークということも自然なことだったと思います。

- ・ 今回のフォーラムに参加して思ったことは、教職員の FD・SD 研修とっているが学生が参加しても有意義ではないのかと思った。学生に参加させる工夫をもっと行ってほしい。
- ・ 今後も継続していただきたいと思います。
- ・ 三浦先生の話は前半は面白かった。後半はいまいち。
- ・ 自分の大学でも、このような形での研修を実施したい。
- ・ 他大学も参加できるフォーラムは大変貴重です。ありがとうございました。
- ・ 大学全体での取り組み、意欲を強く感じました。ティーチングアワードに刺激を受けました。
- ・ 大変有意義なフォーラムでした。これを受けて岡山大学の「学生の共育力を活用する教育」をどうしていくか？現状の問題点、課題、解決方法などを議論する時間があつたらよいと思いました。
- ・ 第 4 分科会の薬学部担当者の説明は興味深かった。
- ・ 第 2 分科会の講師の両先生のお話は、大変示唆に富んでいました。
- ・ 入試関係をテーマに・・・。

#### IV ティーチング・アワード表彰についておたずねします。

##### 1 岡山大学ティーチング・アワード表彰式・受賞者プレゼンテーションは、有意義でしたか？

はい 40 いいえ 5

##### はいの理由：

- ・ 各講師の方のそれぞれの取組みを知ることができたので
- ・ おもしろい工夫を知ることができた。
- ・ 先生方の授業運営の工夫がよくわかった。
- ・ 学生に人気のある授業がわかったこと。
- ・ 学生に興味を持たせるための様々な工夫。
- ・ どのような教育方法が学生の主体的学習に効果的か理解できる。
- ・ 特に若手の教員にとっては、インセンティブになると考える。
- ・ 先進的な教育を多くの教職員が共有できるから。
- ・ 教員のインセンティブを高めるため。
- ・ 評価の高い授業の方法を知ることができた。
- ・ 取り組み内容が分かった。
- ・ 授業がアクティブである様子がよくわかった。

##### いいえの理由：

- ・ 受賞者のプレゼンは分科会でも良いのでは？
- ・ 受講者数に依存しすぎていて、該当しない部分に関心が向かない。
- ・ 発表内容について、ある程度型を作るとよい。成績評価方法など。

##### 2 ティーチング・アワード受賞科目の教育実践を全学に広めるための方策として、何を希望しますか。(いくつでも○を)

###### 学内

	教授	准教授	講師	助教	事務	学生	その他	合計
①授業の見学	3	3		1	5	1	1	14
②授業ビデオの閲覧	8	1		1	2	1	1	14
③担当教員の模擬授業 や講演会	3	4			3		1	11
④授業資料の閲覧	3	3		1		1		8
⑤担当教員による 「授業のコツ」集 (ティーチング・チ ップス)	4			1	3	1		9
⑥その他	2			1	1			4
⑥その他の内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 対象科目の数が少ない事が気になった。</li> <li>・ 勉強会</li> <li>・ 授業に入り込んだ生の状況確認。</li> </ul>							

## 学外

	教授	准教授	講師	助教	事務	学生	その他	合計
①授業の見学	1				1			2
②授業ビデオの閲覧	1				1			2
③担当教員の模擬授業 や講演会	2				2			4
④授業資料の閲覧	1				2			3
⑤担当教員による 「授業のコツ」集 (ティーチング・チ ップス)					1			1
⑥その他					1			1
⑥その他の内容	・学外へアピール講演会など→学外から学内へ戻ってくる。 (評判)							

### 3 ティーチング・アワード表彰の感想を自由にお書きください。

- ・1人のプレゼンテーションの時間を長くしてほしい。
- ・SNSを活用しての学生のコミュニケーション強化など、学内でどの程度普及しているのか知りたいと思いました。
- ・”教育のしくみ”という部分の表彰とすると、教員のみならず、ティーチング・アワードや職員の表彰の対象とするとより活性化につながると思う。
- ・いまひとつどんな授業をしていたのかわからなかった。授業アンケート評価の点数が高いからといっていい授業とは限らない。
- ・ぜひ、本学の教員にも広めたいと思った。授業が評価され、表彰されるというのは、研究が中心の教員にとっては、モチベーションにつながり、良い制度だと思う。
- ・アワードを受けられた先生が規定時間を（大幅に）オーバーするのはいかがなものかと思う。
- ・アワードプレゼンテーションは、年代別に、30 後半～40 前半、40～50、50～60 ぐらいで講演いただければ面白いかも。色々な世代の苦勞・工夫がわかる。
- ・プレゼンされたどの授業も学生のことをすごく考えており、どの授業も受けてみたいと思うものだった。ティーチング・アワード表彰の企画はこれからも続けてほしいと思った。できれば専門にも導入してほしい。（学部ごとに授業の特徴は違うので難しいと思うが。）
- ・IV2の内容は、受賞者の負担を増すことになるので、しない方がよい。
- ・学生の満足も重要だが、教養と専門のすみ分けはきちんとしなければならぬと感じる。専門系は成長が必要なので、学生が少し不満になるくらいがちょうどいいはず。全てが同じ方法ではできないので、学生も、その構造を理解する必要があると思うが、それが大変だとも感じる。
- ・関西大学でもようやく同種の取り組みをはじめようとする機運が高まってきましたが、成功報酬的なものにはしないようにと心がけております。御指導をおおぎたく存じます。
- ・受賞科目の選別方法の明確化。
- ・素晴らしい授業が岡大で提供されていることを知り、誇らしく思いました！
- ・長く続くことを期待しています。

- ・特に佐藤先生のプレゼンテーションが印象に残りました。それぞれ学生の関わり方をどのように工夫されているか興味深かったです。
- ・発表者の数は減らしてもいいと思います。
- ・部分参加にしてほしい。(200名程度の講義では4つ中1つしか参考にならない。ある意味、小規模～中規模なら取り組めるのは当然。加えて分野(講義テーマ)にもかなり依存している印象。また、講義「内容」を知りたいのではなく、“方法”を知りたいのに、内容の話に終始するものがあつた。とても残念。

以上



平成28年度第19回桃太郎フォーラム 参加者名簿

---



平成28年度 第19回桃太郎フォーラム 参加者名簿

部 局 等	氏 名	職 名 等	分科会・セミナー	備 考	
<b>【学内 教員】</b>					
文学部	社会文化科学研究科	山本 秀樹	教授(文学部FD委員長)	第4分科会	
		田仲 洋己	教授	第2分科会	
		藤井 和佐	教授	第3分科会	
		金関 猛	教授	第4分科会	
		出村 和彦	教授	第4分科会	第4分科会話題提供者
		中東 靖恵	准教授	第1分科会	
		佐々木 守俊	准教授	第3分科会	
		本村 昌文	准教授	第3分科会	第3分科会話題提供者
教育学部	教育学研究科	寺澤 孝文	教授	午前の部のみ参加	
		福田 佳彦	教授	午前の部のみ参加	
		上地 雄一郎	教授	午前の部のみ参加	ティーチング・アワード表彰受賞者
		山田 剛史	教授	第3分科会	第3分科会話題提供者
		桑原 敏典	教授	午前の部のみ参加	
		棟方 百熊	准教授	第3分科会	
法学部	社会文化科学研究科	佐野 寛	教授	午前の部のみ参加	
		河原 祐馬	教授	第4分科会	
		中村 誠	教授	第2セミナー	
		築島 尚	准教授	第3セミナー	
		一原 亜貴子	准教授	第1分科会	
		吾妻 聡	准教授	第2分科会	
経済学部	社会文化科学研究科	田口 雅弘	教授	第1セミナー	
		岸田 研作	教授	第1分科会	ストリーミング配信
		西垣 鳴人	教授	第2セミナー	
		兼田 克幸	教授	第3分科会	
		松本 俊郎	教授	第2分科会	
		山口 恵子	准教授	第2分科会	
		余合 淳	准教授	第3分科会	
		東 陽一郎	准教授	第2分科会	
		鈴木真理子	助教	第1分科会	
		理学部	自然科学研究科	金田 隆	教授
千葉 仁	教授			第3分科会	
野上 由夫	教授			第3分科会	
高橋 裕一郎	教授			第3分科会	
清原 一吉	教授			第3セミナー	
味野 道信	准教授			第2セミナー	
本瀬 宏康	准教授			第2分科会	
野坂 俊夫	准教授			第3セミナー	
鳥居 猛	准教授			第3セミナー	
石野 宏和	准教授			第3セミナー	
藤森 祥一	准教授			第1セミナー	
山下 勝行	准教授			第3セミナー	
医学部	医歯薬学総合研究科			松川 昭博	教授
		百田 龍輔	助教	第1セミナー	
		竹田 哲也	助教	第3分科会	
		難波 ひかる	助教	第3分科会	
医学部	保健学研究科	東 義晴	教授	午前の部のみ参加	
		荒尾 雄二郎	教授	第3分科会	
		後藤 佐知子	准教授	午前の部のみ参加	
		松浦 龍太郎	助教	午前の部のみ参加	
		小野 美穂	講師	午前の部のみ参加	ストリーミング配信
歯学部	医歯薬学総合研究科	吉山 昌宏	教授	第2セミナー	
		池亀 美華	准教授	第3分科会	
		苔口 進	准教授	第3セミナー	
		美藤 純弘	助教	午前の部のみ参加	ストリーミング配信
		藤田 雅子	助手	午前の部のみ参加	ストリーミング配信
薬学部	医歯薬学総合研究科	檜垣 和孝	教授	第4分科会	

平成28年度 第19回桃太郎フォーラム 参加者名簿

部 局 等	氏 名	職 名 等	分科会・セミナー	備 考	
	竹内 靖雄	教授	第4分科会	第4分科会話題提供者	
	有吉 範高	教授	第3分科会		
	好光 健彦	教授	第4分科会		
	名倉 弘哲	教授	第3分科会		
	古田 和幸	准教授	第2分科会		
	谷口 抄子	准教授	第3セミナー		
	御船 正樹	准教授	午前の部のみ参加		
	合葉 哲也	准教授	第1セミナー		
	杉本 幸雄	准教授	第3セミナー		
	白石 奈緒子	助教	午前の部のみ参加	ストリーミング配信	
工学部	自然科学研究科	有菌 育生	教授	午前の部のみ参加	
		門田 暁人	教授	午前の部のみ参加	
		菅 誠治	教授	第2分科会	
		多田 直哉	教授	第3分科会	
		豊田 啓孝	教授	第3分科会	
		今村 維克	教授	第3セミナー	
		木之下 博	准教授	第1セミナー	
		内田 哲也	准教授	第3セミナー	
環境理工学部	環境生命科学研究科	西山 哲	教授	第1セミナー	
		森 也寸志	教授	第1セミナー	
		栗原 考次	教授	第1分科会	
		近森 秀高	教授	第2セミナー	
		坂本 亘	教授	第2分科会	
		諸泉 利嗣	教授	第2分科会	
		難波 徳郎	教授	第4分科会	
		加藤 嘉英	教授	第2セミナー	
		新 史紀	助教	第1分科会	
農学部	環境生命科学研究科	神崎 浩	教授	第3セミナー	
		田原 誠	教授	第2セミナー	
		西野 直樹	教授	第1セミナー	
		久保 康隆	教授	第2分科会	
		木村 康二	教授	第2分科会	
		泉 実	准教授	第2分科会	第2分科会話題提供者
		宗正 晋太郎	助教	第2分科会	
		三村 伊予	技術職員	午前の部のみ参加	
グローバル・ディスカバリー・プログラム		福井 陽名	准教授	第2分科会	
		吉岡 貴之	准教授	第3分科会	
		上杉 健志	准教授	第3セミナー	
異分野基礎科学研究所	野原 実	教授	第2分科会		
保健管理センター		小倉 俊郎	教授	第3セミナー	
		岩崎 良章	教授	第1セミナー	
		清水 幸登	准教授	第3セミナー	第3セミナー司会
		河原 宏子	助教	第3セミナー	
環境管理センター	竹内 文章	准教授	第1分科会		
情報統括センター	河野 圭太	准教授	第4分科会		
グローバル・パートナーズ		山本 洋子	センター長	午前の部のみ参加	
		宇塚 万里子	教授	第1分科会	
		大林 純子	准教授	午前の部のみ参加	
		稲森 岳史	准教授	午前の部のみ参加	
		小野 真由美	講師	午前の部のみ参加	ティーチング・アワード表彰受賞者
地域総合研究センター		三村 聡	教授	午前の部のみ参加	ティーチング・アワード表彰受賞者
		山田 一隆	准教授	第3分科会	第3分科会話題提供者
教師教育開発センター	小林 清太郎	特任教授	第3分科会		
全学教育・学生支援機構		劔持 淑	教授	第3分科会	
		坂入 信也	教授	午前の部のみ参加	
		鈴木 久雄	教授	第2セミナー	
		萩野 勝	教授	第3セミナー	
		森岡 明美	准教授	第1セミナー	第1セミナー司会

平成28年度 第19回桃太郎フォーラム 参加者名簿

部 局 等	氏 名	職 名 等	分科会・セミナー	備 考	
	孫 路易	准教授	第2分科会		
	藤原 祐子	准教授	第3分科会		
	Mahmood Sabina	准教授	第3分科会		
	李 安九	准教授	第2分科会		
	吉岡 哲	助教	第3セミナー		
	大崎 理乃	助教	第3分科会	第3分科会話題提供者	
	藤本 真澄	講師	第1セミナー		
	石井 一郎	UAA	第2分科会		
異分野融合先端研究コア	佐藤 伸	准教授	午前の部のみ参加	ティーチング・アワード表彰受賞者	
<b>【学内 学生】</b>					
学生	教育学研究科	山本 裕子	学生	第2セミナー	
		藤原 絵美	学生	第2セミナー	
	保健学研究科	福川 京子	学生	第4分科会	
		文学部	北村 亘	学生	第2セミナー
		弓岡 弘樹	学生	第1分科会	第2分科会話題提供者
		植田 真由	学生	第3分科会	第3分科会登壇者
	教育学部	井上 大吾	学生	第3分科会	第3分科会登壇者
		森崎 大貴	学生	第3分科会	第3分科会登壇者
	経済学部	吉村 利佐子	学生	第3分科会	第3分科会登壇者
	理学部	萩原 聖夜	学生	午前の部のみ参加	
	医学部医学科	林田 慎太郎	学生	第2分科会	
	薬学部	米井 恒太	学生	第4分科会	
	環境理工学部	酒井 也実	学生	第1分科会	第2分科会話題提供者
<b>【学内 職員】</b>					
監事支援室	能勢 修	監事支援室員	第2セミナー		
大学改革推進室	徳山 久文	室長	第2セミナー		
広報・情報戦略室	吉田 満	総括主査	午前の部のみ参加	ストリーミング配信	
	石原 千恵	事務職員	第2分科会		
	松本 尊道	事務職員	第4分科会		
総務・企画部	人事課	國枝 のぞみ	事務補佐員	第3セミナー	
	人事課男女共同参画室	平田 久子	技術補佐員	第3セミナー	第3セミナー司会
	社会連携支援室	内藤 賢一郎	主査	午前の部のみ参加	
		真田 明	主査	午前の部のみ参加	
		近藤 亜希子	事務職員	午前の部のみ参加	
		山脇 知子	事務補佐員	午前の部のみ参加	
		石川 紫乃	事務補佐員	午前の部のみ参加	
		山田 晶子	事務補佐員	午前の部のみ参加	
法務・コンプライアンス対策室	若田 裕史	主査	午前の部のみ参加		
学務部	学生支援課	東 政文	課長	午前の部のみ参加	ストリーミング配信
	学務情報システム開発室	本松 佳子	事務職員	第3分科会	
		森 順子	事務職員	第3分科会	
	グローバル・ディスカバリー・プログラム設置準備事務室	中村 章宏	主査	第2セミナー	
	潘 陽陽	事務職員	第2セミナー		
研究交流部	産学連携推進課	柴田 裕巳	総括主査	第2セミナー	
安全衛生部	保健衛生管理課	恒國 昭二	課長	第2セミナー	
		絹見 佳子	保健師	第3セミナー	
	安全管理課	濱野 光里	事務職員	第2セミナー	
財務部	財務企画課	山本 聖二	主任	第2セミナー	
	契約課	須藤 晴夫	課長	第3セミナー	
施設企画部	施設企画課	山崎 麻里子	事務職員	第2セミナー	
		赤木 洋介	総括主査	第2セミナー	
社会文化科学研究科等	学部教務学生グループ	金谷 至子	事務職員	第2セミナー	
教育学系	教務学生係	佐々木 雅徳	主任	第2セミナー	
		赤木 佐知子	技術補佐員	第2セミナー	
	自然系研究科等事務部		坂本 泰彦	部長	午前の部のみ参加
	学務課	坂部 範章	主査	第2セミナー	
	学務課工学部担当	江良 智彦	主任	午前の部のみ参加	
		明石 理穂	事務職員	第2セミナー	

平成28年度 第19回桃太郎フォーラム 参加者名簿

部 局 等	氏 名	職 名 等	分科会・セミナー	備 考	
工学部 理学部事務室 農学部事務室	栗本 有紀子	技術専門職員	第3セミナー		
	高橋 伸二	室長	第2セミナー		
	石原 真衣子	主任	第2セミナー		
	前田 千遥	事務職員	第2セミナー		
	藤村 泰生	事務職員	第2セミナー		
医歯薬学総合研究科等	植田 宏	部長	午前の部のみ参加	ストリーミング配信	
学務課 薬学系事務室	西川 華奈	主任	第2セミナー		
	赤岩 詳平	事務職員	第2セミナー		
	美濃田 暁	事務職員	第2セミナー		
	岡村 優衣	事務職員	第2セミナー		
	石井 信彦	主査	第2セミナー		
資源植物科学研究所事務部	岡崎 有久美	主任	第3分科会		
	妹尾 浩史	事務職員	第2セミナー		
惑星物質研究所	山崎 征洋	事務長	午前の部のみ参加	ストリーミング配信	
グローバル・パートナーズ事務部	国際企画課	小川 義弘	主任	第3セミナー	
		飯田 智美	事務職員	第2セミナー	
	留学交流課	藤岡 祐子	主査	午前の部のみ参加	
		中野 芳子	主任専門職員	午前の部のみ参加	
地域総合研究センター	吉川 幸	実践型教育プランナー	第2セミナー		
附属図書館	情報管理課	竹下 啓行	主査	第2セミナー	
		須藤 俊和	主査	第2セミナー	
保健管理センター		岡 香織	保健師	第3セミナー	
		古本 友理	保健師	第3セミナー	
<b>【学 外】</b>					
文部科学省	高等教育局大学振興課	長谷川 智	法規係長	第2セミナー	セミナー講師
茨城大学	工学部	石川 雅也	学務第一係主任	第2分科会	
法政大学	学務部	近藤 清之	部長	第1分科会	第1分科会話題提供者
東洋大学	経済学部	佐藤 崇	専任講師	第3分科会	
		児玉 俊介		第4分科会	
桐朋学園大学	音楽学部	加藤 伊津子	非常勤講師	第1分科会	
学校法人 芝学園		坂詰 貴司		第2セミナー	
富山大学	総合情報基盤センター	遠山 和大	講師	第3分科会	
京都産業大学	教学センター	小林 智典	課長補佐	第2分科会	
桃山学院大学	教育支援課	村上 諭司		第1分科会	
大阪府立大学	教育推進課	石田 耕造	課長補佐	第1分科会	
関西大学	教育推進部	三浦 真琴	教授	第1分科会	特別講演講師
和歌山大学		北 文雄	学務課専門職員	第2セミナー	
兵庫大学	健康科学部	河野 稔	准教授	第3分科会	
武庫川女子大学	学校教育センター	山田 雅子	教職支援課長	第2セミナー	
岡山理科大学		滝澤 昇	副学長	第2セミナー	
	教育学部	高原 周一	教授	第3分科会	
	工学部	山口 尚宏	准教授	午前の部のみ参加	
岡山県立大学	情報工学部	榊原 勝己	教授	第4分科会	
	保健福祉学部	山口 三重子	教授	第4分科会	
		佐々木 新介	准教授	午前の部のみ参加	
就実大学	人文科学部	松尾 直昭	教授	第4分科会	
ノートルダム清心女子大学	英語教育センター	加藤 裕子	実験実習助手	第3分科会	
環太平洋大学	次世代教育学部	井上 聡	教授・FD実施推進委員長	第1分科会	
	次世代教育学部	江原 智子	講師	第3分科会	
	経営学部	田村 綾子	准教授	第4分科会	
川崎医科大学		栗林 太		第4分科会	
		伏谷 建造		第4分科会	
		遠藤 賢二		第2セミナー	
川崎医療福祉大学	医療福祉学部	谷原 弘之	教授	第3セミナー	
倉敷芸術科学大学	生命科学部	唐川 千秋	教授	第3分科会	
	経理部経理課	山中 崇良		第2セミナー	
岡山東商業高校		寺澤 寿輝	研究員	午前の部のみ参加	
吉備国際大学	社会科学部	井勝 久喜	教授	第4分科会	

平成28年度 第19回桃太郎フォーラム 参加者名簿

部 局 等	氏 名	職 名 等	分科会・セミナー	備 考	
尾道市立大学	鳥井 正紀	教務係	第2分科会		
	吉井 佐織	教務係	第2分科会		
県立広島大学	人間文化学部	西本 寮子	教授	第1分科会	
広島国際大学	薬学部	青木 宏光	准教授	第2分科会	
愛媛大学	教育・学生支援機構	阿部 光伸	講師	第1分科会	第1分科会話題提供者
九州工業大学	学習教育センター	福永 淳	准教授	第3分科会	
九州産業大学	工学部	藤崎 涉	教授	第3分科会	
久留米工業大学	共通教育科	巽 靖昭	准教授	第3分科会	
岡山大学生協同組合		河津 拓未	店長	第3分科会	
株式会社紀伊國屋書店	岡山営業所	長島 慧史		午前の部のみ参加	
		小野 良男		午前の部のみ参加	
		小野 恵子		午前の部のみ参加	
		三村 幸江		午前の部のみ参加	
<b>【学内関係者】</b>					
役員	許 南浩	理事（教育担当）・副学長 教育開発センター長		開会挨拶	
	荻田 昌	監事	第2セミナー		
全学教育・学生支援機構	佐々木 健二	副機構長 全学教育・学生支援機構教授		ティーチング・アワード表彰式 司会	
教育開発センター	FD委員会	中塚 幹也	委員長 教育開発センター副センター長 保健学研究科教授	特別講演司会	
		花谷 正	全学教育・学生支援機構教授	第4分科会	第4分科会座長
		矢野 正昭	全学教育・学生支援機構准教授	第2分科会	第2分科会座長
		和賀 崇	全学教育・学生支援機構准教授	第1分科会	第1分科会座長
		長瀧 寛之	全学教育・学生支援機構准教授	第3分科会	第3分科会座長
学務部	学務企画課	萱野 朋子	課長	第2セミナー	
		中村 美紀子	主査	第1セミナー	第1セミナー担当
		成本 浩二	主査	第4分科会	第4分科会
		中島 和教	主査	第1分科会	第1分科会担当
		吉田 昌彦	主任		
		佐伯 大亮	事務職員	第1分科会	
		横山 愛美	事務職員	第1分科会	
		廣門 侑花	事務職員	第1分科会	
		正富 詩涉	事務職員		カメラ担当
		吉尾 英子	事務職員	第2セミナー	第2セミナー担当
		池田 弥代	事務職員		午前の部
		岩瀬 大輔	事務職員		午前の部
		橋本 紳平	事務職員	第2セミナー	午前の部
		藤田 知子	事務職員	第3分科会	第3分科会担当
		小郷 敏明	事務職員	第3セミナー	第3セミナー担当
学務情報システム開発室	田中 邦明	主査	第2分科会		
			合計	264人	



平成28年度 第19回桃太郎フォーラムを終えて

---



## 平成28年度 第19回桃太郎フォーラムを終えて

教育開発センターFD専門委員会 教授法開発WG座長  
和賀 崇（全学教育・学生支援機構 准教授）

今般の大学教育改革において、能動的な学習、いわゆる「アクティブ・ラーニング」への取り組みが強く求められています。同時に、学生が学生を支援する活動、ピア・サポートへの機運も高まってきました。そこに共通するのは、学生の教育への関わり方の転換です。一方的に教育や支援を受ける立場から、教える、支援する立場へ回り、そのことがさらなる学びにつながるという考え方の転換でもあります。無論、学生同士が学ぶといっても教員の関与は重要な要素ですし、職員の皆さんの協力も今以上に必要になるでしょう。そこで、三者が学び合う教育とはどういうものか、その在り方を考える契機として、今年度の桃太郎フォーラムのテーマを「『共育力』を高める～教員・学生・職員による三者協働型の教育に向けて～」と設定しました。

午前の部は、今年度から実施された岡山大学ティーチング・アワードの表彰式と受賞された方からのプレゼンテーションを行うこととしました。先生方のご都合と時間の都合もあり、受賞された全ての方にご講演をいただくことはできませんでしたが、4名の先生から貴重なプレゼンテーションをしていただきました。次年度以降も継続していきたい企画ですが、今年度は主催者側の不手際で決められた時間を超過してしまい、後の特別講演に影響がありましたので、改善したいと思います。

午前の部の後半は、関西大学の三浦真琴教授を特別講師にお迎えし、関西大学の「三者協働型アクティブ・ラーニングの展開」についての特別講演を企画しました。講演では、関西大学における「アクティブ・ラーニング」の捉え方を説明していただいた後、知識獲得モデルの構築と関西大学における三者協働体制、また、知識獲得モデルへの転換をわかりやすく示すための人材「ラーニング・アシスタント(LA)」の解説がなされました。「アクティブ・ラーニング」が目指すべき学習への理解が深まる、刺激的なご講演を頂戴できました。この場をお借りして、改めて御礼申し上げます。

午後の部は、4つの分科会と3つのセミナーを設定しました（下記一覧参照）。

第1分科会は、午前中の議論を引き継ぎ、「学生の共育力」の活用について、他大学の実践事例を交えて、さらに具体的な議論を行う分科会としました。第2から第4分科会は、FD委員会の検討課題でもあるアクティブ・ラーニングやルーブリック等をテーマとする分科会としています。

「セミナー」は今年度から新たに設定したものです。分科会よりも参加しやすく、継続的な学習の機会にすることを企図しています。今年度は、英語でシラバスを書くためのセミナーと例年設定しているメンタルヘルス、SDを扱うセミナーを設定しました。なお、各分科会の内容と成果は、それぞれの座長がおまとめになっていますので、そちらをご参照ください。

(分科会・セミナー一覧)

第1分科会 学生の共育力を活用する教育の実際

第2分科会 60分授業・4学期制に対応した授業改善事例

第3分科会 アクティブ・ラーニングを支える学習環境

第4分科会 デザインループリック評価の導入～信頼性の高い成績評価を目指して～

第1セミナー Syllabus Writing in English

第2セミナー 答申を読み解く～教育動向を踏まえた日本の高等教育政策について～  
(SD研修)

第3セミナー 身近な人の様子が変わったとき～悩んでいる人への周囲の対応～

最後に、参加者アンケートについても触れておきます。

今年度の桃太郎フォーラムには、学内外を含め264名の参加者があり、前年に比べ40名減少しています。これは、昨年度はポスター・セッションに多くの方が集まり、今年度はなくなったことの影響が大きいと思われます。前々年度と比較すると36名増加していますので、参加者数は増加の傾向にあると思われます。また、ストリーミング配信を今年度も行いました。より多くの方に参加していただくために、次年度以降も引き続き行いたいと思います。

教員の属性をみると、教務やFD関係の委員、2回目以上の参加の方が多く、参加者にやや偏りがあるように思われます。引き続き、幅広い方が興味を持てるテーマを設定するとともに、参加しやすい開催日や周知方法に工夫をしていきたいと思えます。教員としての総経年数別でみると、多い順に「26～30年」、「1～5年」の方が多いため、そこに合わせた企画、あるいは逆に参加の少ない層を対象とする企画も検討する余地があるように思えます。参加理由として、アクティブ・ラーニングへの関心をあげる方も多いので、次年度以降も取りあげるべき課題といえそうです。

職員については、学務系の方が多く、学生と接する機会がある程度ある方の参加が多いようです。幅広い層、部署の参加を増やすには、昨年度も課題としましたが、勤務年数や業務内容に合わせた内容を引き続き検討することが課題となりそうです。

研修のあり方を問う設問において、アクティブ・ラーニングの話題であるのにフォーラム自体がアクティブではないとのご指摘も散見されました。分科会、セミナーにおいては双方向型を取り入れておりますが、午前の部では時間が限られていることもあり、十分に取り入れられてはおりませんので、今後検討すべき課題と思えます。

受賞者プレゼンテーション、特別講演、分科会のいずれについても、アンケートでは有意義とする回答が大部分を占めました。これは偏に本フォーラムにご参加いただいた講師・発表者の皆様、企画・運営に携わってくださった皆様のご尽力のおかげです。厚く御礼を申し上げますとともに、次年度以降も引き続きご協力賜りますようお願い申し上げます。